一般国道９号出雲バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書６

# 中野清水遺跡(2)

## (本文編)

2005年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

一般国道９号出雲バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書６

# 中野清水遺跡(2)

## (本文編)

2005年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

6 区水田面西側より斐伊川方面を望む

奈良時代後半～平安時代の溝――6区9層1号溝状遺構

奈良時代の建物――5区12層1号建物

奈良時代の土器群――6 区12層 1 号土器群

14層上面で検出された13層の建物跡――6 区13層 4 号建物

古墳後期の土器群――5区13層3号土器群

古墳中期の土器群――6区13層5号土器群

古墳前期の土坑―― 6 区14層 2 号土坑

古墳前期の土器群―― 5 区14層11号土器群

# 序

一般国道９号は、京都市を起点として山陰地方の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路です。

国土交通省中国地方整備局松江国道事務所においては、出雲市内の一般国道９号の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、出雲バイパスの建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当出雲バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成８年度から発掘調査を行っています。

本報告書は平成15年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解をいただきたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、御尽力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成17年３月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所

所長　**本田幸一**

# 序

島根県教育委員会は、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成８年度から一般国道９号出雲バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を行っています。この報告書は、平成15年度に実施した出雲市中野町地内中野清水遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

出雲平野一帯は県内でも有数の遺跡の宝庫であり、原始・古代の遺跡が数多く存在しています。本遺跡は出雲平野の東より、斐伊川の西岸に位置し、古墳時代から奈良時代を中心とする遺構と、膨大な遺物が見つかりました。頻繁に流れを変える斐伊川に近い不安定な環境でありながら、建物跡や遺物が各時代を通して検出され、先人の営みが継続していたことが明らかになりました。環境が比較的安定した中世には、この地でも水田耕作が営まれ、出雲平野の発展を支えてきたこともわかりました。

本報告書がこの地域における人々の暮らしや、それを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として多少なりとも役立てば幸いと思います。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行に当たり、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、地元の方々並びに御協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成17年３月

島根県教育委員会

教育長　**広　沢　卓　嗣**

# 例　言

1．本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、平成15年度に実施した一般国道9号（出雲バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

中野清水遺跡　　島根県出雲市中野町774－4番地　ほか

3．調査組織は次のとおりである。

（平成15年度）中野清水遺跡現地調査

事務局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）
卜部吉博（同副所長）
永島静司（同総務課長）　日高陽生（同総務係主任）
川原和人（同調査第2課長）

調査員　現地調査：角田徳幸（同第5係長）久保田一郎（同文化財保護主事）河田健二（同教諭兼文化財保護主事）渡邊富美子（同教諭兼主事）田中玲子（同調査補助員）糸川寿幸（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）
穴澤義功（たたら研究会委員）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）

（平成16年度）報告書作成

事務局　山根正巳（埋蔵文化財調査センター所長）
卜部吉博（同副所長）
永島静司（同総務Ｇ課長）　日高陽生（同総務Ｇ主幹）
宮澤明久（同調査第２Ｇ課長）　角田徳幸（同第６ＳＬ）

調査員　報告書作成：久保田一郎（同文化財保護主事）渡邊富美子（同教諭兼文化財保護主事）

調査指導（50音順、敬称略）
穴澤義功（たたら研究会委員）
大澤正己（たたら研究会委員）
中村唯史（三瓶自然館指導員）

4．発掘調査は15年度は2～4・7・8区を角田、5・6・9・10区を久保田が担当した。16年度は1区を角田が担当した。このうち5・6・8・9・10区が本報告書の対称である。

5．発掘作業（発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達等）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会
（平成15年度）　〔現場担当〕高橋憲生（技術員）栃木　忍（技術員）
〔事務担当〕馬庭明美
（平成16年度）　〔現場担当〕高橋憲生（技術員）

6．現地調査及び整理作業に際し、島根県教育庁文化財課、古代文化センター、八雲立つ風土記の丘資料館、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。また、調査指導をお願いした方々のほかに、多くの方から有益な御指導、御助言をいただいた。

本書に掲載した実測図は各調査員の他に、内田律雄、林健亮と整理作業員が行った。

平成16年度整理作業員（50音順、敬称略）：安達眞紀子、泉由美子、金坂恵美子、佐々木孝子、鐵尾愛子、難波夏枝、西郁子、三上恭子

7．本書の執筆は、第6章を除き久保田が行い、表は渡邊が作成した。

8．中野清水遺跡出土金属関連遺物の冶金学的分析は、九州テクノリサーチ・TACセンター（大澤正己氏・鈴木瑞穂氏）に委託し、第6章第1節にその成果を収録した。

9．中野清水遺跡出土木製品の樹種鑑定及び自然科学分析は文化財コンサルタント株式会社（渡辺正巳氏）に委託し、第6章第2節、同第3節に成果を収録した。

10．中野清水遺跡出土の獣骨は、井上貴央氏（鳥取大学医学部）に委託し、第6章第4節に成果を収録した。

11．本書の編集は各調査員の協力を得て、久保田、渡邊が行った。

12．本書掲載の出土遺物（非掲載を含む）及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

13．第2図は旧大日本帝国陸地測量部発行の1/50,000地形図（明治32年測量）および1/25,000地形図（大正7年測量）を、第3図は国土地理院発行の1/50,000地形図（平成2年測量）を、第4図は「出雲市都市計画図」を一部改変して使用した。

# 凡　例

1．本文、挿図および写真図版の番号は一致する。

2．本報告書に掲載した遺構はいずれも「層位」を記載している。「層位」を確定した根拠については第3章の「層位・検出・埋土」の項に略述した。

3．本報告書に掲載した土器については、全てスス・コゲの有無と濃淡を観察した。ススは土器の外面につき、コゲは土器の内面につくものとして分類した。スス・コゲが確認できる遺物、及びスス・コゲと断定するに至らないが薄く黒ずむ程度の汚れが見られる遺物については、当該遺物の図をさらに3分の1に縮小した図を脇に配し、網かけによってスス・コゲの濃淡を表現した。図中の網かけの濃淡と実物のスス・コゲの濃淡との対応関係については、各図版の下に凡例を付した。

4．土器の時期決定は主として以下の文献を参考に行った。曲解があるとすれば、その責はすべて編集者の久保田にある。

・松本岩雄「出雲・隠岐地域」(『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』(木耳社、1992年))
・『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』(鹿島町教育委員会、1992年)
・松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から」(『島根考古学会誌』17，2000年)
・松山智弘「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」(『神原神社古墳』加茂町教育委員会、2002年)
・松山智弘「出雲における古墳時代前期の土器の様相－大東式の再検討」(『島根考古学会誌』8，1991年)
・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」(『島根考古学会誌』11，1994年)
・柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古』3，1980年)
・柳浦俊一「島根県東部(出雲)の切り離し技法と長頸壷頸部接合技法」(『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東6　須恵器の製作技法とその転換—』，2001年)
・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」(『九州歴史資料館研究論集』4，1978年)

# 本文目次


第１章　調査に至る経緯と調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　遺跡の層序と概要 …… 7
第４章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　６区の調査 …… 13
　第２節　５区の調査 ……105
　第３節　10区の調査 ……213
　第４節　９区の調査 ……228
　第５節　８区の調査 ……242
　第６章　石製品 ……251
　第７節　木製品 ……253
　第８節　金属製品 ……257
　第９節　金属関連遺物 ……262
第５章　中野清水遺跡出土金属関連遺物（分析資料）の考古学的観察 ……（穴澤・久保田）274
第６章　自然科学的分析 ……289
　第１節　中野清水遺跡出土金属関連遺物の冶金学的分析 ……（大澤・鈴木）289
　第２節　中野清水遺跡３～７区発掘調査に係る花粉、プラント・オパール分析 …（渡辺）325
　第３節　中野清水遺跡発掘調査に伴う種実同定及び木材樹種同定 ……（渡辺）336
　第４節　中野清水遺跡の獣骨について ……（井上）347
第７章　まとめ ……353


# 図版目次


第１図 遺跡の位置…… 1
第２図 中野清水遺跡と周辺の地形…… 3
第３図 中野清水遺跡と周辺の遺跡…… 4
第４図 平成14～16年度調査区配置…… 8
第５図 調査区全体の土層…… 9
第６図 土層と遺構埋土・検出面の関係…… 10
第７図 ６区14層の遺構…… 13
第８図 ６区14層 １号竪穴状遺構及び遺物出土位置 …… 14
第９図 ６区14層 １号竪穴状遺構出土遺物（1）… 15
第10図 ６区14層 １号竪穴状遺構出土遺物（2）… 16
第11図 ６区14層 ３号竪穴状遺構及び周辺遺物出土位置 …… 18
第12図 ６区14層 ３号竪穴状遺構出土遺物（覆土）…… 18
第13図 ６区14層 ３号竪穴状遺構上層及び周辺出土遺物 …… 19
第14図 ６区14層 ２号・３号土坑 …… 22
第15図 ６区14層 ２号土坑及び遺物出土状況 …… 22
第16図 ６区14層 ２号土坑出土遺物 …… 23
第17図 ６区14層 10号・15号土坑及び遺物出土位置 …… 24
第18図 ６区14層 15号土坑出土遺物 …… 24
第19図 ６区14層 ７号土器群出土遺物（1）…… 27
第20図 ６区14層 ７号土器群出土遺物（2）…… 28
第21図 ６区14層 ７号土器群出土遺物（3）…… 29
第22図 ６区14層 ８号土器群出土位置 …… 32
第23図 ６区14層 ８号土器群出土遺物（1）…… 33
第24図 ６区14層 ８号土器群出土遺物（2）…… 34
第25図 ６区13層の遺構…… 37

第26図　6区13層　4号建物 …… 38
第27図　6区13層　4号建物及び遺物 …… 39
第28図　6区13層　4号建物出土遺物（1） …… 41
第29図　6区13層　4号建物出土遺物（2） …… 42
第30図　6区13層　6号建物 …… 43
第31図　6区13層　6号建物出土遺物 …… 44
第32図　6区13層　2号竪穴状遺構及び
遺物出土状況 …… 44
第33図　6区13層　2号竪穴状遺構出土遺物 …… 45
第34図　6区13層　2号竪穴状遺構・10号溝状遺構
及び遺物出土位置 …… 47
第35図　6区13層　10号溝状遺構及び周辺出土遺物
（1）西部・溝内 …… 49
第36図　6区13層　10号溝状遺構及び周辺出土遺物
（2）西部・溝外 …… 50
第37図　6区13層　10号溝状遺構及び周辺出土遺物
（3）中央～東部・溝内 …… 52
第38図　6区13層　10号溝状遺構及び周辺出土遺物
（4）中央～東部・溝外
（その1） …… 53
第39図　6区13層　10号溝状遺構及び周辺出土遺物
（4）中央～東部・溝外
（その2） …… 54
第40図　6区13層　4号柱列及び遺物出土位置 …… 58
第41図　6区13層　4号土器群出土位置 …… 58
第42図　6区13層　4号土器群出土遺物 …… 59
第43図　6区13層　5号土器群出土状況 …… 62
第44図　6区13層　5号土器群出土遺物 …… 63
第45図　6区13層　6号土器群出土位置 …… 64
第46図　6区13層　6号土器群出土遺物 …… 64
第47図　6区13層上面　1号・2号焼土面 …… 65
第48図　6区12層の遺構…… 66
第49図　6区12層　2号建物 …… 67
第50図　6区12層　3号建物 …… 68
第51図　6区12層　5号建物 …… 69
第52図　6区12層　3号・5号建物及び周辺遺物
（1～3号土器群を含む）
出土位置 …… 71・72
第53図　6区12層　1号土器群出土状況 …… 73
第54図　6区12層　1号土器群出土遺物 …… 73
第55図　6区12層　2号土器群出土遺物 …… 74
第56図　6区12層　3号土器群出土遺物 …… 75
第57図　6区12層　2号柱列 …… 79
第58図　6区12層　3号柱列 …… 79
第59図　6区12層　1号土坑及び遺物出土状況 …… 80
第60図　6区12層　1号土坑出土遺物 …… 80
第61図　6区12層　16号土坑及び遺物出土位置 …… 81
第62図　6区12層　16号土坑出土遺物 …… 81
第63図　6区9層の遺構…… 83
第64図　6区9層　1号建物 …… 84
第65図　6区9層　1号建物出土遺物 …… 85
第66図　6区9層　1号柱列 …… 85
第67図　6区9層　柱穴及び柱根 …… 86
第68図　6区9層　1号溝状遺構 …… 87
第69図　6区9層　2号～4号溝状遺構 …… 87
第70図　6区9層　5号・7号溝状遺構 …… 88
第71図　6区9層　6号溝状遺構 …… 89
第72図　6区9層　8号溝状遺構 …… 89
第73図　6区9層　9号溝状遺構 …… 89
第74図　6区9層　4号・5号・8号土坑 …… 90
第75図　6区9層　6号・7号・9号土坑 …… 91
第76図　6区9層　11号・14号土坑及び
遺物出土状況 …… 92
第77図　6区9層　12号・13号土坑 …… 93
第78図　6区9層　集石遺構 …… 93
第79図　6区水田面の遺構…… 94
第80図　6区水田面　畦畔埋納銭出土状況 …… 94
第81図　6区水田面　畦畔出土埋納銭 …… 95
第82図　6区包含層　出土遺物（1） …… 97
第83図　6区包含層　出土遺物（2） …… 98
第84図　6区包含層　出土遺物（3） …… 99
第85図　6区包含層　出土遺物（4） ……100
第86図　6区包含層　出土遺物（5） ……101
第87図　5区14層の遺構……105
第88図　5区14層　調査区東部検出土坑の位置関係…106
第89図　5区14層　3～7号土坑及び
遺物出土位置 ……107
第90図　5区14層　4号土坑出土遺物 ……107
第91図　5区14層　7号土坑出土遺物 ……108
第92図　5区14層　10～14号土坑及び
遺物出土状況 ……110
第93図　5区14層　10号～14号土坑出土遺物 ……111
第94図　5区14層　8号・15号・16号土坑及び
遺物出土状況 ……112
第95図　5区14層　15号土坑出土遺物 ……112
第96図　5区14層　1号土器群出土状況 ……114
第97図　5区14層　1号土器群出土遺物（1） ……115
第98図　5区14層　1号土器群出土遺物（2） ……116
第99図　5区14層　2号土器群出土状況 ……118
第100図　5区14層　2号土器群出土遺物……119

第101図　5区14層　7号土器群出土位置……120
第102図　5区14層　7号土器群出土遺物……121
第103図　5区14層　8号土器群出土位置……122
第104図　5区14層　8号土器群出土遺物（1）……123
第105図　5区14層　8号土器群出土遺物（2）……124
第106図　5区14層　10号土器群出土状況……126
第107図　5区14層　10号土器群出土遺物……127
第108図　5区14層　11号土器群出土位置……128
第109図　5区14層　11号土器群出土遺物（1）……129
第110図　5区14層　11号土器群出土遺物（2）……130
第111図　5区14層　11号土器群出土遺物（3）……131
第112図　5区14層　11号土器群出土遺物（4）……133
第113図　5区14層　11号土器群出土遺物（5）……134
第114図　5区14層　11号土器群出土遺物（6）……135
第115図　5区14層　11号土器群出土遺物（7）……136
第116図　5区14層　11号土器群出土遺物（8）……137
第117図　5区14層　11号土器群出土遺物（9）……138
第118図　5区14層　12号土器群出土状況……144
第119図　5区14層　12号土器群出土遺物（1）……145
第120図　5区14層　12号土器群出土遺物（2）……146
第121図　5区14層　12号土器群出土遺物（3）……147
第122図　5区14層　13号土器群出土位置……150
第123図　5区14層　13号土器群出土遺物……150
第124図　5区14層　14号・15号土器群出土位置……152
第125図　5区14層　14号土器群出土遺物……152
第126図　5区14層　15号土器群出土遺物（1）……153
第127図　5区14層　15号土器群出土遺物（2）……154
第128図　5区14層　15号土器群出土遺物（3）……155
第129図　5区14層　16号土器群出土位置……158
第130図　5区14層　16号土器群出土遺物……159
第131図　5区14層　17号土器群出土位置……161
第132図　5区14層　17号土器群出土遺物……161
第133図　5区14層　18号土器群出土位置……162
第134図　5区14層　18号土器群出土遺物……163
第135図　5区14層　大形甕出土状況……164
第136図　5区14層　出土大形甕……164
第137図　5区14層　9号・19号土器群出土位置……168
第138図　5区14層　9号土器群出土遺物……168
第139図　5区14層　19号土器群出土遺物（1）……169
第140図　5区14層　19号土器群出土遺物（2）……170
第141図　5区13層の遺構 ……171
第142図　5区13層　5号溝状遺構……172
第143図　5区13層　5号溝状遺構出土遺物……172
第144図　5区13層　6号・7号溝状遺構及び
遺物出土位置……174
第145図　5区13層　6号溝状遺構出土遺物……175
第146図　5区13層　3号土器群出土状況……176
第147図　5区13層　3号土器群出土遺物（1）……177
第148図　5区13層　3号土器群出土遺物（2）……178
第149図　5区13層　3号土器群出土遺物（3）……181
第150図　5区13層　3号土器群出土遺物（4）……182
第151図　5区13層　3号土器群出土遺物（5）……183
第152図　5区13層　3号土器群出土遺物（6）……184
第153図　5区13層　3号土器群出土遺物（7）……185
第154図　5区13層　3号土器群出土遺物（8）……186
第155図　5区13層　4号土器群出土状況……190
第156図　5区13層　4号土器群出土遺物……190
第157図　5区13層　6号土器群出土状況……192
第158図　5区13層　6号土器群出土遺物（1）……193
第159図　5区13層　6号土器群出土遺物（2）……194
第160図　5区12層の遺構 ……195
第161図　5区12層　1号建物及び遺物出土位置……196
第162図　5区12層　1号建物出土遺物……197
第163図　5区12層　2号建物……199
第164図　5区12層　2号・3号溝状遺構……200
第165図　5区12層　5号土器群出土状況……200
第166図　5区12層　5号土器群出土遺物……201
第167図　5区9層の遺構 ……202
第168図　5区9層　1号・4号溝状遺構、17号
土坑及び遺物出土位置……203
第169図　5区9層　集石遺構及び9号土坑……204
第170図　5区9層　集石遺構出土遺物……204
第171図　5区水田面の遺構 ……205
第172図　5区水田面　1号・2号土坑……206
第173図　5区水田面　1号・2号井戸、
木組み遺構……207
第174図　5区水田面上層　2号井戸出土遺物……208
第175図　5区包含層　出土遺物（1）……209
第176図　5区包含層　出土遺物（2）……210
第177図　10区水田面下遺構配置 ……213
第178図　10区13層　1号土坑及び遺物出土状況……214
第179図　10区13層　1号土坑出土遺物……215
第180図　10区13層　1号土器群出土状況……218
第181図　10区13層　1号土器群出土遺物（1）……219
第182図　10区13層　1号土器群出土遺物（2）……220
第183図　10区13層　1号土器群出土遺物（3）……221
第184図　10区9層　2号土坑及び遺物出土状況……222
第185図　10区9層　2号土坑出土遺物……222
第186図　10区水田面 ……223
第187図　10区水田面西部の畦畔 ……224

第188図 10区包含層 出土遺物（1）……225
第189図 10区包含層 出土遺物（2）……226
第190図 9区水田面下遺構配置及び遺物出土位置 228
第191図 9区13層 1号土器群出土状況……228
第192図 9区13層 1号土器群出土遺物（1）……229
第193図 9区13層 1号土器群出土遺物（2）……230
第194図 9区12層 1号土坑及び遺物出土位置……232
第195図 9区12層 1号土坑出土遺物（位置判明）233
第196図 9区12層 1号土坑出土遺物（埋土）……234
第197図 9区包含層 出土遺物（1）……238
第198図 9区包含層 出土遺物（2）……239
第199図 8区水田面下遺構配置 ……242
第200図 8区14層 集石遺構及び遺物出土状況……243
第201図 8区14層 集石遺構出土遺物……244
第202図 8区9層 1号溝状遺構……244
第203図 8区9層 1号～4号土坑……245
第204図 8区9層 3号土坑出土遺物……245
第205図 8区水田面 ……246
第206図 8区包含層 出土遺物（1）……247
第207図 8区包含層 出土遺物（2）……248
第208図 中野清水遺跡出土木製品（1）……253
第209図 中野清水遺跡出土木製品（2）……254
第210図 中野清水遺跡出土金属製品（1）……257
第211図 中野清水遺跡出土金属製品（2）……258
第212図 中野清水遺跡出土金属関連
遺物構成表（1）……262
第213図 中野清水遺跡出土金属関連
遺物構成表（2）……263
第214図 中野清水遺跡出土金属関連遺物（1）……265
第215図 中野清水遺跡出土金属関連遺物（2）……266
第216図 中野清水遺跡出土金属関連遺物（3）……267
第217図 中野清水遺跡出土遺物の
組み合わせと変遷（1）……358・359
第218図 中野清水遺跡出土遺物の
組み合わせと変遷（2）……360・361
第219図 中野清水遺跡出土遺物の
組み合わせと変遷（3）……362・363
第220図 中野清水遺跡出土遺物の
組み合わせと変遷（4）……364・365

# 巻頭写真

巻頭図版1　6区水田面西側より斐伊川方面を望む
巻頭図版2　上　奈良時代後半～平安時代の溝
6区9層　1号溝状遺構
下　奈良時代の建物
5区12層　1号建物
巻頭図版3　上　奈良時代の土器群
6区12層　1号土器群
下　14層上面で検出された13層の建物跡
6区13層　4号建物
巻頭図版4　上　古墳時代後期の土器群
5区13層　3号土器群
下　古墳時代中期の土器群
6区13層　5号土器群
巻頭図版5　上　古墳前期の土坑
6区14層　2号土坑
下　古墳前期の土器群
5区14層　11号土器群

# 第１章　調査に至る経緯と調査経過

出雲バイパスは、既存の国道９号線が交通量の増大に対応しきれず、出雲市内の交通渋滞が著しく悪化した現状に対処するため、９号線の北側に新たに建設することになったものである。ルートは、東は簸川郡斐川町富村から、西は出雲市高松町までの8.2㎞である。

国道９号線の出雲市内部分を所管する国土交通省松江国道事務所は、建設予定地内の遺跡の有無を、平成３年９月24日付けで島根県教育委員会に照会した。これに対して、島根県教育委員会は平成５年２月に予定地内の分布調査を実施し、調査を必要とする遺跡が９箇所である旨を回答した。両者の協議の結果を受けて、島根県教育委員会は該当遺跡について順次発掘調査を行ってきた。以下、東から順に記す。

| 遺跡名 | 現地調査 | 報告書 |
|---|---|---|
| 大津町北遺跡 | 平成14年 | 『大津町北遺跡　中野清水遺跡』（平成16年） |
| 中野清水遺跡 | 平成14・15・16年 | 『大津町北遺跡　中野清水遺跡』（平成16年） |
| 中野美保遺跡 | 平成13・14年 | 『中野美保遺跡』（平成16年） |
| 姫原西遺跡 | 平成８・９年 | 『姫原西遺跡』（平成11年） |
| 蔵小路西遺跡 | 平成８・９年 | 『蔵小路西遺跡』（平成11年） |
| 渡橋沖遺跡 | 平成９・10年 | 『渡橋沖遺跡』（平成11年） |
| 小畑遺跡 | 平成17年以降 | |
| 白枝本郷遺跡 | 平成15・16年 | 作成中 |
| 余小路遺跡 | 平成16・17年(予定) | 作成中 |

中野清水遺跡の発掘調査は、平成14年度～16年度の３ヶ年にわたる。本報告書の対象は、平成15年度調査分の約半分に当たる５・６・８・９・10区である（平成14年度調査分は既刊）。

当遺跡の調査は、平成14年度調査の経験から「水との戦い」になることが予想された。調査区によっては水が十分抜けず湿地状態の中での調査となり、遺構検出は難航した。

また、砂混じりの水が噴出して排出しきれず、調査区全体が水没し、14層上面まで到達しなかった調査区もあった。

# 第２章　位置と環境

## 旧石器～縄文時代

現在より約40ｍも海水面が低下していた旧石器時代、現在の松江市から宍道湖、出雲平野にかけてはまだ陸地で、島根半島と中国山地に挟まれた東西に細長い窪地となっていた。

地球が温暖化して縄文海進が起こった縄文前期末～中期にかけて、この窪地に海水が侵入し古宍道湖湾となった。その後再び寒冷化が始まって海水面が下がり、縄文後期から弥生時代に現在とほぼ同じ水準となった(1)。寒冷化と並行して三瓶火山の活動が活発化し、火砕流堆積物などが神戸川によって多量に下流へ運ばれた。これが縄文後期の海退と重なったため沖積作用が一気に促進され、出雲平野が形成された(2)。

出雲平野がこのような経緯で形成されたため、縄文中期以前の遺跡は平野中心部ではなく縁辺部で発見される。縄文早期末の菱根遺跡は大社町内の北山山麓、上長浜貝塚は平野西端の砂丘上に位置している。

海退と沖積作用が進み出雲平野が形成された縄文後期～晩期には、遺跡の分布が出雲平野中心部に拡大する（矢野遺跡、蔵小路西遺跡など）。これは、生活の場となる平野部が拡大したことに加え、地形が現在に近くなっているため発掘調査による検出が容易であることによる。

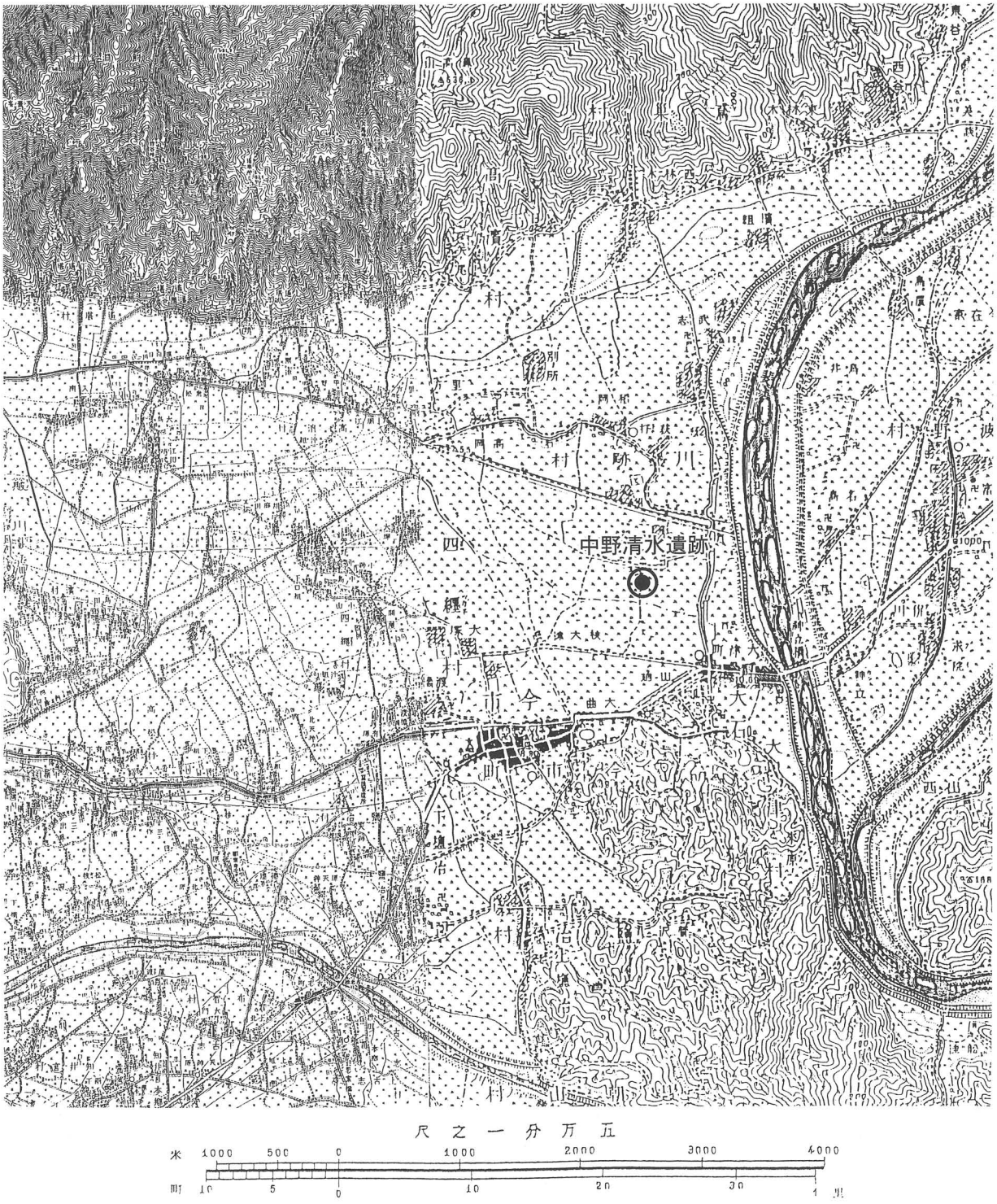
## 弥生～古墳時代

弥生時代には、神戸川流域がほぼ現在の地形と同じ状態になった。弥生時代の遺跡が現地表から１ｍ程度の浅い位置から検出され、弥生時代以後多量の土砂が堆積していないことがそれを示している(3)（小山遺跡、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡など）。

対照的に、斐伊川流域で土砂の堆積・平野の形成が進行するのは、たたら製鉄が行われ「鉄穴流し」による土砂が斐伊川に流され下流へ運ばれる近世以後のことであり(4)、斐伊川が出雲平野へ流れ出る地点に近い斐伊川鉄橋遺跡では、弥生時代の包含層の上に７ｍにのぼる土砂が堆積する。

中野清水遺跡の西に位置する中野美保遺跡は、弥生前期（Ⅰ－３様式）に初めて遺物が見られ、弥生中期中葉には遺物量が増加する(5)。さらに北西に位置する中野西遺跡は、中野美保遺跡に先行して遺物が見られ（Ⅰ－２様式）、中期後葉から遺物の出土量が増加する。弥生後期から古墳後期には、平野を網目状に流れていた斐伊川の堆積作用で、川が土砂で埋まる→洪水→流路が変わるという過程が繰り返され、そのたびに住人は中野美保遺跡、中野西遺跡へと小規模な移住を繰り返したと推定されている。遺物は平安時代まで継続的に出土し続ける(6)。

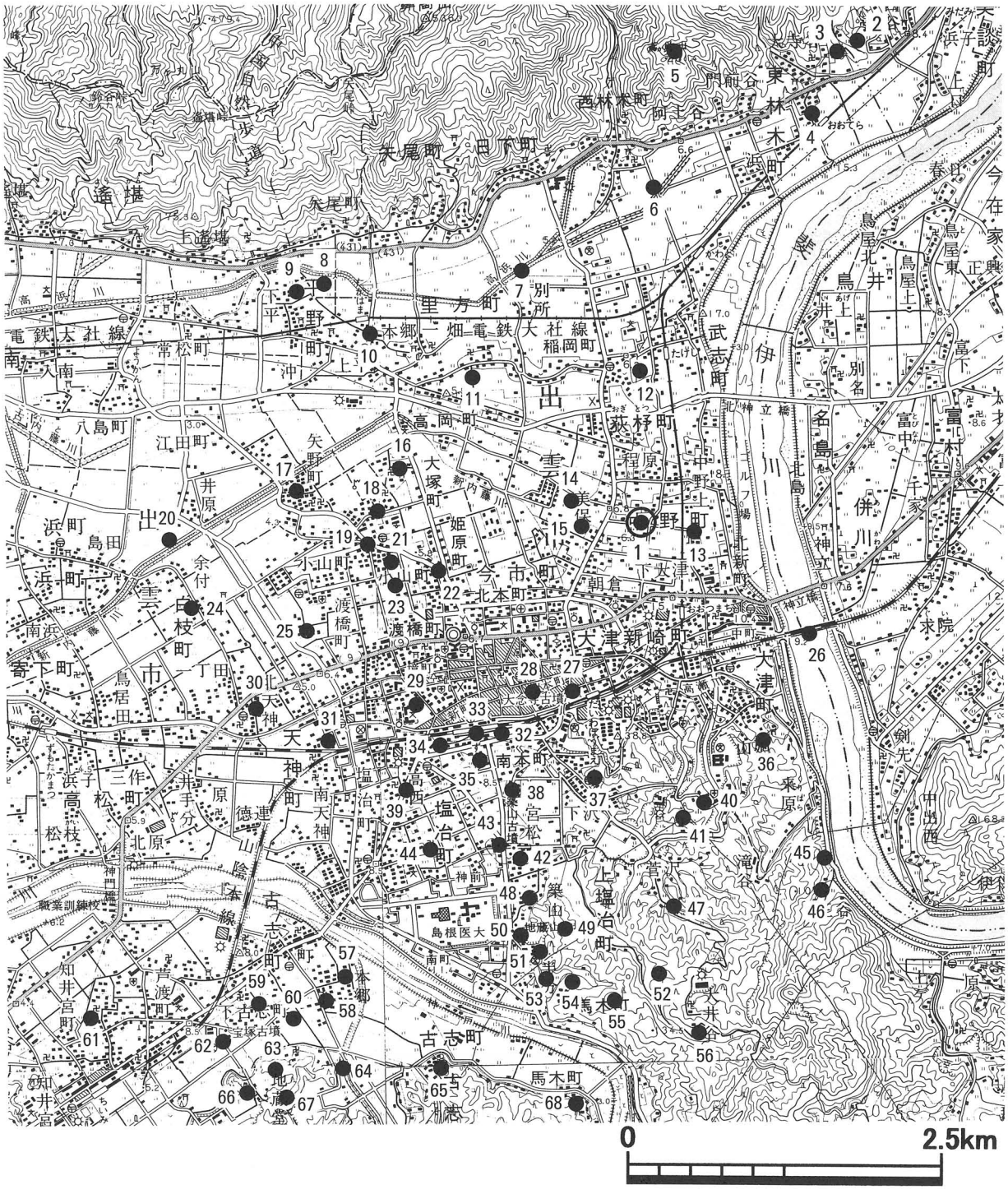
第１図　遺跡の位置




**第２図　中野清水遺跡と周辺の地形**（Ｓ＝1/50,000）

＊明治32年測図（右半分）・大正７年測図（左半分）を合成

1 中野清水遺跡
2 荒木古墳群
3 大寺古墳
4 青木遺跡
5 鳶ヶ巣遺跡
6 山持川川岸遺跡
7 里方別所遺跡
8 里方八石遺跡
9 高浜Ⅱ遺跡
10 高浜Ⅰ遺跡
11 高岡遺跡
12 荻杼Ⅱ遺跡
13 大津町北遺跡
14 中野西遺跡
15 中野美保遺跡
16 大塚遺跡
17 矢野遺跡
18 小山第3遺跡
19 小山第2遺跡
20 井原遺跡
21 小山第1遺跡
22 姫原西遺跡
23 蔵小路西遺跡
24 白枝荒神遺跡
25 渡橋沖遺跡
26 斐伊川鉄橋遺跡
27 今市大念寺古墳
28 塚山古墳
29 海上遺跡
30 壱丁田遺跡
31 天神遺跡
32 藤ヶ森Ⅰ遺跡
33 藤ヶ森Ⅱ遺跡
34 善行寺遺跡
35 藤ヶ森南遺跡
36 西谷墳墓群
37 向山城(大廻城)
38 角田遺跡
39 高西遺跡
40 長者原廃寺
41 菅沢遺跡
42 築山遺跡
43 宮松遺跡
44 神門寺境内廃寺
45 権現山古墳
46 長廻遺跡
47 上塩冶横穴墓群
48 上塩冶築山古墳
49 池田古墳
50 上塩冶地蔵山古墳
51 半分城跡
52 大井谷Ⅰ遺跡
53 三田谷Ⅰ遺跡
54 三田谷Ⅱ・Ⅲ遺跡
55 光明寺3号墓
56 大井谷Ⅱ遺跡
57 古志本郷遺跡
58 大梶遺跡
59 下古志遺跡
60 田畑遺跡
61 知井宮多聞院遺跡
62 宝塚古墳
63 妙蓮寺山古墳
64 放れ山古墳
65 井上横穴墓群
66 地蔵堂横穴墓群
67 浄土寺山城跡
68 小坂古墳




第３図　中野清水遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1/50,000）

両遺跡よりもさらに西では、蔵小路西遺跡から縄文晩期の土器が出土しており[7]、人の居住が確認される。この他、弥生後期の貝塚が確認され、木製品が大量に出土した姫原西遺跡があげられる[8]。

当遺跡では、斐伊川からもたらされた灰オリーブ色の砂質土（14層）が大量に堆積しているが、斐伊川から比較的離れた2・3区（平成17年度報告書刊行予定）では14層上面で弥生中期の土器が出土した。

また8区でも、14層から弥生中期の土器が出土しているので、これらの部分では弥生中期までに14層の堆積がほぼ終わっていたようである。その一方、斐伊川に近い7区北壁で採取したジオスライサー試料では、現地表面から4m深い地点で採取された木片が、年代測定の結果約2500ＢＰの値を示している（本書第6章第2節・渡邊正巳「中野清水遺跡3～7区発掘調査に係る花粉、プラントオパール分析」）。これは、国立歴史民俗博物館が行った年代測定の補正によれば弥生前期に当たり[9]、弥生前期には斐伊川がもたらす砂の堆積作用が依然として続いていた。その後、低い部分に土砂が堆積して高低差が平均化し、ほぼ安定したのは古墳前期（小谷3式）であろう。中野西・中野美保遺跡に比べて斐伊川に接近している中野清水遺跡では、集落の形成も両遺跡に比べてやや遅れて始まった。その後は奈良時代の12層堆積まで粘質土が堆積し続けており、古墳時代を通して安定した環境が続いた。小規模な移動・盛衰はあるが、平安時代まで人々の生活が継続する点は中野美保・中野西遺跡と共通している。

**奈良時代以後**

奈良～平安時代の集落遺跡は、出雲平野中心部の小山遺跡[10]、矢野遺跡[11]で確認されている。さらに中野西遺跡、中野清水遺跡でも確認されたことにより、奈良時代の集落の分布範囲は斐伊川の近くまで広がることがわかった。集落遺跡に加え、官衙遺跡も出雲平野の各地域で確認されている。出雲平野南寄りでは三田谷Ⅰ遺跡[12]や、神門郡家と推定される古志本郷遺跡[13]がある。出雲平野北端の青木遺跡[14]も官衙的な性格を併せ持っていた。

これらの集落の生産活動を支えたのは、広大な沖積平野を利用した稲作であった。高岡遺跡[15]では平安～室町時代、西谷遺跡[16]では奈良～平安時代、中野美保遺跡[17]では室町～江戸時代の水田跡が確認されている。西谷遺跡や中野美保遺跡では、水田面上に人間の足跡と共に牛の足跡が残っており、平安時代には水田耕作に牛が使われていたことを示した。

**註**

（1）中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克巳・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡邊正巳「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」（『汽水域研究』3、1996年3月）

（2）中村唯史「下古志遺跡の立地と環境」（『下古志遺跡』（出雲市教育委員会、2001年）第6章）

（3）「小山遺跡周辺の古地理に関するコメント」（『小山遺跡第2地点発掘調査報告書』（出雲市教育委員会、1998年）第6章）

（4）「山持川川岸遺跡の古環境」（『山持川川岸遺跡』（出雲市教育委員会1996年）6）

（5）『中野美保遺跡』（島根県教育委員会、2004年）

（6）『中野西遺跡』（出雲市教育委員会、2002年）

（7）『蔵小路西遺跡』（島根県教育委員会、1999年）

（8）『姫原西遺跡』（島根県教育委員会、1999年）

（9）『弥生農耕の起源と東アジア―炭素年代測定による高精度編年体系の構築―』（国立歴史民俗博物館、2004年）

（10）『小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）』（出雲市教育委員会、2002年）

（11）『矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』（出雲市教育委員会、1991年）

（12）『三田谷Ⅰ遺跡Vol.2』（島根県教育委員会、2000年）

（13）『古志本郷遺跡Ⅴ』（島根県教育委員会、2003年）

（14）『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報12　平成15年度』（2004年3月）及び『東林木ＢＰ発掘調査概報～山持遺跡　青木遺跡の概要～』（島根県教育委員会、2004年）

（15）『高岡遺跡』（出雲市教育委員会、2000年）

（16）『荒神谷史跡公園整備に伴う尾田瀬Ⅱ・西谷Ⅱ・西谷遺跡発掘調査報告書』（斐川町教育委員会、1999年）

（17）『中野美保遺跡』（島根県教育委員会、2004年）。水田の年代については同報告書19、20頁を参照。

# 第3章　遺跡の層序と概要

## 調査区

中野清水遺跡は市街地内に所在し、遺跡内には市道・用水路・排水路が多数敷設されている。本調査では住民生活に支障を来さないように市道・用水路・排水路を避け、併せて排土処理、湧水対策が行いやすいように調査区を分けた。15年度調査からは、国土座標に合わせて10m区画のグリッドを設定し、遺構外出土遺物はグリッドを単位に取り上げた。

現地調査は平成14～16年度の3ヶ年にわたった。平成14年度調査区は第Ⅰ～Ⅷの8調査区、平成15・16年度は第1～10の10調査区に分けている。平成14年度から15年度にかけて調査区の番号が継続していないのは、15年度以降は10mごとのグリッドを設定し、遺物の取り上げ方法を変更したこと、さらに層位についても細分を行ったためである（後述）。

## 層位

第5図に調査区の基本層序を示す。

1～4層は攪乱部分及び耕作土である。

耕作土の下は斐伊川の洪水によって運ばれた砂層（5・6層）である。5層は洪水で急激に堆積した粗砂、6層は5層に比べて静かな状態で堆積した細砂である。5・6層に覆われた粘質土の7・8層は、室町時代後期～江戸時代初期の水田の床土である。酸化して赤みを帯びるのが7層、還元して褐灰色に近くなったのが8層である。水田床土以下は、粘土層と砂層（いずれも包含層）が交互に堆積する。上から順に9層（粘土層。奈良時代後半～平安の包含層）、12層（砂層。奈良時代前半の包含層）、13層（粘土層。古墳時代前期末～後期の包含層）、14層（砂層。弥生時代～古墳前期の包含層）の順である。9区・10区は湧水が激しく14層上面まで到達できなかった。

平成14年度調査区では土層を1層（近世以降の耕作土）、2層（6世紀後半～中世）、3層（弥生中期～古墳前期）に大別した(1)。このうち2層と3層については、状態の良好な調査区で改めて土層を観察した結果、層位の細分を変更して上記の9・12・13・14層とした。

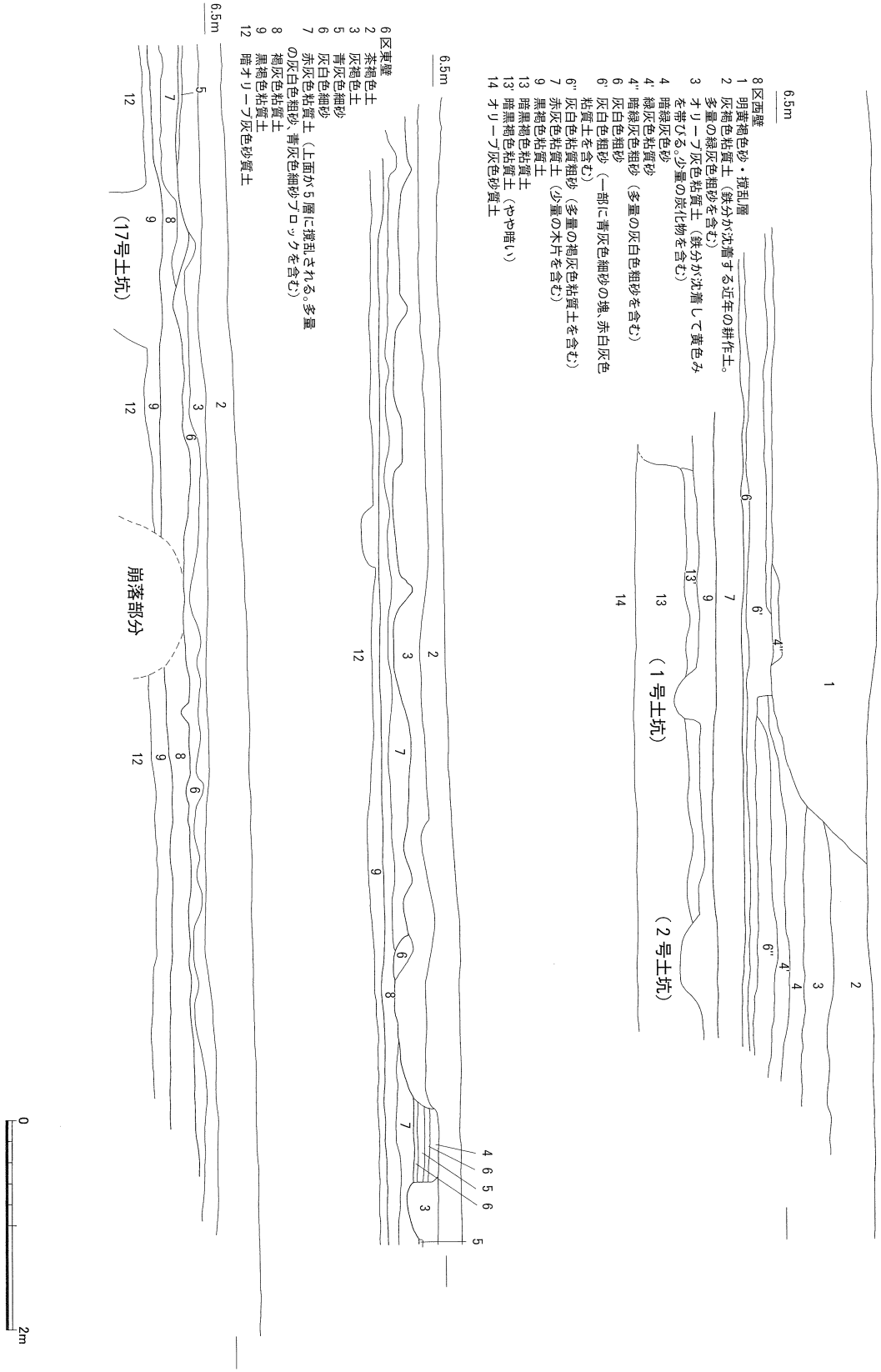
調査が可能であったのは深い所でも14層上面までであり、それより下は湧水が激しいため検出できなくなった。

## 検出面と埋土

調査の過程で、最初に遺構を検出したのは12層の上面である。検出できた遺構は、埋土の違いにより大きく二つに分けられる。一つは遺構検出面の土と埋土がほとんど変わらない場合、もう一つは遺構検出面の土と埋土が違う場合である。両者の埋土の違いは掘り込み面が違うことに起因している（第6図）。

例えば、9層上面から穴を掘り、埋め戻しに手近な生活面（9層上面）の粘土を使用したり、周囲の土砂が流入したりした場合、遺構の埋土も生活面の土も同じ9層の土（黒褐色粘質土）となるため、遺構が検出されにくい。つまりこれらは、遺構検出面と掘り込み面が一致する遺構であるといえる。このような遺構は、埋土にわずかに炭が混じっている、暗い色になっている、などを手がかりに検出した。また、本報告書で「土器群」としたものの中には、比較的浅い掘り方をしている

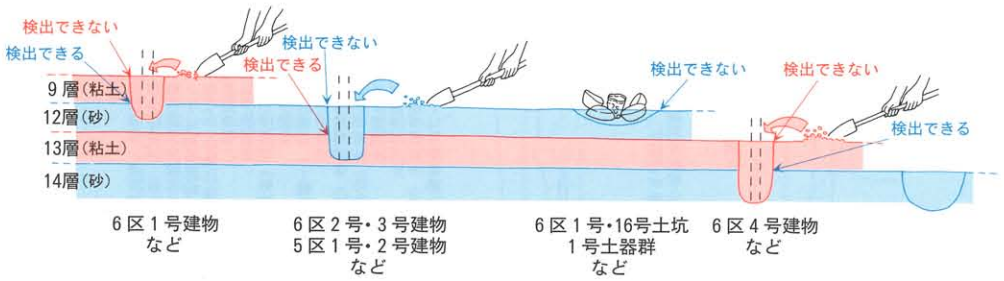
第４図　平成14～16年度調査区配置（Ｓ＝1/2,500）




第5図　調査区全体の土層（S＝1/60）

廃棄土坑（6区12層1号土坑など）と器種構成が類似するものもあり、検出状況が悪かったため遺構と確認できずに終わったものもあると思われる。

一方、9層上面から掘り込んだ穴が12層上面に達していれば、土質の違いが明らかなので、容易




第6図　土層と遺構埋土・検出面の関係

に遺構が検出されることになる。本調査で検出された柱穴は比較的深く掘り込まれて下層に到達したものが多かったので、建物跡・柱列はおおむね遺漏なく検出できていると思われる。

以上のように、遺構の年代・層位を確定する上では、検出面よりも掘り込み面・埋土が決定的な要素となる。本報告書では、掲載した遺構全てにつき「層位」を記すが、その際は検出面よりも埋土を重視して層位を確定した。

## 調査成果の概要

### 水田面

洪水砂（5・6層）に覆われた状態で検出された。水田面の半分近くは、「大津焼」の原料である粘土を採取した粘土採掘坑によって破壊されていた。7・8層が水田床土に当たり、9区以外は畦畔が確認されている。水田面は人、牛の足跡が多数検出される部分と全く確認されない部分に分かれた。

水田面上で出土した備前焼等の出土遺物から、時期は室町末期から江戸初期にかけてである。

### 9層の遺構、遺物

奈良時代後半から中世と時期幅の広い遺物を含む層である。6区の1号建物、溝状遺構やピット群、及び8区の土坑等がある。

9層から掘り込まれたピットは径の小さいものが多い。これらのピットから復元できた建物は6区の1号建物1棟のみである。ピット群は6区中央から7区にかけて広がっており、この範囲が集落の中心部であろう。

ピット群の他に、6区東半の4～9・11～14号土坑、1～9号溝状遺構などがある。

いずれも12層上面で検出されたが、総じてピットや土坑は深く、溝状遺構は浅い。

### 12層の遺構・遺物

6区と北隣の9区を中心に建物跡・柱列・土坑・土器群が多数確認される。

12層堆積以前と以後とでは地形が大きく変わっている。市道以北では10区と8区が高く、これに挟まれる9区は低かった。市道以南の6区・5区では、南端が高く中央～北半部にかけて次第に低くなっていた。この低地部分である5・6・9区を中心に12層が大量に堆積した結果、それまでの地形の凹凸はある程度平均化し、前代に比べて高くなった5区・6区中央部にも建物跡・柱列などの遺構が現れる。

9区は、12層上面まで掘り下げた時点で排水が湧水の量に追いつかない状態となり、13層以下ま

で到達しなかった。

**13層の遺構・遺物**

古墳中期から後期にかけての遺構や土器群がある。遺構や土器群の分布は、古墳中期は6区北半が中心で、2号竪穴状遺構、10号溝状遺構などがある。古墳後期は10区1号土坑、1号土器群に加えて5区南端の3号土器群がある。

10区は、13層まで掘り下げた時点で砂を含んだ水が多量に噴出した。しばらくは200Vポンプで調査区外の公共排水路へ排出していたが、水と一緒に排出される砂が排水路を埋めた。一方、調査区の際では下層の砂を吸い取られた部分が陥没・ひび割れし始めた。陥没は用地外へも及びそうな勢いとなったので、直ちに調査を中断して調査区全体を埋めてようやく水・砂の噴出を止めた。このため、10区の調査は14層には到達していない。

**14層の遺構・遺物**

古墳前期の遺物が中心で、弥生時代に遡る遺物が一部見られる。5・6区を中心に、弥生後期以後少数ずつであるが各時代を通して土坑が掘られている。

14層まで到達できたのは5・6・8区であるが、遺跡周辺は地下水位が高く、14層上面まで掘り下げた時点で調査区の状況は著しく悪化していた。5区は調査区中央に大規模な湧水があったが、全ての水がこの湧泉に集中したため、それ以外の部分は良好な状態に保たれた。湧泉付近で14層の遺構・土器群の分布が希薄（第87図）なのは、当時この範囲が低湿地状態で、利用されなかったためであろう。6区では調査区の北半部が水を含んで軟弱となり、立ち入って精査することができなくなった。この部分が14層の遺構・土器群の空白地帯となっているのは、検出時の状況が悪かったためである。

6区の東端に竪穴状遺構、5区の東半部に土坑・土器群が集中し、5区西寄りにも土坑・土器群が散在する。8区では集石遺構が2基確認された。遺構・土器群の分布はこのような限界に規制された範囲内で検出されたものに限られる。

**註**

（1）『大津町北遺跡・中野清水遺跡』（島根県教育委員会、2004年3月）

中野清水遺跡の遺構一覧表（個別のピットなどを除く）

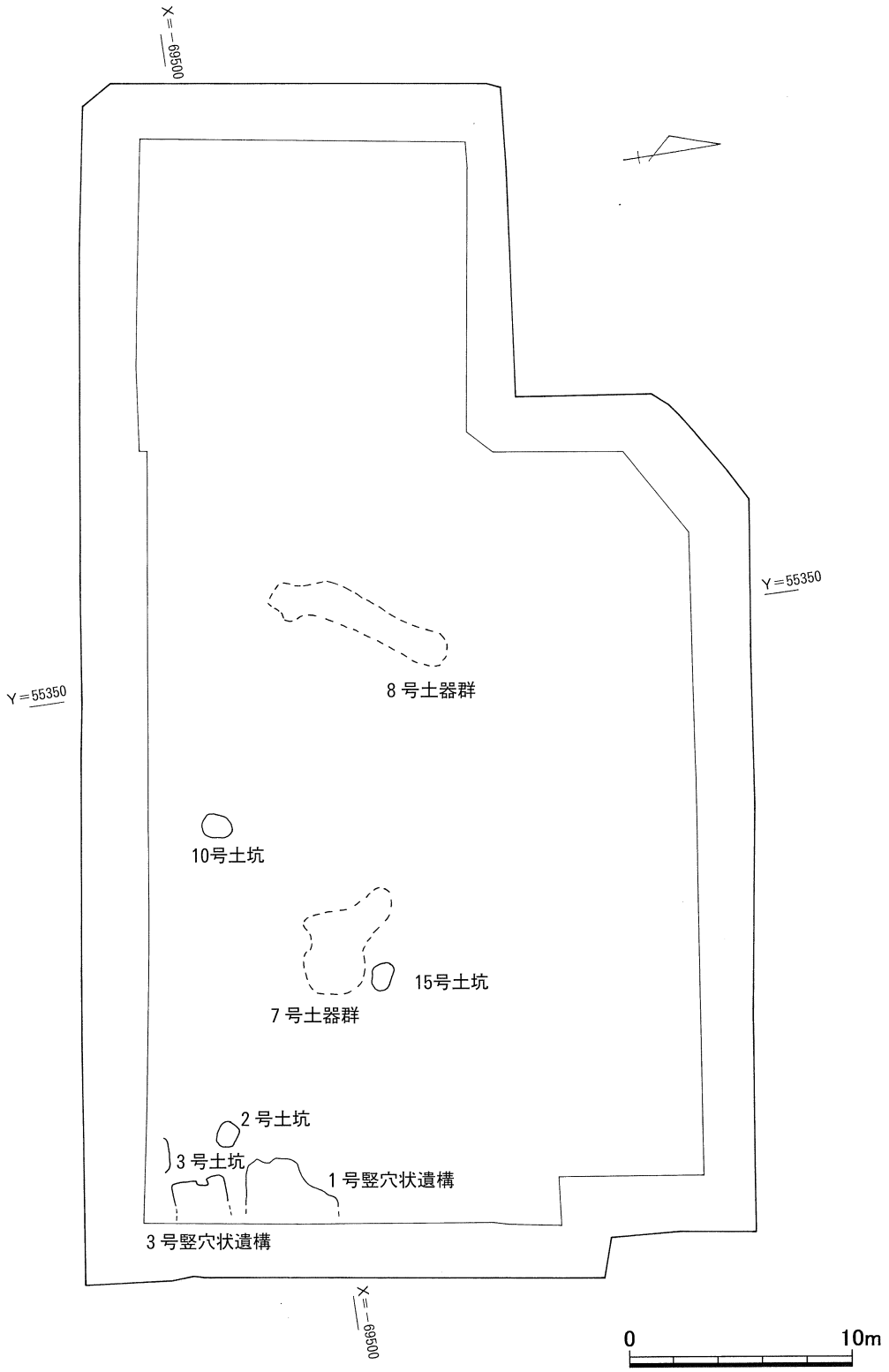
| 遺構名 | 調査区 | 14層 | 13層 | 12層 | 9層 | 水田面 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 建物<br>竪穴状遺構<br>柱列 | 6区 | 1号・3号竪穴状遺構 | 4号・6号建物<br>2号竪穴状遺構<br>4号柱列 | 2号・3号・5号建物<br>2号・3号柱列 | 1号建物<br>1号柱列 | |
| | 5区 | | | 1号・2号建物 | | |
| | 10区 | | | | | |
| | 9区 | | | | | |
| | 8区 | | | | | |
| 溝状遺構 | 6区 | | 10号溝状遺構 | | 1号～9号溝状遺構 | |
| | 5区 | | 5号～7号溝状遺構 | 2号・3号溝状遺構 | 1号・4号溝状遺構 | |
| | 10区 | | | | | |
| | 9区 | | | | | |
| | 8区 | | | | 1号溝状遺構 | |
| 土坑<br>井戸<br>木組み遺構<br>集石遺構 | 6区 | 2号・3号・10号・15号土坑 | 1号・2号焼土面 | 1号土坑・16号土坑 | 4号～9号・11号～14号土坑<br>集石遺構 | 畦畔 |
| | 5区 | 3号～8号・10号～16号土坑 | | | 9号・17号土坑 | 1号・2号土坑<br>1号・2号井戸<br>木組み遺構 |
| | 10区 | | 1号土坑 | | 2号土坑 | 畦畔 |
| | 9区 | | | 1号土坑 | | |
| | 8区 | 集石遺構 | | | 1号～4号土坑 | 畦畔 |
| 土器群 | 6区 | 7号・8号土器群 | 4号～6号土器群 | 1号～3号土器群 | | |
| | 5区 | 1号・2号・7号～19号土器群 | 3号・4号・6号土器群 | 5号土器群 | | |
| | 10区 | | 1号土器群 | | | |
| | 9区 | | 1号土器群 | | | |
| | 8区 | | | | | |

# 第４章　遺構と遺物

## 第１節　６区

### ６区14層の遺構・土器群の位置関係（第７図）

６区東端には、１号・３号竪穴状遺構が並び、その上面や周辺には古墳前期の遺物が多く分布し




第７図　６区14層の遺構（S＝1/300）

ている。

1号竪穴状遺構と3号竪穴状遺構は軒を並べるような位置関係で、あまりに近接しすぎているので、同時に存在したとは考えにくい。建て替えられた可能性が高い。1号竪穴状遺構の遺物（第9・10図）より3号竪穴状遺構出土遺物（第12図）の時期が古いので、3号建物→1号建物の順で建て替えられたと推定される。

1号竪穴状遺構上方の遺物は遺構の輪郭内にほぼおさまっているので、遺構に伴うと見られるが、3号建物周辺の遺物は遺構に伴わない土器群である。竪穴状遺構のすぐ西には2・3号土坑があるが、出土遺物の時期は建物よりも古く、同時存在した遺構ではない。竪穴状遺構の西10mには大規模な7号土器群があり、その北に接して15号土坑がある。この両者も時期が異なり、15号土坑は弥生後期まで遡る。さらに西側の8号土器群は14層で検出されているが、やや時期が下る土器群である。本来は13層から掘り込まれた遺構に伴っていたのであろう。

### 14層　1号竪穴状遺構（第8図）

調査区東端で検出された竪穴状遺構である。覆土は14層上面と同じ砂質土であるが、周囲に比べて酸化が強く黄褐色を帯びていた（写真図版2上段）。遺構南辺の輪郭はほぼ東西方向、西辺もほぼ南北方向だが、北辺の輪郭は検出時においてもなかなか確定できず、最終的にかなり不規則な形状となった。また、柱穴も検出されなかったので、竪穴建物と断定するに至らなかった。よって、竪穴状遺構として掲載する。

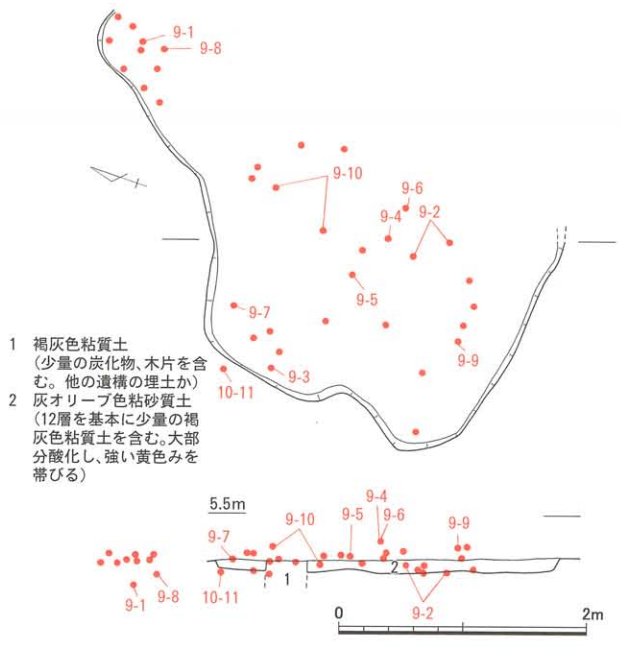
北辺が突出した平面形になっているのは、竪穴状遺構に伴う付属施設があるためか、あるいは遺構の北西部分が検出できなかった可能性が推定される。

**遺物出土位置**

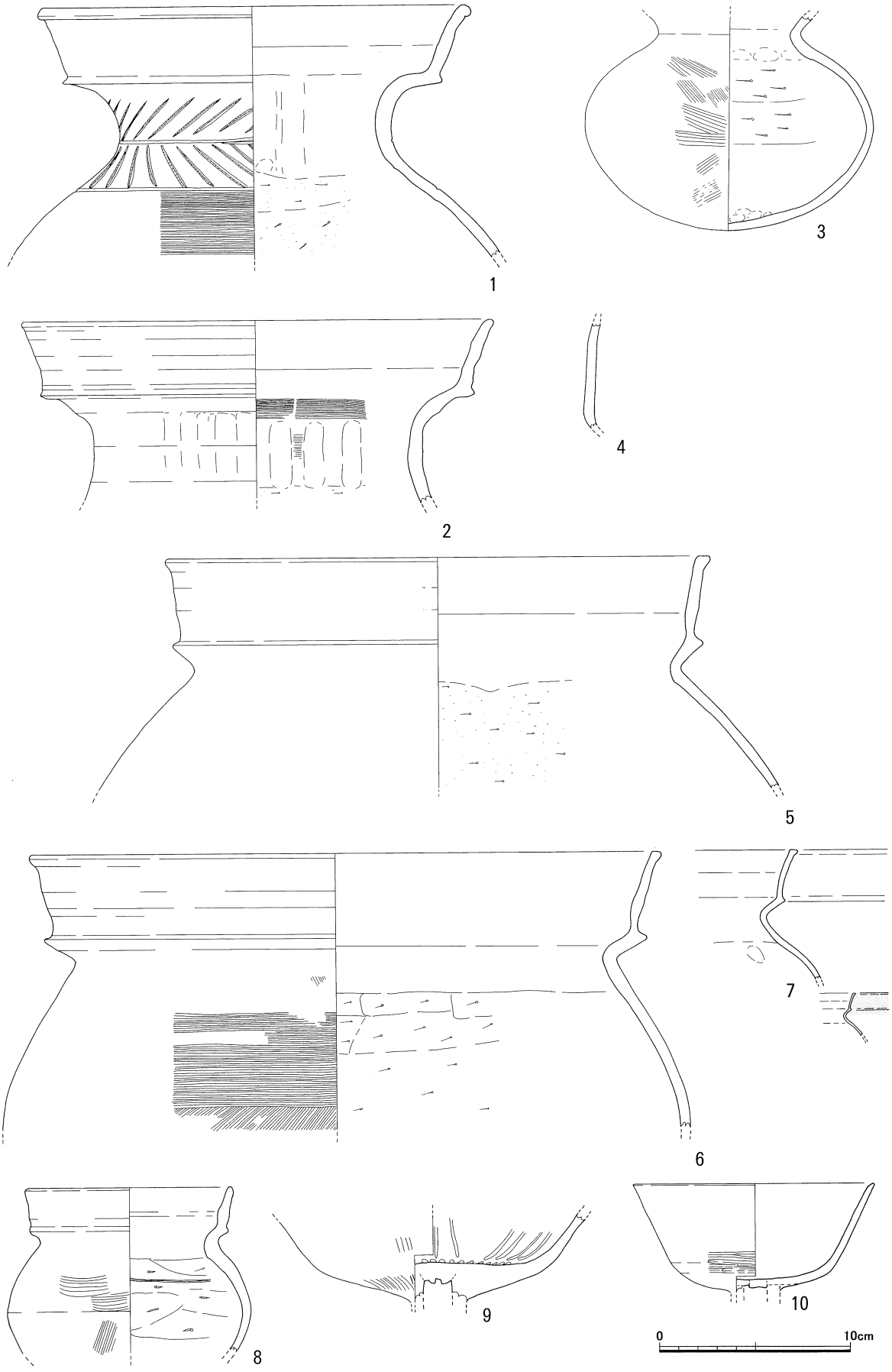
北へ突出した部分では、壺（9－1）の複合口縁部分が床面上で上を向いた状態で出土した。ただし完形にはならない。付近で土器片が出土しているが、出土位置は1より上であり、1の胴部であるかは不明である。2や10もやや離れた場所で破片が出土しているので、置かれた位置で潰れた状態ではなく、割れた状態であったと思われる。若干破片が移動しているかもしれない。

竪穴状遺構の壁は高さ約10cmしか遺存していないが、本来はもっと上まで壁があり、輪郭も上へ行くほど広がっていたと推定される。

遺物が出土した高さは、1及び8は遺構の床面より10cm下の位置から出土している。他の遺物の出土位置は多くが床面上10cmにそろう。

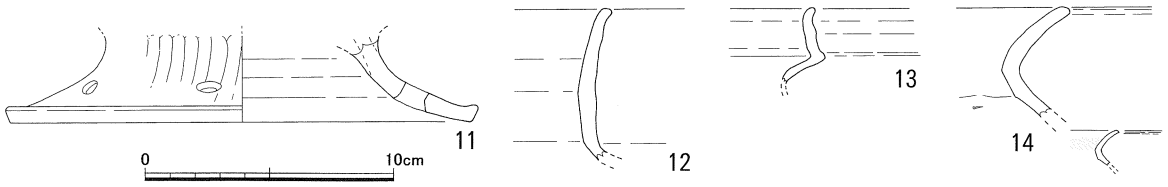



**第8図　6区14層　1号竪穴状遺構及び遺物出土位置**
（S＝1/60）




第９図　６区14層　１号竪穴状遺構出土遺物（1）（Ｓ＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：▭薄いスス




第10図　6区14層　1号竪穴状遺構出土遺物（2）（S＝1/3）
遺物図面(1/3)の凡例：▭薄いスス

10の破片は床面と床上20cmの位置から離れて出土している。いずれの遺物もほぼ竪穴状遺構の輪郭の範囲内に収まっている。

従って、これらは竪穴状遺構に伴う遺物である可能性が高い。

**遺物（第9・10図）**

甕の口縁の多くは複合口縁であるが、覆土から出土した甕の中には、内傾する複合口縁（13）や単純口縁（14）の甕が含まれる。

9－1は、遺構の北端近くから、口縁を上に向けた状態で出土した。口縁部は外傾度が急で、大きく開くような形状となる。口縁端部は下へ折られ玉縁状を呈する。頸部は口縁部近くではほぼ水平になる。頸部外面は全面に羽状文を描く。使用された工具は櫛状工具と思われる。羽状文の軸に当たる沈線が一周して閉じる位置では、沈線の起点と終点がわずかにずれている。羽状文下端の沈線以下には、平行ハケメが見られる。口縁端部が玉縁状になるなど、小谷3式の特徴を持つ。2は口縁部が外反し、端部は先細りとなる。頸部内面に見られる縦方向のナデは、頸部を成形する際に生じたシボリメの可能性もある。その上方ではハケメ調整の痕が十分消されていない。3は胴部が完全な球形ではなく、上下が潰れたような扁球形である。小形丸底壺であろう。口縁部が複合口縁、単純口縁のいずれであったかは不明である。4は直口壺の口縁部とみられるが、胴部～底部は出土していない。5は端部の面が明瞭に作られる。先端部を潰して作られた面で、外側に肥厚する。頸部から口縁部下端までが一連の部位となっており、径もあまり違わないため頸部にしまりがない。胴部内面のケズリ開始位置はかなり上である。6も端部の面が明瞭に作られる。先端部を潰して作られた面で、外側に肥厚する。口縁下端の横への突出が鋭い。頸部から複合口縁部下端まで一連の部位として製作されている。胴部内面のケズリ開始位置は頸部直下にある。7も口縁端部にしっかりした面が作られるが、器壁がきわめて薄い。小形品かと思われるが、口径は不明である。8は甕の小形品であるが、器壁が厚く作られる。口縁端部に面はなく、丸い。口縁下端も退化し、横への突出が鈍くなっている。9・10は高坏である。9は坏部と脚部の境界の断面がよく見え、切れ目無く連続して作られていることがわかる。その後底面中央に円板を充填している。内面底部は水平に整えられている。坏部内面には暗文が施される。10は坏部の口径が小さく、深めで、器壁は薄い。坏部と脚部は別途製作した物を接続している。脚部の上端は底部内面まで貫通していない。10－11は大形の低脚坏の脚部である。13は器壁が薄く、壺の小形品の口縁部であろう。口縁部は内傾し、端部をわずかに外へ曲げている。接地面ではない。14は単純口縁の甕の一部で、口縁部は大きく開いている。

1・11の胎土は他に比べて強い橙色を帯びている。

これらの遺物は、9－1の口縁端部が外見玉縁状になるなどの特徴から小谷3式と考えられる。

## 6区14層　1号竪穴状遺構出土土器観察表

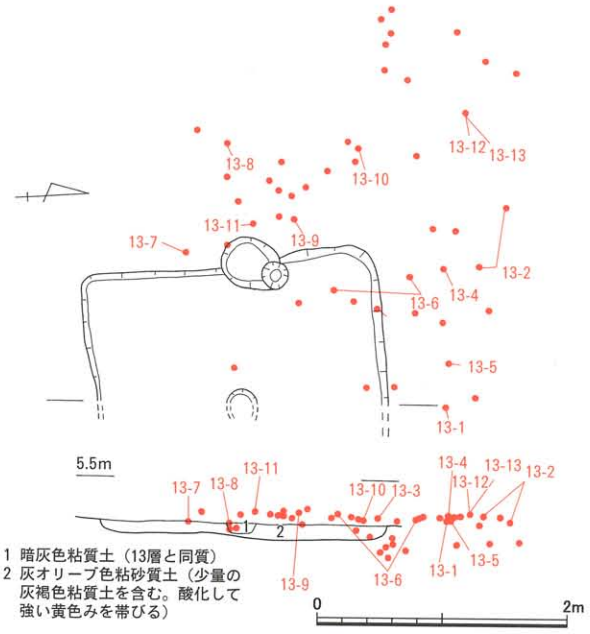
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9－1<br>(図版58) | 土師器<br>壷 | ①22.2<br>②(13.3)<br>④4.0 | 口縁端部が下へ折れる玉縁状 | 口縁：ヨコナデ/頸：綾杉文/肩：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：縦方向のナデまたはシボリメ後ヨコナデ/肩～：ケズリ | 胎土：密（1㎜程度の砂粒、雲母片、5㎜以下の赤褐色粒を含む）<br>色調：外面灰白色・橙色/内面淡橙色 | |
| 9－2<br>(図版57) | 土師器<br>壷 | ①(24.6)<br>②(9.7)<br>④3.9 | | 口縁：ヨコナデ/頸：縦方向のナデ後ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ後縦方向のナデまたはシボリメ | 胎土：密(1㎜以下の雲母片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 9－3<br>(図版58) | 土師器<br>小形壷 | ②(11.3) | | 頸：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ後ナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：横方向のケズリ/底：指オサエ・ナデ | 胎土：密(2㎜の石英粒、雲母片を多く含む)<br>色調：内外面淡橙色/断面浅黄橙色 | 9－4と同一固体か |
| 9－4<br>(図版57) | 土師器<br>直口壷 | ②(5.5) | | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片を含む)<br>色調：内外面にぶい橙色/断面浅黄橙色 | 9－3の口縁部の可能性 |
| 9－5<br>(図版57) | 土師器<br>甕 | ①(28.4)<br>②12.2<br>④4.6 | | 口縁：ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片を含む)<br>色調：灰白色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 9－6<br>(図版57) | 土師器<br>甕 | ①(33.6)<br>②(14.5)<br>④5.0 | | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：ヨコハケメ/胴下半：斜行ハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴ケズリ | 胎土：密(1㎜大の石英粒、雲母片を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 9－7<br>(図版57) | 土師器<br>甕 | ②(6.8)<br>④2.7 | | ヨコナデ | 口縁～肩：ヨコナデ/胴：ナデか | 胎土：密(1㎜程度の石英粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 9－8<br>(図版58) | 土師器<br>甕 | ①10.7<br>②(8.7)<br>④2.4 | | 口縁：ヨコナデ/肩：横方向の粗いハケメ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：内外面浅黄橙色/断面暗褐灰色 | |
| 9－9<br>(図版57) | 土師器<br>高坏 | ②(4.5) | 坏部と脚部を連続して作り、円板を充填している | 体：ハケメ後ナデ/坏底：ハケメ後一部ナデ | 体：ヨコナデ後ミガキか/坏底：放射状のミガキか | 胎土：やや粗(1㎜以下の砂粒を少し含む)<br>色調：内外面浅黄色/断面灰白色 | |
| 9－10<br>(図版57) | 土師器<br>高坏 | ①(12.6)<br>②(5.6) | 脚筒部に充填されている粘土塊は中心に来ない | やや粗いミガキ | ミガキか | 胎土：密(1㎜程度の石英粒を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色/内面：灰白色 | |
| 10－11<br>(図版57) | 土師器<br>低脚坏 | ②(3.5)<br>③(18.6) | 坏部と脚部の接続時に粘土を継ぎ足した痕あり。脚裾部に外面から空けた穿孔があるが総数は不明 | 縦方向のミガキ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片を含む)<br>色調：内外面灰白色/断面にぶい橙色 | |
| 10－12<br>(図版57) | 土師器<br>直口壷 | ②(6.1) | | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜大の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 10－13<br>(図版57) | 土師器<br>甕か | ②(2.9)<br>④1.9 | 内傾する複合口縁 | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 10－14<br>(図版57) | 土師器<br>甕 | ②(4.4) | | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の雲母片を少し含む)<br>色調：灰黄色 | |

### 14層　3号竪穴状遺構（第11図）

1号竪穴状遺構の1m南に隣接する位置で検出された竪穴状遺構である。調査区東端にかかっているため、北辺・南辺の長さは明らかでなく、西辺のみ長さが判明する。南北方向は一辺が2mである。

遺構覆土は1号竪穴状遺構の場合と同じく、灰オリーブ砂質土であるが、周囲よりも酸化が著しく黄褐色を帯びていた。この竪穴状遺構を切って、3穴のピットが掘られる。これらのピットの埋土は黒色～黒褐色の粘質土である。13層あるいは上層の9層から掘り込まれたピットであろう。

1号竪穴状遺構に比べると、各辺の輪郭は明確である。1号竪穴状遺構から北の突出部分を取り




**第11図　6区14層　3号竪穴状遺構及び周辺遺物出土位置**（S＝1/60）

去ると、3号竪穴状遺構と似た形状、規模になる。また、1号竪穴状遺構の南辺・西辺と3号竪穴状遺構の北辺・西辺は方向がほぼ同じであり、隣接した位置に作られている。以上のような関係から、1号・3号竪穴状遺構は性格も時期も共通していよう。ただし、その距離が1mと著しく接近しているので、同時に存在した可能性は低い。覆土からの出土土器をみる限り3号竪穴状遺構が先行しており、その廃絶後隣接する場所に移転したのが1号竪穴状遺構であろう。その際、前の遺構の輪郭線を意識したため方向がそろったと思われる。

**遺物の出土位置**

位置を記録して取り上げた遺物（第13図）が出土したレベルは、3号竪穴状遺構の床面から10～30cm上方に集中する。ただし、ほとんどが3号竪穴状遺構の輪郭からはみ出した位置に出土しており、遺構に伴うとは考えられない。上層の土器群の遺物（第13図）が遺構覆土からの出土遺物（第12図）より新しいので、竪穴状遺構廃絶後に土器群が形成されたと考えられる。これらの遺物を位置関係に注目して分けてみると、遺構北方から出土した群（13－1～6）、西方から出土した群（7～11）、それよりやや西から離れて出土した群（12・13）の3グループに細別できる。これらのグループ間には、器種構成の偏りなどは見られない。出土位置は不規則で、共伴関係を特定できない。

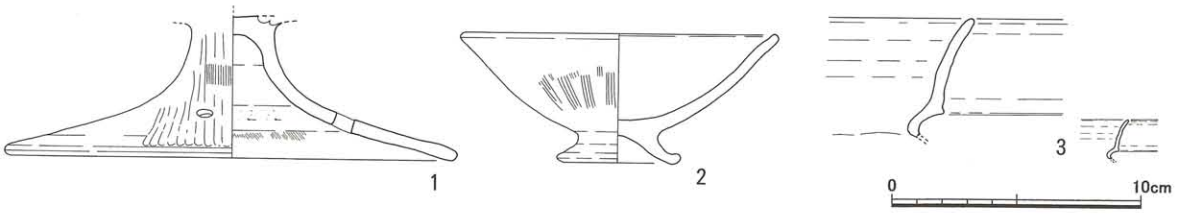
他方で、覆土から出土した遺物（第12図）は、位置を特定できないが、遺構覆土を精査する中で出土したものであり、前者よりも遺構に伴う可能性が高い。

**遺構覆土からの出土遺物（第12図）**

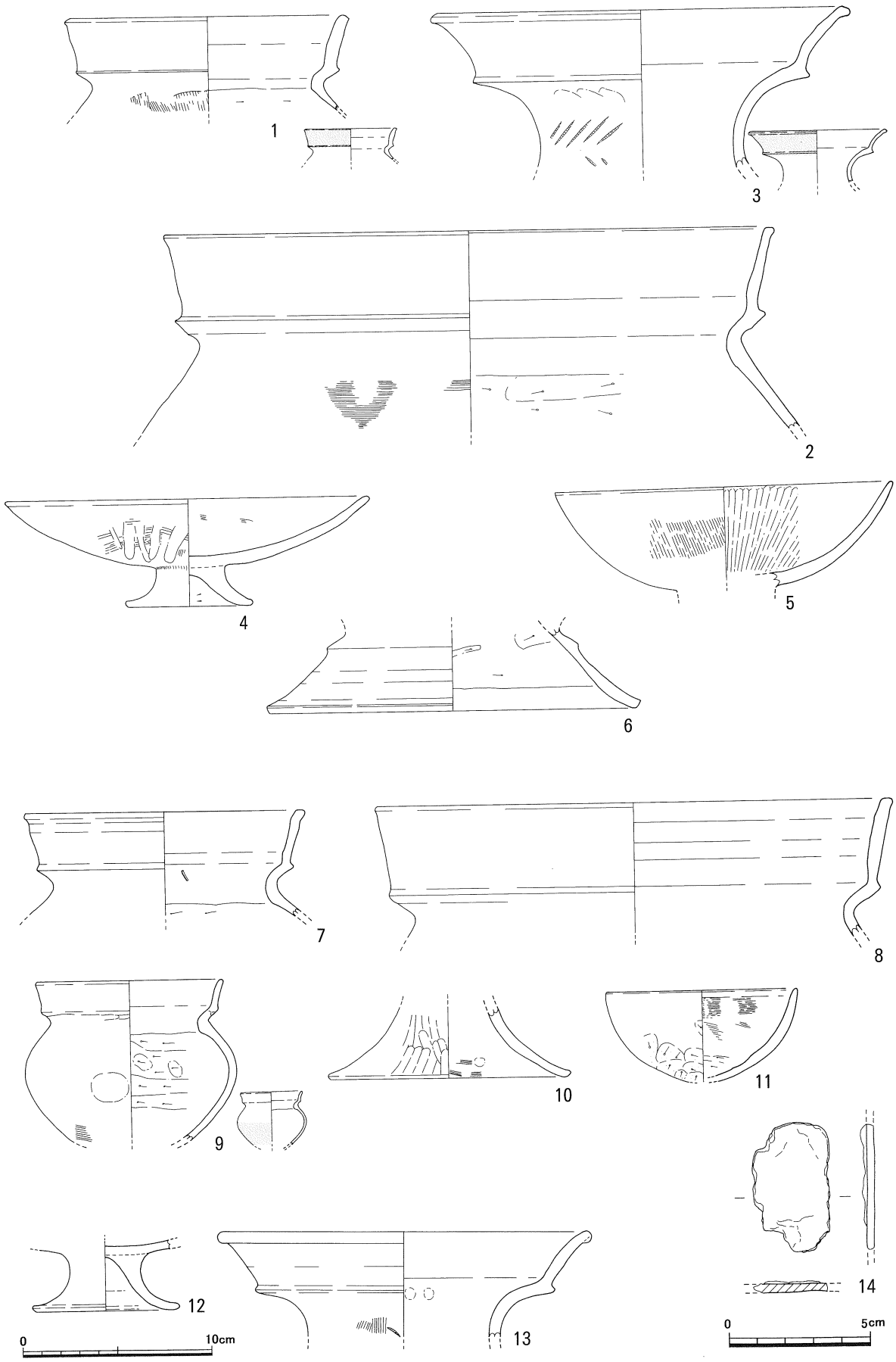
12－1は低めの脚部を持つ高坏である。低脚坏（2）は坏部が直線的に開く。複合口縁の甕（3）は弥生後期に遡る。

**周辺からの出土遺物（第13図）**

13－1は複合口縁の端部に外傾するしっかりした面を持つ。器壁は、胴部が薄いのに比して口縁




**第12図　6区14層　3号竪穴状遺構出土遺物（覆土）**（S＝1/3）
遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス




第13図　6区14層　3号竪穴状遺構上層及び周辺出土遺物（1～13：S＝1/3、14：1/2）

遺物図面(1/3)の凡例：▭ 薄いスス

部の厚さが目立っている。複合口縁部下端の横への突出は弱い。2も口縁端部の面が明瞭であるが、1の面が水平でないのに対し、2は面がほぼ水平であり、倒立させると面全体が接地する。胴部内面のヘラケズリは頸部よりやや下がった位置から開始される。3は口縁部が外反気味で、大きく開く形状となる。頸部外面の羽状文は風化のせいもあるが不明瞭である。工具も、貝殻腹縁、櫛状工具いずれを使用したか明らかでない。口縁部に近い頸部外面には、口縁部と頸部を接続する際に付いたと思われる指頭圧痕が残る。4は広く浅い坏部をもつ低脚坏である。坏底部の下面に脚部をつなげる、単純な接続法である。外面の調整は、ハケメの上からヘラミガキがなされるが、粗い調整で、完全にハケメを消し去っていない。5の坏部はやや深い。外面はハケメが残るが、内面のヘラミガキは細かく入念である。6は脚台部の端部に面が作られる。7は複合口縁の甕で器壁は厚い。口縁先端を潰して水平で広い面を作っており、外側へ少し肥厚する。8は大形の複合口縁の甕で、口縁端部の面は広くしっかりしている。口縁下端と頸部の径がほとんど違わないため、頸部にしまりがない。複合口縁下端から頸部へはスムーズにつながり、一連の部位として製作されている。9は小形の複合口縁甕である。口縁端部が丸く、複合口縁下端の横への突出も鈍い。退化傾向の見られる複合口縁である。頸部と口縁部の境で粘土を継いでいるのが観察される。底部を欠いているが、上下方向が短く、扁球形あるいは算盤玉のような形状であろう。11は粗製の坏である。口縁部がほぼ上を向き、全体は椀形～半球形となる。内面にハケメ、外面は粗いヘラケズリをされる。口縁部と体部とではハケメの方向が異なり、底部は内外面ともケズリである。この器種は、層位は異なるが、6区13層4号土器群の粗製坏（42－10）につながるものか。

13－12・13は同位置から出土しており、一括性は他の遺物以上に高い。やや高めの脚部を持つ低脚坏（12）と、複合口縁の端部が下へ折れて玉縁状を呈する壺（13）のセットである。12はやや器高が高いが、坏部と脚部の接続法は単純で、低脚坏の脚部と見られる。13の複合口縁部は外傾する角度が急で、大きく開く形状となる。複合口縁下端の横への突出は鋭さが全くなくなっている。口縁端部は下へ折られ、外観玉縁状となる。頸部は下半分を欠くが、羽状文の上端がわずかに残っている。

スス・コゲの無いものが多く、小形甕（1・9）と壺（3）、坏（11）にのみ付着する。頸部が長い壺（3）でもススが付き、逆に頸部の短い甕でも大形品（2・8）にはススが付かない。必ずしも壺＝貯蔵具、甕＝煮炊具という区分ではなく、中～小形品が煮炊具、大形品はそれ以外の目的

**6区14層　3号竪穴状遺構（覆土）出土土器観察表**

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12－1<br>(図版58) | 土師器<br>高坏<br>(脚) | ②5.7<br>③(18.0) | 脚裾部に穿孔があるが、総数は不明 | 脚筒：タテハケメ後縦方向のミガキ/脚裾：ヨコナデ後縦方向のミガキ | 脚筒：ケズリ後ナデ→ケズリ→斜行ハケメ/脚裾：ヨコナデ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：外面の一部橙色/断面浅黄橙色 | |
| 12－2<br>(図版58) | 土師器<br>低脚坏 | ①12.5<br>②5.2<br>③4.5 | 坏部が直線的に開く | 坏：タテハケメ後ナデ/脚：ヨコナデ | 坏：ミガキ又はナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 12－3<br>(図版58) | 弥生土器<br>甕 | ②(4.8)<br>④3.0 | 口縁部は外反 | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の雲母片を多く含む)<br>色調：内外面淡橙色/断面灰白色 | |

## 6区14層　3号竪穴状遺構周辺出土土器観察表

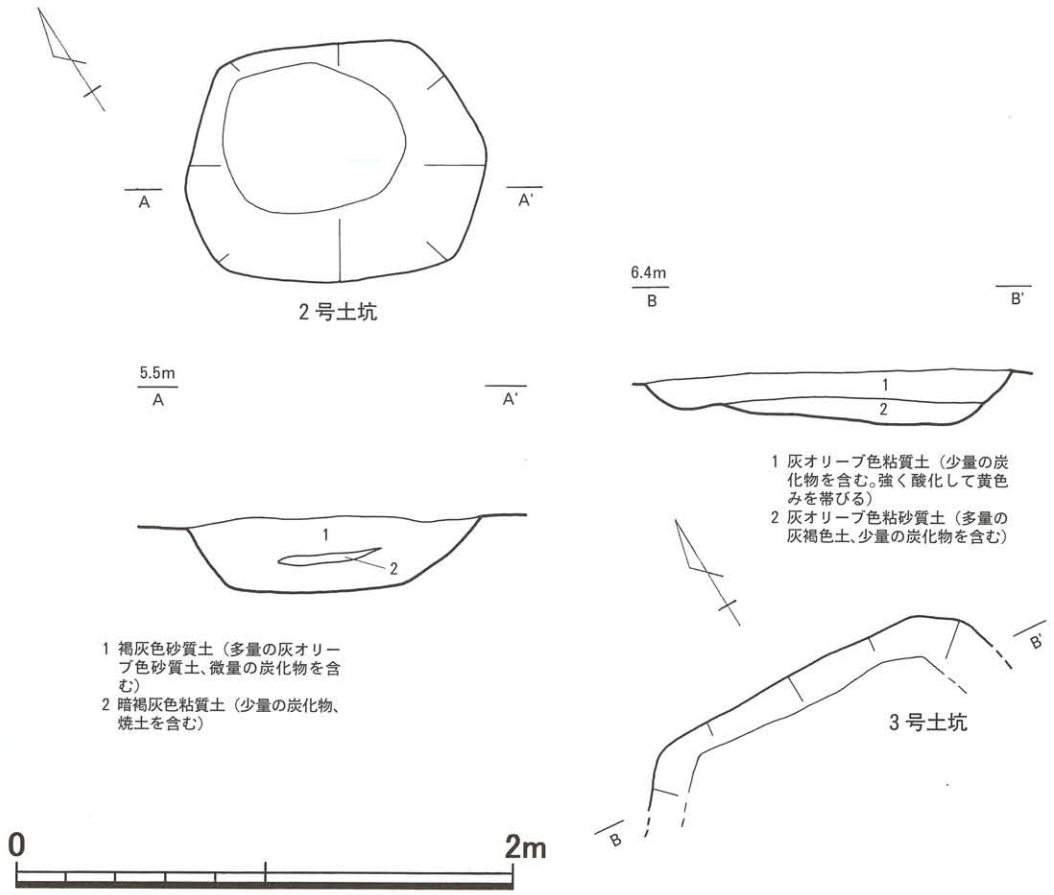
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13－1<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①14.4<br>②(5.0)<br>④2.9 | 口縁端部に面あり。接地せず。 | 口縁：ヨコナデ/肩：斜行ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/肩：ケズリ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：淡灰白色 | |
| 13－2<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①(32.3)<br>②(10.8)<br>④4.6 | 口縁端部に面あり。先端部を潰して作る。 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩～：ハケメ後ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ又はヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 13－3<br>(図版59) | 土師器<br>壷 | ①(21.5)<br>②(8.4)<br>④3.7 | 口縁端部に面あり。接地せず。先端部を潰して作る。 | 口縁：ヨコナデ/頸上半：オサエか/頸下半：羽状文 | 口縁～：ヨコナデ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 13－4<br>(図版58) | 土師器<br>低脚坏 | ①19.1<br>②5.7<br>③6.5 | 坏部が浅い | 口縁：ツマミ調整/坏体：ハケメ後粗いミガキ/坏底：ハケメ/脚：ヨコナデ | 坏：ミガキか/脚：ケズリ後ナデ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：淡橙褐色 | |
| 13－5<br>(図版59) | 土師器<br>低脚坏 | ①(17.8)<br>②(5.4) | | 口縁：ナデ/坏：タテハケメ後ナデ/坏底：ナデ | 坏：ミガキ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を少し含む)<br>色調：淡黄色 | |
| 13－6<br>(図版59) | 土師器<br>鼓形器台 | ②(4.3)<br>③19.5 | | ヨコナデ | 器台上半：ヨコナデ/脚台下半：ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：淡黄色 | |
| 13－7<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①(14.7)<br>②(5.6) | 口縁端部に面あり。接地しないか。先端部を潰して作る。 | 口縁～肩：ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸～肩：ケズリ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 13－8<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①(27.3)<br>②(7.3)<br>④4.4 | 口縁端部に面あり。接地。 | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密（石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：内外面浅黄橙色/断面灰白色 | 口縁に黒斑 |
| 13－9<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①(9.3)<br>②(8.5) | やや肩が張る小形の甕 | 口縁～頸：ヨコナデ/胴下半：ヨコハケメ後ナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：口縁下端と接着後粘土を貼り付け、その後ヨコナデ/胴上半：ケズリ後ナデ/胴下半：ナデ | 胎土：密（石英粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：灰白色/外面の一部は赤褐色 | |
| 13－10<br>(図版59) | 土師器<br>低脚坏 | ②(3.8)<br>③12.5 | | ミガキ | ハケメ後ナデ、指頭圧痕が残る | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を少し含む)<br>色調：淡灰白色 | |
| 13－11<br>(図版59) | 土師器<br>坏 | ①(10.2)<br>②(4.9) | | 口縁：ナデ/底：ケズリ | 口縁：ヨコハケメ後ナデ/体：斜行ハケメ後ナデ/底：ケズリ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：外面浅黄色/内面灰黄色 | |
| 13－12<br>(図版58) | 土師器<br>低脚坏 | ②(3.7)<br>③(7.4) | | 脚：ヨコナデ | 坏底：ミガキか/脚：ナデ | 胎土：密(石英粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 13－13<br>(図版59) | 土師器<br>壷 | ①(15.4)<br>②(5.6)<br>④3.1 | 口縁端部が下へ折れる玉縁状 | 口縁：ヨコナデ/頸：ハケメ後ヨコナデ、羽状文(櫛状工具) | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ(指頭圧痕が残る) | 胎土：(多量の石英粒、少量の金雲母細片を含む)<br>色調：外面橙色/内面断面：浅黄橙色 | |

## 6区14層　3号竪穴状遺構出土金属器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 調査区<br>層位<br>出土地点 | 種別<br>器種 | 計測値(㎜)<br>長×幅×厚 | 重量(g) | 遺存度 | 形態的特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13－14<br>(図版58) | 14層上面 | 不明鉄片 | 4.6×2.8×3.0 | | 破片 | 板状。上下左右とも欠損 | |

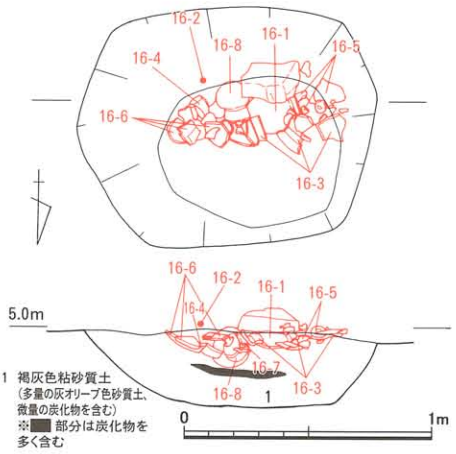
に使われていたようである。

複合口縁の甕は頸部のくびれ部が浅く、器壁は厚くなり（13－1）、ケズリ調整の開始位置が頸部から下方へ下がっている（2）。また、鼓形器台（6）は筒部の短小化が進んでいる。前段階ま




第14図　6区14層　2号・3号土坑（S＝1/30）

でにはなかった椀形で粗製の坏が新たに登場する。以上の特徴から、これらの土器は小谷3式に位置づけられる。



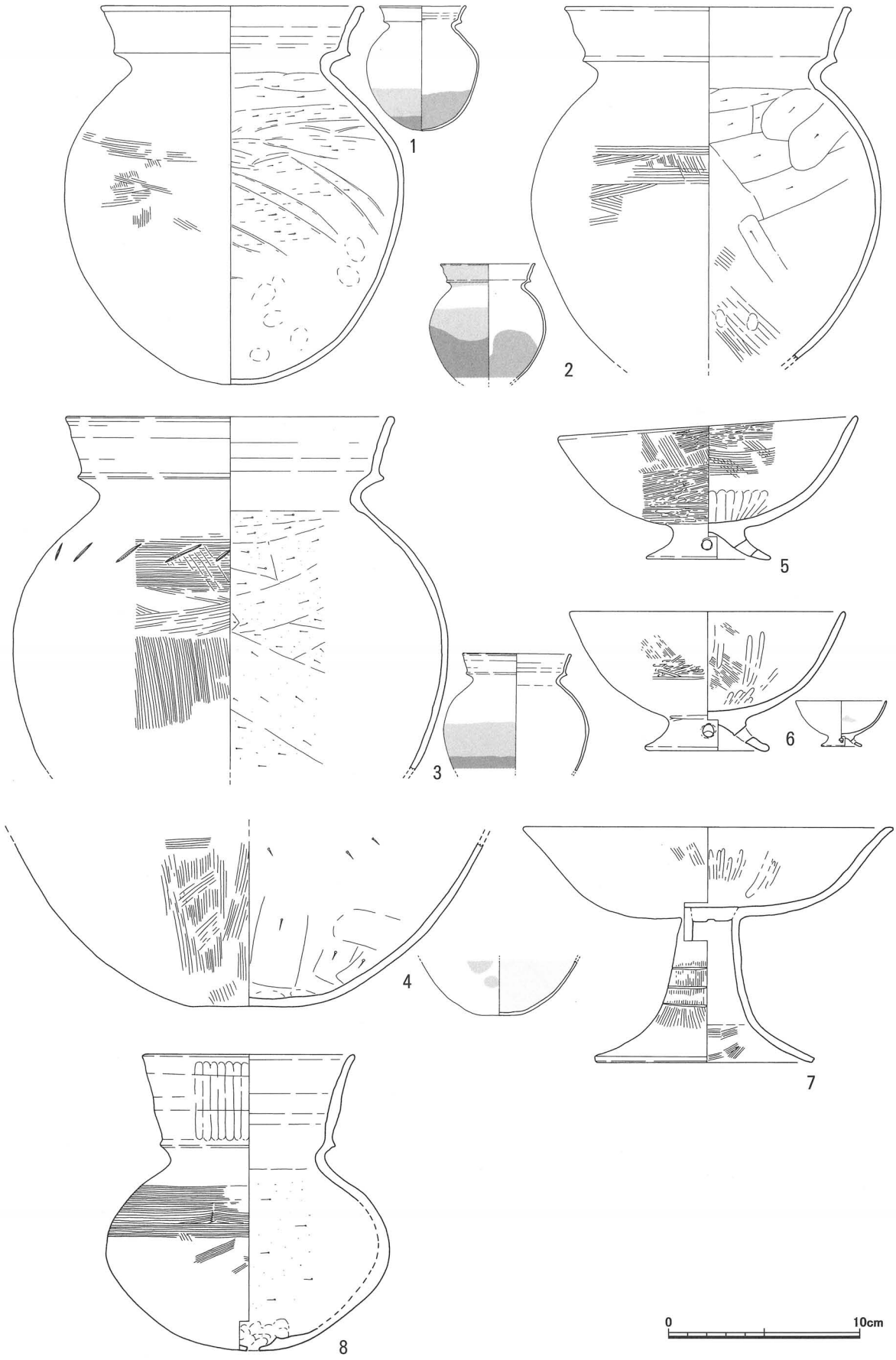

第15図　6区14層　2号土坑及び遺物出土状況（S＝1/30）

**14層　2号土坑（第14・15図）**

1号及び3号竪穴状遺構の1～2m西側の位置で検出された土坑である。埋土は褐色系だが多量の砂質土（14層と同質）を含み、周囲の遺構面との区別がつかないものであった。このため、当初は土器群と認識していたが、出土土器の周囲を精査すると炭化物を周囲よりやや多目に含んでいる部分が認められた。その規模は長軸方向（東西）1.2m、短軸方向（南北）1.0m、深さ30cmであった。埋土の中間には多量の炭化物を含む薄い層がはさまっていた。これは土坑内に埋め置かれた板状の有機物が腐朽して形成した炭化物の層と考えられる。土器は、その土坑の上面から集中して出土し、さらにその上には一辺30～40cmの四角い石が置かれていた。

**2号土坑出土遺物（第16図）**

複合口縁の甕（16－1～3）は、器壁が薄く、胴部最大径が胴中央より上にあって肩が張るプロポーションである。底部は丸底で、内面に指頭圧痕（型に押しつけた時に付いたと思われる）がつ

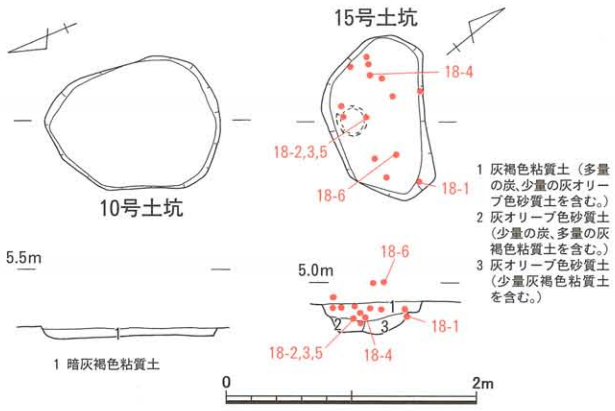



第16図　6区14層　2号土坑出土遺物（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　汚れ

くもの（1）、痕跡的な平底で底部ぎりぎりまでヘラケズリされるもの（4）が共存する。低脚坏は坏部が深く、脚部が1箇所穿孔される（5・6）。さらに、坏部と脚部を接続して円板を充填した高坏や、長い複合口縁を持つ小形直口壺（8）が含まれる。8の底部中央内面は、穿孔されているが、その周囲は指押さえされて薄くなっており、穿孔を予定したような作りとなっている。以上の特徴から、2号土坑の土器群は小谷1式に属する。

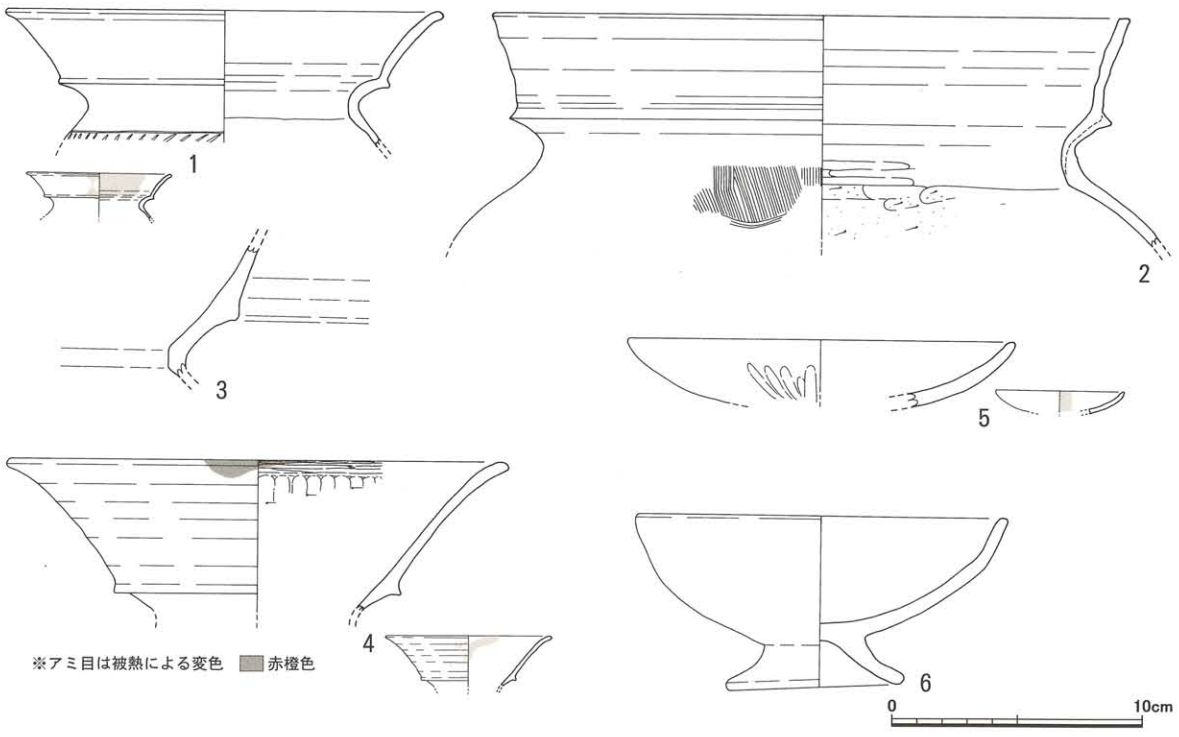
出土した甕にはいずれも外面・内面のいずれかにススやコゲが確認された。外面のススは胴部最大径以下と複合口縁部に付着し、底部近くのススは濃くなる傾向がある。内面にコゲがある1・2は胴部の下半分を中心に付着が見られるので、実際に煮炊きに使用されていたと判断される。甕以外では低脚坏（6）の内面にもススまたはコゲが見られる。




第17図　6区14層 10号・15号土坑及び遺物出土位置（S＝1/60）

## 2号土坑の性格

土器を廃棄した廃棄土坑、あるいは土坑墓の可能性が想定できる。廃棄土坑であれば、土器を廃棄する空間が確保されればそれ以上大きい掘方は不要である。廃棄土坑と考えられる12層1号土坑や16号土坑（80～81P）では、遺物が出土した標高と土坑底面の標高がほとんど同じであった。しかし、この2号土坑は出土遺物より下の部分




第18図　6区14層 15号土坑出土遺物（S＝1/3）
遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス

に深さ30㎝に達する掘方をもち、底面から土器群までが無用な空間になってしまう。また、廃棄土坑の中間部に薄い炭層が形成される理由が説明できない。一方、土坑墓であれば、炭化物層は腐朽した棺材、土器は葬送儀礼の際に墓上に供献された土器と考えることができる。土器群の上に乗っている石も、墓の標柱のような役目を持っていたと考えられる(1)。断定はできないが、土坑墓ではなかろうか。

### 14層　3号土坑（第14図）

調査区の南東隅、3号竪穴状遺構のすぐ南西で検出された土坑である。遺存状況のよい部分で長軸1.2m、深さ20㎝を測る。検出時は竪穴状遺構と予想したが、小規模な竪穴状遺構の一辺2mをさらに下回る小規模な遺構であるため、土坑として掲載した。土は周囲の遺構面と同質の灰オリーブ色砂質土であったが、周囲より酸化が著しく黄褐色を帯びていることから遺構と判断した。この埋土の質は1・3号竪穴状遺構とも共通する。

遺物は出土しなかった。

**竪穴状遺構と土坑の位置関係**

1・3号竪穴状遺構の西に2・3号土坑が掘られるという位置関係になっている。遺構配置だけ

**6区14層　2号土坑出土土器観察表**

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16－1<br>(図版60) | 土師器<br>甕 | ①13.4<br>②19.9<br>④2.5 | 口縁の器壁は厚い | 口縁～頸直下：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴中央：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/頸直下：横方向のケズリ/胴中央：横方向のケズリ後斜め方向のヘラ痕/胴下半～底：オサエ | 胎土：密(黒雲母・金雲母細片を多く含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 16－2<br>(図版60) | 土師器<br>甕 | ①14.8<br>②(18.6)<br>④2.9 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：不定方向のハケメ/胴下半：ナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：ケズリ/胴下半～：粗いハケメ→細かいハケメ→ナデ(指頭圧痕残る) | 胎土：密<br>色調：浅黄色一部赤橙色 | |
| 16－3<br>(図版60) | 土師器<br>甕 | ①(17.0)<br>②(18.6)<br>④3.2 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁：ヨコナデ/胴上半：ヨコハケメ後刺突文/胴下半：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸～：ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の雲母片を多く含む)<br>色調：灰白色 | 口縁、胴部の一部に黒斑 |
| 16－4<br>(図版60) | 土師器<br>甕 | ②(8.7)<br>③5.7 | 底部はわずかに平底 | 胴下半～底：タテハケメ | 胴：ケズリ後部分的にナデ/底：オサエ | 胎土：やや粗(0.5㎜の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 黒斑 |
| 16－5<br>(図版60) | 土師器<br>低脚坏 | ①15.5<br>②7.5<br>③6.4 | 坏部がやや深い。脚部に内面から穿った1箇所の穿孔 | 坏上半：タテハケメ後横方向の細かいミガキ/坏下半：横方向の細かいミガキ/脚：ヨコナデ | 坏上半：横・斜行ハケメ後横方向の細かいミガキ/坏下半：縦方向のミガキ/脚：ヨコナデ | 胎土：密(微細な雲母片を多く含む)<br>色調：外面灰白色/内面灰黄色・黄灰色 | 外面の1/3に黒斑 |
| 16－6<br>(図版60) | 土師器<br>低脚坏 | ①14.2<br>②7.3<br>③6.2 | 坏部がやや深い。脚部に内面から穿った1箇所の穿孔 | 坏：ハケメ後横方向のミガキ/脚：ヨコナデ | 坏：ハケメ後一部に縦方向のミガキ/脚：ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：内外面淡黄色/断面灰褐色～浅黄橙色 | |
| 16－7<br>(図版61) | 土師器<br>高坏 | ①19.2<br>②12.4<br>③11.2 | 坏部と脚部は円板を充填して接続。脚裾端部に面あり | 口縁～体：斜行ハケメ後ヨコナデ/脚筒：タテハケメ後横方向の沈線文/脚裾：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/坏中央：ミガキ/坏底：ナデ/脚筒：横方向のケズリ後ナデ/脚裾：ハケメ後ナデ | 胎土：密(金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 16－8<br>(図版61) | 土師器<br>直口壺 | ①10.9<br>②15.6<br>④4.5 | 焼成後底部外面から穿ったと思われる1箇所の穿孔 | 口縁：ヨコナデ後縦方向のミガキ/頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメが1周/胴下半：横・斜行方向のハケメ後ナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸～：ケズリ/底：オサエ | 胎土：密(微細な雲母片を多く含む)<br>色調：灰白色、口縁の一部橙色 | 外面から口縁内部は赤彩か |

## 6区14層　15号土坑出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18－1<br>(図版59)<br>(図版61) | 土師器<br>甕 | ①(17.3)<br>②(5.4)<br>④3.0 | 外傾度きつい。口縁端部を加工した接地面あり | 口縁～：ヨコナデ/肩：1条の凹線文、刺突文 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩～：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の雲母片、石英粒を含む)<br>胎土：内外面灰褐色/断面灰褐色～浅黄橙色 | |
| 18－2<br>(図版59) | 土師器<br>甕 | ①(25.4)<br>②(9.2)<br>④4.2 | 口縁端部に面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/肩～：タテハケメ、一部波状文 | 口縁：ヨコナデ/頸：一部ミガキ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片を多く含む)<br>胎土：外面灰白色/内面断面灰褐色 | |
| 18－3<br>(図版59) | 土師器<br>鼓形器台 | ②(4.9) | 筒部やや長い | ヨコナデ | ヨコナデ後ミガキ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片を含む)<br>胎土：灰白色 | |
| 18－4<br>(図版59)<br>(図版61) | 土師器<br>鼓形器台 | ①(19.8)<br>②(6.0) | 筒部やや長い | ヨコナデ | 器受口縁：横方向のミガキ/器受体：横方向のケズリ後縦方向のナデ | 胎土：密(1㎜以下の雲母片を多く含む)<br>胎土：内外面灰白色/断面被熱して赤橙色 | 外面の一部に黒斑 |
| 18－5<br>(図版59) | 土師器<br>坏 | ①15.4<br>②(2.7) | | 口縁：ヨコナデ/坏底：ミガキ | ミガキ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：外面にぶい橙色/内面断面明褐灰色 | |
| 18－6<br>(図版61) | 土師器<br>低脚坏 | ①14.7<br>②7.0<br>③6.7 | 坏部はやや深い | 不明 | 脚：ヨコナデ | 胎土(石英粒、赤褐色粒、黒雲母細片を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色/内面にぶい橙色 | |

を取り上げれば、竪穴状遺構に土坑が付属するという関係にも見えるが、1号竪穴状遺構の土器が小谷3式、2号土坑は小谷1式で時期が異なっている。

3号土坑については、時期を確定する手がかりもないため不明である。

### 14層　10号・15号土坑（第17図）

#### 10号土坑（第17図）

調査区中央南寄りで検出された土坑である。平面形の規模は長軸1.5m、短軸1.0mを測る。遺存状況が悪く、深さ5㎝程度残存していたのみである。検出面は14層であったが、埋土は13層に似た暗灰褐色粘質土で、13層から掘り込まれた遺構の可能性もあり、13層4号柱列との前後関係も問題となる。遺物は出土していない。時期、性格とも不明である。

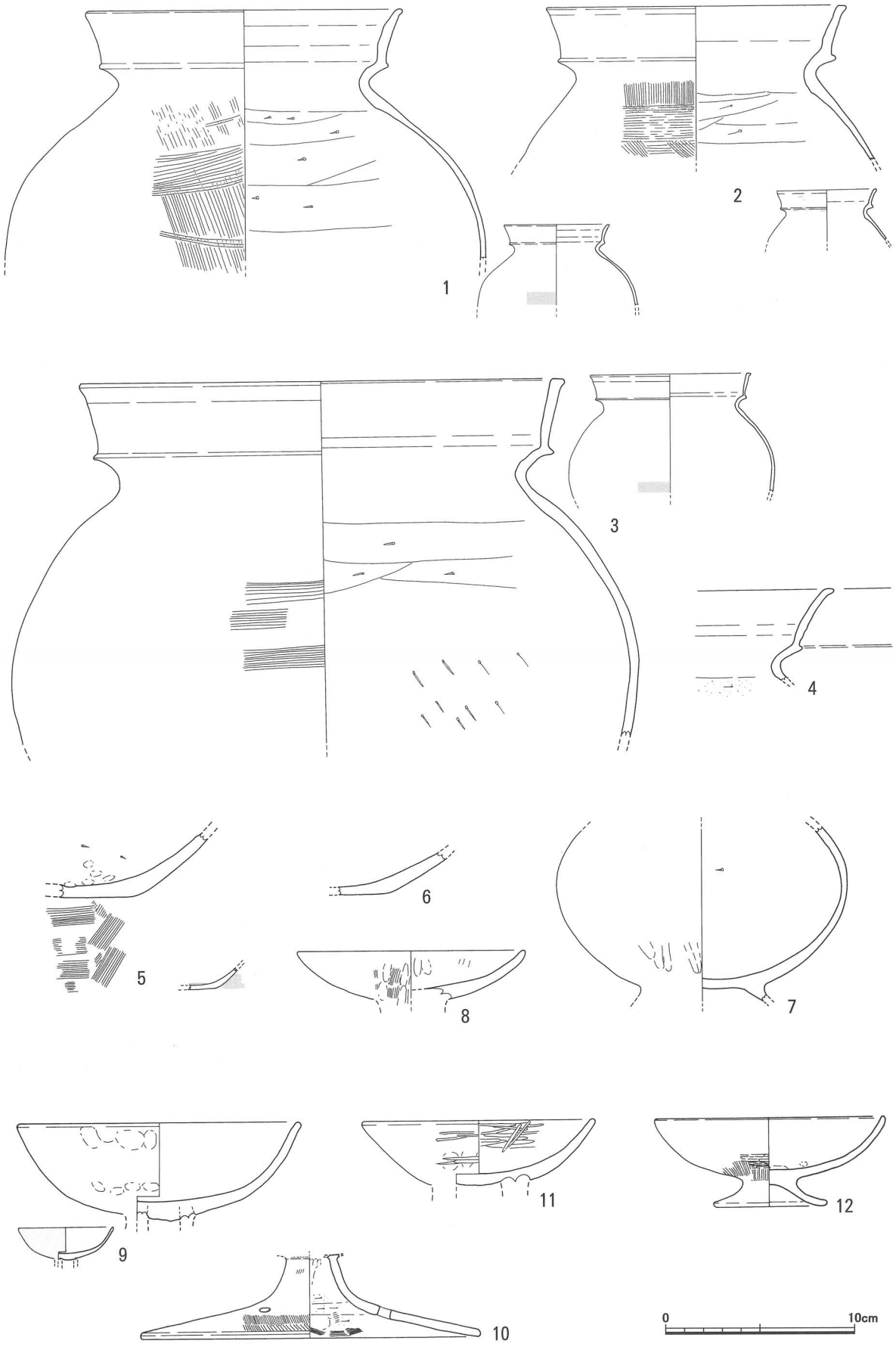
#### 15号土坑（第17図）

調査区東端から約10m西方の位置で検出された。埋土上層の1層が周囲と異なる粘質土で、多量の炭を含んでいたため容易に検出できた。下層は砂質土で、炭化物を含んでいる。

遺物は第1層を中心に出土した。18－1～5は土坑底面から出土した。2～5が遺構の西側に集まっているのに対して、1はやや離れて遺構の東端から出土している。接近して出土した2～5のうち、器台である3あるいは4が2を載せるために使用された可能性が考えられる。6は底面から30㎝浮いた位置から出土したが、本来の土坑は上から掘り込まれていた可能性があるので、6も15号土坑に伴う遺物と判断した。

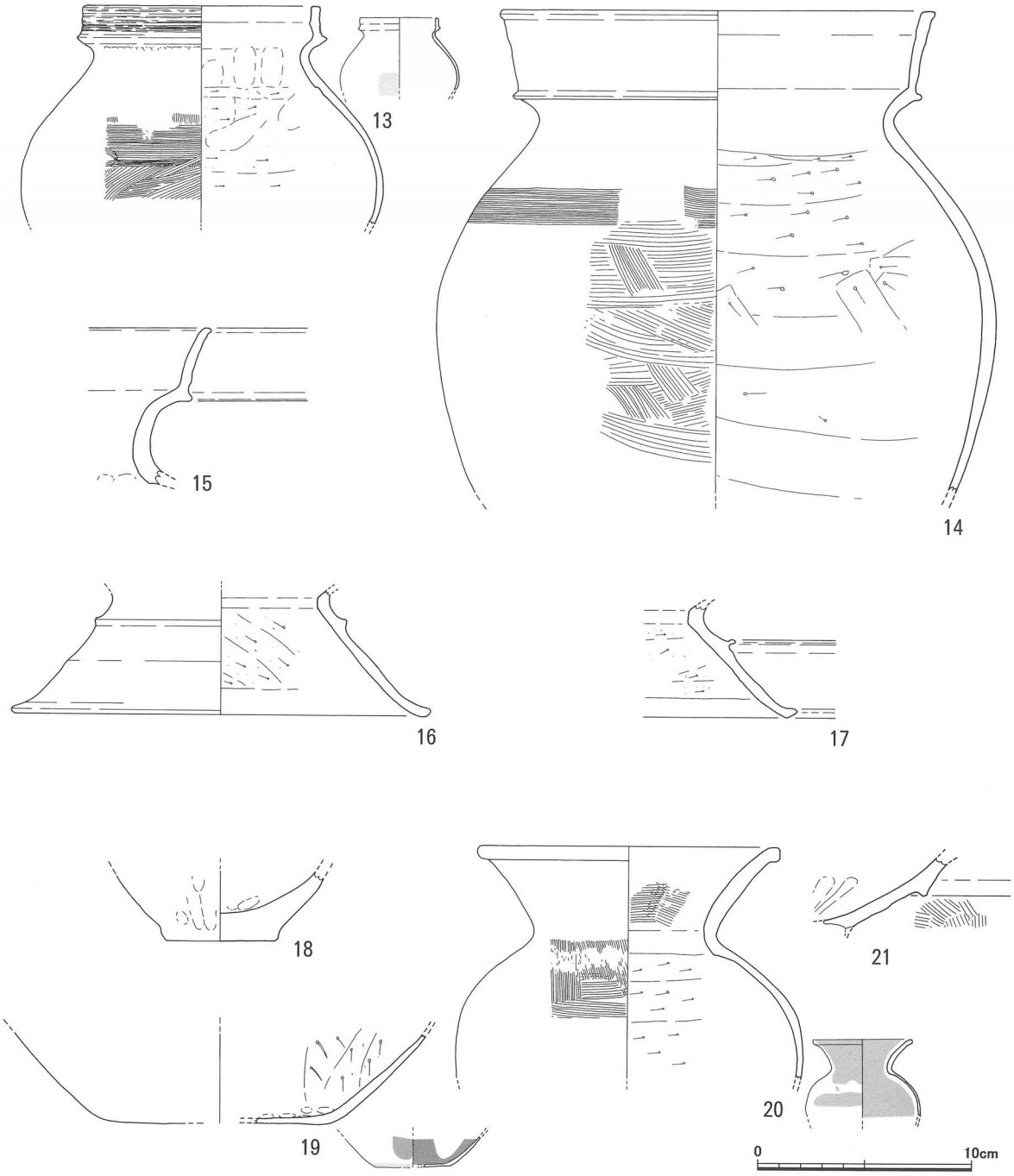
#### 15号土坑出土遺物（第18図）

複合口縁の甕は、口縁部の外傾度がきつく（18－1）、器壁が薄い（1・2）等の特徴を持つ。鼓形器台も筒部が長い傾向がある（3・4）。これらの特徴から、15号土坑の出土遺物は弥生後期




第19図　6区14層　7号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　薄いコゲ　汚れ




第20図　6区14層　7号土器群出土遺物（2）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ　汚れ

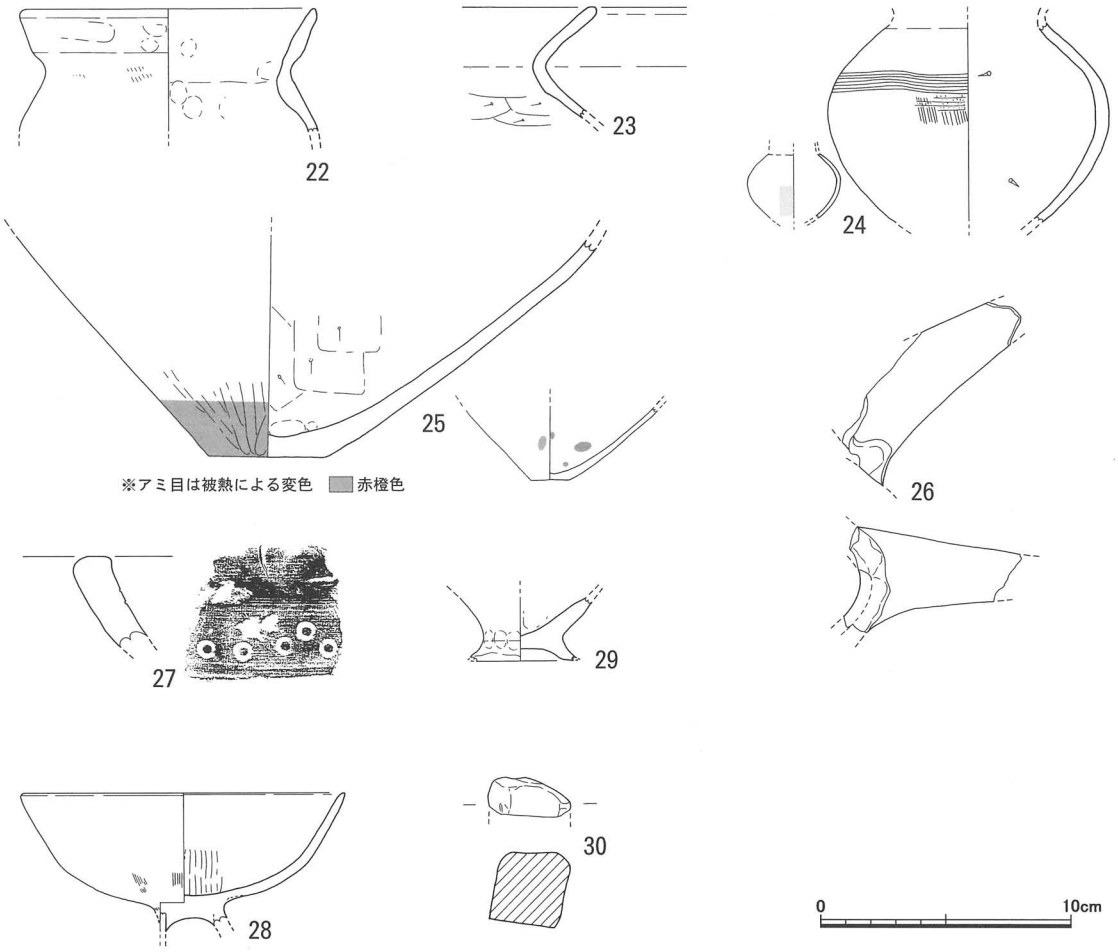
（V－4様式）に属する。

ススやコゲは甕（1）以外に、鼓形器台の器受部や低脚坏（4・5）の内面に見られる。

## 14層　7号土器群（第27図）

### 出土位置、13層4号建物との関係

13層4号建物の北からまとまって出土した土器群である。ただし出土した層位は14層であり、4号建物と直接の関係はない。




**第21図　6区14層　7号土器群出土遺物（3）（S＝1/3）**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　濃いコゲ**

4号建物は14層上面で検出された。検出面の標高はちょうど5.0mであるが、4号建物の柱穴の埋土は13層と同じ暗灰褐色粘質土であり、本来は13層上面に建てられていた建物である。これに対し、7号土器群の遺物出土位置の標高は5.2m付近をピークに建物4の検出面である5.0mまでの間の20cmに集中しており（第27図Bライン）、4号建物が建っていた生活面よりも下になる。4号建物の住人が廃棄した土器である、という関連性を想定することはできない。

出土位置は広範囲に及び、まばらな出土状況であるが、出土位置のまとまり具合等から4グループに大別することができる。19－1～8は、8個体が同一地点から塊状になって出土しており、7号土器群の中で最も一括性が高い。その南東側で散発的に出土している土器（19－9～20－17）は、20－13の破片が広範囲で接合していることから、ひとまとまりの土器群と見ることができる。約2m南東の4号建物に近い位置で集中的に出土している4点（19－18～21）は、出土位置の標高を比較すると（第27図Bライン）、18と21及び19・20がそれぞれ同一の位置から出土している。それ以外は出土状況がやや散漫で（21－22～30）、必ずしも一括性が確かでない土器群である。

**遺物（第19～21図）**

同一地点から集中的に出土した19－1～8は甕とその底部が主体であるが、台付き甕（壺）（7）と高坏（8）を一個体ずつ含む。口縁部の破片に見られる個体差から少なくとも4個体の甕の存在

## 6区14層　7号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 19－1<br>(図版61) | 弥生土器<br>甕 | ①16.6<br>②(13.4)4<br>④3.0 | | 口縁：ヨコナデ/頸直下：ハケメ後ナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(石英粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 19－2<br>(図版61) | 土師器<br>甕 | ①15.8<br>②(8.3)<br>④2.8 | | 口縁：ヨコナデ/頸直下～：縦・横のハケメ後ナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密<br>色調：内外面にぶい橙色/断面灰白色 | |
| 19－3<br>(図版63) | 土師器<br>甕 | ①25.6<br>②(19.2)<br>④3.7 | | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ハケメ後ナデ | 口縁：ヨコナデ/頸～頸直下：ナデ/胴上半：横方向のケズリ/胴下半：斜め方向のケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母細片を少し含む)<br>色調浅黄橙色 | 口縁外面の一部に黒斑 |
| 19－4<br>(図版62) | 弥生土器<br>甕 | ②(4.8)<br>④3.0 | | ヨコナデか | 口縁～頸：ヨコナデか/頸～：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒を多く含む)<br>色調：内外面浅黄橙色/断面褐灰色 | |
| 19－5<br>(図版62) | 土師器<br>(底) | ②(3.3) | | ハケメ | ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 底部に黒斑 |
| 19－6<br>(図版62) | 弥生土器<br>(底) | ②(2.2) | | ナデ又はミガキ | ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 19－7<br>(図版63) | 弥生土器<br>台付甕 | ②(9.2) | | | 最大径：ケズリ/胴下半：ミガキ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 19－8<br>(図版62) | 弥生土器<br>高坏 | ①12.0<br>②(2.5) | | 口縁：ヨコナデ/体：タテハケメ後縦方向のナデ | ミガキ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 19－9<br>(図版62) | 土師器<br>高坏 | ①14.8<br>②(5.3) | 予め穿孔した坏底部に脚部を差込み、粘土塊を充填した | ナデ、指頭圧痕は胴と底部の境付近と口縁部に集中 | | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：外面褐灰色/内面灰白色 | |
| 19－10<br>(図版62) | 土師器<br>高坏 | ②(4.2)<br>③20.0 | 脚裾部に4方向の穿孔(外面から内面へ向けて穿孔される) | 脚筒：タテハケメ後ミガキか/底：タテハケメ | 脚筒：ケズリ後ナデ/脚裾中央：ハケメ後ケズリ/脚裾端：ハケメ後ナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、黒雲母細片を含む)<br>色調：灰白色一部橙色 | 黒斑 |
| 19－11<br>(図版62) | 土師器<br>高坏 | ①12.2<br>②(3.4) | | ナデの地横方向のミガキ | 不定方向のミガキ・ヨコハケメ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：外面橙色/内面浅黄橙色一部橙色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 19－12<br>(図版63) | 土師器<br>低脚坏 | ①(12.1)<br>②4.7<br>③5.6 | | 坏：タテハケメ後横方向の目の細かいミガキ/脚：ヨコナデ | 坏：ナデか(指頭圧痕)/脚：ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 20－13<br>(図版62) | 土師器<br>甕 | ①10.8<br>②10.1<br>④1.5 | | 口縁：凹線文後ヨコナデ/複合口縁直下：接合痕か/頸～肩：タテハケメ後ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ縦方向のナデ/肩：ケズリ一部ナデ | 胎土：密(1㎜以下の微砂粒を含む)<br>色調：淡橙色/内面浅黄橙色 | |
| 20－14<br>(図版62) | 土師器<br>甕 | ①20.0<br>②(22.5)<br>④4.0 | ナデ肩 | 口縁：ヨコナデ/頸下半：ナデ/胴上半：右方向のケズリ/胴下半：左方向又は斜め上方のケズリ | 口縁～肩直上：ヨコナデ/肩：ハケメがほぼ1周しカキメのよう/胴下半：横・斜め方向のケズリ後一部ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色一部橙色/内面浅黄橙色 | |

が確認できる。複合口縁の甕は胴部内面のケズリ調整の開始位置が頸部の下方に下がっている。口縁端部は、面がしっかりしているもの（19－2・3）と下へ折れて玉縁状になりかかっているもの（19－1）とがある。破片のみが出土して、外傾度のきつい4は弥生時代に遡るもので、混入の可能性もあるが同じ場所から出土した事実を重視して一緒に掲載した。底部（5・6）は甕の口縁部（1～4）のいずれかと同一個体であると推定されるが、特定できない。共伴する底部には、平底であったり（19－5）内面調整がヘラケズリされる（6）といった古い要素も見られる。製作技法

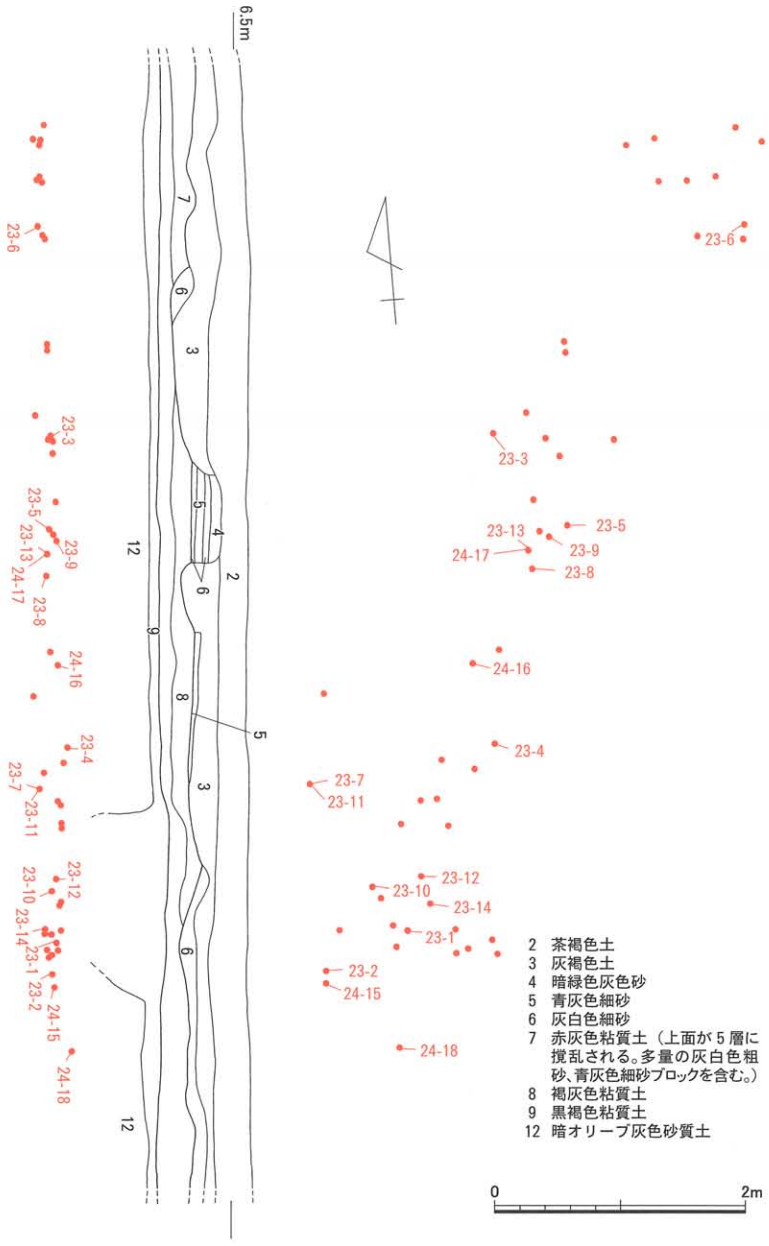
の上からは弥生土器的要素の残る４・６と、土師器に近い１～３・５が共伴しており、これらが同時に使用されていたと考えられる。７は口縁～胴部上半を欠くが、球形の胴部をもつ台付甕であろう。甕と底部には多くスス・コゲ等の痕跡が認められる。

19－９～20－17のグループは他のグループより高坏や低脚坏が多い。10は脚部が低いタイプの高坏の脚部で、外面から内面へ向けて穿孔される。上端は、坏底部に接着される前の平坦な面が生き

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20－15<br>(図版62) | 土師器<br>甕 | ②(7.3)<br>④3.3 | | ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸最下：縦方向のナデ/胴：ケズリか | 胎土：密(１㎜以下の砂粒、雲母片を含む)<br>色調：灰黄色 | |
| 20－16<br>(図版62) | 土師器<br>鼓形器台 | ②(5.8)<br>③(19.2) | 筒部の短小化が進む | ヨコナデ | 脚筒：ヨコナデ/脚台：ケズリ/脚裾：ヨコナデ | 胎土：密(１㎜以下の石英粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 20－17<br>(図版62) | 土師器<br>鼓形器台 | ②(5.2) | 稜の位置が下降し、筒部から離れる | ヨコナデ | 脚筒：ヨコナデ/脚台：ケズリ/脚裾：ヨコナデ | 胎土：密(１㎜程度の石英粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 20－18<br>(図版62) | 弥生土器<br>(底) | ②(3.3)<br>③5.0 | 厚い平底 | 胴：ミガキ/底：ナデ | ナデか | 胎土：密(１㎜以下の石英粒を含む)<br>色調：外面灰黄色～橙色/内面にぶい黄橙色 | |
| 20－19<br>(図版62) | 土師器<br>(底) | ②4.2<br>③11.2 | 広く薄い平底 | ミガキ又はナデ | 胴：ケズリ/底：オサエ・ナデ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：外面にぶい黄橙色/明黄褐色 | |
| 20－20<br>(図版63) | 土師器<br>直口壷 | ①13.8<br>②(10.8) | | 口縁：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ後ヨコナデ/胴：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：タテハケメ後ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(１～２㎜の砂粒、石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | |
| 20－21<br>(図版62) | 弥生土器<br>高坏 | ②(3.4) | | 坏体：口縁に向ってヨコナデ/坏底：間隔の広いタテハケメ | 中心に向ってミガキ | 胎土：密(３㎜大の石英粒、２～５㎜大の茶褐色粒を含む)<br>色調：内外面橙色/断面灰白色 | |
| 21－22<br>(図版63) | 土師器<br>甕 | ①(11.6)<br>②(4.9) | | 口縁～：ヨコナデ一部タテハケメか | 指ナデ・オサエ | 胎土：密(１㎜以下の金雲母片、２㎜程度の砂粒を少し含む)<br>色調：灰白色 | |
| 21－23<br>(図版63) | 土師器<br>甕 | ②(4.4) | | 口縁：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒、金雲母・黒雲母片を含む)<br>色調：にぶい橙色 | |
| 21－24<br>(図版63) | 土師器<br>甕 | ②(8.0) | | 肩：タテハケメ後ヨコハケメを１周させる/胴上半：ヨコナデ/胴下半：ナデ | 胴上半：左方向のケズリ後ナデ/胴下半：左上方向のケズリ後ナデ | 胎土：密(石英粒、金雲母片を含む)<br>色調：内外面橙色/断面：浅黄橙色 | |
| 21－25<br>(図版64) | 弥生土器<br>(底) | ②(9.0)<br>③4.7 | 平底 | ミガキ | 胴：ケズリ/底：ナデ(指頭圧痕残る) | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：外面橙色/断面褐灰色 | |
| 21－26<br>(図版63) | 弥生土器<br>注口土器 | ① | | 不明 | 不明 | 胎土：１㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む<br>色調：灰白色 | |
| 21－27<br>(図版63) | 土師器<br>壷 | ②(3.7) | 内傾する複合口縁 | ヨコナデ、不規則な竹管文 | ヨコナデ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒、雲母片を含む)<br>色調：外面明褐灰色/内面灰褐色 | |
| 21－28<br>(図版63) | 土師器<br>高坏 | ①(12.9)<br>②(5.2) | | ハケメ後ナデ又はミガキ | 体：縦方向のミガキ/脚筒：ナデ | 胎土：密(１㎜以下の石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：内外面浅黄橙色/断面灰白色 | |
| 21－29<br>(図版63) | 弥生土器<br>低脚坏 | ②(2.5) | | ナデ | ナデ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：にぶい橙色 | |

6区14層　7号土器群出土石器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 出土地点 | 種　別 | 石　材 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | 研磨・使用状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21－30（図版63） | | 砥石 | 流紋岩 | 1.5 | 3.3 | 3.05 | 17.12 | 2面使用 | 端部のみ残存 |




第22図　6区14層　8号土器群出土位置（S＝1/60）

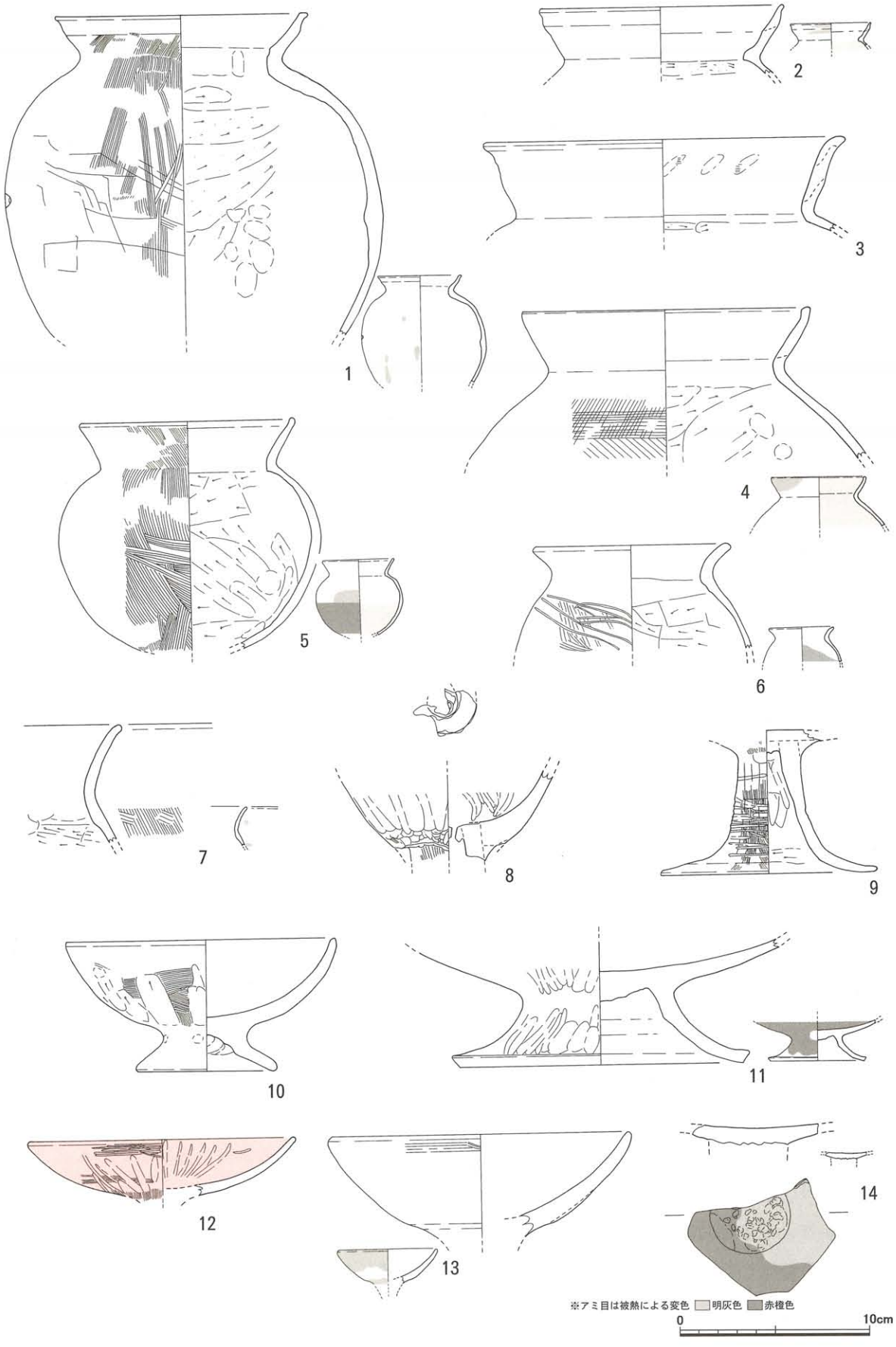
ている。坏部と脚部は別途製作され、この面を坏底部外面に直接接着したものである。複合口縁の甕や壺は、口縁下端の稜が鋭く横へ突出する（20－13～15）。角度は外傾度がゆるい14・15に加え、直立する13も見られる。このグループの土器の大部分はススもコゲも認められない。

4号建物すぐ北で出土した4点のうち、18と21、19と20が同じ位置から出土している。18はしっかりした平底をもつ弥生土器の底部、21は複合口縁状を呈する弥生後期の高坏の坏部と考えられる。外面の凹線または擬凹線は風化して失われている。19は古墳前期の甕で、広く薄い平底を持つタイプである。長頸壺（20）はこの時期にはあまり見られない器形である。19・20ともススやコゲの付着は明瞭で、実際に火にかけて使用されている。

退化の進んだ複合口縁（21－22）あるいは単純口縁の甕（23）がある一方で、外面にミガキが入り弥生後期と見られる平たい底部（25）も出土し、時期的なまとまりは悪い。

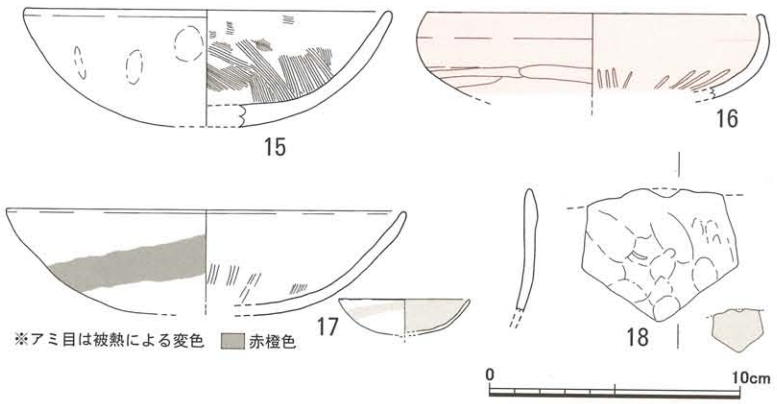
## 14層　8号土器群（第22図）

6区14層で検出された遺構・土器群のうち最も西端に位置する。他の14層の遺構や土器群からは離れ、孤立した位置にある。また、出土している遺物の時期も新しく、13層の遺構・土器群の遺物の時期にむしろ近い。遺物出土位置のレベルは5.0～5.2mで、13層4号土器群の出土レベルとほぼ




第23図　6区14層　8号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　汚れ




**第24図　6区14層　8号土器群出土遺物(2)**（S＝1/3）
**※赤のアミ目は赤彩　遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス**

同じである。

このような出土状況となった理由については、大きく二通りの可能性が想定できる。13層で廃棄された土器であるが、14層に達してようやく検出できたか、あるいは13層から掘り込まれた遺構（溝状か）に伴う土器群であったが遺構を検出できなかった、等の可能性が考えられる。

遺物の出土範囲は東西2ｍに対し南北方向が8ｍと長く、列をなして出土している。出土位置による器種の偏りはこの土器群では確認されない。近い位置から出土している遺物同士を拾ってみると、小形甕（23－2）と高坏（24－15)、甕（1）と高坏（12・14)、甕（7）と低脚坏（11)、甕（5）と高坏（8・9)、坏（13・17）等があり、器種ごとに出土位置がかたまる様子は見られない。

**遺物（第23・24図）**

甕は退化した複合口縁（23－1～3）や単純口縁（4～7）のものがある。肩部の平行ハケメが残存するもの（4）と残存しないもの（1・5）が共伴しており、時期幅がある。退化した複合口縁の甕は、口縁の途中で粘土を1～2回継ぎ足して製作され、継ぎ目の部分が他より太くなって稜やくびれが生じる（2・3)。単純口縁のものは、口縁部と胴部の境界で粘土が継ぎ足されている（4)。1の外面の調整は、胴部最大径付近のみハケメが無く、かわりに細いヘラ状工具の操作によって付いたと思われるキズが多数見られる。内面の調整も、胴部最大径を境に上半分がヘラケズリ、下半分には指頭圧痕がつく。上半分と下半分を別途製作して接続したと推定される。胴中央部に穿孔が1箇所ある。2は退化した複合口縁の甕である。口縁部中位で粘土が継ぎ足され、くびれが生じている。3は口縁部だけで2回にわたって粘土が継ぎ足されているが、縦長に継ぎ足されるため目立ったくびれは生じない。口縁部内面はヨコナデされているが、部分的にヨコナデが不十分で、下のハケメが露出している。4は単純口縁の甕で、口縁端部がわずかに内彎する。肩部外面では横方向のハケメと縦方向のハケメが交差し、格子目状になっている。文様を意識している可能性がある。5は小形の単純口縁の甕である。外面には縦方向の細かなハケメが全面に施される。内面は底部までヘラケズリされている。6も単純口縁の小形甕である。口縁部は外反するがやや短い。肩部外面に横方向の不規則なヘラ痕がつけられている。文様を意識しているか否かは不明である。

高坏8は、坏部と脚部を別途作った後に接続されている。坏底部にはあらかじめ径2.9㎜の穴があいており、この部分に脚部をはめ込み、さらに、脚部中央に残る径1.6㎜の中空部分に坏部側から粘土塊を充填して穴をふさいだと推定される。一旦接続した後は、周囲に粘土を張って補強していった。一回目の貼り足し後ハケメ調整を施してつなぎ目を強化したものの、一部は粘土が薄く、最初の接続時と比べ強度がほとんど上がらなかったのであろう。そのため、上からさらにもう一層粘土を貼り、上から下へ何度も粘土をなでつけて接続部を強化している。9の筒部には複雑な手順で調整が施される。縦方向の粗いナデの上から、目の細かい縦方向のハケメ調整を入念に施す。そ

## 6区14層　8号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 23－1<br>(図版65) | 土師器<br>甕 | ①12.3<br>②(17.0)<br>④1.0 | 胴部中央最大径付近に、外面からの穿孔1箇所あり | 口縁：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ/胴最大径付近：ヘラによる傷のような沈線多数 | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴上半：粗いケズリ/胴下半：粗いナデ | 胎土：密(3㎜以下の石英粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：灰白色 | |
| 23－2<br>(図版64) | 土師器<br>甕 | ①12.8<br>②(3.6)<br>④1.2 | | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：蜜(1㎜以下の石英粒、赤褐色粒を少し含む)<br>色調：内外面淡赤橙色/断面淡黄橙色 | |
| 23－3<br>(図版64) | 土師器<br>甕 | ①18.6<br>②5.0<br>④2.4 | 口縁部は粘土を2回貼り継ぐ | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ一部ハケメ残る/胴：ケズリ | 胎土：密(1～2㎜の砂粒を含む)<br>色調：内外面浅黄色/断面淡黄色 | |
| 23－4<br>(図版65) | 土師器<br>小形壺 | ①(15.0)<br>②(8.0) | | 口縁：ヨコナデ/胴：タテハケメとヨコハケメが交差 | 胴：ケズリ後指オサエ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色/内面褐灰色 | |
| 23－5<br>(図版65) | 土師器<br>甕 | ①(11.4)<br>②(12.1) | | 口縁：斜行ハケメ後ヨコナデ/肩：タテハケメ後ナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/肩：横方向のケズリ/胴：斜め方向のケズリ・不定方向のナデ | 胎土：密(2㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：外面浅黄色/内面にぶい黄色 | |
| 23－6<br>(図版64) | 土師器<br>甕 | ①10.3<br>②5.5 | | 口縁：ヨコナデ/胴：ハケメ後ナデ、その後ヘラによる横方向の傷 | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：淡黄色 | |
| 23－7<br>(図版64) | 土師器<br>甕 | ②(6.4) | | 口縁：ヨコナデ/肩：斜行後タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：指オサエ又はナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の金雲母・黒雲母細片を多く含む<br>色調：内面淡黄色/断面淡褐灰色 | |
| 23－8<br>(図版64) | 土師器<br>高坏 | ②(4.8) | 坏部と脚部の境に2度にわたって粘土を張り足す | 坏：ハケメ後粗いナデ(ヘラ使用か)/坏：粘土の厚い部分はハケメ薄い部分はナデ後ハケメ後ナデ | ミガキ | 胎土：2㎜以下の石英粒、金雲母細片を少し含む<br>色調：内外面淡橙褐色～橙褐色/断面褐灰色 | |
| 23－9<br>(図版65) | 土師器<br>高坏 | ②(7.6)<br>③11.2 | 坏部と脚部は円板又は粘土塊を充填して接続か | 縦方向の粗いナデ後縦方向の丁寧なハケメ、その後横方向の疎らなミガキ | 脚筒上半：縦方向のナデか/脚筒下半：横方向のケズリ後横方向のナデ/脚裾：ヨコハケメ後横方向のナデ | 胎土：やや粗(石英粒、白色粒、金雲母細片を多く含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 23－10<br>(図版65) | 土師器<br>低脚坏 | ①14.2<br>②7.0<br>③7.3 | | 口縁：ヨコナデ/坏：ハケメ後縦方向のケズリ/接続：ナデ/脚：ヨコナデ | 坏：ミガキ又はナデ/脚中央：右回りのナデ又はオサエ/脚：ヨコナデ | 胎土：密(2㎜以上の白色砂粒を少し含む)<br>色調浅黄橙色 | |
| 23－11<br>(図版65) | 土師器<br>低脚坏 | ②6.5<br>③15.8 | 脚端部はヨコナデで横方向へ引き伸ばした後ヘラミガキ | 坏底：縦方向のミガキまたはナデ/脚：ミガキ又はナデ/脚端：ヨコナデで後ミガキ | 坏底：ハケメ後ミガキ又はナデ/接続：粘土を押さえて接続した指頭圧痕が残る/脚：ヨコナデ | 胎土：やや粗(石英粒、白色粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む)<br>色調：脚筒淡橙褐色/脚裾淡黄色 | |
| 23－12<br>(図版64) | 土師器<br>高坏 | ①14.4<br>②(3.0) | | 横方向のミガキ後縦方向のナデ又は暗文 | 横方向のミガキ後縦方向のミガキ又は暗文 | 胎土：やや粗(1～2㎜の砂粒を含む)<br>色調：内外面橙色/断面灰白色 | 赤彩(全面) |
| 23－13<br>(図版64) | 土師器<br>高坏 | ①16.2<br>②(5.5) | | ハケメ後ナデ | ミガキか | 胎土：やや粗(石英粒、金雲母細片を少し含む)<br>色調：灰黄褐色 | |
| 23－14<br>(図版64) | 土師器<br>坏 | ① | 坏底部外面に多数の凹みをつけて脚部と接続しやすくした | | ナデ | 胎土：やや粗(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：内外面にぶい橙色/断面明褐灰色 | |

の後、横方向にヘラ状工具で磨いている。縦方向のハケメと横方向のミガキを交差させ、文様を意識している可能性もある。低脚坏の坏部・脚部の接続法は高坏よりも単純で、脚部の上端を坏部の底部外面に直接取り付けたと考えられる。その際には、接着面積を広くするためあらかじめ坏底部側に細かい凹凸がつけられた（23－14）。10・11の底部外面には、接続する際に脚部を坏部に押し

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24－15<br>(図版64) | 土師器<br>坏 | ①14.5<br>②(4.7) | | 口縁：ヨコナデ、一部に指頭圧痕が残る | 口縁：ハケメ後ヨコナデ | 胎土：精良<br>色調：淡黄灰色、一部淡橙褐色 | |
| 24－16<br>(図版64) | 土師器<br>坏 | ①13.3<br>②(3.4) | | 口縁：ヨコナデ/底：粗いミガキ又はナデ | 口縁：ヨコナデ/底：ナデ後暗文 | 胎土：精良<br>色調：断面浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 24－17<br>(図版64) | 土師器<br>坏 | ①15.9<br>②4.2 | | ナデか | 体：ナデか/底：ハケメ後ナデ | 胎土：密(石英粒、金雲母細片を少し含む)<br>色調：淡黄色～黒褐色～淡赤橙色～淡黄色 | |
| 24－18<br>(図版64) | 土師器<br>焼塩壷 | ②4.9 | | 指オサエ痕多数 | ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | |

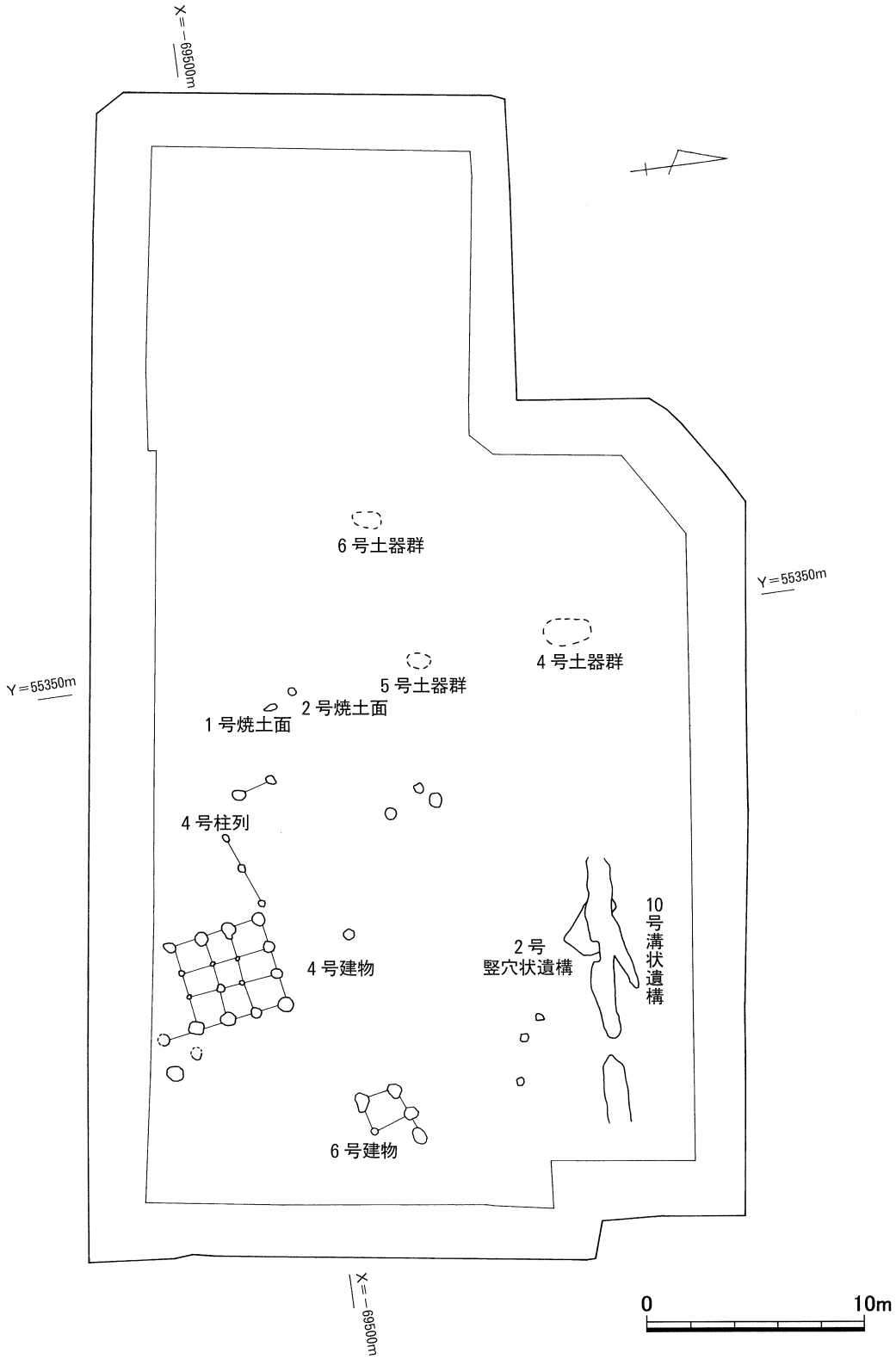
つけてできた指頭圧痕が多数残っている。

器種構成の上では、低脚坏が残っている一方で、赤彩された高坏・坏も出土しており（12・16)、松山編年Ⅱ期からⅢ期にわたっていると思われる。

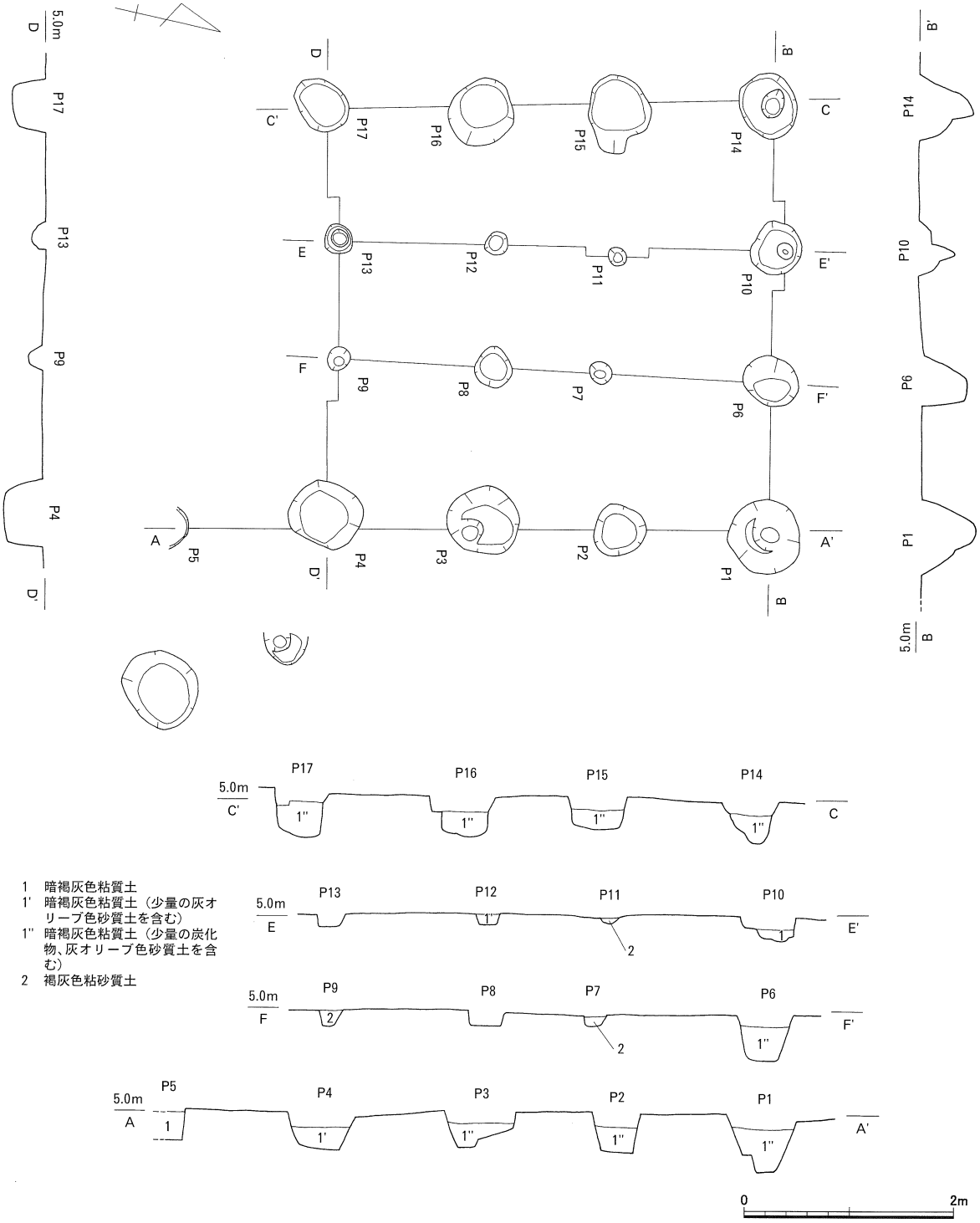
ススやコゲは3以外のすべての甕で認められる。外面のススは比較的明瞭だが、内面のコゲは薄く、単なる汚れとしか観察されないものも多い。ススやコゲの付着は甕以外にも低脚坏や高坏（11・13）で見られる。11は、坏部内外面と脚部外面のススやコゲが明瞭だが、脚部内面のみ明瞭でない。低脚坏を正置し、脚部内面に火が当たらない状態で使用されたと推定される。

## 13層の遺構・土器群の位置関係（第25図）

6区の中央から北半分では、古墳前期末から中期にかけて、継続して遺構が作られた。2号竪穴状遺構をはじめ、10号溝状遺構西部の土器群、さらに西の4号土器群など、古墳中期初頭から須恵器が出現する時期にかけての遺構や土器群がこの部分の13層に集中する（第25図）。7区の南端でも同時期の竪穴建物が検出されているので、当該時期の集落は6区から東へ続いていたと思われる。




第25図　6区13層の遺構（S＝1/300）

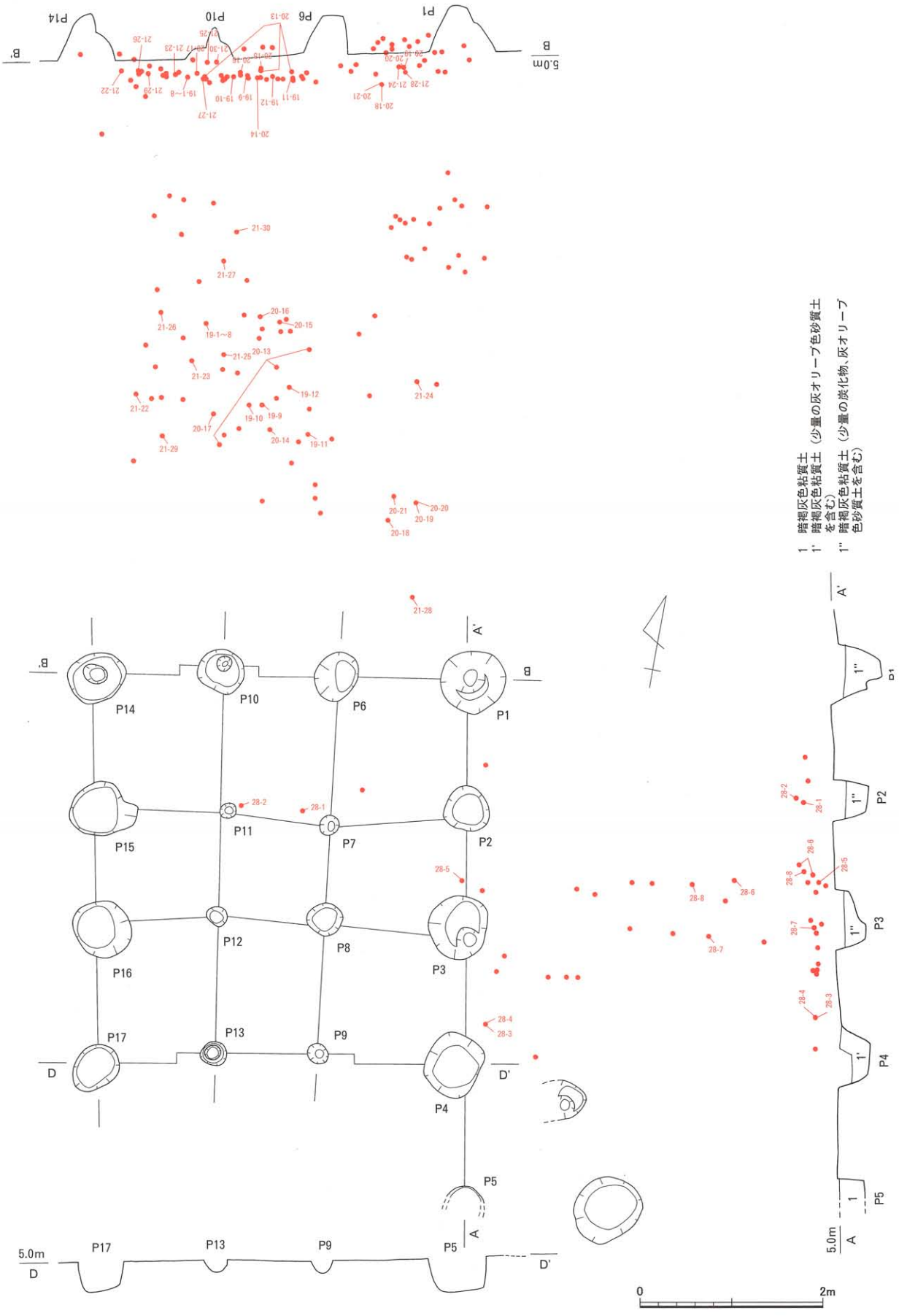



第26図　6区13層　4号建物（S＝1/60）

6区14層で検出された8号土器群（第7図）も同じ時期に属するが、6区の中では8号土器群より南にも西にも当該時期の遺構・土器群が見られず、隣接する5区の6号土器群（第141・147図）までは空白地帯が続く。

## 13層　4号建物（第26図）

調査区南東寄りの調査区端で検出された掘立柱建物である。14層上面の精査時、雨で遺構面が濡れた状態で柱穴が検出された。




第27図　6区13層　4号建物及び遺物（14層7号土器群を含む）出土位置（S＝1/60）

軸はほぼ南北方向である。Ｐ５は調査区の南端にかかっているため、その先は不明であるが、桁行きは少なくとも４間以上である。柱穴は建物の外周だけでなく中央部でも検出されている（Ｐ７・８・９・11・12・13)。建物外周に当たる柱穴は径60～70cmと大きく、柱穴の底面の標高は4.4～4.6mと深い。これに対し、建物中央部分の柱穴は径が小さく（20～30cm)、柱穴の底面の標高も4.8～4.9mと浅いため、検出面から10～15cmの深さまでしか残っていなかった。外周部分の柱穴よりも規模が小さくて浅いことから、床面を支えた束柱と推定される。柱穴からは柱根や柱痕の土層は検出されなかったが、柱穴底面に段掘り状に小さなピットが確認される場合があり（Ｐ１・３・10・14)、これが実際に柱の立っていた部分であろう。径は15～18cmと細い。束柱の柱穴底面にも柱の痕跡が見られるが、径は10～12cmで、外周の柱痕よりやや細い（Ｐ７・９・11)。

柱穴の埋土は暗褐灰色粘質土で、13層と同質である。埋土の主体が13層であることから、掘り込み面は13層の中位または上面であり、そこから柱穴を掘り込んで周囲の土（13層）で埋めたと推定される。束柱の埋土は14層の土を多量に交えるため砂質に近くなる。Ｐ５の周辺にもピットが２穴見られ、４号建物の柱穴の埋土と同質の埋土であることから、４号建物に関連するピットの可能性がある。

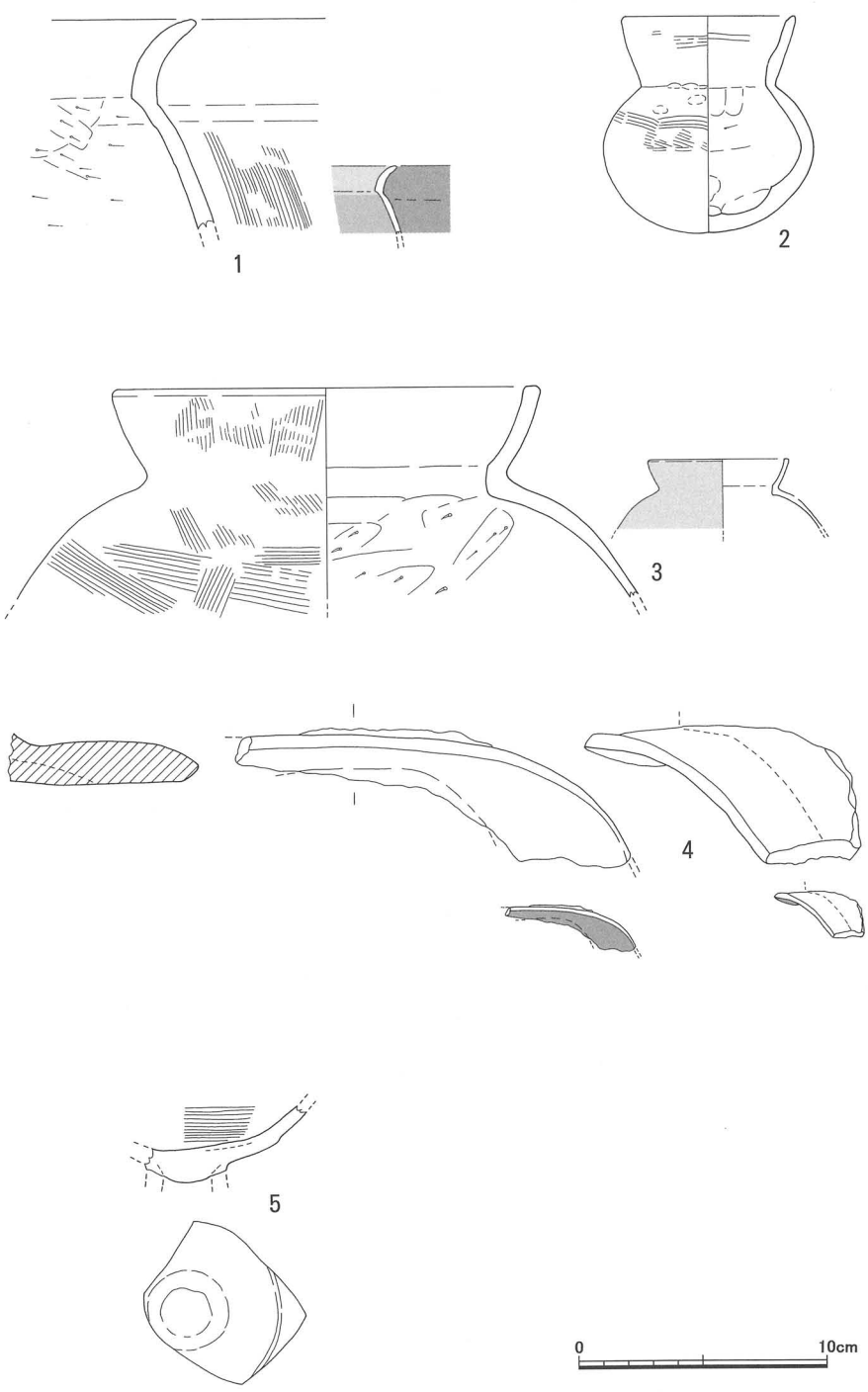
**遺物の出土位置（第27図）**

建物内部から建物東側にかけて遺物が列をなすように分布している。４号建物が検出された14層

**６区13層　４号建物計測表**

| 規模 | | 梁行き | | | 桁行き | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 3間（4.10m） | | | 4間（4.30m） | | |
| 検出面 | | 灰オリーブ色砂質土（14層）上面 | | | | | |
| 柱穴の埋土 | | 暗褐灰色粘質土（13層） | | | | | |
| 主軸 | | N－10°－W | | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 |
| 平面規模（cm） | | 72（18） | 52 | 70（16） | 74 | 40 | 54 |
| 標高（m） | 上面 | 5.00 | 5.02 | 5.02 | 5.00 | 5.02 | 4.96 |
| | 下面 | 4.45 | 4.62 | 4.67 | 4.64 | 4.72 | 4.54 |
| 番号 | | P7 | P8 | P9 | P10 | P11 | P12 |
| 平面規模（cm） | | 22［12］ | 40 | 24［10］ | 52（17） | 18［10］ | 24［16］ |
| 標高（m） | 上面 | 4.95 | 4.99 | 4，97 | 5.00 | 4.99 | 5.03 |
| | 下面 | 4.85 | 4.84 | 4.84 | 4.65 | 4.93 | 4.92 |
| 番号 | | P13 | P14 | P15 | P16 | P17 | |
| 平面規模（cm） | | 30（18） | 64（28） | 76 | 68 | 58 | |
| 標高（m） | 上面 | 5.00 | 5.00 | 5.00 | 5.00 | 5.00 | |
| | 下面 | 4.88 | 4.48 | 4.88 | 4.88 | 4.74 | |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | P3－P4 | P4－P9 | P9－P13 | P13－P17 |
| | | 1.52 | 1.30 | 1.52 | 1.50 | 1.14 | 1.28 |
| | | P17－P16 | P16－P15 | P15－P14 | P14－P10 | P10－P6 | P6－P1 |
| | | 1.52 | 1.30 | 1.48 | 1.36 | 1.26 | 1.48 |
| | | P7－P2 | P7－P6 | P7－P11 | P7－P8 | P8－P3 | P8－P12 |
| | | 1.54 | 1.66 | 1.12 | 1.00 | 1.48 | 1.18 |
| | | P8－P9 | P11－P10 | P11－P15 | P11－P12 | P12－P16 | P12－P13 |
| | | 1.48 | 1.52 | 1.36 | 1.18 | 1.24 | 1.50 |

［　］内は柱穴の下面径（cm）
（　）内は柱穴底面の柱痕跡の径（cm）




**第28図　6区13層　4号建物出土遺物（1）**（S＝1/3）
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス**

上面（標高5.00m）から20～40cm浮いた位置で出土しており、この高さが4号建物本来の掘り込み面、つまり13層上面である。

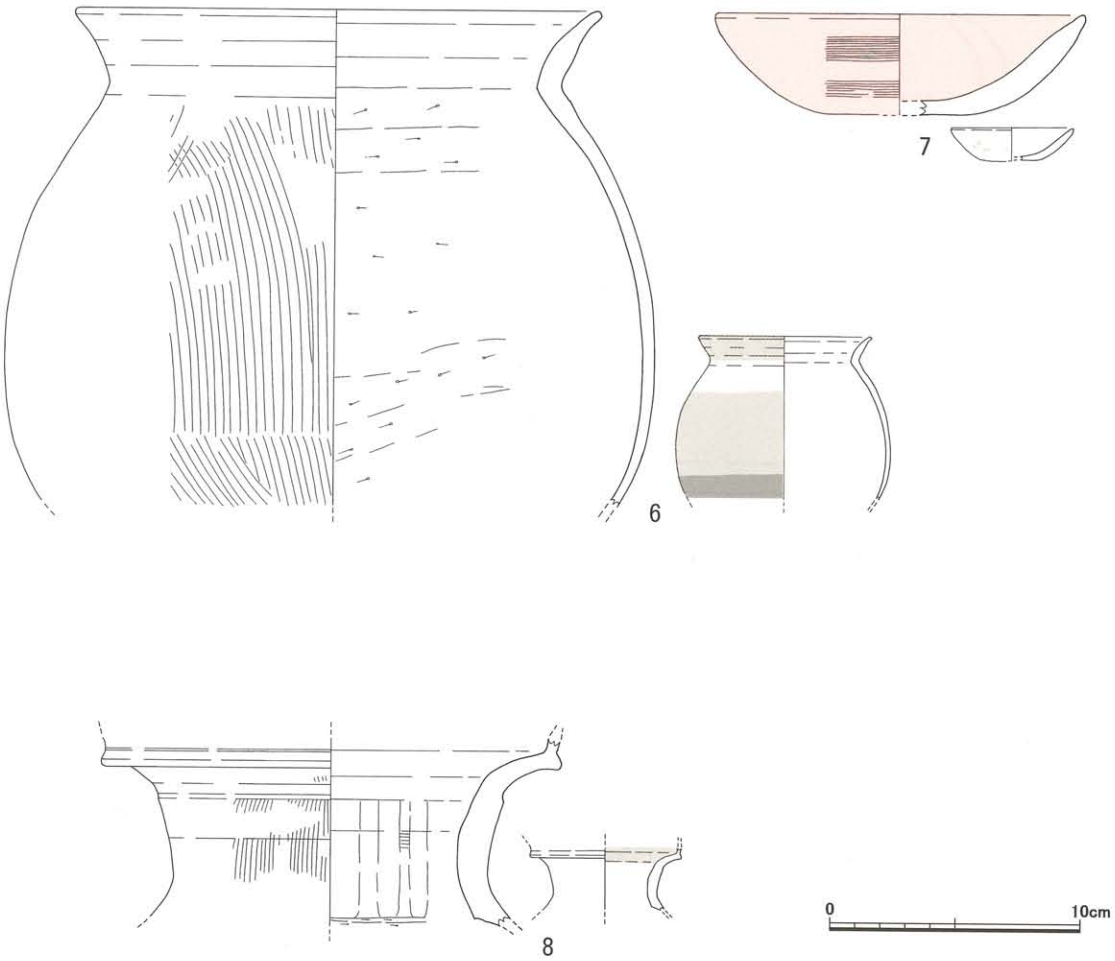
4号建物北方に広がる7号土器群は14層から出土した遺物であり、4号建物とは直接関係しない。

28－1・2は建物内の束柱（P7・11）の脇から、検出面より30～40cm浮いた位置で出土した。3・4・5は建物東辺の柱穴（P3・4）の脇から、検出面より20cm上で出土した。29－6・7は建物からやや離れて出土したが、出土位置が4号建物に近く、出土した高さも1～5と変わらず、また年代も矛盾しないので、4号建物に関係する遺物である可能性が高い。29－8だけは弥生土器で、明らかに年代が異なっているので混入品と考えられる。

遺物のうち3と4は同位置から出土しており、同時に廃棄されたと見られる。単純口縁の甕と移動式竈の庇部が共伴している。他に、建物の柱穴脇から出土したのは甕（1）、小形丸底壺（2）、高坏（5）である。器種が偏ることはない。建物東側から出土した遺物は甕（29－6）と坏（または皿）（7）である。遺物数が少ない中での比較であるが、建物内の遺物と建物外の遺物とで明瞭な器種の差は見られない。

**遺物（第28・29図）**

28－1は単純口縁の甕である。口縁部と胴部の境は明確で、頸部内面は「く」の字に近い形状と




**第29図　6区13層　4号建物出土遺物（2）（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス**

なる。口縁端部は大きく外反しながら先細る。2は小形丸底壺である。口縁部は起きあがって直立に近くなるため、胴部径は口径よりかなり大きい。肩部のハケメは文様を意識している可能性もある。3は単純口縁の甕で、口縁部が内彎する。外傾する甕（28－1、29－6）と違って頸部内面は「く」の字状にはならず、約1㎝の直線部分がある。4は移動式竈の庇部で、ナデ調整して平滑に仕上げられている。5は高坏である。底部内面に非常に目の粗いハケメが残る。6は単純口縁の甕である。口縁部が外傾し、頸部内面は「く」の字状となる。7は坏である。赤彩されているが胎土に多量に砂が混じり、ハケメがそのまま残るなど、粗製である。広口壺（8）は口縁の上部が欠損したもので、弥生時代に遡ると見られる。出土位置は平面的にも標高も他の遺物とほとんど変わらないが、混入品と見ざるを得ない。

単純口縁の甕（1・3・6）や移動式竈の庇部（4）にはススやコゲが付着している。1は口縁部の内面が黒くなっている。口縁部に限定され、胴部内面には付かないので、外面のススの続きか。小形丸底壺（2）にはス・コゲは認められないので、火にかけられずに使用されている。3の内面はきれいでコゲは認められない。1・3は下半分が欠損しているので、内面下半のコゲの有無は確認できない。しかし、6は底部まで残っているにもかかわらず内面には全く汚れもコゲも見られないので、湯甕または水甕など、コゲ付きの起こらない内容物を入れていたと思われる。甕以外で

## 6区13層　4号建物出土土器観察表

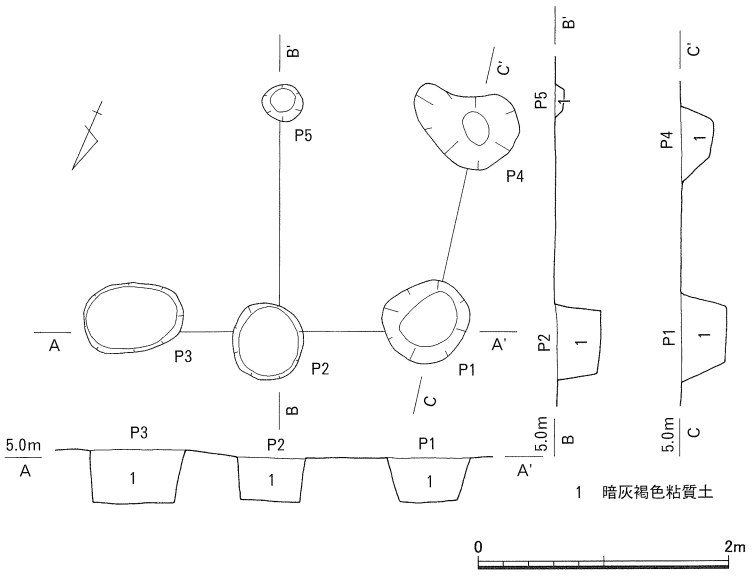
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28－1<br>(図版66) | 土師器<br>甕 | ②(8.3) | | 口縁～：ヨコナデ/肩～：斜行ハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の白色砂粒を多く含む)<br>色調：断面外側淡橙色/断面内側褐灰色 | 焼成不均一 |
| 28－2<br>(図版66) | 土師器<br>小形丸底壺 | ①(6.8)<br>②8.7<br>③ | 小形。口縁部接着後部分的にナデ | 口縁：ヨコハケメ後ヨコナデ/胴上半：ハケメ/胴中央：横・斜行ハケメ後ナデ/胴下半：ナデか | 口縁ヨコハケメ後ナデ/頸～肩：縦方向のナデ/胴～：ケズリ | 胎土：密(2㎜以下の石英粒、砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 底部の一部に木の葉の葉脈状の痕跡が残る |
| 28－3<br>(図版66) | 土師器<br>甕 | ①16.6<br>②(8.6) | | 口縁：タテハケメ後ヨコナデ/頸～肩：タテハケメ後ナデ/胴：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(4㎜以下のにぶい橙色・暗灰色・白色の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 28－4<br>(図版66) | 土製品<br>移動式竈<br>(庇) | ①5.6<br>(厚さ)0.8 | | ハケメ後ナデ | ハケメ後ナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒を多く含む)<br>色調：淡橙色 | |
| 28－5<br>(図版66) | 土師器<br>高坏又は低脚坏 | ②(3.1) | 口縁と坏底部境に段を持つ。坏部と脚部は円板を充填して接続か | 不明 | 目の粗いハケメ | 胎土：密(1㎜程度の白色砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 底部内面に黒斑 |
| 29－6<br>(図版66) | 土師器<br>甕 | ①20.7<br>②(19.8) | 胴部径が口径より大 | 口縁ヨコナデ/頸～：縦方向の目の粗いハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ケズリ | 胎土：密(4㎜以下の石英粒・白色粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 29－7<br>(図版66) | 土師器<br>坏 | ①(14.6)<br>②(4.0) | | ヨコハケメ後ナデ | ナデ | 胎土：密(2㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：灰白色 | 底部外面の一部に黒斑。赤彩(全面) |
| 29－8<br>(図版66) | 弥生土器<br>壺 | ②7.5 | | 複合口縁直下：タテハケメ後ヨコナデ | ～頸：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ後縦方向のナデ/肩：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の微砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |

は、赤彩で粗製の坏（7）の外面や、弥生土器の壺（8）の頸部内面の上端にもうすいススが残り、これらも火にかけて使用されている。坏が火にかけられる使用目的が何であるかが問題となろう。

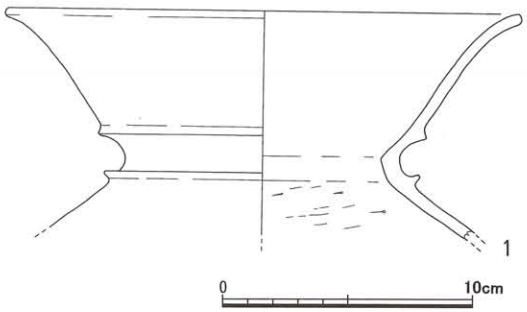
### 13層　6号建物（第30図）

調査区東端で検出された建物である。雨天時に14層上面が水に濡れたため、柱穴埋土である暗灰褐色粘質土の部分が浮き上がって容易に検出された。軸方向は南北に近い。西辺に当たるP1－P4の軸の方向がP2－P5（梁方向）とやや違っている。また、P1－P2－P3（桁方向）と直交しない。埋土が13層と同質であることから、4号建物同様13層から柱穴が掘り込まれた建物と推定できる。

建物外周部に当たるP1～4は径が60㎝以上で、底面の標高は4.7mである。一方P5は径が30㎝で




第30図　6区13層　6号建物（S＝1/60）




第31図　6区13層　6号建物出土遺物
（S＝1/3）

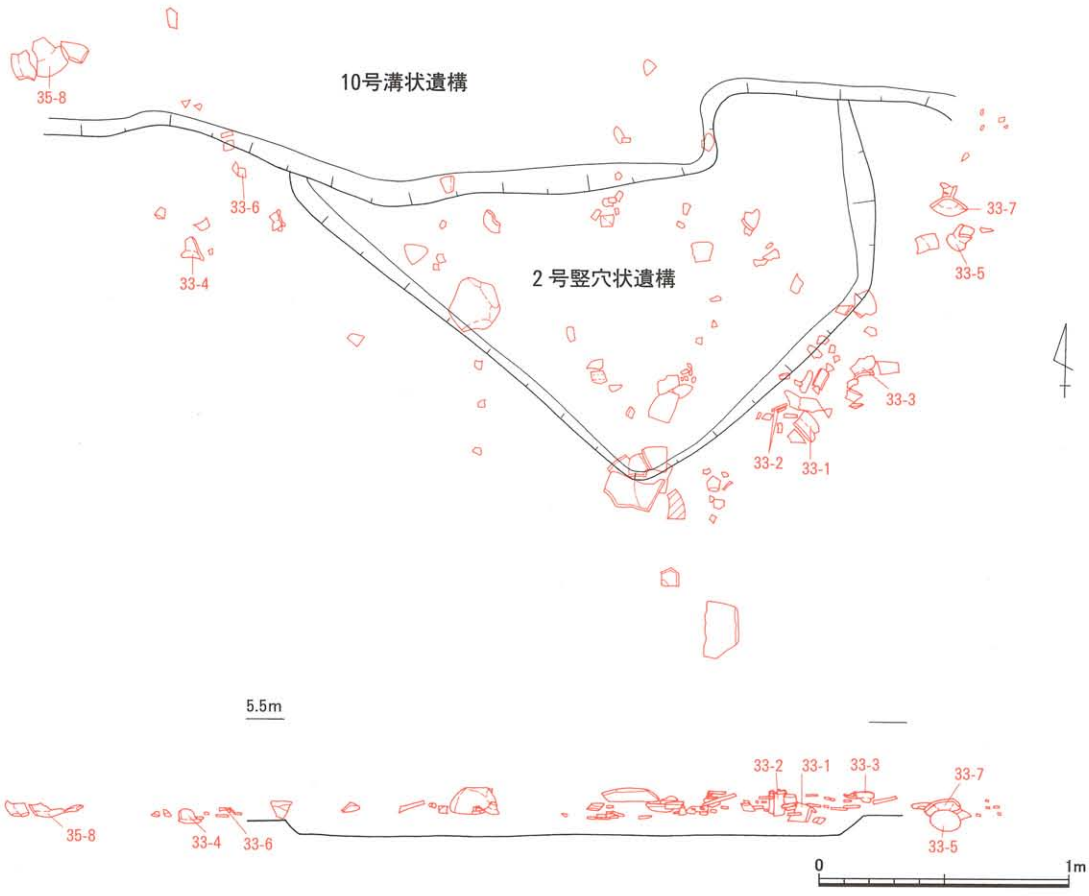
小さく、底面の標高が4.9mと高い。柱穴より小規模で掘り方が浅いこと、及び柱穴の配置から見て束柱と推定される。

建物の東は調査区の東端にかかっているので、東がどこまで続いていたかは明らかでない。南側は、P5が建物外周でなく束柱と推定されるため、さらに先にも柱穴があると予想されたが、対応する柱穴や床束は検出されなかった。

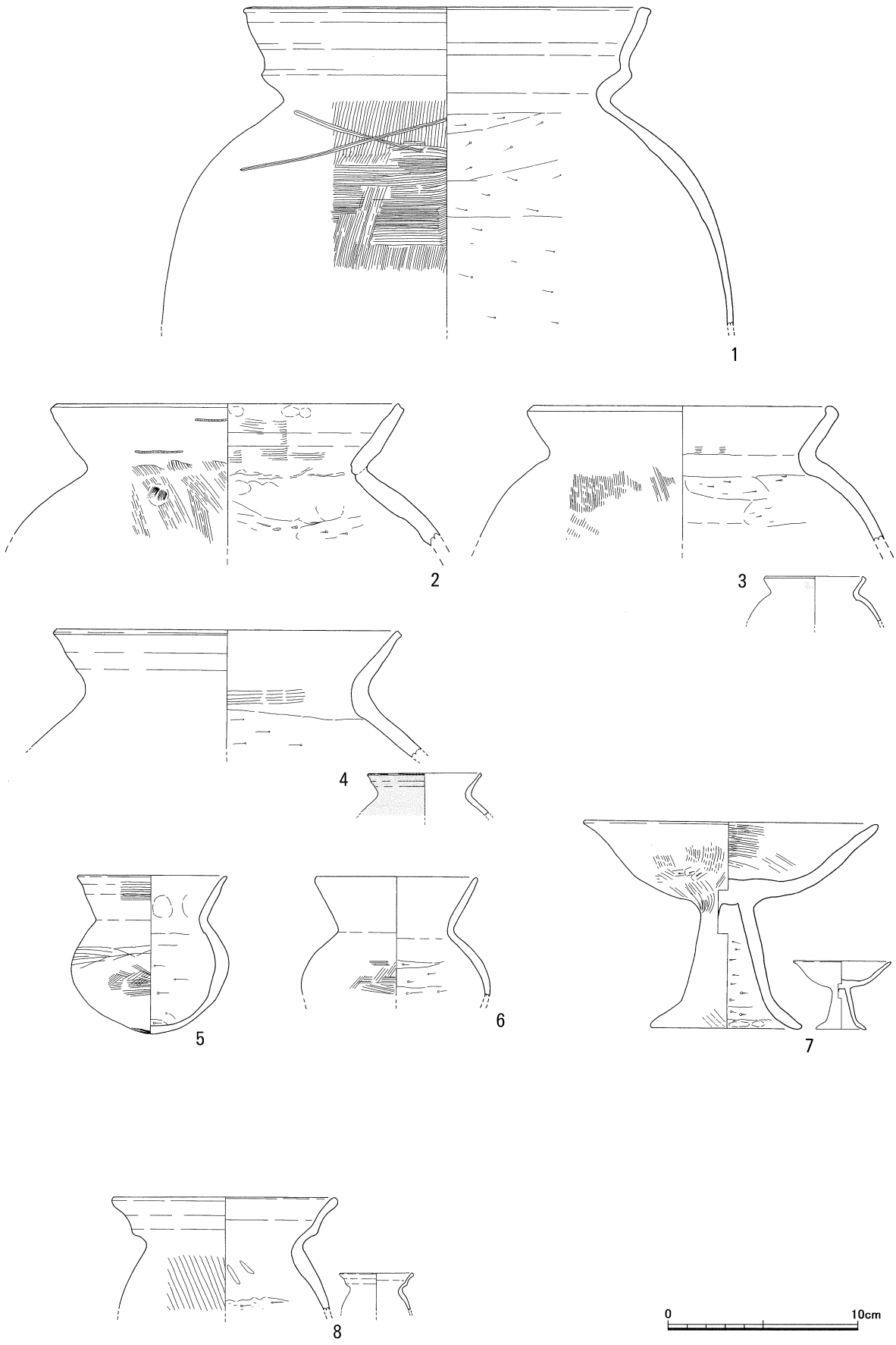
遺物は、P1の埋土中から鼓形器台が1点出土している（第31図）。建物の時期は4号建物よりも古い古墳前期に遡ると考えられる。

### 13層　2号竪穴状遺構（第32図）

調査区北寄りで、13層を掘り下げる途中で検出した。検出時は周囲の土に比べてわずかに黄色みを帯びている程度の違いしかなく、輪郭線の確定が困難であった。遺物は調査員が認識できた輪郭線の外にも分布しており、実際の遺構の範囲はもっと広かった可能性は十分にある。遺物は遺構の南東辺、南西辺に沿うように出土しており、高さは床面より10cm程度上に集中する。これらの遺物が分布している範囲がおおよそ竪穴状遺構の範囲だと考えられる。退化した複合口縁の甕（33－8）は遺構からやや西へずれた位置からの出土である。10号溝状遺構によって北半分のほとんどを壊さ




第32図　6区13層　2号竪穴状遺構及び遺物出土状況（S＝1/30）




第33図　6区13層　2号竪穴状遺構出土遺物（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：▒ 薄いスス

## 6区13層　6号建物計測表

| 規模 | | 梁行き | | | 桁行き | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1間以上（1.60m+α） | | | 2間以上（2.34m+α） | |
| 検出面 | | 灰オリーブ色砂質土（14層）上面 | | | | |
| 各柱穴の埋土 | | 暗灰褐色粘質土（13層） | | | | |
| 主軸 | | N－68°－E | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 |
| 平面規模（cm） | | 70 | 62 | 80 | 88 | 33 |
| 標高（m） | 上面 | 5.00 | 5.00 | 5.06 | 5.00 | 5.00 |
| | 下面 | 4.64 | 4.64 | 4.64 | 4.93 | 4.73 |
| 柱間距離（m） | | P3－P2 | P2－P1 | P2－P5 | P1－P4 | P4－P5 |
| | | 1.10 | 1.30 | 1.94 | 1.60 | 1.48 |

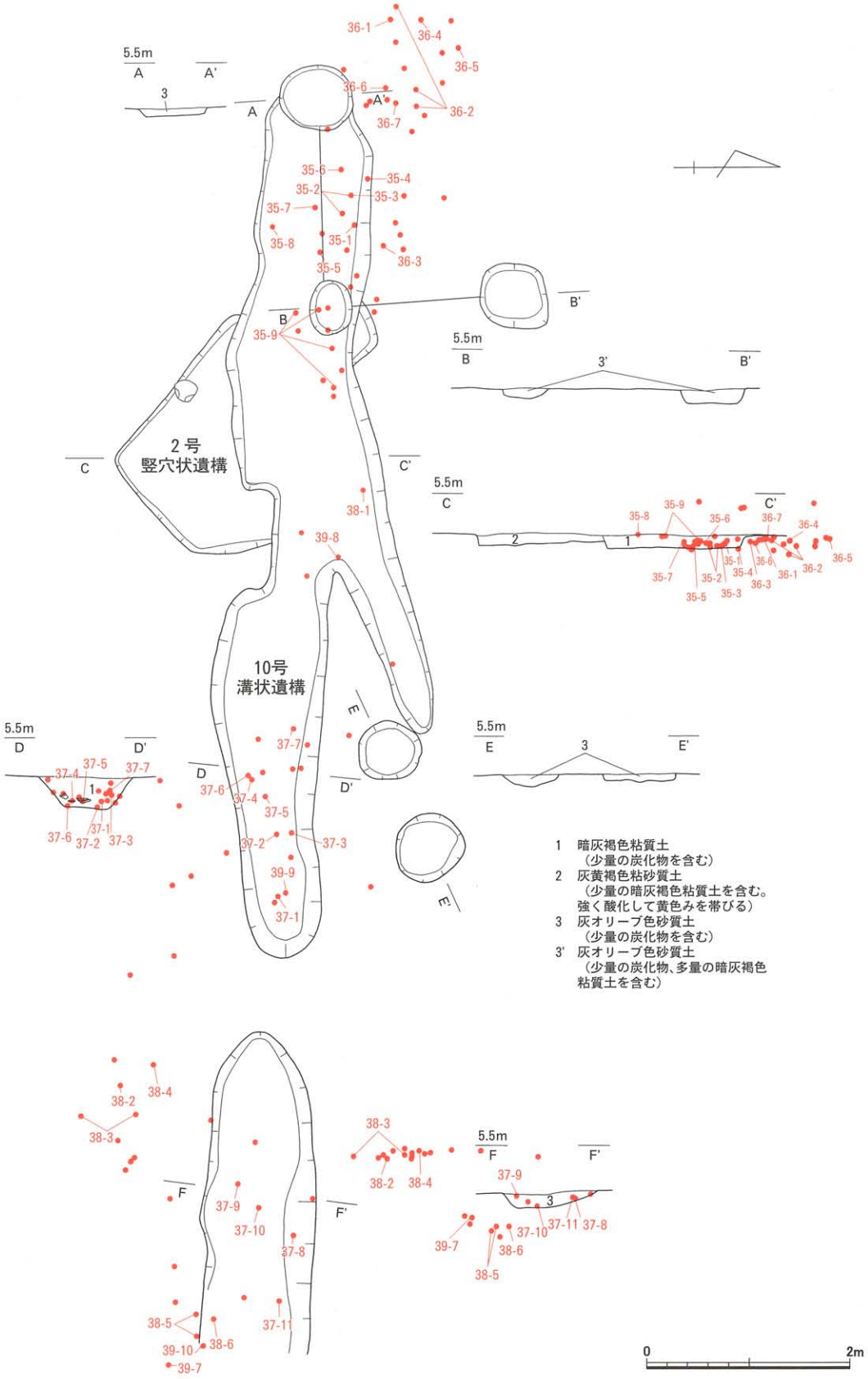
［　］内は柱穴の下面径（cm）
（　）内は柱根径（cm）

## 6区13層　6号建物出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31－1（図版66） | 土師器 鼓形器台 | ①20.4 ②(9.1) | 筒部は短く太い | ヨコナデ | 器受：ミガキ又はヨコナデ/器台：ケズリ | 胎土：2㎜の石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む 色調：浅黄橙色 | 外面に黒斑 |

## 6区13層　2号竪穴状遺構出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 33－1（図版67） | 土師器 甕 | ①(20.4) ②(16.8) ④3.6 | 口縁端部に面あり。接地せず | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密（2㎜大の砂粒を含む） 色調：灰白色 | |
| 33－2（図版67） | 土師器 甕 | ①18.0 ②(7.5) | 口縁部と胴部を別作りして接続 | 口縁～頸：ハケメ後粘土を上塗りしてヨコナデ/肩：ハケメ | 口縁：ハケメ後ヨコナデ/頸直下：オサエ後無調整/胴ケズリ | 胎土：粗（5㎜以下の小石を含む） 色調：浅黄橙色～にぶい黄橙色 | 胎土は他の土師器と異質 |
| 33－3（図版67） | 土師器 甕 | ①15.6 ②(7.2) | 口縁端部に面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：タテハケメ | 口縁：ハケメ後ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜以下の砂礫、砂粒を含む 色調：灰白色 | |
| 33－4（図版67） | 土師器 甕 | ①(18.0) ②(6.7) | 口縁端部近くでくびれ。端部に面あり | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ハケメ/胴：ケズリ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒を含む） 色調：灰白色 | |
| 33－5（図版67） | 土師器 小形丸底壷 | ①(7.7) ②8.4 | 胴部径と口径はほぼ同じ | 口縁：ヨコナデ、ヨコハケメ/頸：ヨコナデ/胴中央：ヘラ痕、ハケメ/胴下半：ハケメ | 口縁～：ヨコナデ、一部に指頭圧痕/胴：ケズリ | 胎土：密（1㎜程度の黒色砂粒を多く含む） 色調：橙色 | |
| 33－6（図版67） | 土師器 小形壷 | ①(8.4) ②(6.3) | 胴部径は口径より大 | 口縁～肩：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：浅黄橙色 | |
| 33－7（図版67） | 土師器 高坏 | ①15.5 ②10.9 ③7.6 | 坏底部～体部境の一部外面にヘラケズリあり。面取り痕か | 口縁：ヨコナデ/体～底：タテハケメ/脚筒：ナデか/脚裾：ハケメ | 口縁～体：ヨコハケメ/坏底：押圧後無調整/脚筒：ケズリ/脚裾：オサエ・無調整 | 胎土：粗（2㎜以下の砂礫、砂粒を含む） 色調：淡黄色 | |
| 33－8（図版67） | 土師器 甕 | ①(11.8) ②(5.9) ④1.9 | 口縁端部は丸い。口縁下端は丸い | 口縁：ヨコナデ/胴：縦方向の太いハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/肩：刺突痕/胴：ケズリ | 胎土：やや粗（径1.3cmの暗赤褐色の塊を含む） 色調：灰白色 | |




第34図　6区13層　2号竪穴状遺構・10号溝状遺構及び遺物出土位置（S＝1/60）

れていたため、調査時に出土した遺物の量は、本来2号竪穴状遺構に残されていた遺物の量よりも少なくなっている可能性がある。

遺物（第33図）

甕には、退化した複合口縁の33－１、単純口縁の２～４がある。１は複合口縁の退化がまだ進んでいない。肩部には平行ハケメがめぐらされるとともに、ヘラ状工具でつけた大きな×印がある。２は、胴部と頸部の境で粘土を貼り継いでいる。頸部内面には、接続した際に粘土をなでつけた跡が調整されないまま残る。ヘラケズリの開始位置は頸部の下方まで下がっている。３は口縁の先端部が押さえつけられ、内面側に肥厚する。口縁端部に面が作られる点は１～４に共通する。２点の小形壺のうち、５は口径と胴部径がほぼ同じ、６は胴部径の方が大きい。５の胎土は橙色で、５区14層12号土器群出土の小形丸底壺（121－20）と共通するが、径２㎜程度の砂粒を多く含んでおり、121－20に比べてやや胎土が粗い。高坏（７）は、底部内面を水平に整えるための指押さえ痕が多数残る。

時期的には松山編年Ⅱ期に属するが、肩部の平行ハケメが残る１を含んでいることからⅡ期古段階に含められよう。

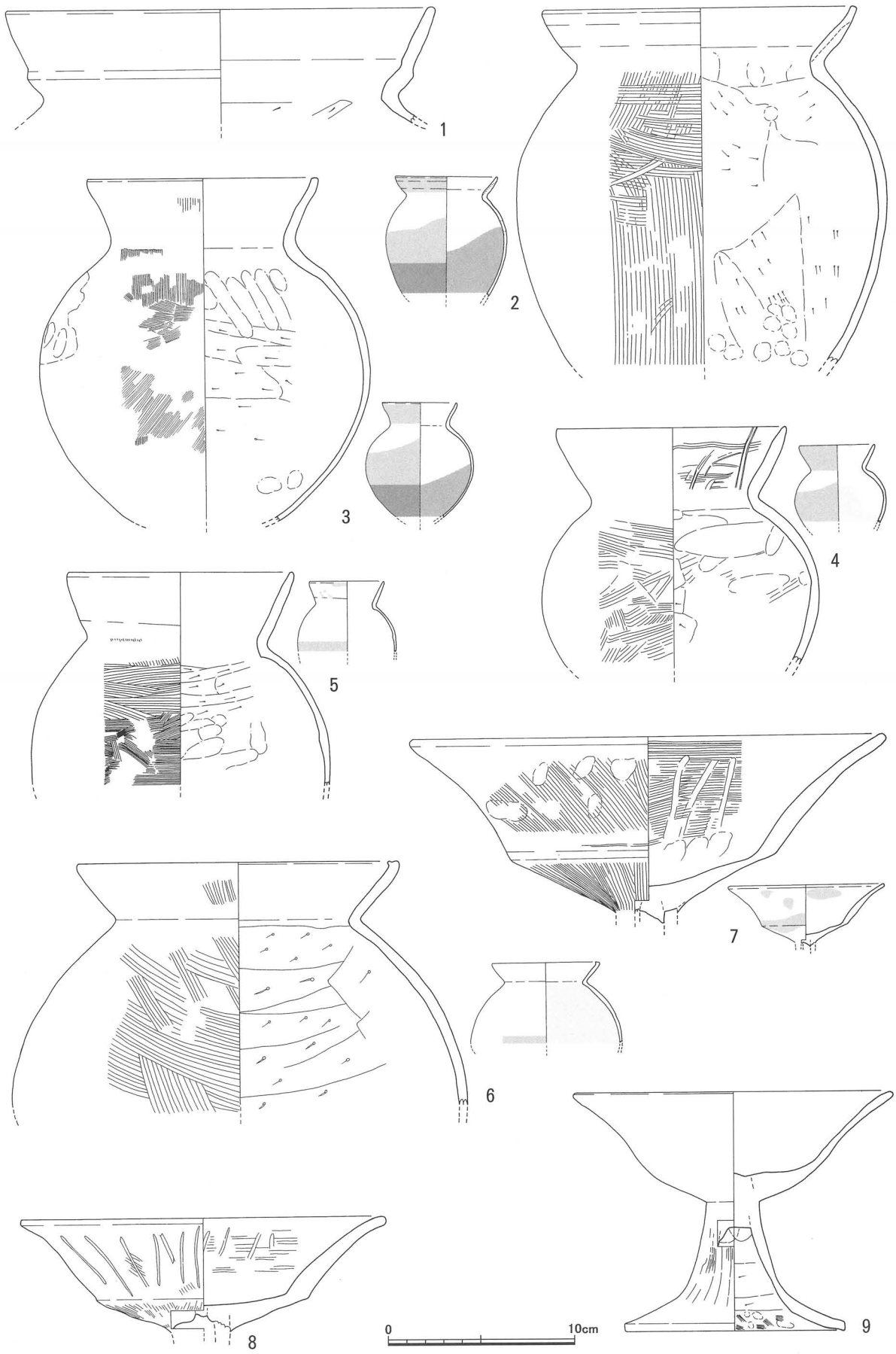
## 10号溝状遺構（第34図）

調査区北端付近を東西に走る溝状遺構である。東端から3.5ｍの位置で一旦とぎれた後さらに西へ続き、約４ｍで２号竪穴状遺構を切り、さらに12層から掘り込まれた３号柱列のピットによって切られる。西端は確認できないが、３号柱列のピットに切られた位置で終わっているようである。２号竪穴状遺構と切り合う位置では、短い溝が東北東へ分岐するような平面形となっている。分岐しているように見えるのは、実際には複数の溝が重複しているためと考えられるが、土層から前後関係を確定することができなかった。

### 10号溝状遺構西部溝内出土遺物（第35図）

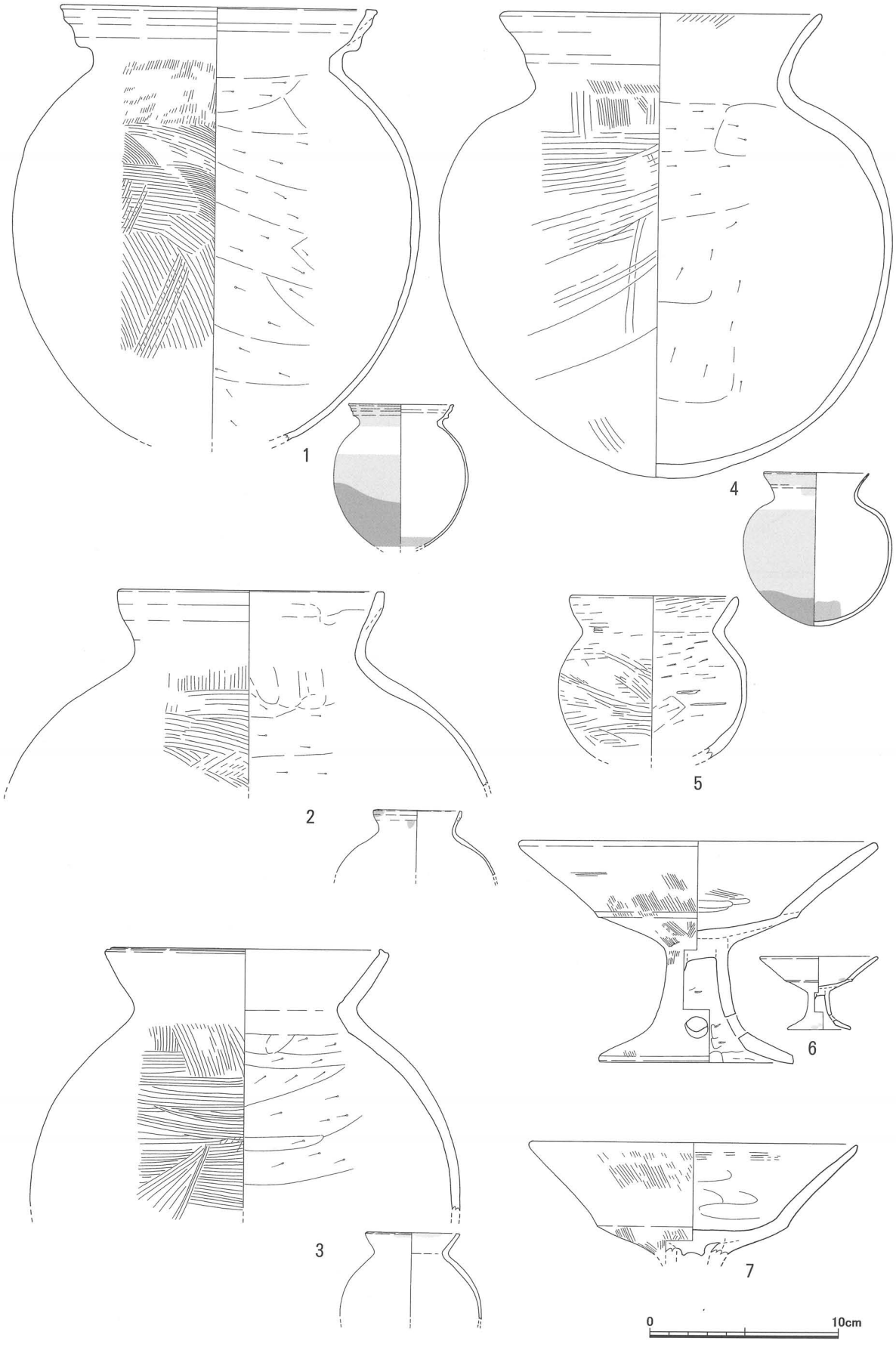
２号竪穴状遺構を切っているあたりから溝の西端にかけての範囲で、溝内から出土した土器である。溝の西端をこえて遺構外にも土器が広がっている。遺構の外と中という違いはあるが、10号溝状遺構溝内から出土した土器（第35図）の出土位置の標高とほとんど変わらない。時期も同じ古墳中期である。

甕は退化の著しい複合口縁をもつ甕（35－１）を除き単純口縁のものが多数を占める（35－２～６）。このうち２・３・６は、口縁の外傾度が急なため外観「く」の字形を呈する。胎土は灰白色で砂粒を多く含む。４・５は口縁の角度がやや直立に近く、胴部はなで肩・球形で、細長いプロポーションとなる。胎土は前者に比べ赤みを帯びた浅黄橙色であり、精良で砂粒の含有量が少ない。２の頸部直下は、縦方向のハケメ（先）と横方向のハケメ（後）が交差して格子目状となっており、文様を意識した可能性がある。３の肩部では、製作時に何回か粘土が貼り足されたのでその部分が層状に剥落しているが、剥落後も構わず使用されたので、一部にススが付着し、一部は赤橙色に変色している。高坏は、坏部・底部の境界に明瞭な段が付くもの（７・８）と段がつかないもの（９）の両者を含む。８・９が内面底部を何度も指押さえして水平に整えるのに対し、７の底部内面は中心へ向かって下り傾斜する形を変えないまま、ハケメとヘラミガキで美観を整えることに注意が集中している。坏部と脚部の接続箇所は、７が粘土塊を充填して穴をふさいでいるのに対し、８の坏底部には脚筒部を成形した際の回転軸の痕跡が残る。脚部と坏部を別途製作して接続したと考えられる。




第35図　6区13層 10号溝状遺構及び周辺出土遺物（1）西部・溝内（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　汚れ




第36図　6区13層 10号溝状遺構及び周辺出土遺物（2）西部・溝外（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ

ススコゲは単純口縁の甕全てに付く。5のみ内面のコゲが不明瞭だが、風化が著しいためとも考えられ、本来は内面にも汚れ又はコゲがあった可能性が高い。甕以外では高坏7の外面全体と内面の一部に認められ、主として坏部外面が火に当たる状態で使用されている。

**10号溝状遺構西部溝外出土遺物（第36図）**

10号溝状遺構の西端近くで、遺構外から出土した土器群である。出土位置が10号溝内で出土した土器（第35図）と続いており、標高もほぼ同じ、遺物の時期も合っているが、遺構外と遺構内であるから別個の土器群とした。

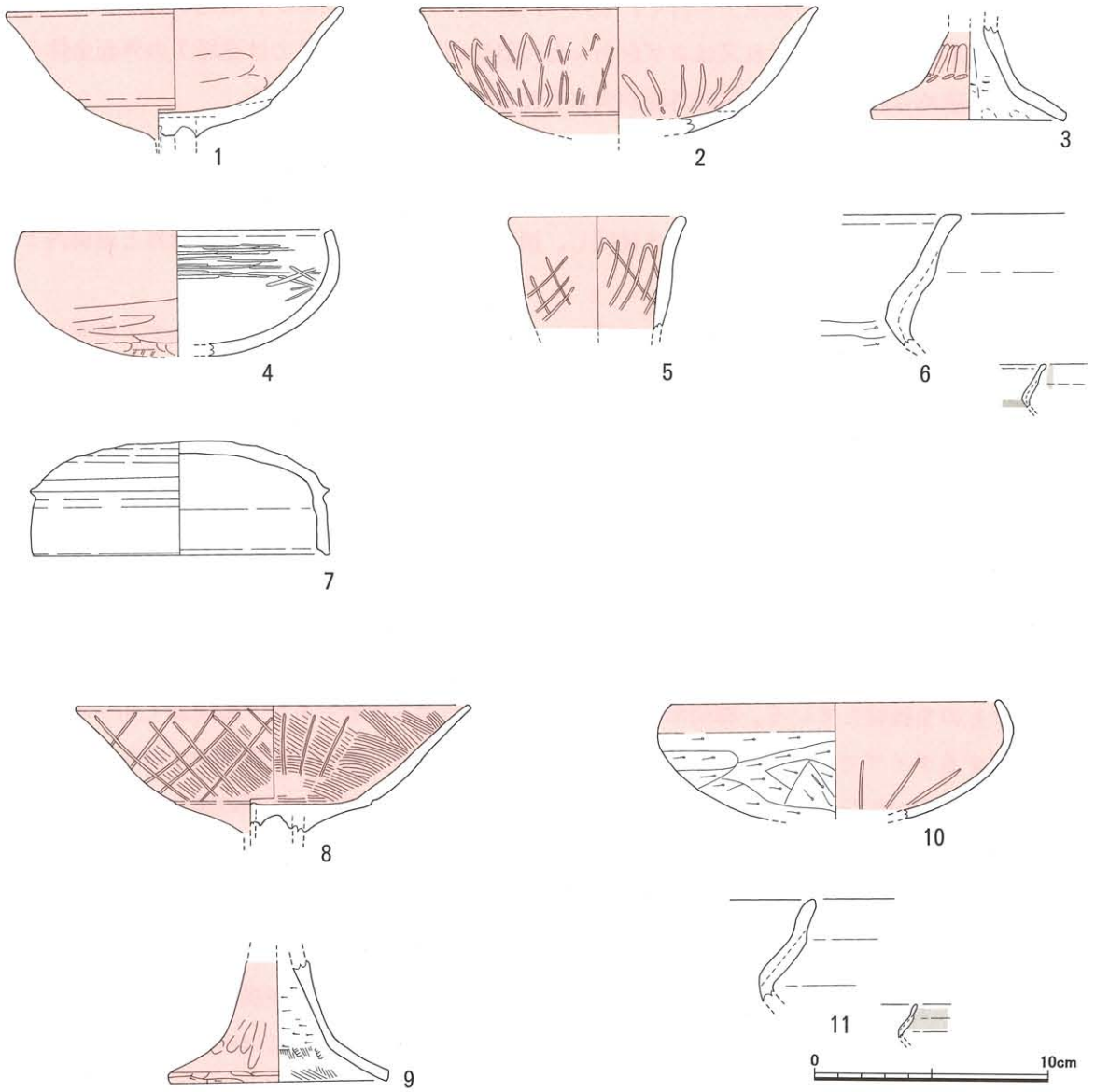
1は退化した複合口縁を持つ。粘土が2回貼り継がれているため、口縁部の途中で2箇所のくびれが生じている。口縁端部は水平な面が作られる。2も退化した複合口縁の甕である。端部に面が作られる。中位で粘土が貼り継がれ、くびれが生じている。口縁の立ち上がる角度は、直立に近い。3の肩部には沈線が一本横に走っており、文様を意識して付けられた可能性がある。口縁の先端を潰して広い面が作られ、わずかに内側へ肥厚する。頸部内面の形は、1・2・4が緩いのに対し、3・5は急角度で屈曲して「く」の字状となる。ただし、3は「く」の字先端のやや下方からヘラケズリが始まるが、5は「く」の字の先端部を境に上は口縁部でハケメ調整、下は胴部でヘラケズリ調整と、画然と分かれる。高坏はいずれも坏部・口縁の境に段をもつ。6の坏部と脚部は、別途製作したものを接続している。脚筒部の上面に坏底部がかぶる状態であり、脚筒部上面が坏部内面まで貫通するタイプではない。7の接続部では、脚筒部上面の一部が坏底部外面に付着して残っている。それ以外の部分は、接続以前の坏部側の面が残っている。脚部と坏部の間にはわずかな空間部分ができている。

小形の5を除く4点の甕は、いずれも外面にススが付着し、火にかけて使用されたことを裏付ける。1は口縁部のほか胴部中央以下の外面にススが付着する。ススは胴最大径付近では薄く、火をまともに受ける胴部下半分～底部にかけて濃いススが付着する。4は火が直接当たらない胴部上半分にもススが認められ、底部付近のススは濃い。1・4の内面底部付近には内容物のコゲ痕が見られる。5は全体が黒いが、これは焼成時に黒変したのであり、明確なススやコゲは認められない。6の外面にもわずかにススが残っており、火にかけて使用されている。

**10号溝状遺構中央～東部溝内出土遺物（第37図）**

10号溝状遺構の東半分は、約70cmにわたって一部途切れる。この途切れた部分から西の溝内で出土したのが37－1～7、東の溝内で出土したのが37－8～11である。それぞれの器種構成は、西側は土師器が高坏2、坏1、直口壺1、甕の口縁部破片1で、須恵器の坏蓋1点を含む（脚部は個体数に直結しないので数えていない）。東側では、土師器の高坏1、坏1、甕の口縁部破片1である。須恵器の坏蓋（7）は、セットになる坏身が無いので、単独で使われたと推測される。恐らく坏身として使用されたのであろう。

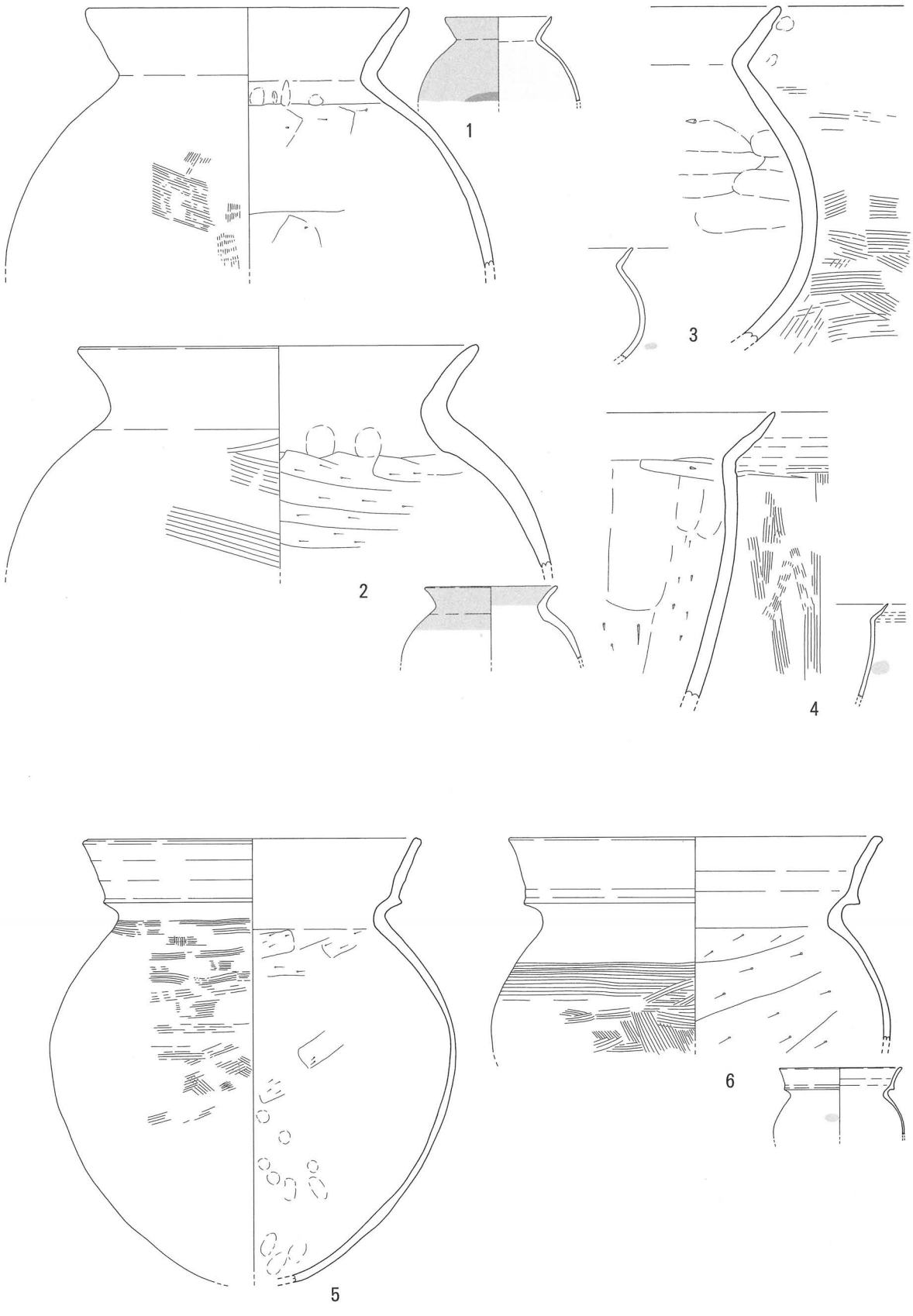
1は内外面とも赤彩されるが他の高坏と違って暗文は描かれない。脚部と坏部、坏体部と坏底部をそれぞれ別途作って接続しているため、坏体部と坏底部の境に明瞭な段を有する。2も坏体部と坏底部を別途製作してつないでおり、境に明瞭な段を有する。外面は花弁状、内面は放射状の暗文を描く。3は高坏の脚部である。筒部の外面にヘラ痕が4個認められる。4は外面のみ赤彩される。底部には、ヘラ痕が残る。浅い椀形であり、口縁端部に面を持つ。5は直口壺の口縁部である。内面の暗文は山形の文様1個と右上がりの斜線2本を合わせて一単位としている。6は退化した複合




**第37図　6区13層 10号溝状遺構及び周辺出土遺物（3）中央～東部・溝内**（S＝1/3）※赤のアミ目は赤彩
遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス 薄いコゲ

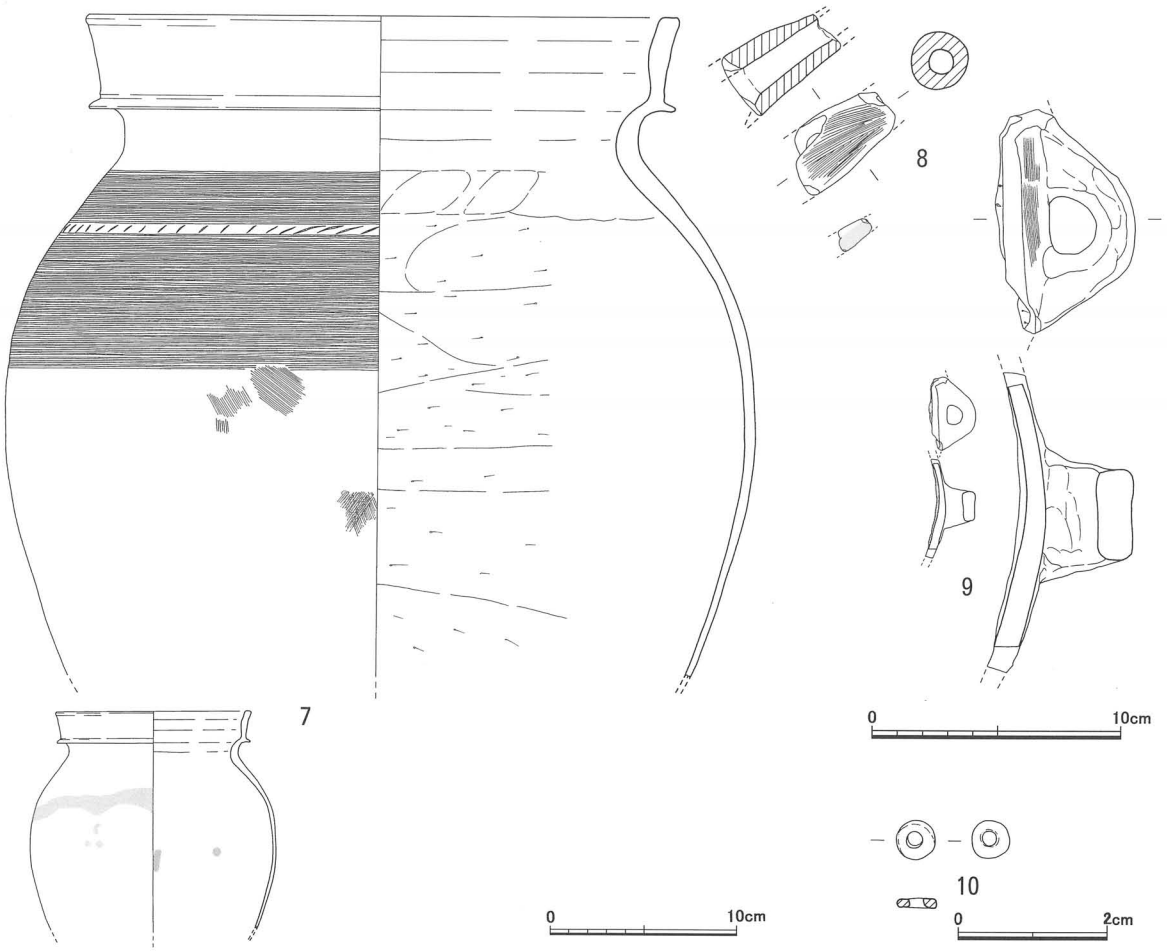
口縁の甕の破片である。粘土を貼り継いでいるが、下半分は粘土２枚分が重なった状態である。口縁端部に水平な面を持つ。須恵器の坏蓋（７）は、天井部と口縁部の段が明瞭であり、須恵器出現期に近い大谷編年１期の遺物である。ただし、口縁端部を面取りした後沈線を入れないため、段をもたない平面的な形の端部となっている。高坏が全面赤彩されるのに対し、坏の赤彩は外面・内面のいずれか一方に限られる。甕の口縁部はいずれも破片で、退化した複合口縁である。中央で粘土が貼り足されてくびれが生じている。６・11ともスス、またはコゲが見られ、火にかけて使用されている。

８はハケメを十分に消さないまま暗文を描く。外面は格子状、内面は放射状の暗文が描かれる。９は脚端部に面を作るため加工された跡が見られるが、著しく不規則で明瞭な四角い面にはならない。10は内面は全面赤彩、外面はヘラケズリ部分を残して赤彩されており、赤彩は目に触れる部分




第38図　6区13層 10号溝状遺構及び周辺出土遺物（4）中央～東部・溝外（その１）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　汚れ




**第39図　6区13層 10号溝状遺構及び周辺出土遺物（4）中央～東部・溝外（その2）**
（7：S＝1/4、8・9：S＝1/3、10：S＝1/1）
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　薄いコゲ**

のみにとどめている。11は退化した複合口縁の甕の破片である。口縁部中程で粘土を貼り継ぎくびれが生じているが、下半分は内側と外側に粘土が重なった状態である。端部には面が無く、丸い。

**10号溝状遺構中央～東部溝外出土遺物（第38・39図）**

10号溝状遺構の東部で溝の周辺から出土した遺物である。

1は単純口縁の甕である。頸部内面は「く」の字に近い形状であり、「く」の字の先端からやや下がった位置からヘラケズリされる。2も単純口縁の甕であるが、「く」の字形にはならず緩やかにカーブする。頸部から肩部にかけて器壁が非常に厚い。3は口縁部の外面がヨコナデ後に指押さえされている。その目的は不明である。頸部内面は「く」の字に近い形状である。器壁は口縁部から底部まで一様に厚い。4は甑である。口縁部が長くのびる。内面はヘラケズリ後縦方向のナデが入っており、内面を平滑にしようという意識が強い。蒸した米をかき取るとき、砂粒が付着するのを嫌ったためか。

5以下は10号溝上遺構よりも下層で出土した遺物である。5は複合口縁の甕である。器壁は薄く、わずかに肩が張る。口縁端部にわずかに面があるようだが明瞭でない。頸部外面に幅の狭いハケメが一周する。6も複合口縁甕であるが、口縁下端が横へ突出せず、一部水平になってから頸部へ続いている。弥生終末期に属すると思われる。7は口縁部と頸部の器壁の厚さ、及び口縁端部の面の

## 6区13層　10号溝状遺構及び周辺（1）西部・溝内出土土器観察表

| 挿図番号<br>（写真図版） | 種別<br>器種<br>（部位） | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 35－1<br>（図版69） | 土師器<br>甕 | ①22.7<br>②(6.1)<br>④3.7 | | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：密（石英粒、金雲母細片を多く含む）<br>色調：淡灰白色 | |
| 35－2<br>（図版69） | 土師器<br>甕 | ①16.6<br>②(19.1) | 胴部径は口径より大。文様を意識したハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：斜行ハケメ/胴上半：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴上半横方向のケズリ後ナデ/胴下半：縦方向のケズリ後ナデ/底：オサエ | 胎土：密（石英粒、金雲母細片を多く含む）<br>色調：灰白色 | 赤彩 |
| 35－3<br>（図版68） | 土師器<br>甕 | ①(12.3)<br>②(18.3) | 肩の一部は赤い胎土を後から張り足して周りと同じ厚さにしている | 口縁～頸：タテハケメ後ヨコナデ/肩：不定方向のハケメ/胴下半：斜行ハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：縦方向のナデ/胴下半：ケズリ/底：強いナデ | 胎土：密（石英粒、黒雲母・金雲母細片を含む）<br>色調：灰白色 | |
| 35－4<br>（図版68） | 土師器<br>甕 | ①12.1<br>②(12.7) | | 縁～頸：強烈なヨコナデ/胴上半：ヨコハケメ/胴中央：不定方向のハケメ/胴下半：タテハケメ | 縁：ヨコナデ後部分的に波状の櫛描文/頸ナデ/胴上半：ハケメ後ナデ/胴下半：ケズリ後ナデ | 胎土：密<br>色調：淡黄橙色 | |
| 35－5<br>（図版68） | 土師器<br>甕 | ①12.0<br>②(11.3) | | 口縁～：ヨコナデ/頸：斜行ハケメ後ヨコナデ/肩：横方向の粗いハケメ/胴：不定方向の細かいハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：横方向の粗いナデ又はケズリ/胴：不定方向の粗いナデ | 胎土：密（1㎜程度の細かい砂粒を含む）<br>色調：外面淡い橙色/内面浅黄橙色 | |
| 35－6<br>（図版68） | 土師器<br>甕 | ①16.9<br>②(13.0) | | 縁：タテハケメ後ヨコナデ/頸直下：不定方向のハケメ/肩：ヨコハケメ/胴下半：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下：ケズリ | 胎土：やや粗（2㎜以下の石英粒を多く含む）<br>色調：外面灰白色/内面褐灰色 | |
| 35－7<br>（図版69） | 土師器<br>高坏 | ①24.9<br>②(10.0) | 坏底中心部の接続部には脚部と接続しやすいようヘラで凹凸がつけられる。その後底部の穴に粘土塊を充填してふさいだ | 坏：ナデ後ハケメ/坏部下端：ハケメ後ヨコナデ/坏底：ハケメ | 口縁～：ヨコハケメ後部分的なミガキ（ミガキは密度が低く暗文状）/底：ミガキ、一部にハケメが残る | 胎土：密（石英粒、金雲母細片を多く含む）<br>色調：内外面浅黄橙色/底外面淡赤橙色/断面灰白色 | |
| 35－8<br>（図版68）<br>（図版69） | 土師器<br>高坏 | ①19.2<br>②(6.1) | 坏部と脚部を別作りして接続。脚部が底部内面まで貫通しているかは不明。口縁～体部と底部が別作りかは不明 | 口縁～体：ハケメ、ヨコナデ後部分的にミガキ（暗文か）/底：不定方向のハケメ | 口縁～体：ヨコハケメ後部分的なミガキ（暗文か） | 胎土：4㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：にぶい橙色 | |
| 35－9<br>（図版68） | 土師器<br>高坏 | ①16.8<br>②12.2<br>③11.6 | | 脚筒：ハケメ後ミガキ/脚裾：ヨコナデか | 坏底：オサエ/脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ後部分的にナデ | 胎土：密（石英粒を多く含む）<br>色調：淡赤橙色 | |

## 6区13層　10号溝状遺構及び周辺（2）西部・溝外出土土器観察表

| 挿図番号<br>（写真図版） | 種別<br>器種<br>（部位） | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 36－1<br>（図版70） | 土師器<br>甕 | ①(16.8)<br>②(23.0)<br>④2.1 | 口縁の途中で2回粘土を継ぎ足す | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：タテハケメ/胴上半：ヨコハケメ/胴下半タテハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸～胴上半：横方向のケズリ後一部ナデ/胴下半：斜め方向のケズリ | 胎土：密（2㎜大の石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む）<br>色調：灰白色 | 胴部外面の一部に黒斑 |
| 36－2<br>（図版70） | 土師器<br>甕 | ①(14.1)<br>②(10.3) | 口縁中程で粘土を継ぐ | 口縁：ヨコナデ/頸：タテハケメ後ナデ/胴：ヨコハケメ | 口縁：ナデ（指頭圧痕残る）/頸：縦方向のナデ/胴～：ケズリ後ナデか | 胎土：密（1㎜程度の石英粒、金雲母細片を含む）<br>色調：灰白色 | 口縁の一部と胴部の一部に黒斑 |
| 36－3<br>（図版70） | 土師器<br>甕 | ①14.3<br>②(13.8) | 口縁端部に外傾する面を持つ。胴部径が口径より大 | 口縁：ヨコナデ/肩：タテハケメ後ナデ/胴：横方向の粗いハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下～胴：ケズリ | 胎土：やや粗（1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：外面浅黄橙色/内面にぶい黄橙色 | |
| 36－4<br>（図版71） | 土師器<br>甕 | ①(16.7)<br>②14.7<br>③ | 胴部径が口径より大 | 口縁：ヨコナデ/頸：タテハケメ後ナデ/肩：面取り痕か、不定方向のハケメ後ナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ケズリ | 胎土：密（2㎜大の砂粒を含む）<br>色調：灰白色 | 口縁の一部に布目痕か |
| 36－5<br>（図版70） | 土師器<br>甕 | ①8.8<br>②8.6 | 胴部径と口径がほぼ同じ | 口縁～肩：ヨコナデ/胴：ヨコハケメ | 口縁：ハケメ後ナデ/胴上半：横方向のケズリ/胴下半：斜め方向のケズリ | 胎土：密（2㎜程度の砂礫、0.5㎜以下の雲母片を多く含む）<br>色調：灰黄色 | 内外面とも黒変 |
| 36－6<br>（図版70） | 土師器<br>高坏 | ①18.7<br>②11.8<br>③10.1 | 坏部と脚部を別作りして接続。厚さ1㎝程度の粘土塊を充填。脚部に1ヶ所の穿孔 | 坏：ハケメ後ミガキ/底：ハケメ/脚：ハケメ後縦方向のナデ | 坏～坏底境：ハケメ後ミガキ/坏底：ナデ/脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ後ナデ | 胎土：密（2㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む）<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 36－7<br>（図版70） | 土師器<br>高坏 | ①17.4<br>②(6.0) | 坏部～坏底部は連続して作る。坏部と脚部を別作りして接続。粘土塊の下面は生きている | 坏：ハケメ後ナデ/底：ハケメ | 口縁付近：ハケメ後ナデ/坏底：ミガキ又はナデ | 胎土：密（1㎜程度の砂粒がわずかに残る）<br>色調：灰黄色 | |

## 6区13層　10号溝状遺構及び周辺（3）中央～東部溝内出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 37－1（図版71） | 土師器 高坏 | ①14.2 ②(5.6) | 坏部と底部は別作りして接着。段がつく。坏部と脚部を接着後粘土塊を充填 | 口縁：ヨコナデ/体～底：ナデ | 口縁：ヨコナデ/体～坏底：ナデ | 胎土：やや粗(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：にぶい橙色 | 赤彩(全面)。一部に黒斑。 |
| 37－2（図版71） | 土師器 高坏 | ①16.8 ②(5.4) | 外面の暗文は右方向へ順に施文。上半はヘラの当たった幅が広い | 体：ヨコナデ/坏底：ナデ後放射状の暗文 | 体：ヨコナデ後重なる花弁状の案文/坏底：ナデ | 胎土：密(水簸され精良) 色調：にぶい橙色密 | 赤彩(全面) |
| 37－3（図版72） | 土師器 高坏 | ②(4.0) ③8.2 | | 脚筒：縦方向のナデ/脚筒下端：横方向のヘラ痕が4個 | 脚筒：ケズリ/脚裾：オサエ | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：にぶい橙色 | 赤彩(外面全面) |
| 37－4（図版71） | 土師器 坏 | ①13.4 ②(5.4) ③ | 浅い椀形。口縁端部に面あり | 口縁：細かいミガキ又はヨコナデ/体：ケズリ後部分的にナデ/底：ヘラ切り痕か | 口縁：細かいヘラミガキ/体～底：ナデ | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：外面にぶい橙色/内面浅黄橙色 | 赤彩(外面全面) |
| 37－5（図版72） | 土師器 直口壷（口縁） | ①7.3 ②(4.9) | 内面の暗文は右上がりの線を描いた後3本に1本を最上部で折り返して山形にする順。進行方向は右 | ナデ後暗文 | ナデ後暗文 | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む) 色調：明赤褐色 | 赤彩(全面) |
| 37－6（図版71） | 土師器 甕 | ②(5.7) | 口縁端部に面あり。口縁中央～根元で粘土を継ぎ足す | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(5㎜大の小石、金雲母・黒雲母細片を含む) 色調：にぶい黄橙色～灰褐色 | |
| 37－7（図版72） | 須恵器 坏蓋 | ①12.8 ②4.9 | 天井～口縁境に段。天井全面ヘラケズリ | 天井：回転ケズリ/口縁：回転ナデ | 口縁～天井周縁：回転ナデ/天井：ナデ | 胎土：密(2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む) 色調：灰色 | |
| 37－8（図版72） | 土師器 高坏 | ①16.8 ②(5.5) | 体部と底部は別作りして接着。段を持つ | 体：ハケメ後暗文/坏底：ナデ・オサエ | 体：ハケメ後暗文/坏底：ナデ | 胎土：やや粗(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 37－9（図版72） | 土師器 高坏 | ②(5.2) ③9.3 | 脚端部に面を作ろうとしているが著しく不規則 | 脚筒：ミガキ/脚端：ナデ | 脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ後ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む) 色調：暗灰黄色 | 赤彩(外面全面) |
| 37－10（図版72） | 土師器 坏 | ①14.1 ②(5.0) | 椀形 | 口縁：ヨコナデ/体～坏底：不定方向のケズリ | 口縁：ヨコナデ/体～坏底：ナデ後疎らな暗文 | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む) 色調：浅黄橙色 | 赤彩(口縁外面、内面全面) |
| 37－11（図版71） | 土師器 甕 | ②(4.4) | 口縁の中間部で粘土を貼り継ぐ | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒、金雲母/黒雲母細片を含む) 色調：浅黄色 | |

## 6区13層　4号柱列計測表

| 規模 | | 2間（3.42m） | | |
|---|---|---|---|---|
| 検出面 | | 灰オリーブ色砂質土（14層）上面 | | |
| 各柱穴の埋土 | | 暗灰褐色粘質土（13層） | | |
| 主軸 | | N－68°－E | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 |
| 平面規模（cm） | | 36 | 42 | 36［18］ |
| 標高（m） | 上面 | 5.00 | 4.99 | 5.00 |
| | 下面 | 4.73 | 4.54 | 4.64 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | |
| | | 1.84 | 1.60 | |

［　］内は柱穴の下面径（cm）

広さが1cmにもなる厚さである点が特徴的である。それに比較して胴部の器壁が薄いのは、熱効率を落とさないためであろう。肩部外面の平行ハケメは入念・精美である。平行ハケメの中に刺突文が一列めぐらされる。刺突文の間隔は一定しない。9は山陰系甑形土器の把手部で、横方向に付くタイプである。10は翡翠製の臼玉である。側面のミガキ調整は穿孔以前の段階で施されている。形割り後角を取って円形に仕上げるための調整であろう。これにより上面と側面の境はきれいに角がとれている。

単純口縁の甕（38－1～3）や甑（4）はいずれも外面にススが付着する。2の内面には　口縁部にのみススが付着する。頸部に蓋を載せたので、それより外の部分にススが付いたのであろう。

## 6区13層　10号溝状遺構及び周辺（4）中央～東部溝外出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 38－1（図版73） | 土師器 甕 | ①16.5 ②(13.4) | 胴部径は口径より大 | 口縁～肩：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(1.5㎜程度の砂粒を多く含む) 色調：灰黄色 | |
| 38－2（図版73） | 土師器 甕 | ①20.5 ②(11.6) | 胴部径は口径より大 | 口縁～頸直下：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(金雲母・黒雲母・石英細片を多く含む) 色調：にぶい橙色 | |
| 38－3（図版74） | 土師器 甕 | ②(17.3) | 胴部径は口径より大 | 口縁：ヨコナデ/胴上半：ハケメ後ナデ/胴下半：ハケメ | 口縁：ヨコナデ後一部オサエ/胴：ケズリ後全面ナデ | 胎土：密（5㎜以下の石英粒、赤褐色粒を含む) 色調：外面橙色/断面：浅黄橙色 | 焼成やや不良。口縁外面のオサエの目的は不明。 |
| 38－4（図版74） | 土師器 甑 | ②(14.8) | | 口縁：ヨコナデ/頸直下：部分的に横方向のケズリ/胴：タテハケメ後不定方向のハケメ/ | 口縁：ヨコナデ/胴：縦方向のケズリ後縦方向のナデ | 胎土：密（1㎜以下の石英粒を多く含む) 色調：にぶい黄橙色 | |
| 38－5（図版73） | 土師器 甕 | ①17.0 ②(23.0) | わずかに肩が残り、器壁が薄い | 口縁ヨコナデ/胴上半：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴上半：ケズリ/胴下半～底：指オサエ | 胎土：密(石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む) 色調：灰白色 | |
| 38－6（図版73） | 弥生土器 甕 | ①19.0 ②10.6 | 口縁下端が突出しない | 口縁～頸直下：ヨコナデ/肩：横方向の平行ハケメが1周する/肩直下：不定方向のハケメ/胴下半：タテハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(0.5㎜以下の砂粒を含む) 色調：灰白色 | |
| 39－7（図版73）（図版74） | 土師器 甕 | ①31.5 ②(35.5) ④4.9 | | 口縁～肩：ヨコナデ/肩～胴：横方向の丁寧なハケメ/胴～：縦方向中心の乱雑なハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸：縦方向のナデ/胴～：ケズリ | 胎土：密（1㎜程度の石英粒、金雲母細片を含む) 色調：灰白色 | |
| 39－8（図版73）（図版74） | 土師器 注口土器 | ①(最大径)2.8 ②(長さ)4.6 ③（最大内径)1.25 | 内径は基部近くで急に拡がる | ハケメ | | 胎土：密（1㎜以下の微細な砂粒、金雲母細片を含む) 色調：灰白色 | |
| 39－9（図版73）（図版74） | 土師器 山陰系 甑形土器 | ②(9.0) | 縦方向につく把手 | 把手：ナデ/胴：タテハケメ後ケズリ | 胴横方向のケズリ | 胎土：密（2㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む) 色調：把手及び外面灰白色/内面：灰褐色 | |

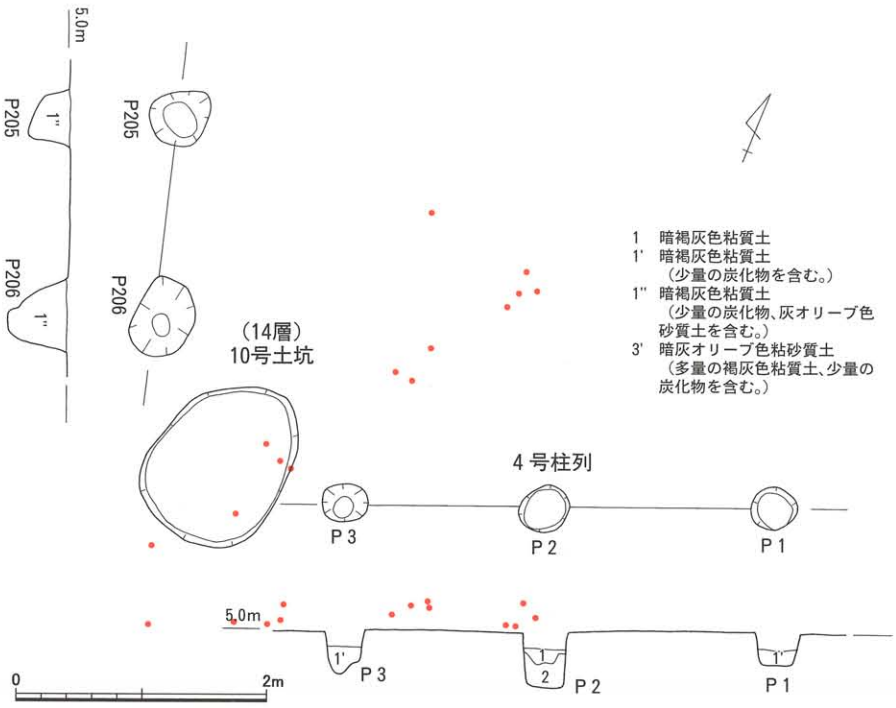
## 6区13層　10号溝中央～東部溝外出土石器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 出土地点 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 研磨・使用状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 39－10（図版73） | 13層 | 臼玉 | 翡翠 | 0.76 | | 0.17 | 0.21 | 側面のミガキは形割り後角を取るためか | 上面から下面へ向けて穿孔か。 |

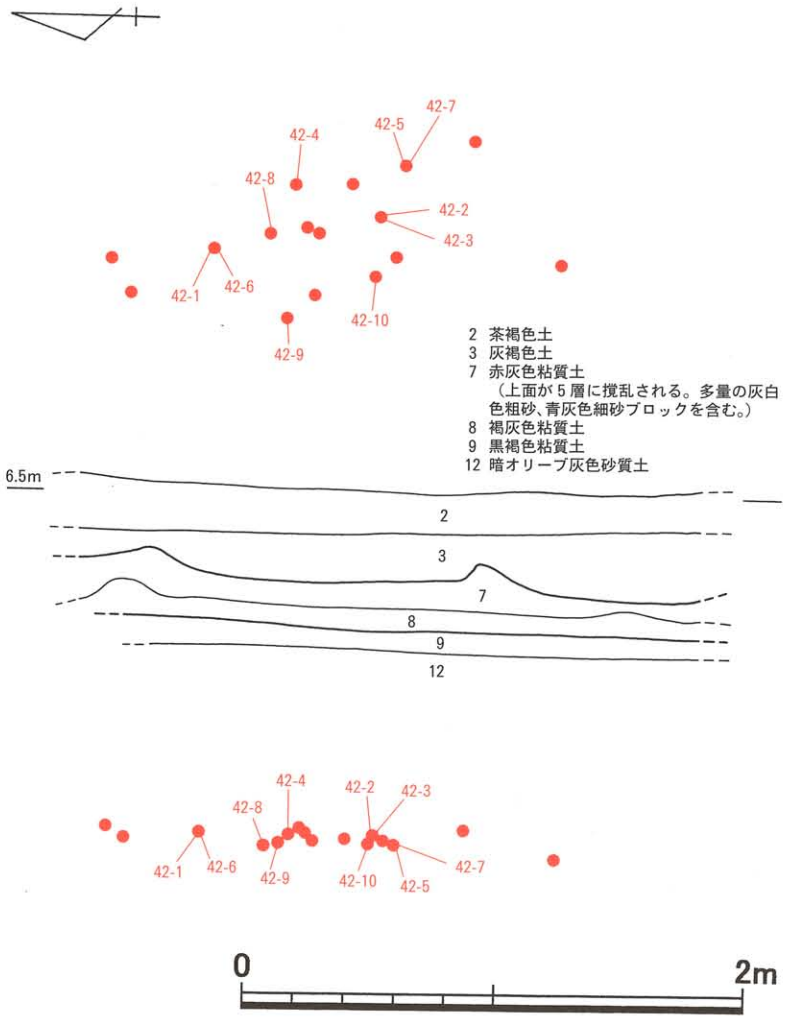
5にはスス・コゲの付着が見られず、甑（4）のススも不明瞭である。それ以外は全て明瞭なススの付着が確認され、火にかけて使用したことが確かめられる。

### 13層　4号柱列（第40図）

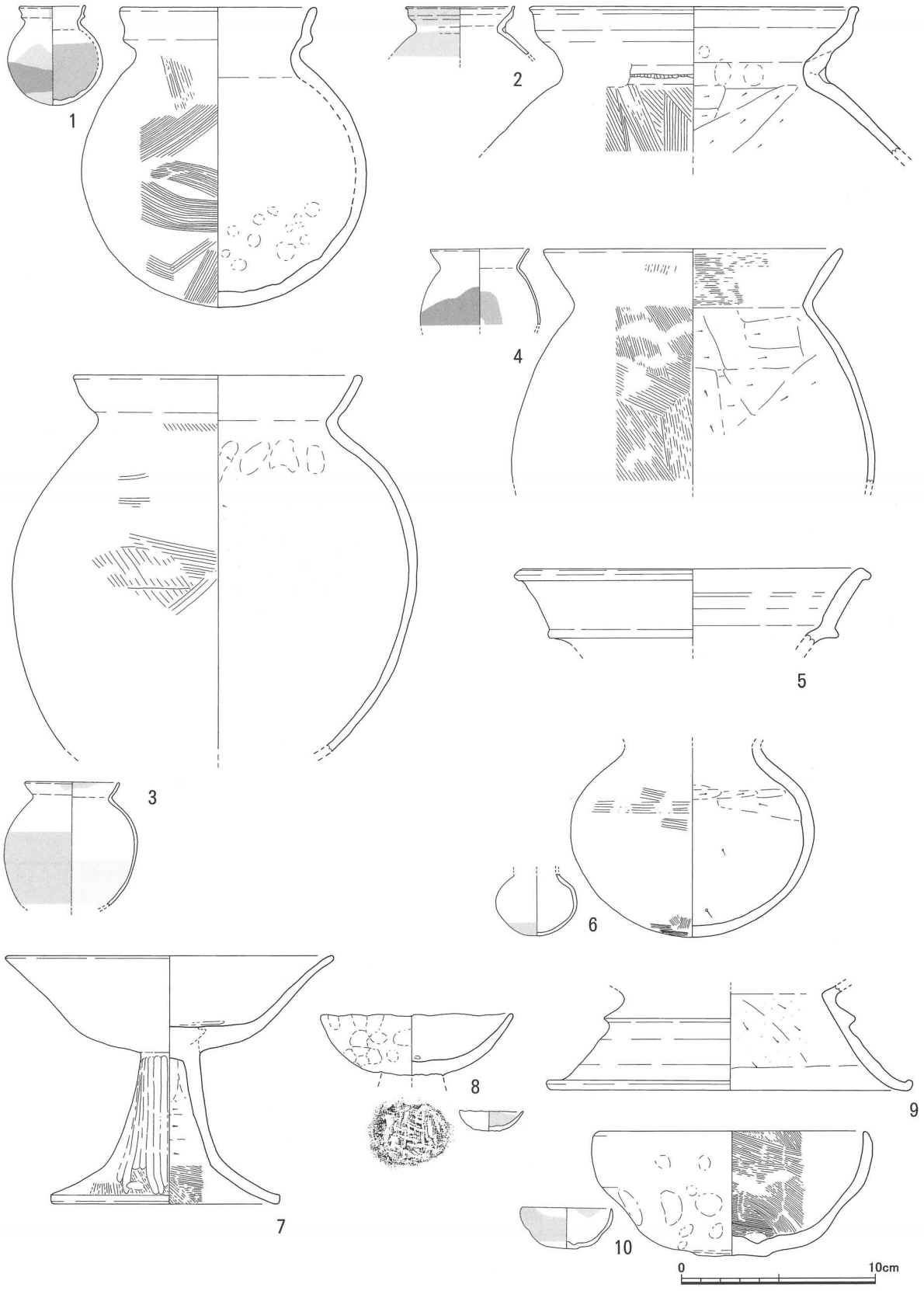
4号建物のすぐ西で検出された柱列である。14層上面で検出されたが、埋土は13層と同質の暗灰褐色粘質土であり、13層から掘り込まれた柱穴で構成される柱列である。P3の北西寄りで、南北方向に連なる2穴のピットが検出されているが、その軸方向は4号柱列に対しほぼ直角となる。埋土も4号柱列と同様の暗灰褐色粘質土であることから、両者が一連の柱列である可能性も予想され




第40図　6 区13層　4 号柱列及び遺物出土位置（S＝1/60）




第41図　6 区13層　4 号土器群出土位置（S＝1/30）




第42図　6区13層　4号土器群出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ

た。そうであればもう１穴の柱穴がＰ３の西側になければならないが、該当の位置にピットは確認されなかった。

遺物は、柱列の検出面直上から20㎝上方にかけて、破片が出土している。時期を確定できる遺物は出土しなかった。

### 13層　４号土器群（第41図）

10号溝状遺構西端から10m西の地点で検出された土器群である。時期は須恵器出現以前の古墳前期から中期にかけてであり、同時期の遺構・土器群の西端に当たる。須恵器出現期の５号土器群も東西の位置関係はほぼ４号土器群と同じである。集中的に出土しており、遺物のほとんどが直径１mの円内に収まる。出土位置の標高は5.0～5.2mの間に集中し、同時期の２号竪穴状遺構床面や10号溝状遺構の上面とほぼ同じである。

退化した複合口縁の甕が３点、単純口縁の甕が２点、高坏・低脚坏・鼓形器台・粗製の坏各１点が出土している。甕が多く坏類を上回る器種構成は、古墳中期の建物跡である松江市大角山遺跡のＳＩ01・02・04と共通する(2)。

**６区13層　４号土器群出土土器観察表**

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 42－１（図版75） | 土師器 甕 | ①10.2 ②15.5 ③ | | 口縁～肩：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸～胴上半：ナデ/胴下半：ナデ又はオサエ | 胎土：密（石英粒、白色粒を多く含む） 色調：断面灰黄色 | |
| 42－２（図版75） | 土師器 甕 | ①16.5 ②(7.6) | 口縁と胴を接続後一部は粘土を上から張り足した | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：縦・斜行ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：密（石英粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む） 色調：淡黄色 | |
| 42－３（図版75） | 土師器 甕 | ①14.7 ②(19.4) | | 口縁：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下：オサエ | 胎土：１～３㎜の砂粒を多く含む 色調：浅黄橙色 | |
| 42－４（図版75） | 土師器 甕 | ①15.2 ②12.1 | 胴部最大径と口径の差が小さい | 口縁：タテハケメ後ヨコナデ/肩～：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下：ケズリ | 胎土：２㎜程度の石英粒を多く含む 色調：浅黄橙色一部淡橙色 | |
| 42－５（図版76） | 土師器 壷又は甕（口縁） | ①17.4 ②3.9 ④3.5 | 口縁端部が下へ肥厚し、玉縁状 | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密（石英粒、金雲母・黒雲母細片を多く含む） 色調：淡黄色 | |
| 42－６（図版75） | 土師器 小形壷（胴） | ②(9.7) ③ | 小形 | 頸直下：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ・胴下半：不定方向のハケメ | 頸直下：ナデ/肩：横方向のケズリ/胴下半：斜め方向のケズリ | 胎土：やや粗（２㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む） 色調：灰白色 | |
| 42－７（図版75） | 土師器 高坏 | ①16.7 ②12.8 ③11.5 | 坏部・脚部を別に作って接続 | 坏：ミガキ/脚筒：縦方向のミガキ/脚裾：ハケメ後ミガキ、部分的にナデ | 坏：ミガキか/脚裾上面：ナデ/脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ | 胎土：石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む 色調：淡橙褐色 | 赤彩（脚筒外面、脚裾部内外面の一部） |
| 42－８（図版76） | 土師器 低脚坏 | ①9.8 ②3.2 | 小形 | オサエ（多くの指頭圧痕が残る） | ナデ | 胎土：密（１～２㎜の白色砂粒を多く含む） 色調：淡灰白色 | |
| 42－９（図版76） | 土師器 鼓形器台 | ②(5.4) ③(18.6) | 外面の稜は筒部からやや下降する | ヨコナデ | 脚台上半：ケズリ後ナデ/脚裾：ケズリ/脚端：ケズリ後ナデ | 胎土：密（１㎜程度の石英粒を多く含む） 色調：内外面浅黄橙色/断面灰白色 | |
| 42－10（図版76） | 土師器 小形鉢 | ①13.7 ②6.5 ③ | 手捏ね土器。作業台から切り離した痕跡を調整しない | 口縁～：強い指ナデ | 坏体：ハケメ/底中央：ナデ | 胎土：粗（１㎜以下の砂粒を多く含む） 色調：明黄褐色 | |

## 6区13層　5号土器群出土土器観察表

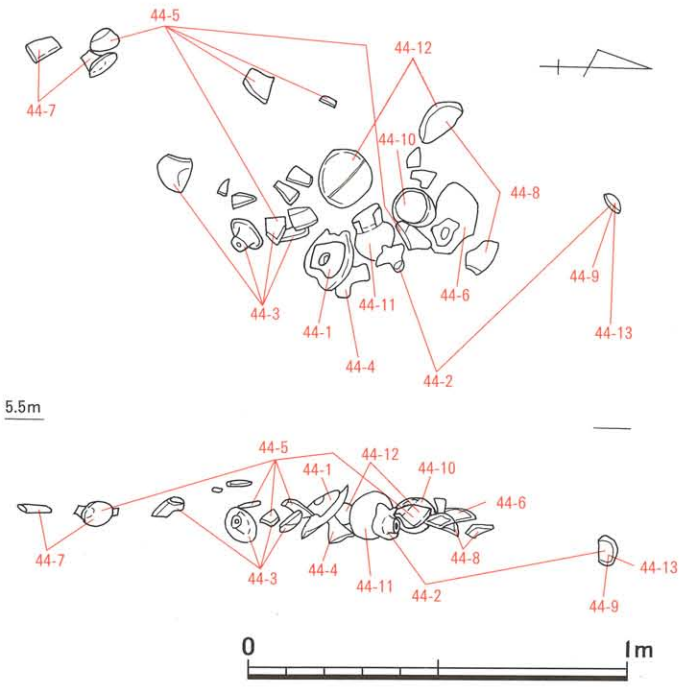
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44－1<br>(図版77) | 土師器<br>高坏<br>(坏) | ①16.7<br>②(5.1) | 体部と底部の境は段が退化。内面ハケメもなし。坏部と脚部は別作り | 口縁～体：ハケメ・ナデ後暗文/底：ナデ(暗文なし) | ナデ後暗文 | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 44－2<br>(図版77) | 土師器<br>高坏 | ①16.2<br>②(7.7) | 体部と底部の境は段が退化。内面ハケメなし | 口縁～体：ヨコナデ/底：ハケメ後ナデ/接続部：指頭圧痕/脚筒：ナデ又はミガキ | 坏：ナデ後暗文/脚：ケズリ | 胎土：密(0.5㎜程度の砂粒をわずかに含む)<br>色調：浅黄色 | 赤彩(脚筒部の内面の一部を含む) |
| 44－3<br>(図版76) | 土師器<br>高坏 | ①16.3<br>②(8.2) | 体部と底部の境は段が退化。内面ハケメもなし | 口縁：ヨコナデ/底：ナデ/脚筒：ミガキ又はナデ | 口縁：ミガキ/体：ナデ後暗文/底：ナデ | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(脚筒部の内面の一部を含む) |
| 44－4<br>(図版76) | 土師器<br>高坏 | ①(17.3)<br>②10.2<br>③9.3 | 体部と底部の境に明確な段あり。内面ハケメあり | 口縁～体：ナデ後暗文/坏底：ハケメ後ナデ/脚との接続：ハケメ/脚：縦方向のミガキ | 口縁～体：ヨコハケメ後ナデ後暗文/底：ハケメ/脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ後ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 赤彩(脚部の内面を除く) |
| 44－5<br>(図版77) | 土師器<br>高坏 | ①16.4<br>②(7.8) | 坏～脚部を連続して作ったか。体部と底部の境に明確な段あり。内面ハケメあり | 口縁～体：ナデ又はミガキ後暗文/脚との接続：ハケメ/脚：ミガキ又はナデ | 口縁～体：ナデ又はミガキ後暗文/底：ナデ/脚：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | 赤彩(脚部の内面を除く) |
| 44－6<br>(図版77) | 土師器<br>高坏 | ①17.7<br>②(5.5) | 坏～脚部を連続して作ったか。体部と底部の境に明確な段あり。内面ハケメあり | 口縁：ヨコナデ後暗文/体：ナデ後暗文/底：ナデ | 口縁：ヨコナデ後暗文/体～底：ハケメ・ナデ後暗文 | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(脚部の内面を除く) |
| 44－7<br>(図版76) | 土師器<br>高坏 | ②(5.2)<br>③8.3 | 坏部と脚部を別に作り坏底面に脚筒部を挿入する | 脚筒：縦方向のナデ/脚裾：ナデ/ | 脚筒：横方向のケズリ後ナデ/脚裾：ナデ | 胎土：密(0.5㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | 赤彩(脚筒部内面を除く) |
| 44－8<br>(図版76) | 土師器<br>坏 | ①12.4<br>②4.7<br>③ | 椀形で口縁端部が内湾 | 口縁：ヨコナデ/底：ケズリ | 口縁：ヨコナデ後暗文/底：ナデ後暗文 | 胎土：密<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 44－9<br>(図版77) | 土師器<br>坏 | ①12.5<br>②(4.6)<br>③ | 椀形で口縁端部が内湾 | 口縁：ヨコナデ/底：ケズリ | 坏底：ミガキ後暗文 | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 44－10<br>(図版77) | 土師器<br>坏 | ①12.0<br>②5.4<br>③ | 半球形で口縁端部はまっすぐ上へのびる | 口縁：ヨコナデ/底：ケズリ | 坏体：ミガキ後放射状の暗文 | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を少し含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 44－11<br>(図版77) | 土師器<br>小形壷 | ①9.0<br>②12.2<br>③ | 頸～肩部の粘土の継ぎ目は器壁の厚い部分でのみ確認できる。胴部と底部の境に粘土の継ぎ目あり | 口縁～肩：横方向のナデ後暗文/胴下半～底：ナデ | 口縁～頸：横方向のナデ後暗文/頸～胴：ケズリ後ナデ/底：オサエ | 胎土：密(雲母などの微細片を均一に含む)<br>色調：外面灰白色/内面浅黄橙色 | 赤彩(外面全面・口縁から頸までの内面) |
| 44－12<br>(図版77) | 土師器<br>坏 | ①12.6<br>②4.5<br>③ | 椀形で口縁部が少しくびれる | 口縁：ヨコナデ/底：ケズリ | 口縁：ミガキ/体：ミガキ又はナデ後暗文 | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 44－13<br>(図版77) | 土師器<br>小形壷 | ①(11.5)<br>②(6.6) | 口径が胴部径より大 | 口縁～肩：ハケメ後ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ハケメ後一部ナデ/頸直下：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(2㎜以下の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰黄褐色 | |

### 遺物（第42図）

甕は、退化した複合口縁（42－1・2）と単純口縁（3・4）の両方を含む。他に高坏・低脚坏・鼓形器台・粗製の坏を各1個体含む。鼓形器台や低脚坏など、小谷式に特徴的な器種が残る一方、新たな器種として粗製の坏が登場しているので、この土器群の時期は大角山遺跡と同様、松山編年Ⅱ期の古段階に位置づけられよう。

2は頸部及び口縁部付け根付近の2箇所で粘土の継ぎ目が確認される。胴部・口縁部の接続箇所の外面をハケメ調整によって整えようとしているが、調整しきれない部分があり、この部分に新たに粘土を貼り足した上、ヨコナデして継ぎ目をふさいでいる。5は壷又は甕の口縁部で、端部を下へ肥厚させるため玉縁状となる。7は坏部と脚部を別途製作して接続している。脚部の上面は、底部内面まで貫通している可能性もある。8は、脚部との接着面に多数の切れ目を入れ、接着面積を

広くしている。外面に指頭圧痕が多数残り粗製である。この他、粗製の坏（10）も見られる。外面から押さえたためか、底部内面中心部がふくらんで山なりになっている。逆に外面側は窪んでしまったため、外面中央に粘土を貼り足して補強したものと思われる。




**第43図　6区13層　5号土器群出土状況**（S＝1/20）

**13層　5号土器群（第43図）**

6区中央やや西寄りで検出された土器群である。13層4号土器群のほぼ真南に当たり、同時期の遺構・土器群の分布の西端に位置する。

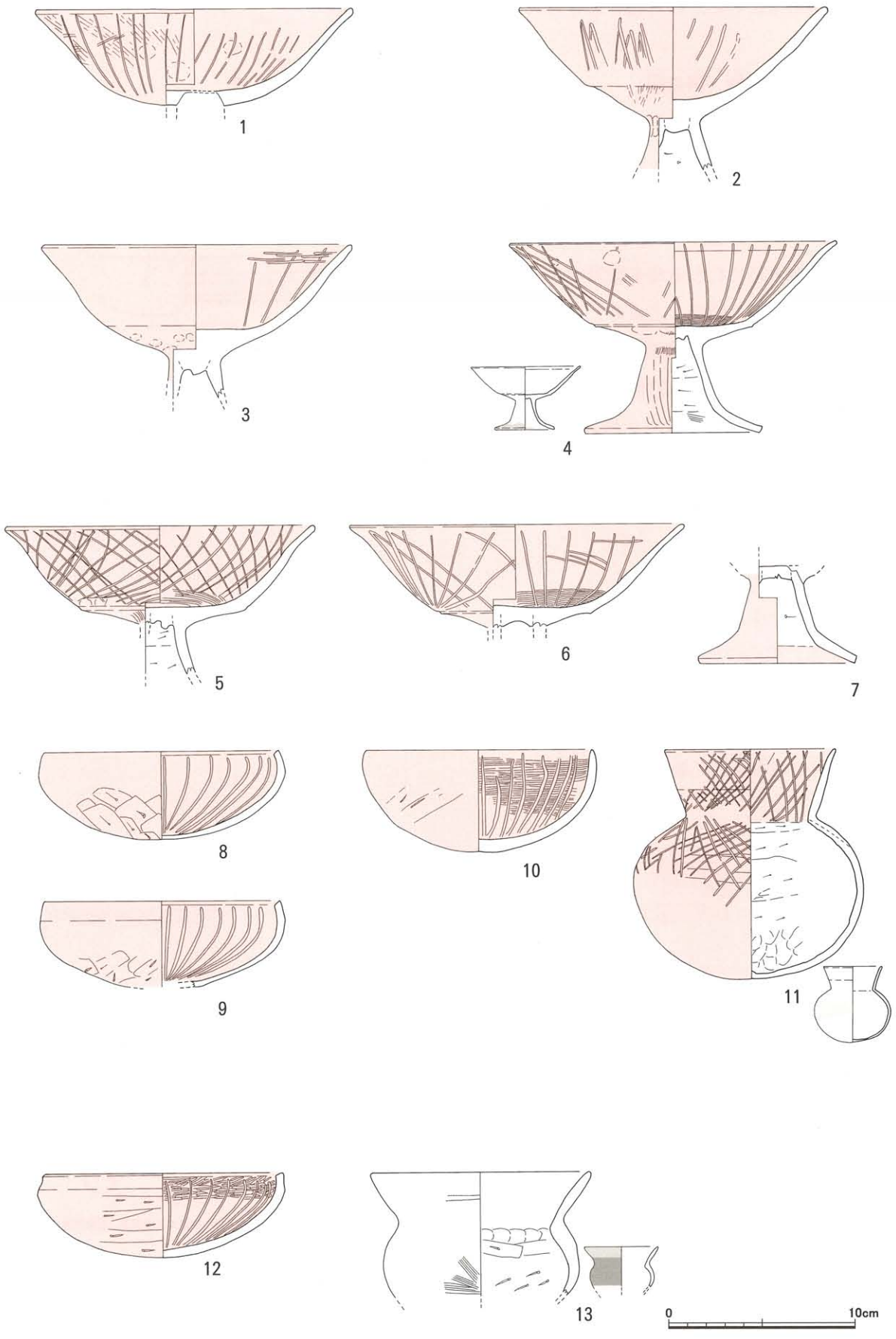
遺物の出土位置の標高は5.2～5.3mにあり、4号土器群に比べてやや高い。この高低の差は、4号土器群の時期が古墳中期前半であるのに対し5号土器群は古墳中期後半の須恵器出現期という時期差とも対応する。

土器の大半が径1mの円内に集中する。やや離れた位置から出土している破片もあるが（44－7・13など）、2・5の破片が広範囲で接合することから、これらも含めてひとまとまりの土器群と判断される。出土状況からは、4の坏部の上に1が反転して被さっていたことが確認できる。

**遺物（第44図）**

高坏7点、坏4点、小型壺2点が出土している。甕は破片も含めて1点も出土していない。供膳具に偏った器種構成である。13以外は全て赤彩され、坏部の内面には例外なく暗文が描かれる。高坏の外面には暗文があるが、坏の外面はヘラケズリされて暗文は施されない。高坏は、底部と体部の境の段が明瞭なもの（4～6）、段が形骸化しているもの（2・3）、段を持たないもの（1）の3種がある。段が明瞭な4～6は、内面の体部・底部の境目にハケメがめぐる。このハケメ調整の役割は、坏体部と底部の接続の後、継ぎ目が露出している状態をならして内面を平滑に仕上げるためであろう。境目の段が形骸化あるいは消失している1～3ではこのハケメが見られないので、底部から口縁部まで一連のものとして製作されたと考えられる。5号土器群では、これら二つのタイプの高坏が共存していた。坏は、椀形で口縁部が内彎する8・9や、半球形の10が見られる。12は口縁部がくびれており、須恵器の坏蓋を模倣したものであろう。口縁端部が面取りされるだけで段状に仕上げられないのは、10号溝状遺構東部で出土した須恵器坏蓋（37－7）に通ずる省略の仕方である。小形壺は、赤彩される11では胴部径が口径よりも大きく、赤彩されない13は逆に口径の方が大きい。13と同様の器形の小形壺は、6区2号竪穴状遺構（33－5）や5区12号土器群（121－20）で出土しているが、それらに比較してこの遺物の胎土は著しく粗い。

小形壺（13）には濃いススが付着しており、火にかけて使用されたことが明らかである。11のススはやや不明瞭である。高坏4の脚部にも、薄いが明瞭なススの付着がある。高坏の脚端部が軽く




第44図　6区13層　5号土器群出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　汚れ

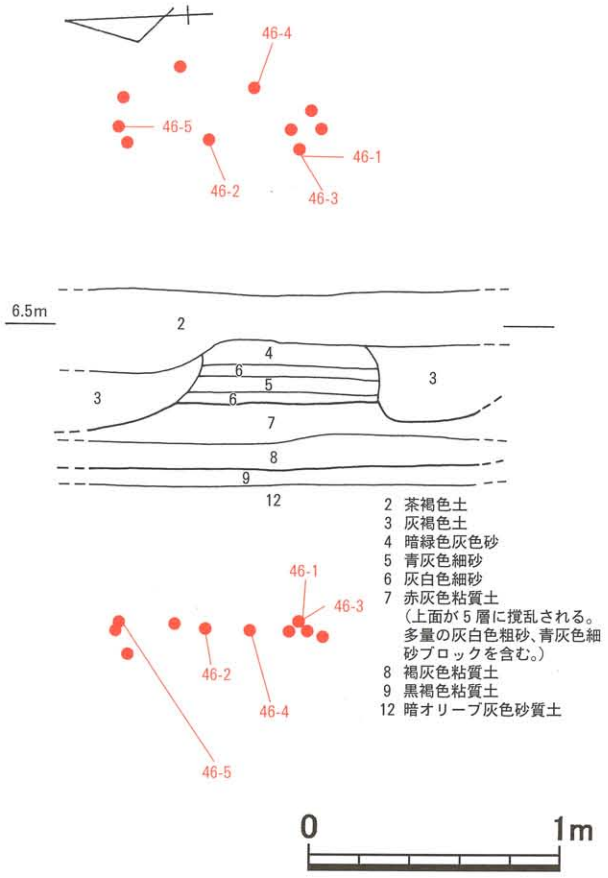
すすける程度の火にかけられたと見られる。

### 13層　6号土器群（第45図）

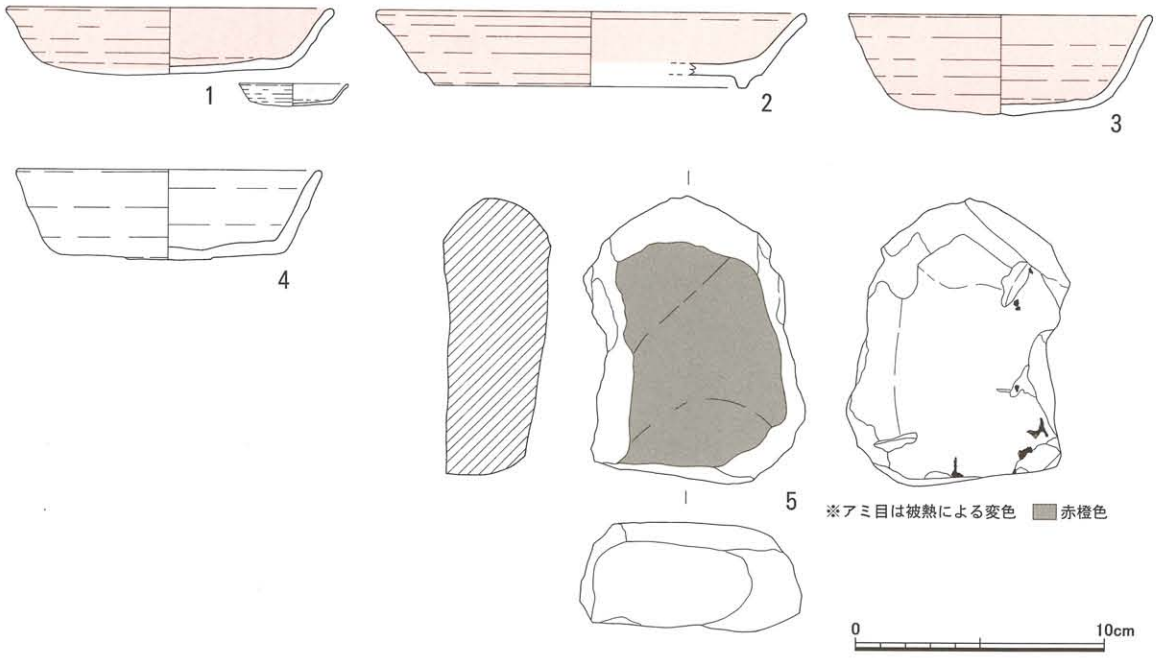
調査区西よりで検出された土器群であり、13層の土器群・遺構の最も西寄りに当たる。しかし、出土位置は13層であるが、奈良時代の遺物からなり、上層の12層の年代に属する。12層から掘り込まれた遺構を認識できず、13層まで掘り下げた時点で土器群として検出されたと思われる。出土位置の標高は5.2～5.3mの間に集中し、5号土器群よりわずかに高く、12層2号土器群や3号土器群の5.3～5.4mよりわずかに低い。3号土器群のすぐ西に位置する。1m×30cmの南北に細長い範囲に、遺物5点が集中する。

**遺物（第46図）**

土師器はいずれも底部外面を除いて赤彩されている。高台の付く皿（46－2）、付かない皿（1）、坏（3）、須恵器の坏（4）、砥石（5）が各1点含まれ、器種が分散している。1・3はおそらく底部外面が作業台から




第45図　6区13層　6号土器群出土位置（S＝1/30）




第46図　6区13層　6号土器群出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩
遺物図面(1/3)の凡例：汚れ

## 6区13層　6号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種　別<br>器　種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 46－1<br>(図版78) | 土師器<br>皿 | ①13.2<br>②2.7 | 底部中心へ向い下がる | 口縁～体：回転ナデ/<br>底：切り離し後調整せず | 口縁～底外周：回転ナデ/底中央：ナデ | 胎土：密<br>色調：口縁・内面灰白色/底外面浅黄橙色 | 赤彩(底部外面を除く) |
| 46－2<br>(図版78) | 土師器<br>皿 | ①(17.1)<br>②3.0<br>③(12.5) | | 体：回転ナデ | 体：回転ナデ | 胎土：精良<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面は不明) |
| 46－3<br>(図版78) | 土師器<br>坏 | ①(12.2)<br>②4.0 | 底部中心へ向い下がる | 口縁～体：回転ナデ/<br>底切り離し後調整せず | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(微細な雲母片を含む)<br>色調： | 赤彩(底部外面を除く) |
| 46－4<br>(図版78) | 須恵器<br>坏 | ①12.2<br>②3.6<br>③9.5 | 底外周はヘラにより土器を起こした痕あり。底中央には切り離す瞬間にくっついてきた粘土あり | 体：回転ナデ/底：切り離し後調整せず | 体：回転ナデ/底：回転ナデ一部オサエ | 胎土：やや密(２㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰色 | |

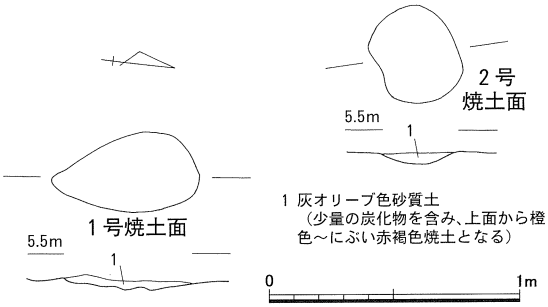
## 6区13層　6号土器群出土石器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 出土地点 | 種　別 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 研磨・使用状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 46－5 | 13層<br>6号土器群 | 砥石 | アプライト | 11.2 | 8.3 | 4.3 | 595.53 | 3面使用 | |

の切り離し時のまま調整されていない。底部の中心へ向かってわずかに下がる。4の底面外周部にはヘラの痕跡が残る。また、底面中央には切り離しの際に付着した粘土が残っている。

### 13層　1号・2号焼土面（第47図）

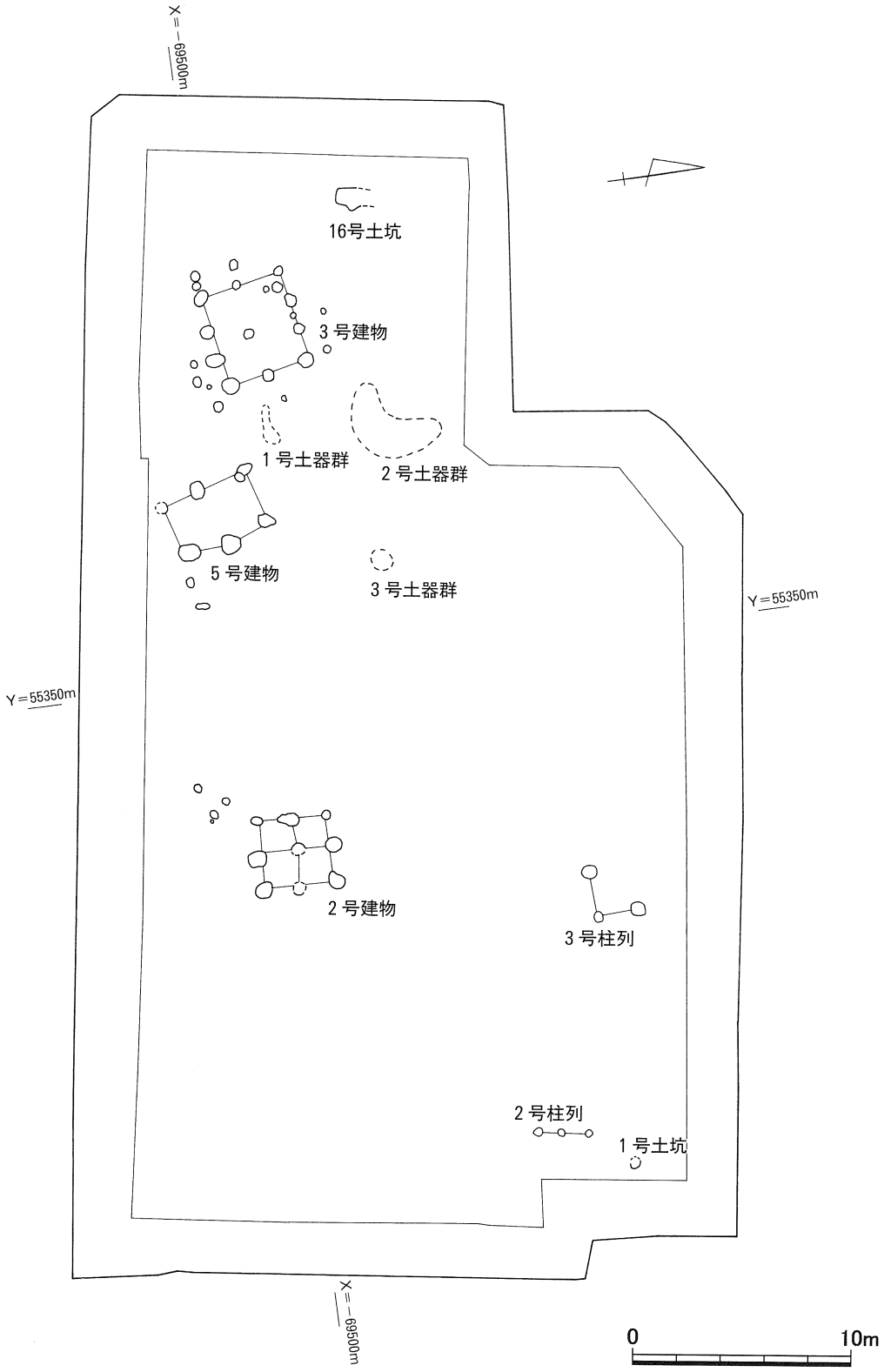
調査区ほぼ中央で、並んだ位置で検出された焼土面である。南の1号焼土面は長径60cm、短径30cmと南北に細長い平面形である。南端が細くなる鶏卵形である。1号焼土面から北80cmで2号焼土面が検出された。径は30～40cmの円形である。いずれも検出面である13層上面から4cm程度の深さまで被熱により黄橙色に変色していた。遺物は検出されておらず時期は不明である。付近に13層の遺構や土器群が無いため、性格も不明である。




第47図　6区13層上面　1号・2号焼土面
(S＝1/30)

## 6区12層の遺構の位置関係（第48図）

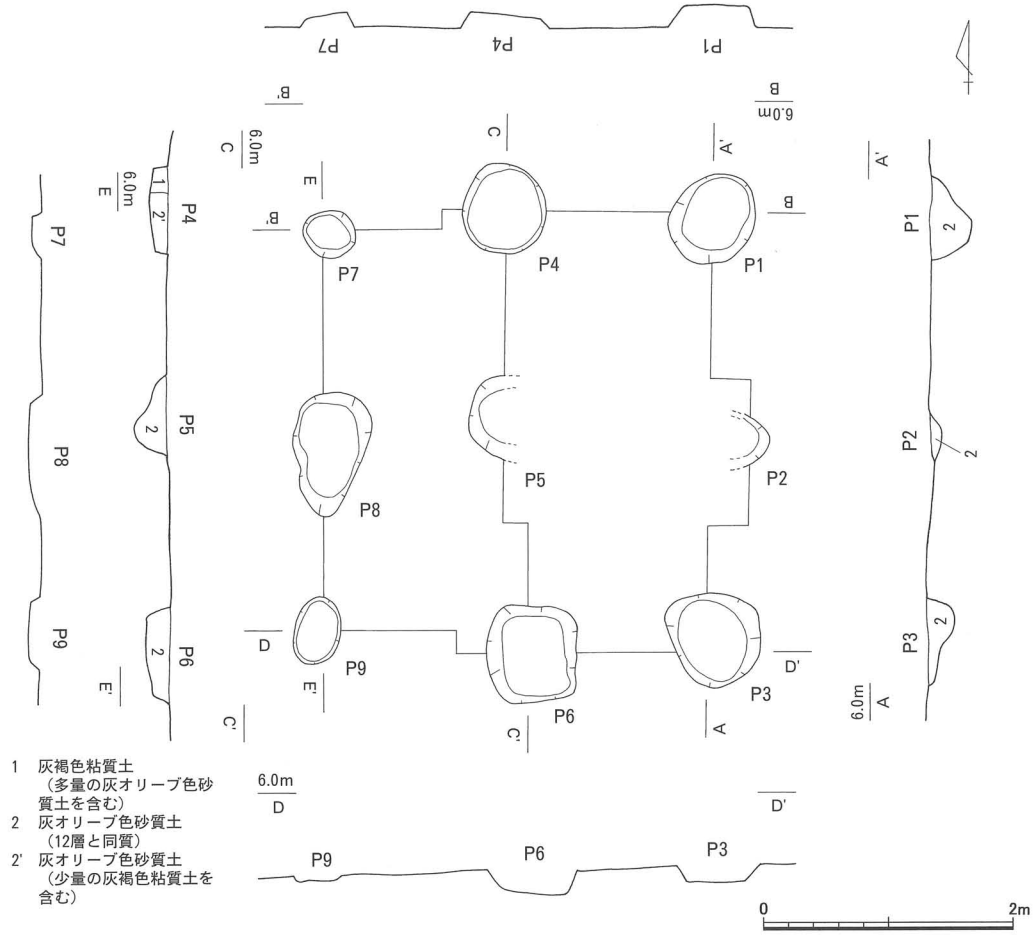
調査区南半には、2号建物から西の3号建物まで、奈良時代の掘立柱建物が建ち並ぶ。建物の建てられない空間には土器が廃棄され、6区12層1～3号土器群が形成された。これらの土器群は、本来は16号土坑のように極浅い土坑を掘って廃棄されたものであろう。しかし、土坑の埋土も周囲の土も同じ灰オリーブ色砂質土（12層）であるため、区別ができず、土器群として検出されたもの




第48図　6区12層の遺構（S＝1/300）

である。

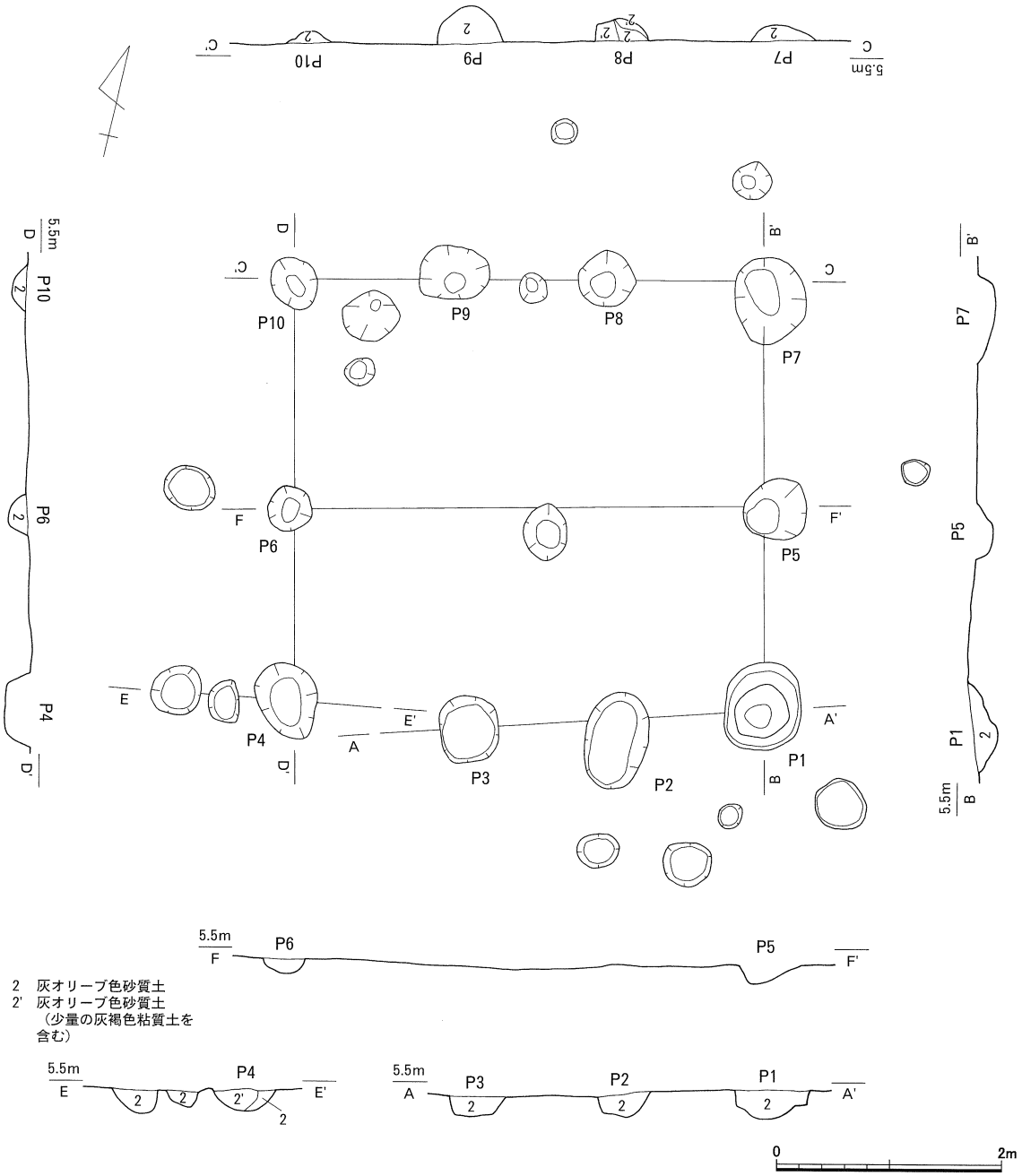
調査区北西部には３・２号柱列、１号土坑がある。10号溝状遺構や２号竪穴状遺構など、古墳中




第49図　６区12層　２号建物（S＝1/60）

## ６区12層　２号建物計測表

| 規模 | | 梁行き | | | 桁行き | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 2間（3.20m） | | | 2間（3.56m） | | |
| 検出面 | | 暗灰褐色粘質土（13層）上面 | | | | | |
| 柱穴の埋土 | | 灰オリーブ色砂質土（12層） | | | | | |
| 主軸 | | 真北 | | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 |
| 平面規模（cm） | | 78 | 40 | 82 | 74 | 66 | 88 |
| 標高（m） | 上面 | 5.50 | 5.52 | 5.54 | 5.40 | 5.40 | 5.40 |
| | 下面 | 5.18 | 5.42 | 5.27 | 5.25 | 5.12 | 5.18 |
| 番号 | | P7 | P8 | P9 | | | |
| 平面規模（cm） | | 44 | 102 | 56 | | | |
| 標高（m） | 上面 | 5.38 | 5.37 | 5.34 | | | |
| | 下面 | 5.30 | 5.27 | 5.26 | | | |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | P3－P6 | P6－P5 | P5－P4 | P4－P1 |
| | | 1.84 | 1.64 | 1.44 | 1.92 | 1.66 | 1.70 |
| | | P7－P8 | P8－P9 | P7－P4 | P8－P5 | P9－P6 | |
| | | 1.76 | 1.42 | 1.42 | 1.40 | 1.78 | |




**第50図　6区12層　3号建物**（S＝1/60）

期の13層の遺構・土器群の分布範囲に重なる位置であり、この部分が奈良時代にいたって再び利用されたといえる。

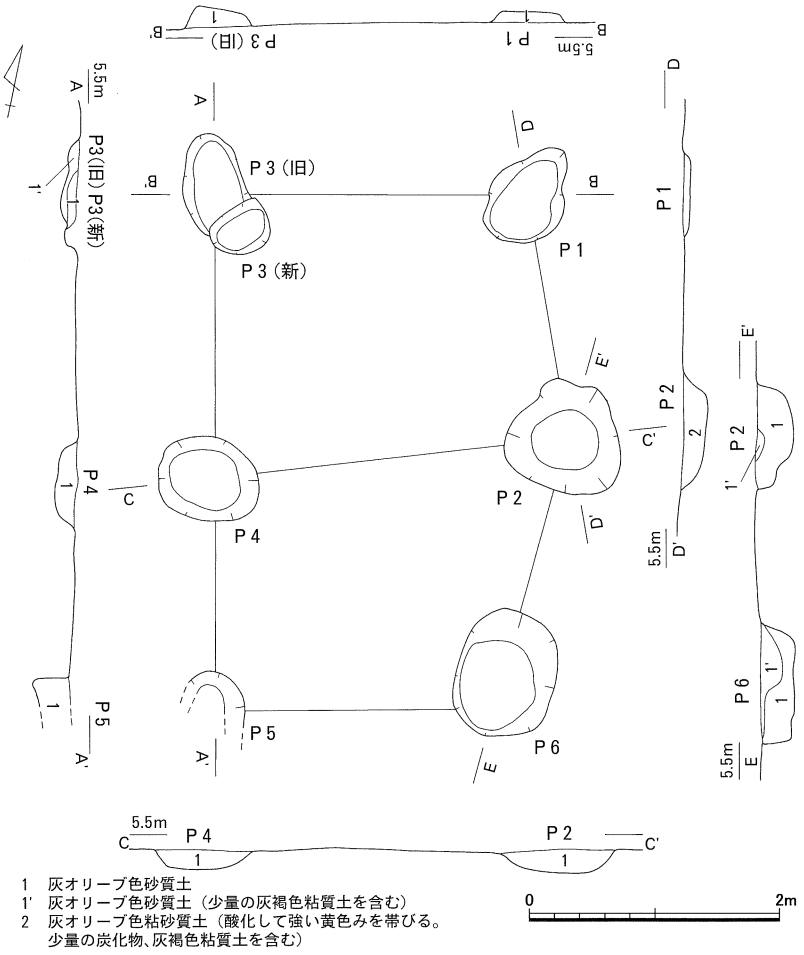
## 12層　2号建物跡（第49図）

調査区中央南寄りで検出された、2間×2間の掘立柱建物である。P2やP5は試掘坑にかかったため、ほとんど半裁状態で検出した。柱穴の埋土は12層と同質の灰オリーブ色砂質土であり、下位の粘土層である13層の上面で検出した。柱穴の平面形はP6のように方形になるものもあるが、他の柱穴は不整形であり、明らかでない。検出面は既に柱穴の底面に近い標高であり、残っている部分は浅かった。柱穴のうち、南西端のP9は9層の1号溝状遺構と重なる位置に当たる。1号溝状遺構掘り下げ時にはP9の存在は確認されておらず、1号溝状遺構の調査終了後さらに下層を掘

り下げる過程で検出された。これにより、２号建物が先、１号溝状遺構が後という前後関係が明らかになった。

## 12層　３号建物（第50図）

調査区西の張り出し部分で検出した、梁行き（南北）２間×桁行き（東西）３間の掘立柱建物である。粘質土である13層上面を精査する過程で、灰オリーブ色砂質土のピットが並んで検出され、並びから建物と判明した。埋土である灰オリーブ色砂質土は12層と同質であり、３号建物の柱穴は12層上面から掘り込まれた遺構である。柱穴の底面近くには、赤彩土師器の破片（図化できず）が入り込んでいた。赤彩土師器は、主として12層上面で検出される土器群や遺構（１～３号土器群や16号土坑など）で出土する遺物なので、これらの柱穴は12層から掘り込まれた遺構であることがわかる。柱穴が検出された13層上面から柱穴底面までの深さは、Ｐ９以外は20～30㎝を残すのみで残りが悪い。実際は12層上面から掘り込まれている柱穴を12層上面で検出できず、12層相当部分を掘りとばして13層上面で検出したためである。




第51図　６区12層　５号建物（Ｓ＝1/60）

周辺にもＰ６・Ｐ４の西側やＰ１・Ｐ２の南側に埋土が同質のピットが複数見られ、これらが建物と関係している可能性もあるが、庇部などの配列は確認できなかった。

## 12層　５号建物（第51図）

３号建物から１号土器群をはさんだ東側で検出された掘立柱建物である。東西方向の柱間距離が、Ｐ２－４間のみ他の２箇所よりも長いため、柱穴配置は不規則となる。このような不確定要素はあるが、建物の可能性が高いと考えた。建物の規模は現存部分で１間×２間であるが、Ｐ５が調査区南端の側溝に切られており、これより南側の規模は不明である。５号建物の東西には柱穴は確認されなかった。残存部分の深さは30㎝以下で残りが悪かった。12層上面から掘り込まれている柱穴を13層上面で検出したためである。

柱穴のうちＰ３については建て替えられており、新旧の埋土の差が土層断面から確かめられる（第51図Ａライン）。他に、平面形が不整形であるＰ２も建て替えられている可能性があるが、土層からこれを確かめることができなかった。

### 6区12層　3号建物計測表

| 規模 | | 梁行き | | | 桁行き | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 2間（3.72m） | | | 3間（4.22m） | |
| 検出面 | | 暗灰褐色粘質土（13層）上面 | | | | |
| 各柱穴の埋土 | | 灰オリーブ色砂質土（12層） | | | | |
| 主軸 | | N－13°－W | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 |
| 平面規模（cm） | | 84（24） | 88 | 62 | 72 | 60 |
| 標高（m） | 上面 | 5.43 | 5.40 | 5.35 | 5.40 | 5.35 |
| | 下面 | 5.15 | 5.22 | 5.10 | 5.21 | 5.20 |
| 番号 | | P6 | P7 | P8 | P9 | P10 |
| 平面規模（cm） | | 42［22］ | 78 | 52［24］ | 64［18］ | 50［22］ |
| 標高（m） | 上面 | 5.39 | 5.35 | 5.37 | 5.40 | 5.38 |
| | 下面 | 5.22 | 5.19 | 5.14 | 5.05 | 5.24 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | P3－P4 | P4－P6 | P6－P10 |
| | | 1.34 | 1.32 | 1.62 | 1.70 | 2.02 |
| | | P10－P9 | P9－P8 | P8－P7 | P7－P5 | P5－P1 |
| | | 1.42 | 1.36 | 1.46 | 1.86 | 1.80 |

［　］内は柱穴の下面径（cm）
（　）内は柱根径（cm）

### 6区12層　5号建物計測表

| 規模 | | 梁行き | | | | 桁行き | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1間（2.52m） | | | | 2間（4.12m） | | |
| 検出面 | | 暗灰褐色粘質土（13層）上面 | | | | | | |
| 柱穴の埋土 | | 灰オリーブ色砂質土（12層） | | | | | | |
| 主軸 | | N－18°－W | | | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | 新P3 | P4 | P5 | 旧P3 | P6 |
| 平面規模（cm） | | 86 | 98 | 82+α | 84 | 52+α | 50 | 102 |
| 標高（m） | 上面 | 5.38 | 5.38 | 5.43 | 5.40 | 5.33 | 5.41 | 5.34 |
| | 下面 | 5.24 | 5.15 | 5.22 | 5.24 | 5.03 | 5.30 | 5.06 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P4 | P4－新P3 | 新P3－P1 | P4－P5 | P1－旧P3 | P4－旧P3 |
| | | 198 | 288 | 240 | 252 | 174 | 232 | 204 |
| | | P2－P6 | P6－P5 | | | | | |
| | | 200 | 230 | | | | | |

［　］内は柱穴の下面径（cm）
（　）内は柱根径（cm）

**12層　1号～3号土器群と3号・5号建物の位置関係（第52図）**

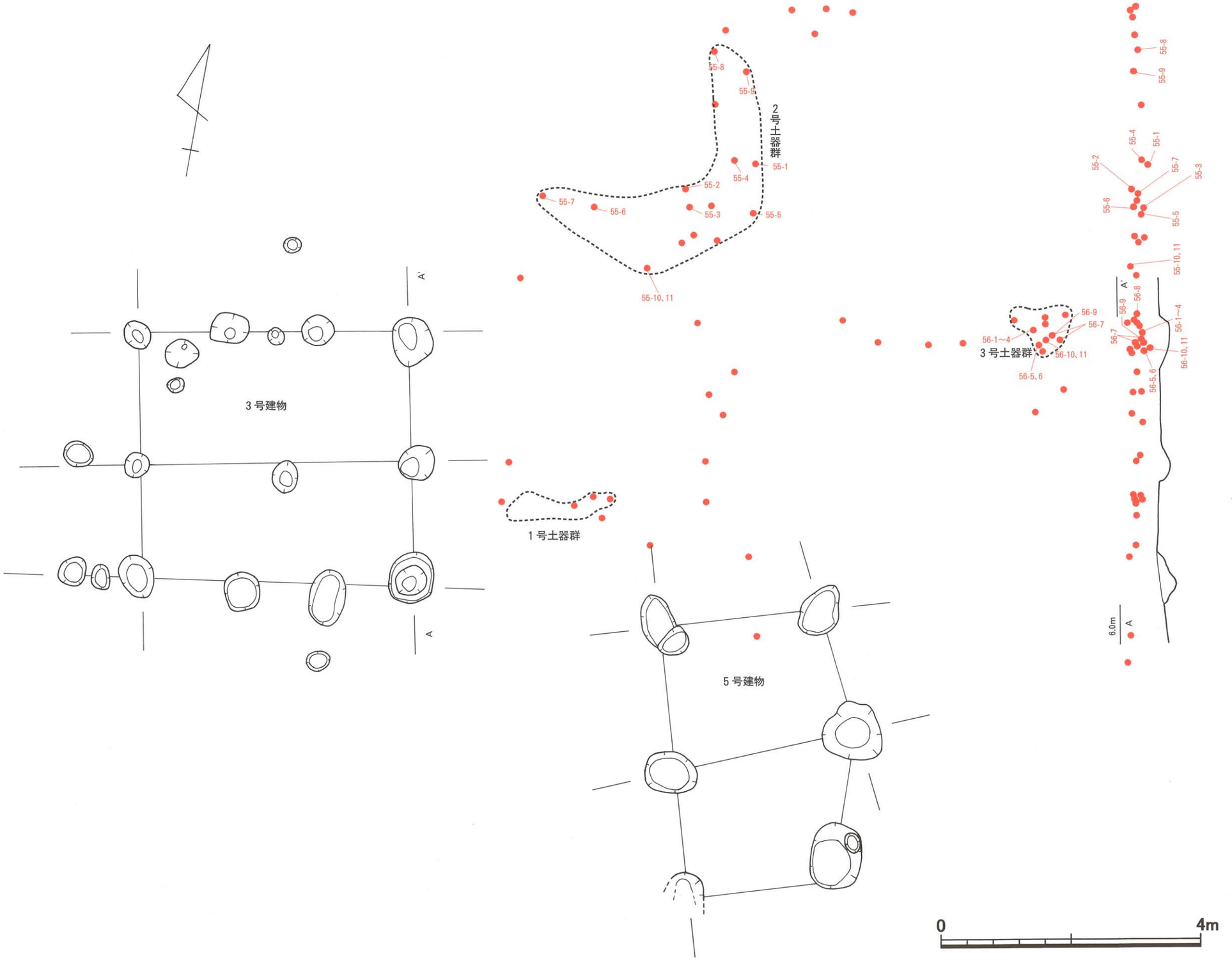
3号建物は13層上面で検出されたが、柱穴の埋土は12層（砂層）であり、12層の上面または途中から掘り込まれた遺構である。5号建物も同様で、12層が生活面である時期に12層から掘り込まれた遺構である。

1～3号土器群はいずれも12層から出土しており、また1・2号土器群は12層3・5号建物に近い位置にあるので、位置的にも層位的にもこれらの建物との関連性を推定し得る。

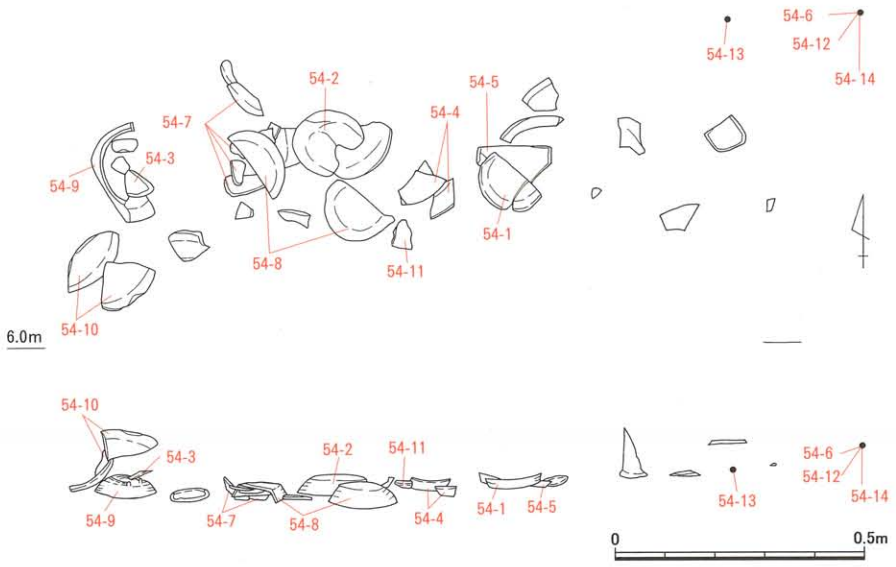
**12層　1号土器群（第53図）**

検出時、土器群付近の土は周囲よりわずかに黒いように見えたが、明確な遺構の輪郭を確認できなかった。この土器群のすぐ南は試掘坑にかかっていたが、その壁面にも遺構の掘方は現れなかったため、土器群とした。

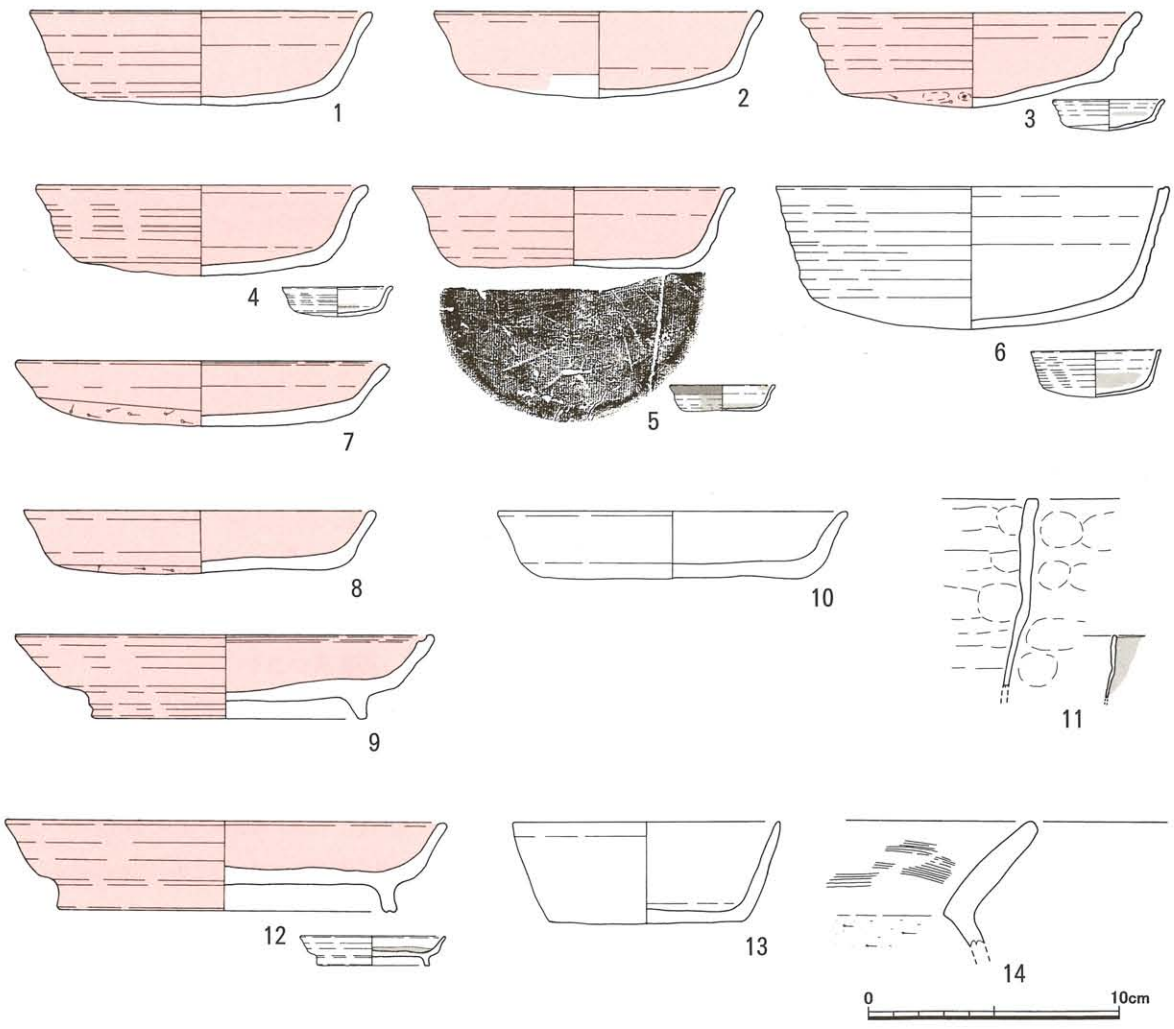
しかし、この土器群とよく似た状況で、辛うじて浅い掘方を検出できた例もある（6区12層1・




第52図　6区12層　3号・5号建物及び周辺遺物（1～3号土器群を含む）出土位置

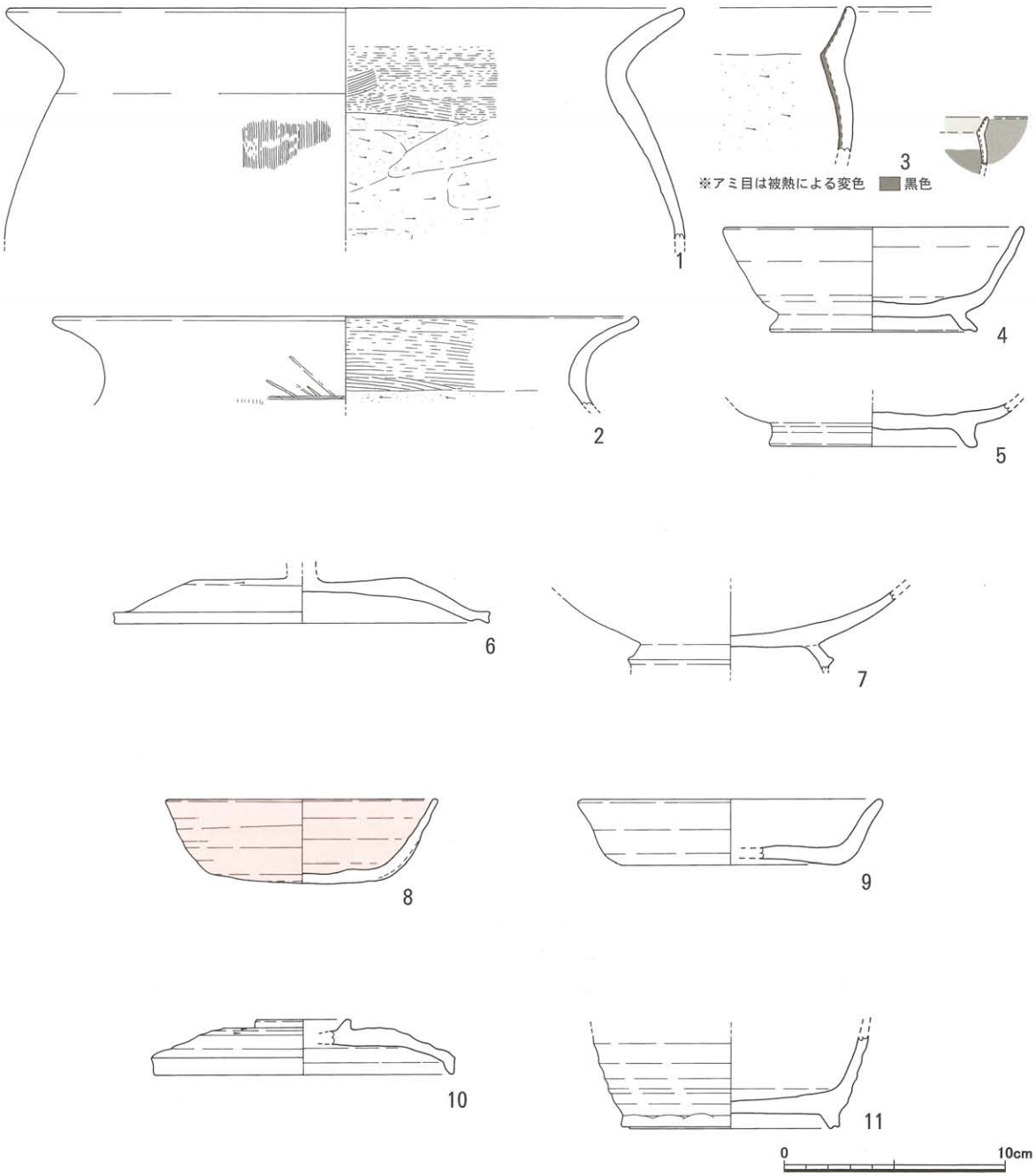



第53図　6区12層　1号土器群出土状況（S＝1/15）




第54図　6区12層　1号土器群出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

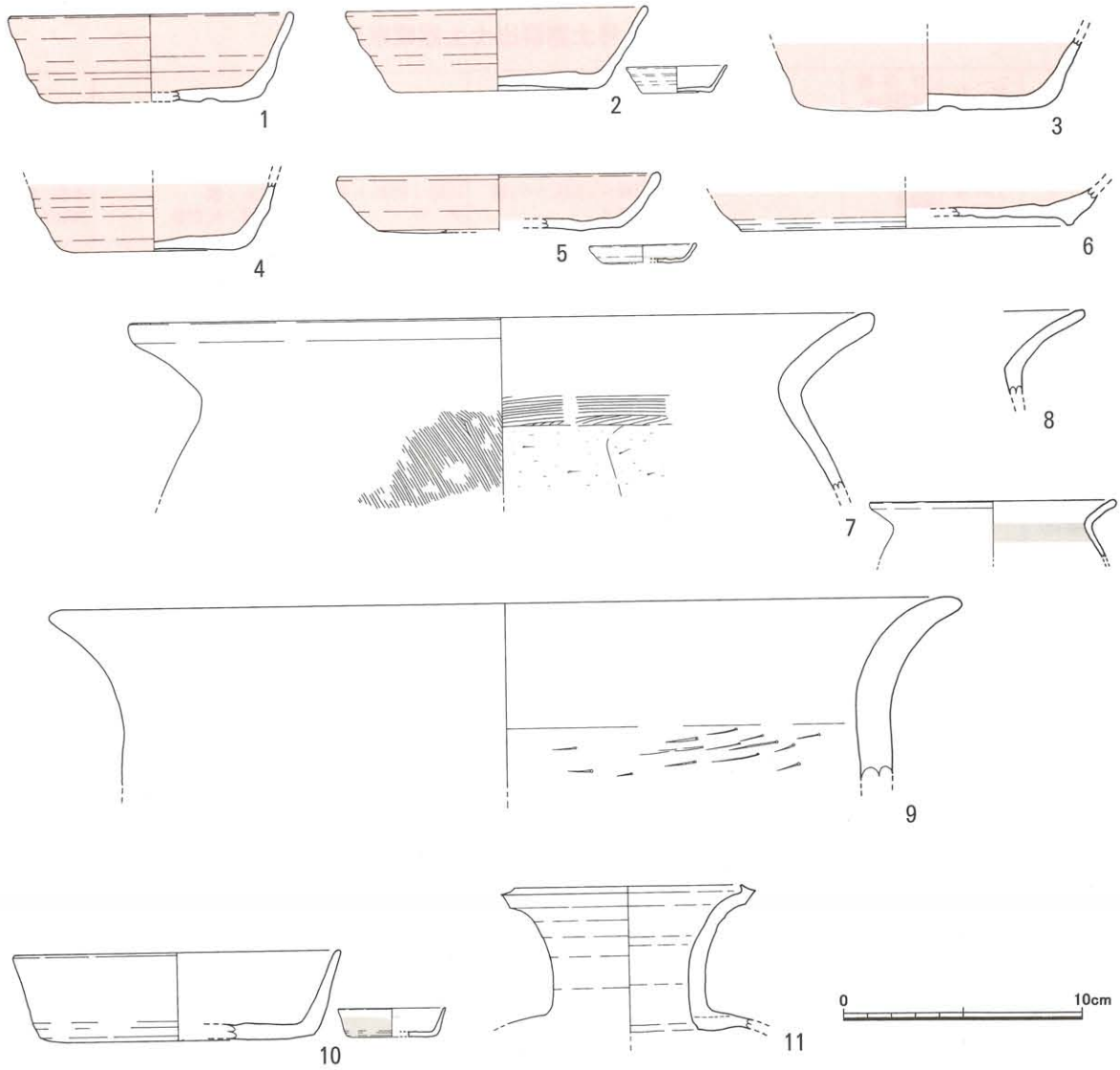
遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス




**第55図　6区12層　2号土器群出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　濃いコゲ**

16号土坑、9区12層1号土坑)。これらの遺構の埋土は周囲の土と同質の灰オリーブ色砂質土で、わずかに炭化物の含有量が違うという程度の微妙な差異である。砂質土の遺構面の上で砂質土の遺構を探すことになるため、遺構の検出は困難であり、なかなか輪郭線を確定できないケースが多かった。掘方は非常に浅く、出土した土器の下端が土坑底面の標高とほぼ同じである。平面的にも、土器の出土範囲と土坑の輪郭がほぼ同じであり、余分なスペースがない。これらの土坑は土器を埋めるためにだけ掘られた、廃棄土坑と考えられる。

1号土器群は、元々これらの土坑と同様12層上面から掘り込まれた浅い土坑であった可能性が高い。3号建物の東辺から2m東、5号建物の北西2mの位置で出土した。




**第56図　6区12層　3号土器群出土遺物**（S＝1/3）　**※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：▭薄いスス**

3・5号建物の検出された標高は5.3～5.4mであるのに対し、土器群の出土した標高は5.7mで、建物の検出面より高い。上述のように、遺構を検出したのは本来の建物の掘り込み面を掘りとばした後であったから、当時の生活面の高さは後者に近く5.7m付近と推定される。

3号建物と重なる位置の上層には、9層から掘り込まれて12層上面で検出された9層5号溝状遺構がある。その検出された標高は5.6～5.7mで、1～3号土器群の標高と近く、これが奈良時代の生活面の標高であったと考えられる。

**遺物（第54図）**

赤彩土師器の坏・皿が主体の土器群である。土器群の中心で54－1～5・7～11が、やや東へ離れた位置で6・12～14が出土した（第53図）。坏底部外面は、ロクロから切り離された後ヘラケズリされるものが多い（1・2・3・7・8）。あるいは底部外面が調整されないままで（4・5・6）、ヘラ状工具による切り離しの痕跡が残るものもある（5）。高台付きの皿の高台は、体部の立ち上がりから8～12㎜内側に取り付けられる。土師器の坏は底部外面を赤彩しないもの（1・2）と赤彩するもの（54－3・4・5・6）に分かれるが、皿は2点とも底部外面まで赤彩される（7・

## 6区12層　1号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 54－1<br>(図版78) | 土師器<br>坏 | ①(13.8)<br>②3.8<br>③10.1 | | 口縁～：回転ナデ/底：ケズリ | 口縁：回転ナデ/底ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面は不明) |
| 54－2<br>(図版78) | 土師器<br>坏 | ①13.0<br>②3.5<br>③11.0 | | 口縁～体：回転ナデ/底：ケズリ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面は不明。黒斑あり。 |
| 54－3<br>(図版79) | 土師器<br>坏 | ①13.3<br>②3.8<br>③10.6 | | 口縁～：回転ナデ/底：ケズリ一部に圧痕 | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(2㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 54－4<br>(図版79) | 土師器<br>坏 | ①13.1<br>②3.6<br>③10.0 | 口縁端部が少し外反 | 口縁～体：回転ナデ/底：切り離し後無調整 | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：やや密<br>色調：灰白色 | 赤彩(全面) |
| 54－5<br>(図版79) | 土師器<br>坏 | ①(12.7)<br>②3.2<br>③(9.5) | | 口縁～体：回転ナデ/底外周：ケズリによる面取り痕/底：切り離し後無調整、ヘラ痕が多く残る | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩(全面) |
| 54－6<br>(図版79) | 土師器<br>坏 | ①(15.5)<br>②5.7<br>③13.2 | | 口縁～体：回転ナデ/底外周：切り離し時、土器をヘラで起こしたヘラ痕あり/底中央：ケズリ後ナデ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 54－7<br>(図版79) | 土師器<br>皿 | ①14.8<br>②2.7<br>③12.7 | | 口縁～：回転ナデ/底：ケズリ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩(全面) |
| 54－8<br>(図版79) | 土師器<br>皿 | ①14.2<br>②2.7<br>③11.5 | | 口縁～：回転ナデ/底：ケズリ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩(全面) |
| 54－9<br>(図版79) | 土師器<br>皿 | ①(16.7)<br>②3.4<br>③11.0 | 高台あり。口縁端部は溝又は凹線状にへこむ | 口縁～：回転ナデ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ/台：ヨコナデ | 胎土：密<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 54－10<br>(図版79) | 須恵器<br>皿 | ①14.0<br>②2.7<br>③10.2 | 土師器の皿に酷似 | 口縁～体：回転ナデ/底：回転糸切り後調整せず | 口縁～：回転ナデ | 胎土：0.5㎜程度の微砂粒を多く含む<br>色調：灰黄色 | |
| 54－11<br>(図版78) | 土師器<br>焼塩壷 | ②7.6 | | 粗いナデ | 粗いナデ | 胎土：1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：外面灰白色/内面橙色 | |
| 54－12<br>(図版79) | 土師器<br>坏 | ①17.7<br>②3.6<br>③(13.6) | 高台あり。口縁端部はわずかに外反 | 口縁～高台：回転ナデ/底：切り離し後ナデか | 口縁～体：回転ナデ/底：無調整/台：ヨコナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 54－13<br>(図版79) | 須恵器<br>坏 | ①10.7<br>②4.1<br>③8.0 | | 口縁～体：回転ナデ/底：回転糸切り後痕をナデ消す | 口縁～：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：やや密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 54－14<br>(図版78) | 土師器<br>甕 | ②5.1 | | ヨコナデ | 口縁：ヨコハケメ/胴～：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒を含む)<br>色調：外面灰黄色/断面灰白色 | |

8)。高台付きの皿（9・12）の底部外面も部分的に赤彩される。赤彩される土師器の切り離しには糸切りは使われず、ヘラ状工具を使用していたようである。

坏・皿以外では焼塩壷（11）と単純口縁の甕（14）が各1点含まれる。

### 12層　2号土器群（第55図）

3号建物の北東2.4～5.6mの範囲から、比較的まとまって出土した土器群である。出土位置が接近している55－6・7・10・11は、それぞれ同じ位置から出土しており、坏蓋・坏身のセットであろう。8・9は出土位置が近いが、片方が土師器、片方が須恵器という違いがある。1～5もまとまって出土しており、一つのグループと見られる。

## 6区12層　2号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 55－1<br>(図版80) | 土師器<br>甕 | ①(30.5)<br>②(10.5) | | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：粗いハケメ/肩：ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：外面橙色/内面断面淡橙色 | |
| 55－2<br>(図版80) | 土師器<br>甕 | ①(26.2)<br>②(4.0) | | 口縁：ヨコナデ/頸：横・斜め方向のヘラ痕か/肩：縦方向の粗いハケメ | 口縁：横方向の粗いハケメ後ヨコナデ/頸付近：ハケメ残る/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜大の砂粒を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色/内面淡橙色 | |
| 55－3<br>(図版80) | 土師器<br>甕 | ②(6.6) | | 口縁：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸～：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、雲母片、白色粒を含む)<br>色調：外面にぶい橙色/内面灰黄褐色/断面灰黄色 | 使い込まれスス・コゲの付着が著しい |
| 55－4<br>(図版80) | 須恵器<br>坏 | ①13.4<br>②4.8<br>③9.3 | 高台あり | 体～高台：回転ナデ/底：回転ケズリ | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：外面灰白色/内面灰色 | |
| 55－5<br>(図版80) | 須恵器<br>坏 | ②(2.0)<br>③9.3 | 高台あり | 体～高台：回転ナデ/底：回転糸切り痕 | 底外周：回転ナデ/底中央：ナデ | 胎土：密(1～2㎜程度の砂粒を少し含む)<br>色調：黄灰色 | |
| 55－6<br>(図版80) | 須恵器<br>蓋 | ①17.1<br>②(2.1) | ツマミ欠落(宝珠形？) | 天井：回転ナデ/肩：回転ケズリ/口縁：回転ナデ | 天井：ナデ/口縁：回転ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：黄灰色 | |
| 55－7<br>(図版80) | 須恵器<br>坏か | ②(3.6)<br>③(高台)<br>9.0 | 高台あり。底面を静止糸切り後高台を貼り付け | 体～高台：ヨコナデ/底：静止糸切り | ヨコナデ後不定方向のナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：浅黄色～灰色 | |
| 55－8<br>(図版80) | 土師器<br>坏 | ①12.4<br>②3.8<br>③8.3 | 体～底部の境の一部に粘土を貼り直した痕跡 | 体：ヨコナデ/底外周：ケズリ/底中央：ナデか | 口縁～体：ヨコナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩 |
| 55－9<br>(図版80) | 須恵器<br>皿 | ①7.0<br>②3.0<br>③(10.0) | | 体：回転ナデ/底外周：回転糸切り後中から外に削って底を平らにしている/底中央：回転糸切り | 回転ナデ | 胎土：密(0.5㎜程度の微砂粒を含む)<br>色調：明赤褐色 | |
| 55－10<br>(図版80) | 須恵器<br>蓋 | ①13.7<br>②2.5 | 輪状ツマミ | ツマミ：回転ナデ/天井：回転ナデ/肩：回転ケズリ/～口縁：回転ナデ | 天井：ナデ/～口縁：回転ナデ | 胎土：密<br>色調：外面暗灰色/内面断面灰色 | |
| 55－11<br>(図版80) | 須恵器<br>坏 | ②(4.2)<br>③10.0 | 高台あり | 体～高台：回転ナデ/底：回転糸切り後外周を回転ケズリ | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(0.5㎜程度の微砂粒を含む)<br>色調：灰色 | |

2号土器群の器種構成は、須恵器の坏・皿を基本とし、3点の土師器甕、1点の土師器の坏を含む。55－1・2は口縁部が大きく開く単純口縁の甕で、ともに大形である。小形の3は口縁部の角度が直立に近く、胴部径も小さいので、断面が直線的で頸部が目立たない。赤彩の坏は1点のみ(8)見られる。器壁は厚く頑丈で、体部下半はとくに粘土を貼り足して強化されている。出土時はその一部が剥落していた。高台の付く坏のうち、4・5・7の高台は底部と体部の境界よりもやや内側に取り付けられ、体部は内彎して立ち上がる。11の高台は底部の最も縁辺に取り付けられ、体部は直線的に立ち上がる。高台貼付後接続部分を十分にヨコナデしないため、内外面とも貼り継ぎ跡が明瞭に残る。7は蓋(6)とセットになり、6には宝珠形つまみが付いていたと思われる。須恵器の皿(9)は体部下半から底部にかけて酸化気味に焼成され、赤褐色を帯びる。11は輪状つまみを持つ蓋(10)と同一位置から出土している。底部外面に回転糸切り痕が明瞭なのは5・7・9のみで、他はヘラケズリや回転ナデで見えなくなっている。

## 6区12層　3号土器群出土土器観察表

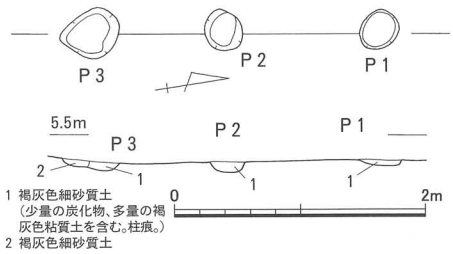
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 56－1<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ①11.7<br>②(3.7)<br>③ | 底面は水平 | 体：回転ナデ/底：圧痕あり | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：黄橙色 | 赤彩(底部外面は不明) |
| 56－2<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ①12.5<br>②3.4<br>③8.4 | 底面は水平 | 体：回転ナデ/底：圧痕あり | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(底部外面は除く) |
| 56－3<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ②(2.9)<br>③10.6 | 底面は水平 | 体：回転ナデ/底：布目圧痕あり | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(底部外面は部分的) |
| 56－4<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ②(2.8)<br>③6.6 | 底面は水平 | 体：ヨコナデ/底：指頭圧痕あり | 体～底外周：回転ナデ/底中央：ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：淡黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 56－5<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ①(13.4)<br>②(2.4)<br>③(10.2) | | 体：回転ナデ/底：ケズリ | 回転ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 56－6<br>(図版81) | 土師器<br>坏 | ②(1.6)<br>③13.7 | 底面は高台あり | 体：回転ナデ/底：圧痕あり | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面は除く) |
| 56－7<br>(図版81) | 土師器<br>甕 | ①30.8<br>②(7.4) | | 口縁～：ヨコナデ/頸～：斜行ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：目の粗いヨコハケメ/肩～：ケズリ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：外面灰白色/内面灰黄色 | |
| 56－8<br>(図版81) | 土師器<br>甕 | ②(3.5) | | 不明 | 不明 | 胎土：粗(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：黒・にぶい黄橙色 | |
| 56－9<br>(図版81) | 土師器<br>甑 | ①(38.4)<br>②(7.6) | | ヨコナデか | 肩～：ケズリか | 胎土：粗(1～2㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：内外面褐灰色/断面外半浅黄橙色/断面内半橙色 | |
| 56－10<br>(図版81) | 須恵器<br>坏 | ①13.8<br>②3.7<br>③ | 切り離し痕は全く不明。ヘラケズリによって消されている | 口縁：回転ナデ/底：一方向のケズリ | 口縁～底外周：回転ナデ/底中央：ナデ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 56－11<br>(図版81) | 須恵器<br>壺 | ①(9.5)<br>②(6.1) | | 回転ナデ | 口縁：回転ナデ/頸部つけ根痕：ケズリ後ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：灰色 | 内外面の一部に多量の自然釉が付着 |

### 12層　3号土器群（第56図）

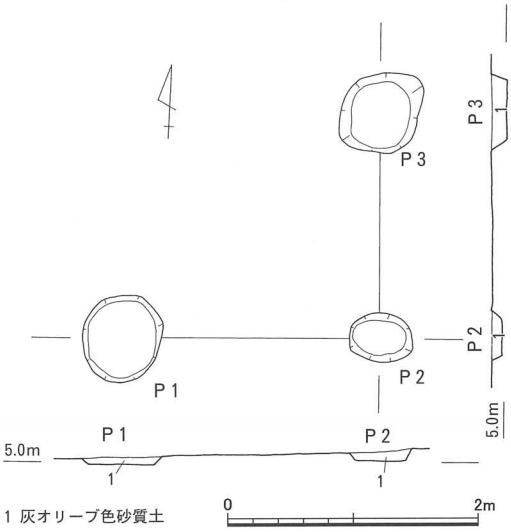
5号建物の北東4.2mでまとまって出土した土器群である。3・5号建物、東の2号建物のいずれからも離れている。これらの建物と層位は同じであり、時期的にも一致する可能性はあるが、建物から廃棄された土器であるという確証はない。出土位置の範囲は直径1mの円内におさまり、集中的に出土している。赤彩土師器の坏・皿が6点と多く、他に土師器甕2点、甑1点、須恵器の坏・小形壺各1点を含む。

坏の体部は外反することなく直線的に立ち上がる。1号土器群では高台の付く皿でのみ確認された底部外面の指頭圧痕は、この土器群では高台の付かない坏でも確認され（56－1・2・3・4）、底部外面の赤彩は部分的か、省略されるようになる。同種の圧痕は高台の付く坏でも確認されるが、底面の厚さは1号土器群の遺物（54－9で4～7㎜、54－12で5～7㎜）よりも薄く均一になる(4.5～3㎜)。須恵器の坏（10）底部には回転糸切りが認められない。

ススやコゲは甕（7）以外に坏（2・5・10）にも認められる。外面よりも内面に明瞭に残っている。




第57図　6区12層　2号柱列（S＝1/60）




第58図　6区12層　3号柱列（S＝1/60）

6区12層　2号柱列計測表

| 規模 | | 2間（2.30m） | | |
|---|---|---|---|---|
| 検出面 | | 暗灰褐色粘質土（13層）中位 | | |
| 各柱穴の埋土 | | 褐灰色細砂質土（12層か） | | |
| 主軸 | | N－81°－W | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 |
| 平面規模（cm） | | 34 | 34 | 50 |
| 標高（m） | 上面 | 5.30 | 5.28 | 5.31 |
| | 下面 | 5.26 | 5.20 | 5.20 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | |
| | | 1.24 | 1.06 | |

6区12層　3号柱列計測表

| 規模 | | 2間（2.36m） | | |
|---|---|---|---|---|
| 検出面 | | 暗灰褐色粘質土（13層）上面 | | |
| 各柱穴の埋土 | | 灰オリーブ色砂質土（12層） | | |
| 主軸 | | 真北 | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 |
| 平面規模（cm） | | 53 | 72 | 78 |
| 標高（m） | 上面 | 5.12 | 5.05 | 5.12 |
| | 下面 | 5.02 | 4.98 | 4.98 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | |
| | | 2.06 | 1.82 | |

## 12層　2号・3号柱列・1号土坑の位置関係（第48・57～59図）

2・3号柱列・1号土坑が、調査区の北東部で検出されている。調査区南半分で確認された2・3・5号建物、1～3号土器群ほど高い遺構密度ではなく、位置的にもこれらの遺構から遠く離れている。13層で古墳中期の遺構・土器群が集中していた場所でもあり、古墳中期の集落があった場所が奈良時代になって再び利用されていると推定される。

## 12層　2号・3号柱列（第57・58図）

### 2号柱列（第57図）

調査区の東端で検出した南北方向の柱列である。1号土坑のすぐ南に当たっており、何らかの関係があったと考えられる。13層（粘土層）を精査する過程で、砂質土が埋土であるピットが確認され、その配置から柱列と判断した。柱列の西側には対になるピットは検出されていない。一方、柱列の東側は調査区東端にかかっており、これ以東の状況は不明である。

### 3号柱列（第58図）

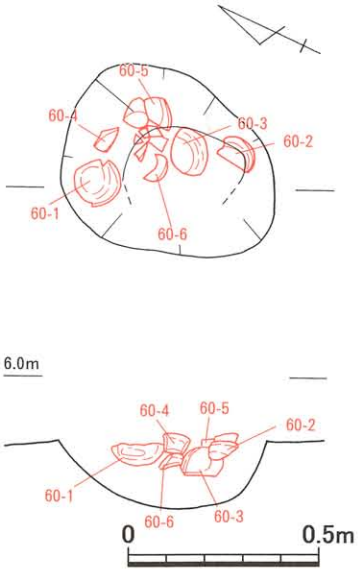
調査区中央北寄りで検出された、3穴のピットが直角に並ぶ柱列である。位置的には13層の10号溝状遺構の西端に重なり、P1とP2が同遺構西部の輪郭を切っている。柱穴の並びは北や西へのびていた可能性が高い。

## 12層　1号土坑（第59図）

調査区北東端で検出した、赤彩土師器が廃棄された浅い土坑である。2号柱列のすぐ北に位置する。

1号土坑は12層上面で検出したが、埋土は周囲の砂質土＝12層とほとんど同質で、わずかに炭化物を周囲よりも多く含む程度の違いであったから、遺構の輪郭の確定は困難であった。このような検出時の状況は、1号土器群や16号土坑と類似する。炭化物の混入する量など、わずかの差で検出できる遺構・検出できない遺構の差が生じていると思われる。

遺構検出面も、遺物が出土した位置もともに標高が5.8mである。南の1号土器群の標高（5.7m）に比べてわずかに高く、9区1号土坑の標高（5.8～6.0m）に近い。これによれば、12層の生活面での地形は調査区北側が南に比べてわずかに高かった。




第59図　6区12層　1号土坑及び遺物出土状況（S＝1/20）

### 遺物（第60図）

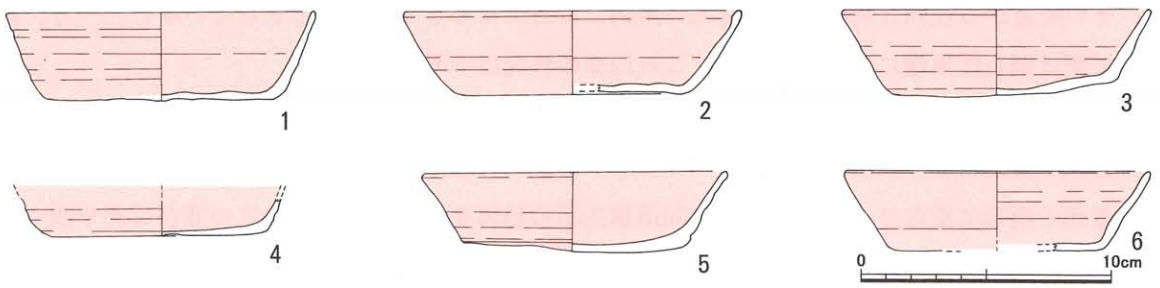
すべて赤彩された土師器の坏である。底部外面はヘラケズリされたものが1点見られ、器壁が3～7㎜と厚めで、外周よりも中央がわずかに下がる（60－5）。1～4の底部外面には圧痕があり、水平で、厚さはいずれも3.5㎜以下と薄い。6以外は体部が直線的にのびる。

### 1号・3号土器群・1号土坑の赤彩土師器の押圧痕

上記の土器群は、いずれも赤彩土師器の坏・皿を主体とする。

1号土器群出土土器のうち、高台が付く皿（54－9・12）の底部外面には、押圧痕跡が数箇所残る。この種の押圧痕は成形法と関わっている。ロクロから切り離した坏または皿を、底部内面が下になる状態で型の上面（坏の底径と同じであれば望ましい）に置き、底部外面側から押しつけて水平に整えたと推測される(3)。この方法で調整された坏や皿は、底面が水平に整えられる反面、外面に多数の押圧痕がつくことになる。一方、この成形法を採らなかった土器では、底部が水平に修正されず、中心へ向かって下がる傾向がある。1号土器群では、高台の付く皿にのみこの技法が採用されている。高台のつかない坏・皿の底面はヘラケズリまたは無調整である。押圧痕があるタイプの坏皿の底部外面には赤彩が施されない場合が多い。

3号土器群では、型に押しつける成形法が高台の付かない坏にも採用され、圧痕がつくようにな




第60図　6区12層　1号土坑出土遺物（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

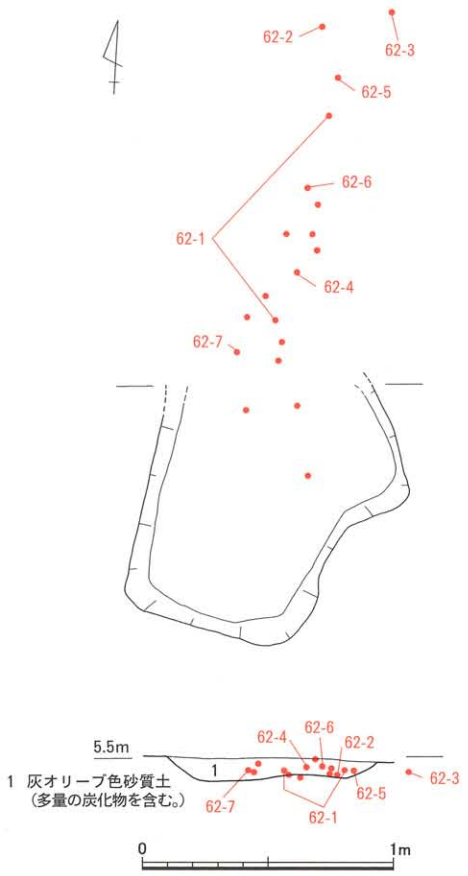
る。高台の付く坏・皿にも引き続き採用されるが、1号土器群に比べて底面の厚さが薄くなるという変化がある。底部外面の赤彩はいずれも省略されている。

1号土坑の坏・皿は、底部に圧痕のつくものが多数を占めると同時に、底部の厚さが薄くなる変化も起こっている。

## 12層　16号土坑（第61図）

3号建物の3.75m北西で検出された土坑である。12層上面で検出したが、埋土も同じ土質であるため、輪郭を確定するのは困難であった。周囲の砂地に比べてわずかに炭化物を多く含んでいる部分が遺構の南半分の範囲と判断した。遺構の北半分については輪郭が確定できなかったが、本来は土坑の続きがあったものと考えられる。

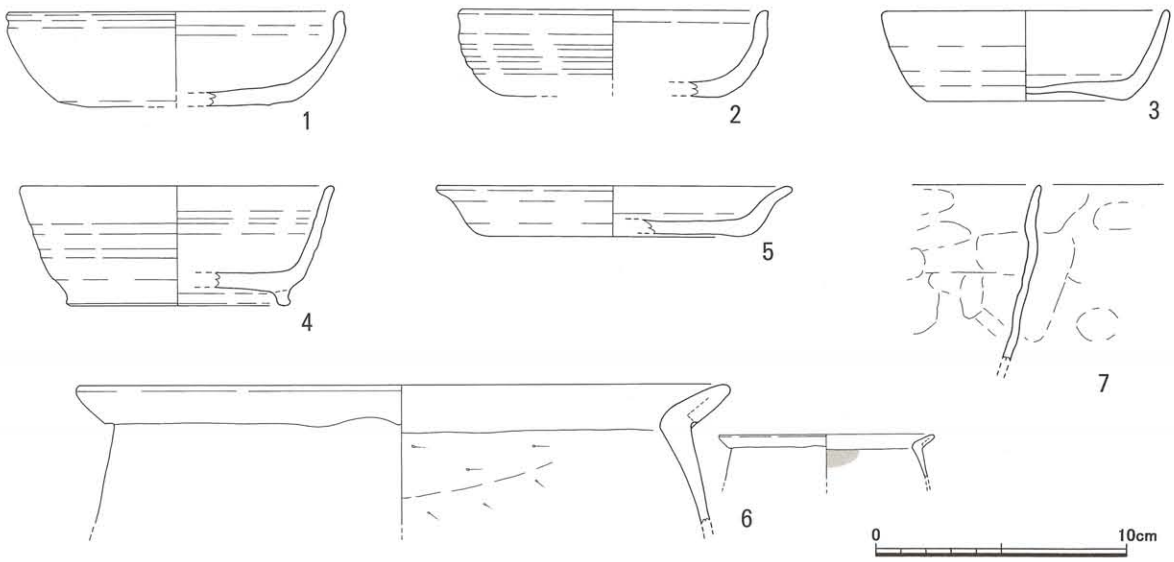
検出された標高は5.5mで、3号建物よりわずかに高い程度である。同じ12層の他の遺構との関係では、位置的に見て、最寄りの遺構である3号建物との関係が第一に考えられる。ただ、16号土坑は調査区西端に位置するため、調査区外に遺構があってそれと関係している可能性も考えられよう。




第61図　6区12層 16号土坑及び遺物出土位置（S＝1/30）

### 遺物（第62図）

須恵器の坏・皿が中心で、赤彩された土師器は1点も無い。すべての須恵器の坏・皿の底面には回転糸切り痕が残る。2の口縁端部内面は面取りされる。皿（5）は口縁端部が外反する。甕の口




第62図　6区12層 16号土坑出土遺物（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いコゲ

## 6区12層　1号土坑出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60－1<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ①12.4<br>②3.5<br>③9.2 | 切り離し痕が残る。底面は薄く水平 | 体：回転ナデ/底：押圧痕多数 | 体：回転ナデ/底：オサエ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面を除く) |
| 60－2<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ①13.4<br>②3.4<br>③9.4 | 底面は薄く水平 | 体：回転ナデ/底：押圧痕多数 | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面は不明) |
| 60－3<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ①12.2<br>②3.5<br>③9.3 | 体部は開いていて直線的にのびる | 体：回転ナデ/底：押圧痕 | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密（2㎜の砂粒、1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(底部外面を除く) |
| 60－4<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ②(1.5)<br>③(9.6) | 底部から体部の変わり目が、一部では湾曲、一部では直線的 | 体：回転ナデ/底：押圧痕 | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面を除く) |
| 60－5<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ①12.2<br>②3.3<br>③9.0 | 底面厚い。体部は外反気味に立ち上がる | 体：回転ナデ/底：ケズリ | 回転ナデ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：浅黄橙色 | 赤彩(全面) |
| 60－6<br>(図版82) | 土師器<br>坏 | ①12.1<br>②3.2<br>③8.6 | 体部中程にくびれあり | 回転ナデ | 回転ナデ | 胎土：密（1㎜以下の砂粒を含む）<br>色調：灰白色 | 赤彩(底部外面を除く) |

## 6区12層　16号土坑出土土器観察表

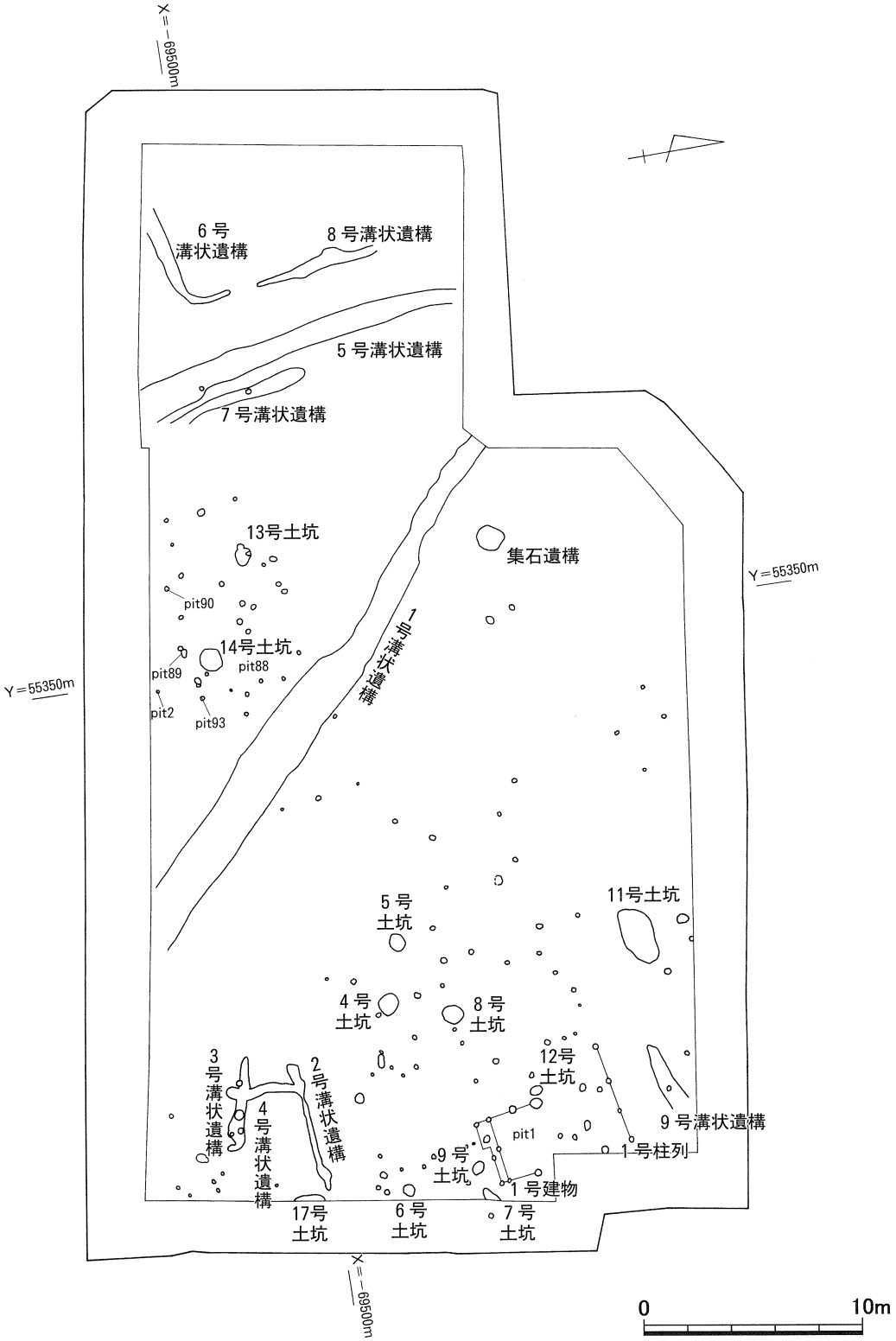
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 62－1<br>(図版82) | 須恵器<br>坏 | ①13.2<br>②3.8<br>③9.4 | 体部は内弯し、口縁端部がくびれる | 体：回転ナデ/底：回転糸切り、一部面取り | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：青灰色 | |
| 62－2<br>(図版82) | 須恵器<br>坏 | ①12.2<br>②3.5<br>③8.6 | 体部は内弯し、口縁端部がくびれる | 体：回転ナデ/底：回転糸切り | 回転ナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色粒・黒雲母細片をわずかに含む)<br>色調：灰色 | |
| 62－3<br>(図版82) | 須恵器<br>坏 | ①11.2<br>②3.6<br>③8.0 | 体部が直線的に立ち上がる | 体：回転ナデ/底：回転糸切り | 体：回転ナデ/底中央：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：暗灰色 | |
| 62－4<br>(図版82) | 須恵器<br>坏 | ①12.2<br>②4.8<br>③8.8 | 体部が直線的に立ち上がる。高台が低い。底部～体部境のやや内側につく | 体：回転ナデ/底：回転糸切り | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：やや密(3㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰色 | |
| 62－5<br>(図版82) | 須恵器<br>皿 | ①(13.9)<br>②(2.0)<br>③ | 口縁端部が外反 | 体：回転ナデ/底：回転糸切り | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：やや密(5㎜大の木炭をかみこむ)<br>色調：暗灰色 | |
| 62－6<br>(図版82) | 土師器<br>甕 | ①(25.7)<br>②(5.5) | 口縁端部は粘土を折り返して成形 | 口縁：ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：外面橙色/内面灰白色 | |
| 62－7<br>(図版82) | 土師器<br>焼塩壷 | ②(7.1) | | ナデ | 横方向のナデ | 胎土：やや粗(2㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい橙色 | |

縁部・焼塩壺が各1点含まれ、甕（6）は口縁部を折り曲げたようであり、粘土の折り目が明瞭である。

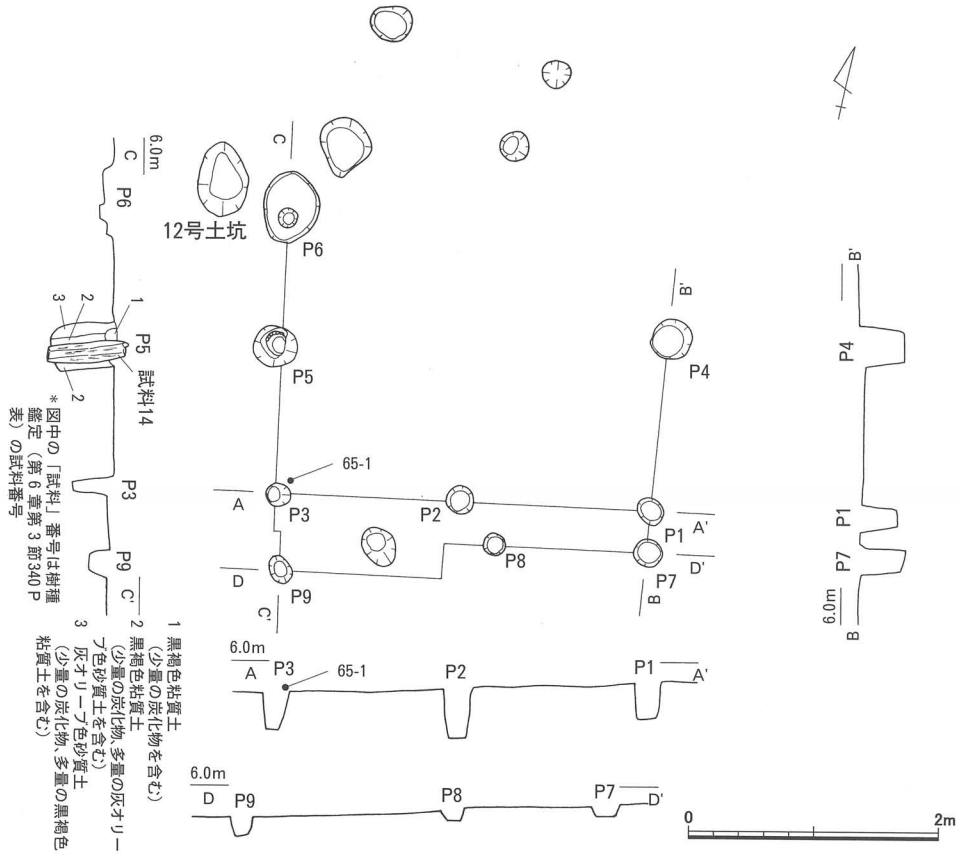
コゲは甕（6）の内面にのみ認められる。

## 6区9層の遺構の位置関係（第63図）

調査区を分断するように、北西から南東へ長大な1号溝状遺構がある。調査区東半分では径の小さなピットを多数検出しており、部分的だが建物、柱列を復元できた。一方、調査区西端では南北に走る溝が多く見られる反面、ピットは見られない。場所によって土地利用のされ方が全く違っていたことが窺われる。ピットの間には大きめの土坑も検出された。




第63図　6区9層の遺構（S＝1/300）




第64図　6区9層　1号建物（S＝1/60）

## 6区9層　1号建物計測表

| 規模 | | 梁行き | | | 桁行き | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 2間以上（2.98m＋α） | | | 2間以上（2.38m＋α） | |
| 検出面 | | 灰オリーブ色砂質土（12層）上面 | | | | |
| 各柱穴の埋土 | | 黒褐色粘質土（9層） | | | | |
| 主軸 | | N－10°－W | | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 |
| 平面規模（cm） | | 24 | 23 | 21［12］ | 34 | 36［18］ |
| 標高（m） | 上面 | 5.83 | 5.78 | 5.75 | 5.86 | 5.79 |
| | 下面 | 5.54 | 5.38 | 5.42 | 5.48 | 5.26 |
| 番号 | | P6 | P7 | P8 | P9 | |
| 平面規模（cm） | | 58（16） | 23 | 18 | 24 | |
| 標高（m） | 上面 | 5.77 | 5.85 | 5.82 | 5.74 | |
| | 下面 | 5.64 | 5.48 | 5.71 | 5.58 | |
| 柱間距離（m） | | P4－P1 | P1－P7 | P1－P2 | P2－P3 | P3－P5 |
| | | 1.40 | 0.34 | 1.52 | 1.44 | 1.20 |
| | | P5－P6 | P5－P4 | P7－P8 | P8－P9 | P3－P9 |
| | | 1.14 | 3.18 | 1.24 | 1.72 | 0.61 |

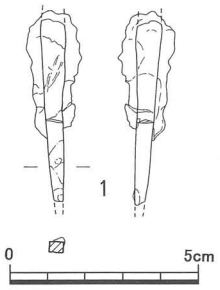
［　］内は柱穴の下面径（cm）
（　）内は柱根径（cm）

## 6区9層　1号建物出土金属器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 調査区 層位 出土地点 | 種別 器種 | 計測値（mm） 長×幅×厚 | 重量（g） | 遺存度 | 形態的特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 65－1（図版83） | 9層 | 鉄器 釘 | 5.0×6.5×6.5 | 4.63 | 1/2以上 | 両端欠損 | |

### 9層　1号建物（第64図）

調査区北東隅で検出した建物である。遺構埋土は9層と同質の黒褐色土であり、砂質である12層上面の精査段階で検出された。柱穴が9層から掘り込まれ、9層の土を柱穴に埋めたと推定される。調査区の東端に当たり、これより東の状況が不明であるが、P2・4・5の中間に束柱に相当するピットが見られないので、束柱を持たない外周のピットだけで構成される建物である可能性が高い。よってP1やP4は建物の東辺に当たると考えられる。南北方向には柱穴が続く様子は確認できないが、P4の北が調査区端に当たっているため確認できていない可能性がある。P1・2・3の南隣に接する位置でP7・8・9がある。この3穴はP1・2・3を建て替えたものであろう。柱穴の底面の標高はP1～5は5.4～5.5mにほぼそろうが、P6～9は5.6～5.9mと浅い。建て替えた柱穴は浅くなっている。P6も、底面中央に柱があったと考えられる陥没部分があるので柱穴に含めている。東に接して同規模のピットがあるのも、建て替えの可能性があろう。




第65図　6区9層　1号建物出土遺物（S＝1/2）

柱材はP5のみ残存していた。残材の太さから、この建物では径18cmの柱材が使われていたことがわかる。P6を除く柱穴の径はほぼ25cm以内であり、柱材とほとんど変わらない径の柱穴が掘られている。

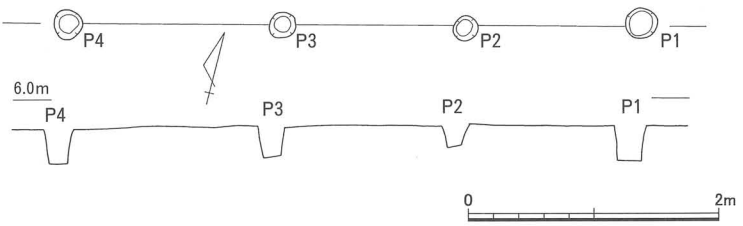
**遺物（第65図）**

P3の脇から出土した釘（65－1）1点のみである。これ以外に遺物が出土していないので、時期は不明である。

### 9層　1号柱列（第66図）

1号建物の北3mで確認された柱列である。柱穴の径は21～26cmの間におさまり、1号建物の柱穴の大きさと変わらない。底面の標高も5.5～5.6mで、1号建物の柱穴底面に近い。P1は調査区の東端に当たり、柱列はこれより東の調査区外部分に続いていた可能性もある。P4以西には、等間隔で並ぶピットは見られないので、柱列の西端はP4であったと思われる。柱列の方向は東西方向からややずれており、1号建物の柱の軸線とほぼそろっている。

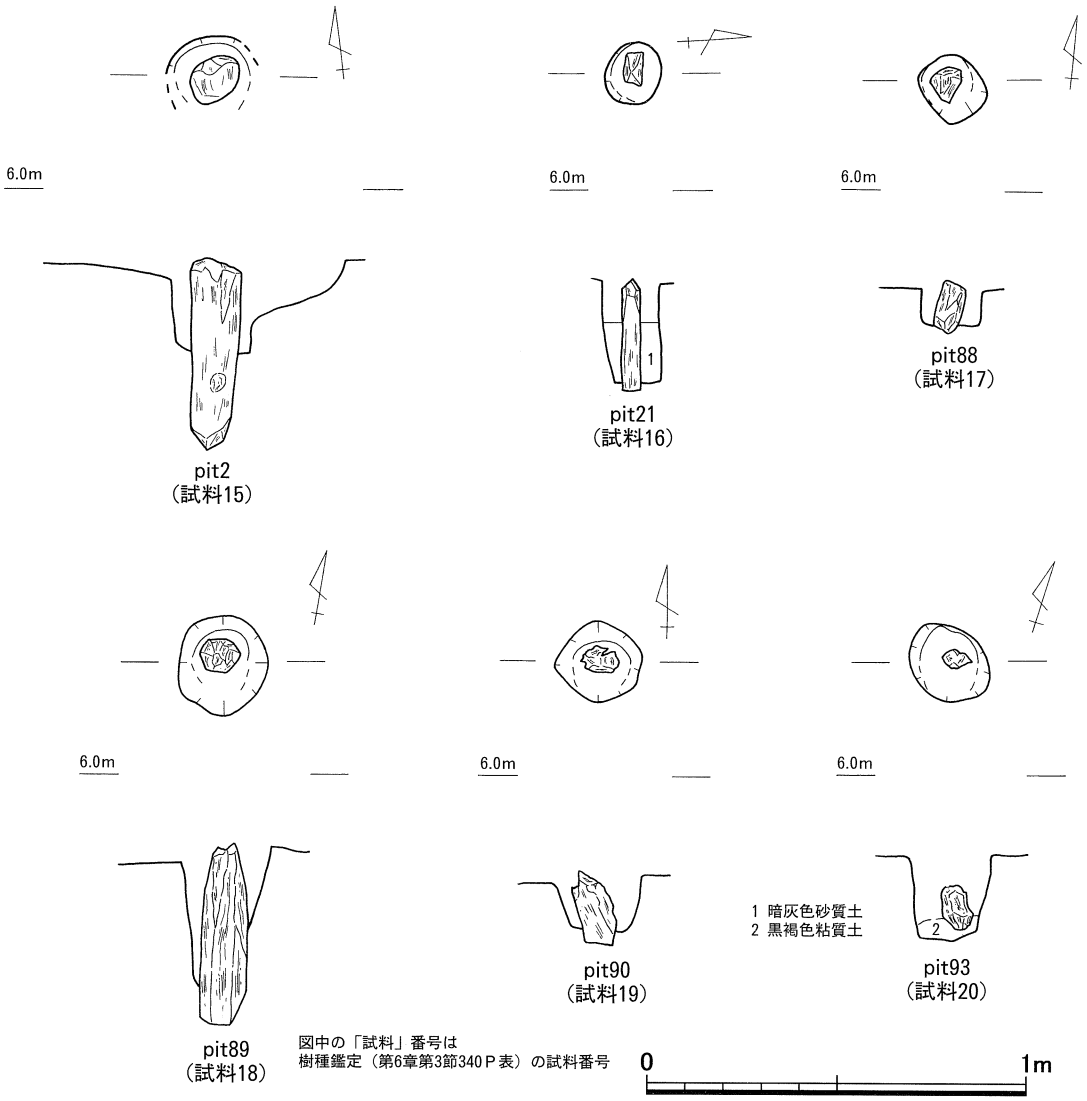
この柱列から2m北には層位の同じ9号溝状遺構が確認されてい




第66図　6区9層　1号柱列（S＝1/60）

6区9層　1号柱列計測表

| 規模 | | 3間（4.58m） | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 検出面 | | 灰オリーブ色砂質土（12層）上面 | | | |
| 各柱穴の埋土 | | 黒褐色粘土質（9層） | | | |
| 主軸 | | N－77°－E | | | |
| 番号 | | P1 | P2 | P3 | P4 |
| 平面規模（cm） | | 26 | 22 | 21 | 24 |
| 標高（m） | 上面 | 5.78 | 5.78 | 5.78 | 5.76 |
| | 下面 | 5.50 | 5.60 | 5.52 | 5.48 |
| 柱間距離（m） | | P1－P2 | P2－P3 | P3－P4 | |
| | | 1.40 | 1.46 | 1.72 | |



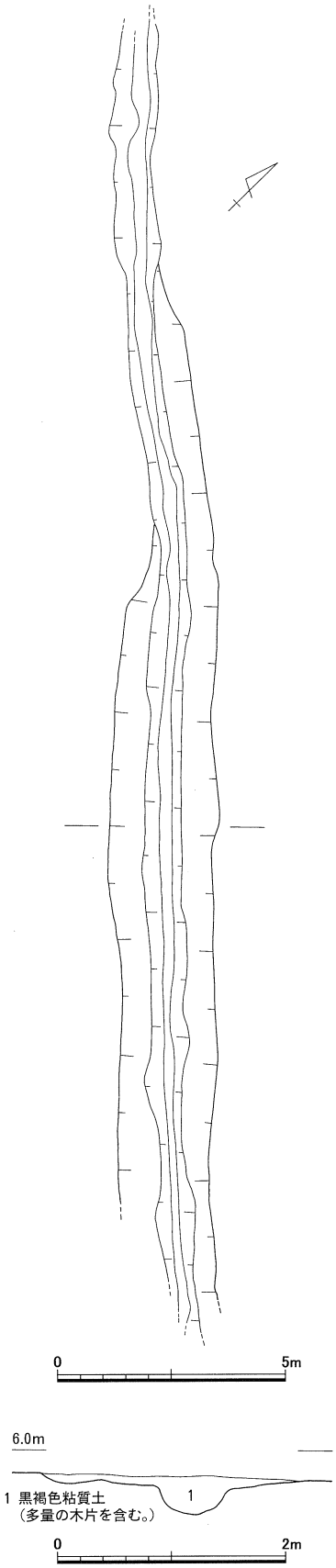

**第67図　6区9層 柱穴及び柱根**（S＝1/20）

るが、この溝状遺構の方向も1号建物、1号柱列とそろっているので、この3遺構は同じ規格に基づいて建てられた（掘られた）可能性がある。

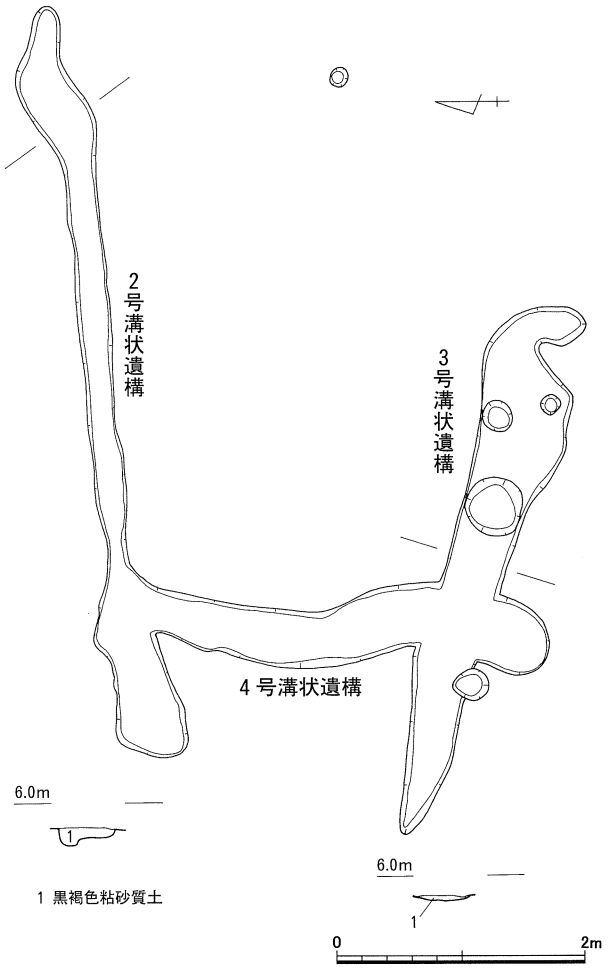
**残存していた柱根（第67図）**

9層に伴う柱穴のうち7箇所で柱根の材が残存していた。67図には6箇所を掲載しており、1号建物のＰ5（第64図）がこれに加わる。柱根が残存していたピットは、1号建物Ｐ5以外は1号溝状遺構と5号溝状遺構の間で検出されたピット群である。

1号建物Ｐ5およびＰ21・88・89・90から検出された柱根は底面が平たく整えられ、側面は複数の面を持つように仕上げられており、柱材（角柱）として使われたと推定される。これに対し、Ｐ2は底部を尖らせ、側面は加工しないまま使用し、穴の掘り方よりも深く食い込んでいることから、柱材ではなく杭と推定される。径20㎝と太めの柱材にはクリ、10㎝程度の細めの柱材にはニレやサカキが使われ、杭にはマツ材が使われた（第6章第3節340Ｐ）。




第68図　6区9層　1号溝状遺構
（平面図：S＝1/150、
断面図：S＝1/60）




第69図　6区9層　2号～4号溝状遺構（S＝1/60）

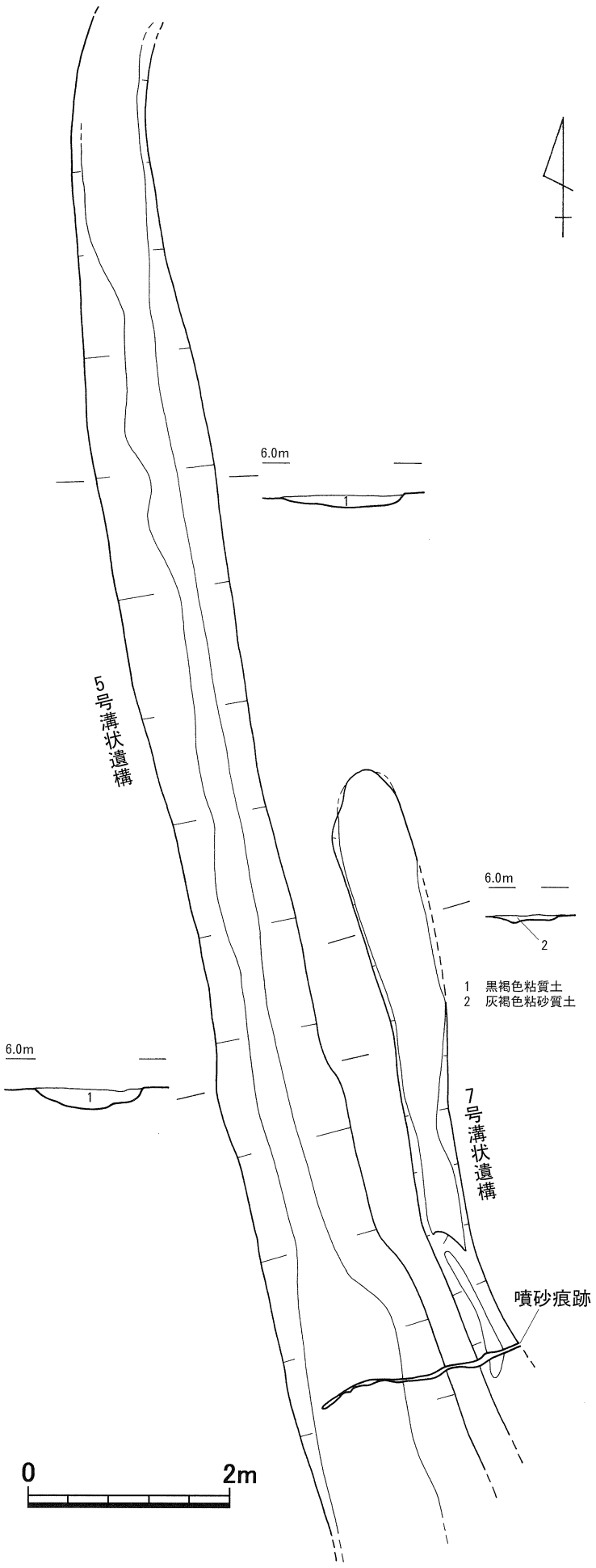
## 9層　1号溝状遺構（第63・68図）

調査区の南東から北西にかけて続く大規模な溝である。本来は9層から掘り込まれた溝であり、現存している以上の深さがあったと推定される。

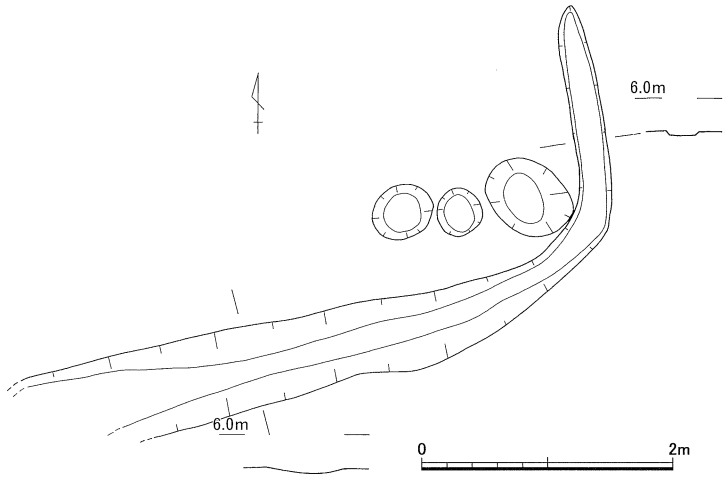
北西端より5mの位置から幅が広がり始め、10.5～11.5m付近で断面形が完全な二段掘りに変わる。段掘り部分は、南西側は深さ5～6cmで幅1m続いて、中央では20～30cm落ち込む。北東側の浅い部分は深さ4cm、巾が70～80cmである。

### 溝状遺構の役割

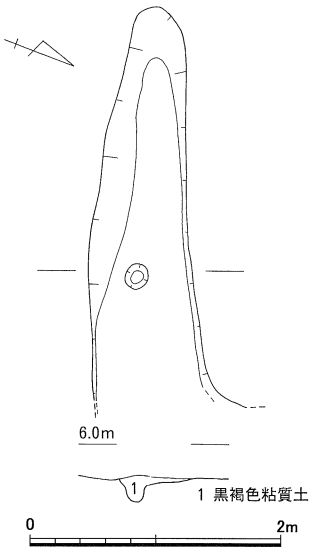
調査区を14層上面まで掘り下げた時点で遺構面の状態は著しく悪化していた。調査区のかなりの部分が地下水を含んで軟弱となり、立ち入り不可能で調査を継続できない状態であった（写真図版1上段）。軟弱な部分は調査区の南東から北西へかけて続いている。この部分は、9層直下の12層では遺構が検出されておらず、空白地帯となっている。当時から湿地帯であったため、集落が営めなかったと考えられる。



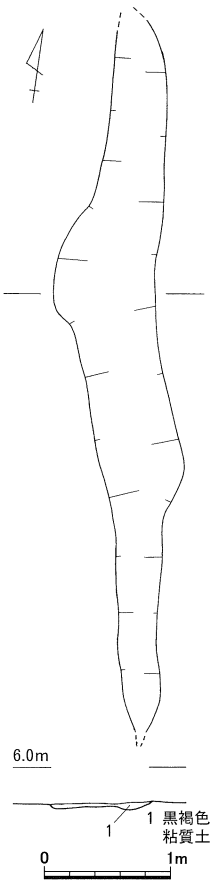

第70図　6区9層　5号・7号溝状遺構（S＝1/60）




第71図　6区9層　6号溝状遺構（S＝1/60）




第73図　6区9層　9号溝状遺構（S＝1/60）




第72図　6区9層8号溝状遺構（S＝1/60）

1号溝状遺構は、この湿地帯を貫く位置・方向に掘られた。12層では空白地帯のまま放置されていた部分にも、9層の段階でピットが出現し、人が住める状態になっていることがわかる。これは1号溝状遺構を掘削したことによる効果であろう。

**9層　2号～4号溝状遺構（第69図）**

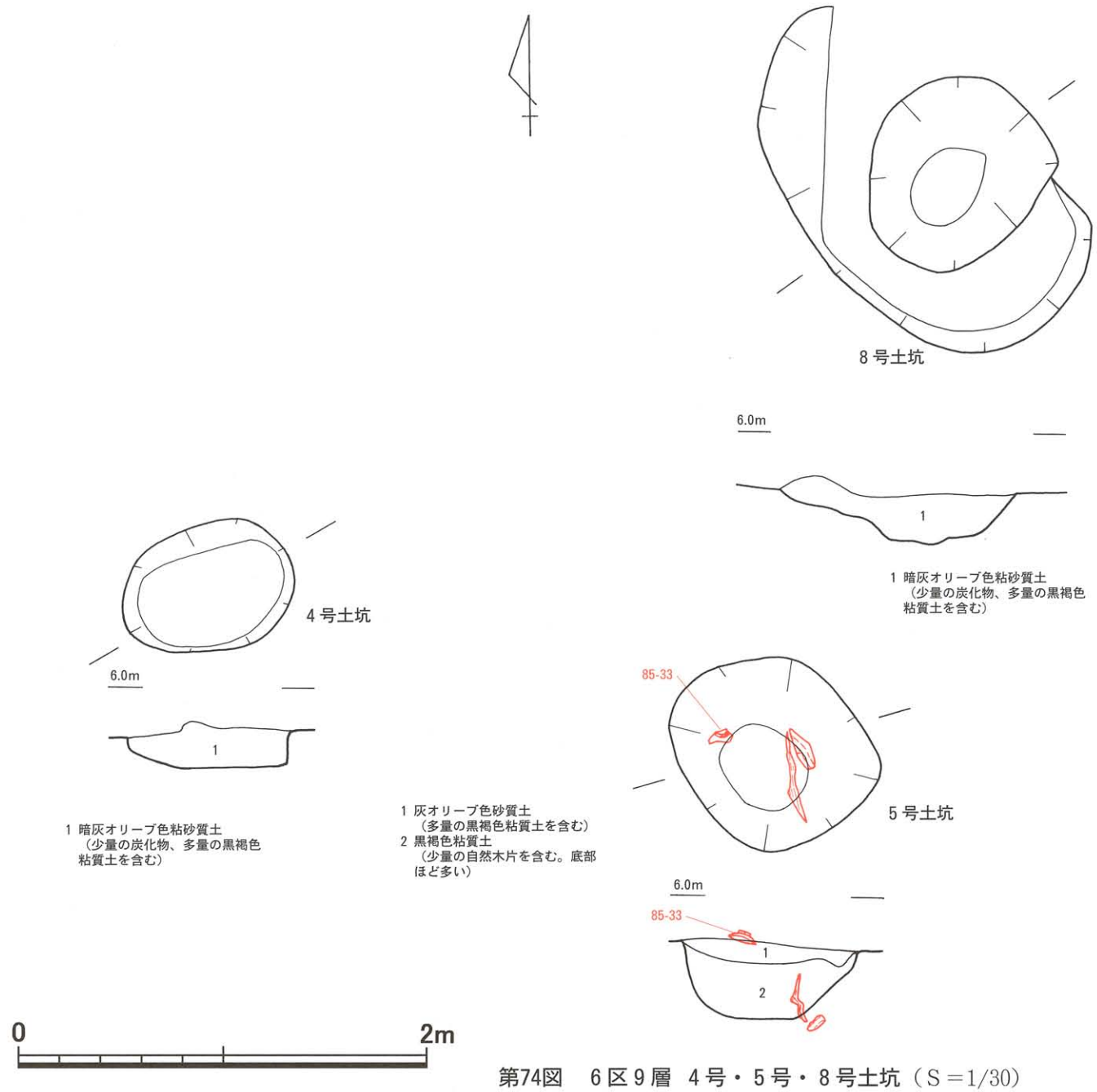
調査区南東隅で検出された溝状遺構である。東西方向の2・3号溝状遺構と南北方向の4号溝状遺構が西よりの位置で交差している。3本とも残存状況は悪く、深さ5～10cm程度しか残っていなかった。各溝の端部は輪郭がはっきりせず、先へ続いていた可能性が高い。本来は9層上面から掘り込まれたやや浅い溝の底部のみが残って検出されたものである。

**9層（西部）の溝状遺構（第70～72図）**

6区の南西側に張り出した部分で、南北方向に走る複数の溝状遺構を検出した。溝状遺構は同じ方向を向いているので、ほぼ同時期に同じ目的で掘られたものと推定される。

5号溝状遺構は南端と北端が調査区の側溝にかかるため、全体の規模は不明である。北半分での規模は幅1.2m、深さ10cm程度に対し、南半分では幅1.6m、深さ20cmと遺存状況がよくなる。底面の標高は南側が北に比べて10cm低く、北から南へかけて下がっているので、北から南へ水を流す溝である。南の方が深く掘られているため、遺存状況も南の方が良好であった。

5号溝状遺構のすぐ東には、7号溝状遺構が並走している。5号溝と同時に存在したか、前後関



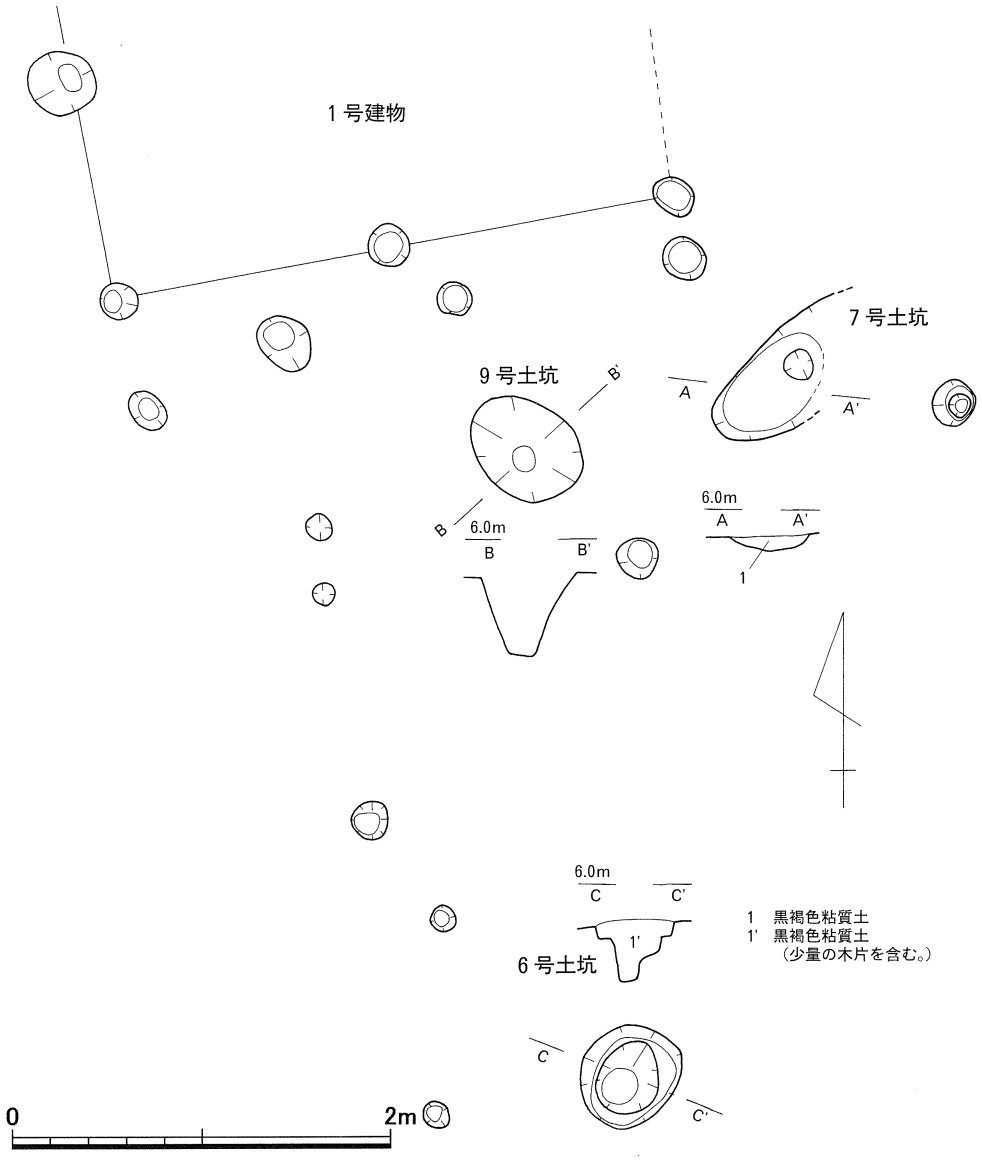

第74図　6区9層　4号・5号・8号土坑（S＝1/30）

係があるのかは不明である。全体的に底面の標高が5号溝状遺構より浅い。南端はやや低くなるが、北は徐々に浅くなって北端で途切れている。7号溝も本来は北へ向かって浅くなりながら続いていたと推定される。

8号溝状遺構は5号溝状遺構の2m西側に並行している。南北両端が途切れているが、本来9層から掘り込まれた遺構であり、北方向へも伸びていたと推定される。南側は1m先から6号溝状遺構が検出されており、これが8号溝状遺構の続きであろう。北端から約2mの位置で右へ折れ、西南西へ続く。底面の標高は6・8号溝状遺構ともに5.7mで違いはない。

### 9層　9号溝状遺構（第73図）

調査区北東端で検出された溝状遺構である。検出された長さは4.4mであるが、北東端は調査区




第75図　6区9層　6号・7号・9号土坑（S＝1/40）

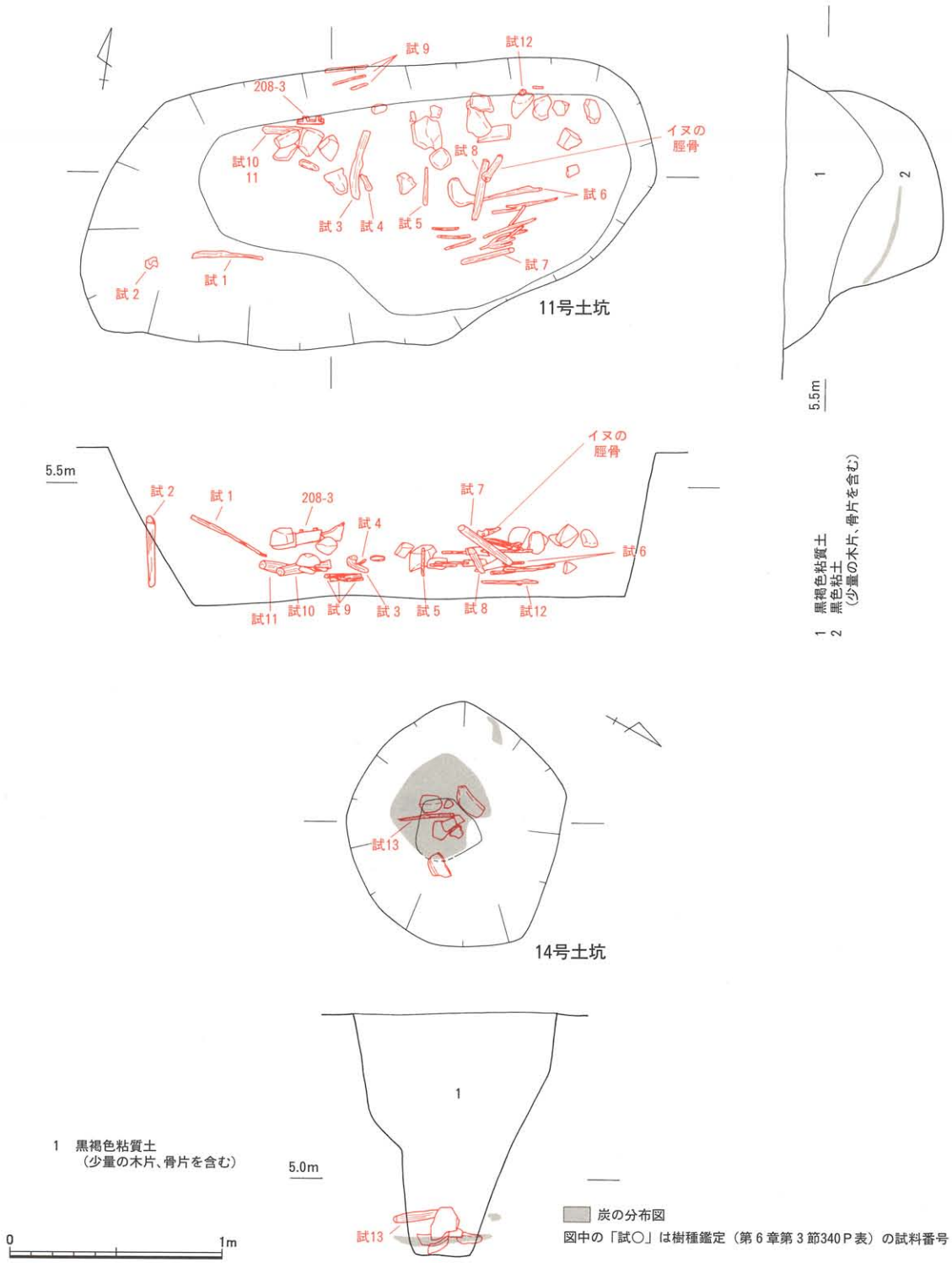
北端にかかっているので、溝状遺構が調査区外へ続いていた可能性が高い。また、確認された範囲内での遺構の西端の先にも、輪郭が不明瞭ではあるが黒土の分布が見られたので、遺構は西へも続いていた可能性が高い。

**9層　4号・5号・8号土坑（第74図）**

1号建物から5m西の地点で、直角にならぶ3穴の土坑を確認した。5号土坑を中心に、2.8m北に8号土坑、2.8m西に4号土坑が並ぶ。直角の配列から一度は柱列の可能性を想定したが、互いの距離が離れすぎていること、深さ・底面の標高にばらつきがあることから、それぞれ単独の土坑と判断した。

4号土坑の検出面から土師器片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

5号土坑の下層には自然木と自然石、上面からはⅣ類の白磁碗の底部（85－33）が、底部を上にした逆置きの状態で出土した。白磁碗は土坑の検出面やや上方からの出土であるが、本来の掘り込み面は検出面（12層上面）よりも上の9層上面であり、白磁碗は土坑の埋土中にあったと考えられる。



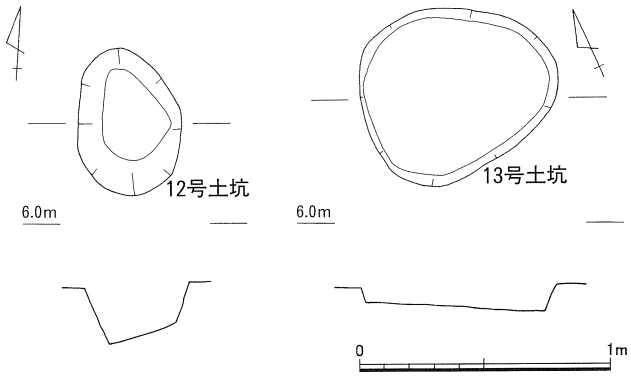

第76図　6区9層 11号・14号土坑及び遺物出土状況（S＝1/30）

8号土坑からは遺物は出土していない。

**9層　6号・7号・9号土坑（第75図）**

1号建物の南方に、径12～30㎝程度の小ピットが集中的に検出されている。埋土はいずれも9層と同質の黒褐色土であり、1号建物の柱穴の埋土と共通する。これらのピットについては建物、柱列を始め幾通りかの可能性が想定されるが、配置から柱列・建物と判明するピットは見られなかっ

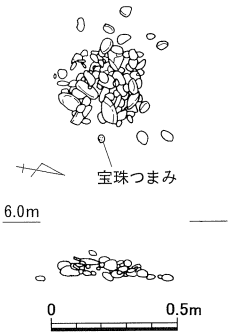
た。それらのピットの間に挟まるように6・7・9号土坑が掘られていた。いずれも、時期を決定できる遺物に恵まれず、土坑の時期、性格ともに不明である。




第77図　6区9層 12号・13号土坑（S＝1/30）

**9層　11号土坑（第76図）**

調査区北東隅で検出された土坑である。埋土は9層と同質の黒褐色粘質土で、下半分はさらに粘性の強い黒色粘土となる。平面形は東西に長い不規則な長方形で、長辺2.8m、短辺1.3m、検出面から底面までの深さは70cmを測るが、本来の深さはこれに9層の厚さが加わる。




第78図　6区9層 集石遺構（S＝1/30）

遺構に伴う木、自然石、下駄などの遺物のほとんどの出土位置はこの下半分の埋土に集中する。木の上に石が重なる状態で出土した。細い枝程度の径の小さい木が多量に出土しているが、その全てを図化できていない。ただし、それらの大部分が東西方向を向くという緩やかな規則性が見られた。これらと直交する南北方向を向いた状態で、より径の太い木が見られ、さらに土坑の隅には直立した状態の木も見られた。これら2種類の材を交差させるように組み、隅には柱が立った形態の木製の施設が想定される。東西方向の細い材（試1・6・7・9）はヤナギ類、南北方向の太い材（試3・8）にはスギやアオギリ類似種、直立していた材（試2）にはクワ類が使用されている（第6章第3節表2、340P）。土坑内から骨が2点出土しているが、人骨ではなくイヌの脛骨であり（第6章第4節表2、349P）、石や木よりも上位から出土している。また、出土位置の明確な木製品として下駄（208－3）があるが、これも木や石よりも上位から出土している。木の組み合わせを埋葬施設とすると、下駄やイヌの骨は施設上面に供献された状態であったと考えられる。

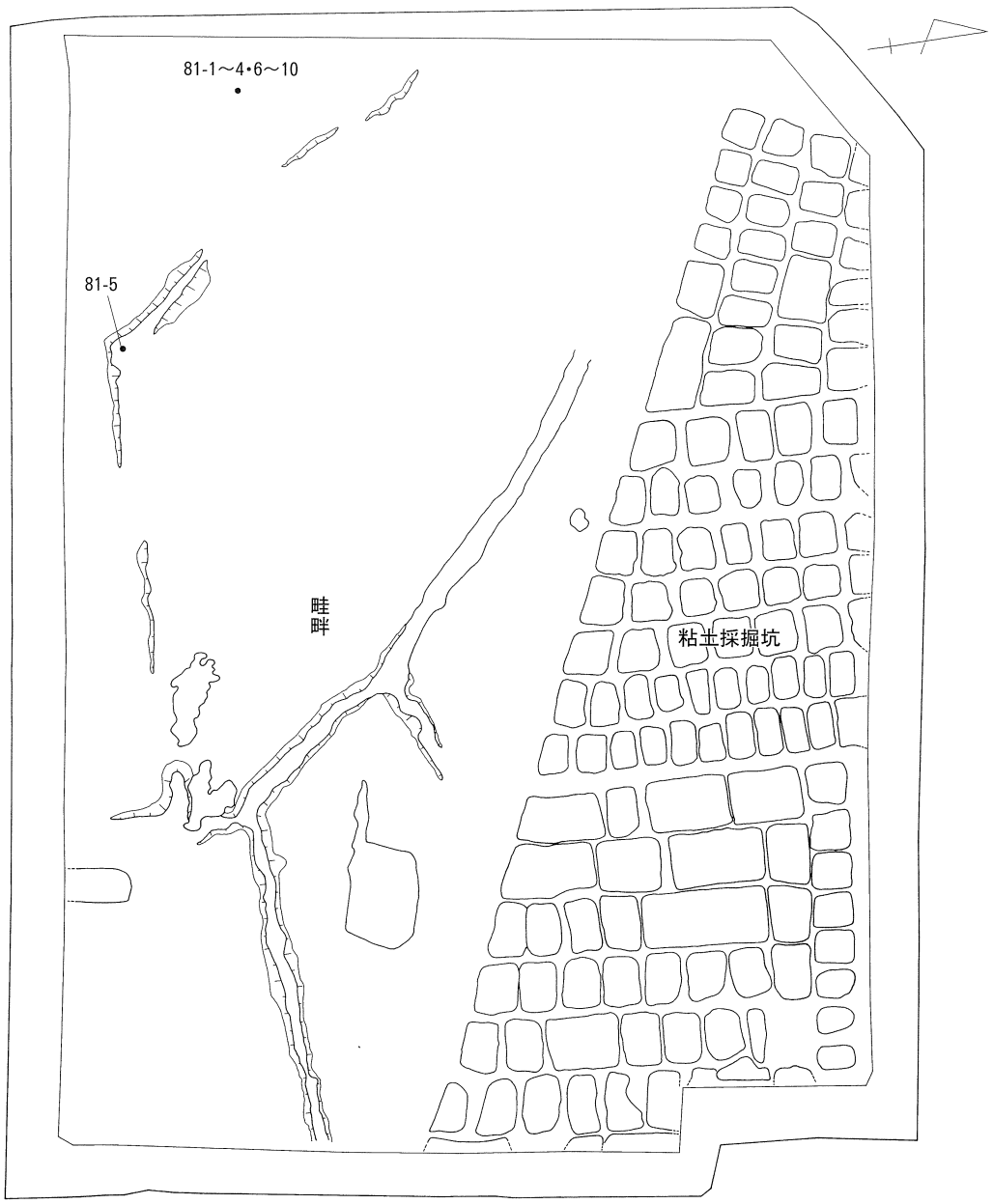
**9層　14号土坑（第76図）**

1号溝状遺構の南西側、調査区南寄りで検出された土坑である。北隣のピットを切って掘り込まれているので、14号土坑の方が新しい。掘り方は1.2mと深い上に、9層の厚みが加わる。埋土は木片を多く含む粘土質で、含有されている有機質がそれ以外の物質と反応して、青く変色した無数の細片として観察された。

底面には炭化物が一面に分布し、その上に石、木が出土する。

**9層　12号・13号土坑（第77図）**

12号土坑は1号建物北西隅のP6の横で確認された土坑である。位置関係から、1号建物の柱P6の建て替えである可能性が考えられたが、土坑の底面が平坦でなく、柱の当たった痕跡も見られないので、単独の土坑とした。1号建物のすぐ横で検出されたので、1号建物と関係する土坑の可能性はある。

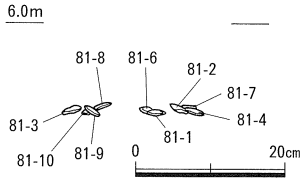



第79図　6区水田面の遺構（S＝1/240）

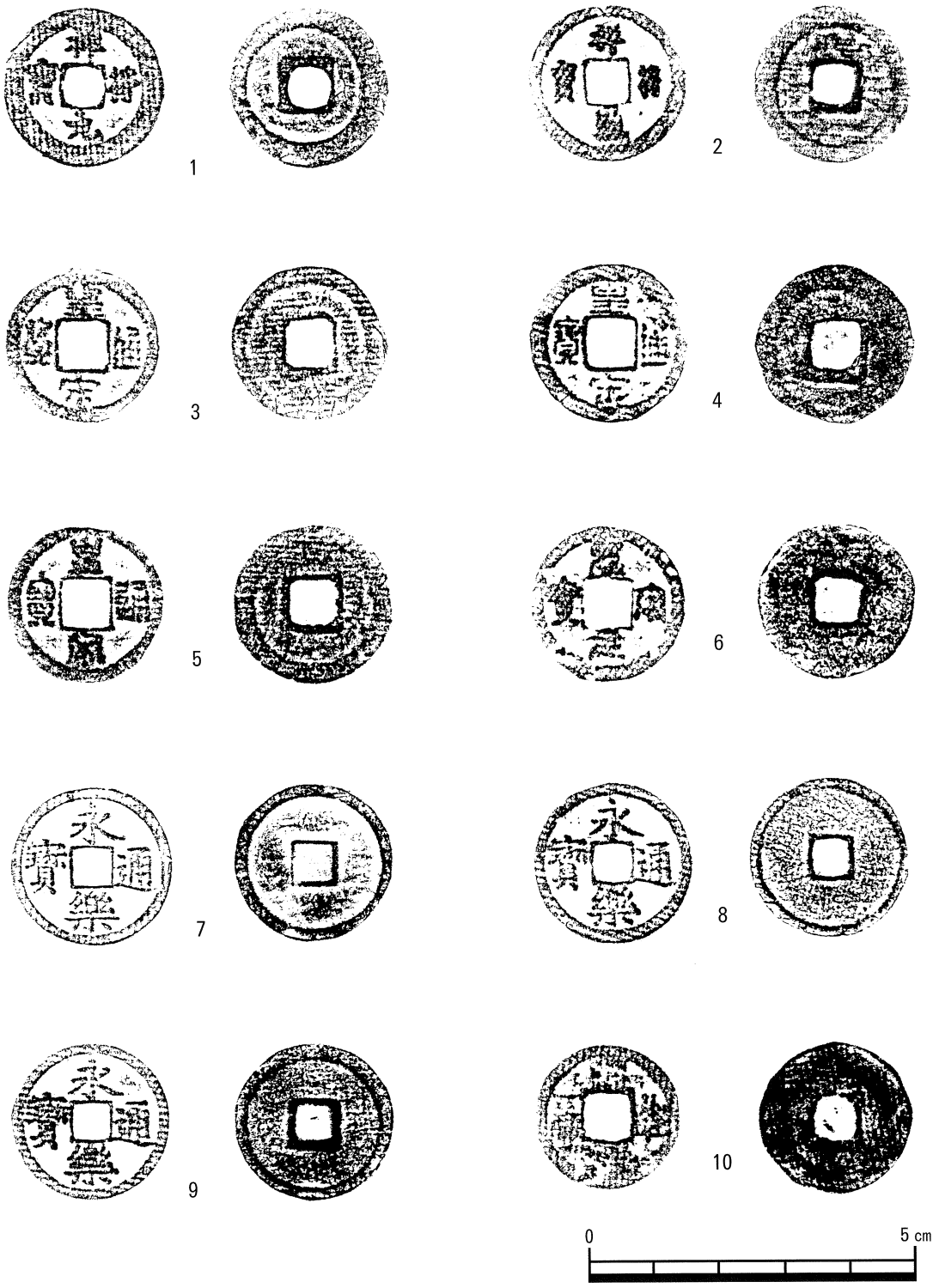
13号土坑は調査区南西部のピット群の中で検出された土坑である。これと重なる位置で小ピットが検出されたのは、13号土坑を底面まで掘り下げた段階であり、13号土坑検出時には見られなかった。従って、13号土坑が小ピットの後に作られる前後関係である。

## 9層　集石遺構（第78図）

6区北東部で検出された。角の取れた自然石が集められて重ねられていた。集石遺構の西脇には、須恵器の坏蓋の宝珠つまみが上を向いた状態で出土した。集石の下層に土坑があるものと予想して輪郭の検出を試み、半裁したが、土坑らしい明確な痕跡は検出されなかった。地面の上に直接石を積み置いた遺構である。




第80図　6区水田面　畦畔埋納銭出土状況（S＝1/10）




第81図　6区水田面　畦畔出土埋納銭（S＝1/1）

**水田面（第79図）**

第5・6層の砂を取り除いた第7層の上面で畦畔が検出され、水田と判明した。

調査区南東部では、ほぼ東西方向の畦畔が見られ（最大幅1.2m）、調査区東端から12mの位置で別の畦畔にぶつかって終わる。畦はこの位置から北西、南、東の3方向へ分岐し、三叉路状となる。北西へのびる畦（最大幅96cm）は、北西方向へ18m続くが、その先は検出されない。上場と下場は北へ行くにつれて不明瞭となる。この畦を境に北東の水田面は高く、南東の水田面は低くなってい

### 6区 水田面　畦畔出土埋納銭観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 調査区<br>層位<br>出土地点 | 種　別<br>器　種 | 径 | 遺存度 |
|---|---|---|---|---|
| 81－1<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>祥符元宝 | 25.0 | 完形 |
| 81－2<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>祥符通宝か | 24.0 | 完形 |
| 81－3<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>皇宋通宝 | 23.5 | 完形 |
| 81－4<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>皇宋通宝 | 25.0 | 完形 |
| 81－5<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>皇宋通宝 | 24.0 | 完形 |
| 81－6<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>聖宋元宝 | 24.0 | 完形 |
| 81－7<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>永楽通宝 | 25.0 | 完形 |
| 81－8<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>永楽通宝 | 24.0 | 完形 |
| 81－9<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>永楽通宝 | 24.0 | 完形 |
| 81－10<br>(図版83) | 水田面<br>N-41 | 銅銭<br>永楽通宝 | 23.0 | 完形 |

る。この畦は分岐点から6.4mの位置でさらに北東方向へも分岐する。

三叉路状の分岐点から南方向へのびる畦は、三叉路のすぐ南から輪郭が不明確となる。分岐点のすぐ西に不整形の窪みがあるためである。西側にもう一箇所不整形の窪みがあり、底面から備前焼擂鉢の破片が出土している。

三叉路の南2.4mの位置から畦は西方向へ分岐する（最大幅１m）が、1.6m西で途切れている。この断絶部分が水口であろう。畦は分岐点から西へ16m、途中２箇所で途切れながら続く。この畦を境に北側の水田面は高く、南側の水田面は低くなっているので、畦畔の大部分では南辺の上場と下場しか確認できなかった。

東西方向の畔の西端では、畔の上面から皇宋通宝（81－５）が出土している。銭出土地点から北西へも畔が13mのびている。この畔は北東側も南西側も畔の上場、下場が検出されているが、水田面自体は南西側の方がわずかに低い。

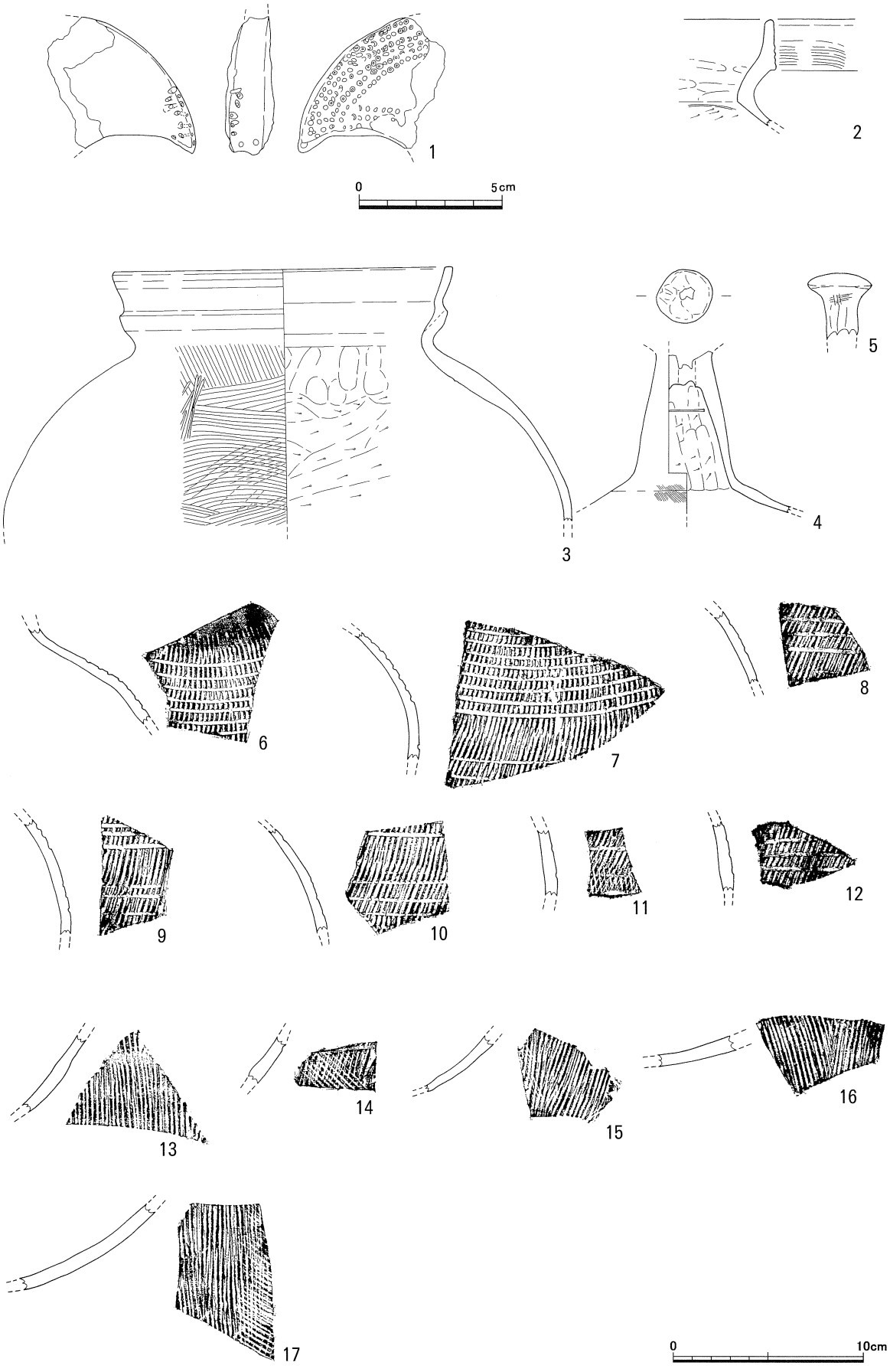
水田面の高さは全体に北・北東が高く、南・南西へ行くほど低くなる傾向がある。調査区南よりの畦畔で検出された水口も、北から南へ水を流していたと推定される。

調査区北半分は、「大津焼」で使用される粘土を採掘した跡が並んでいるため、水田面は残っていなかった。

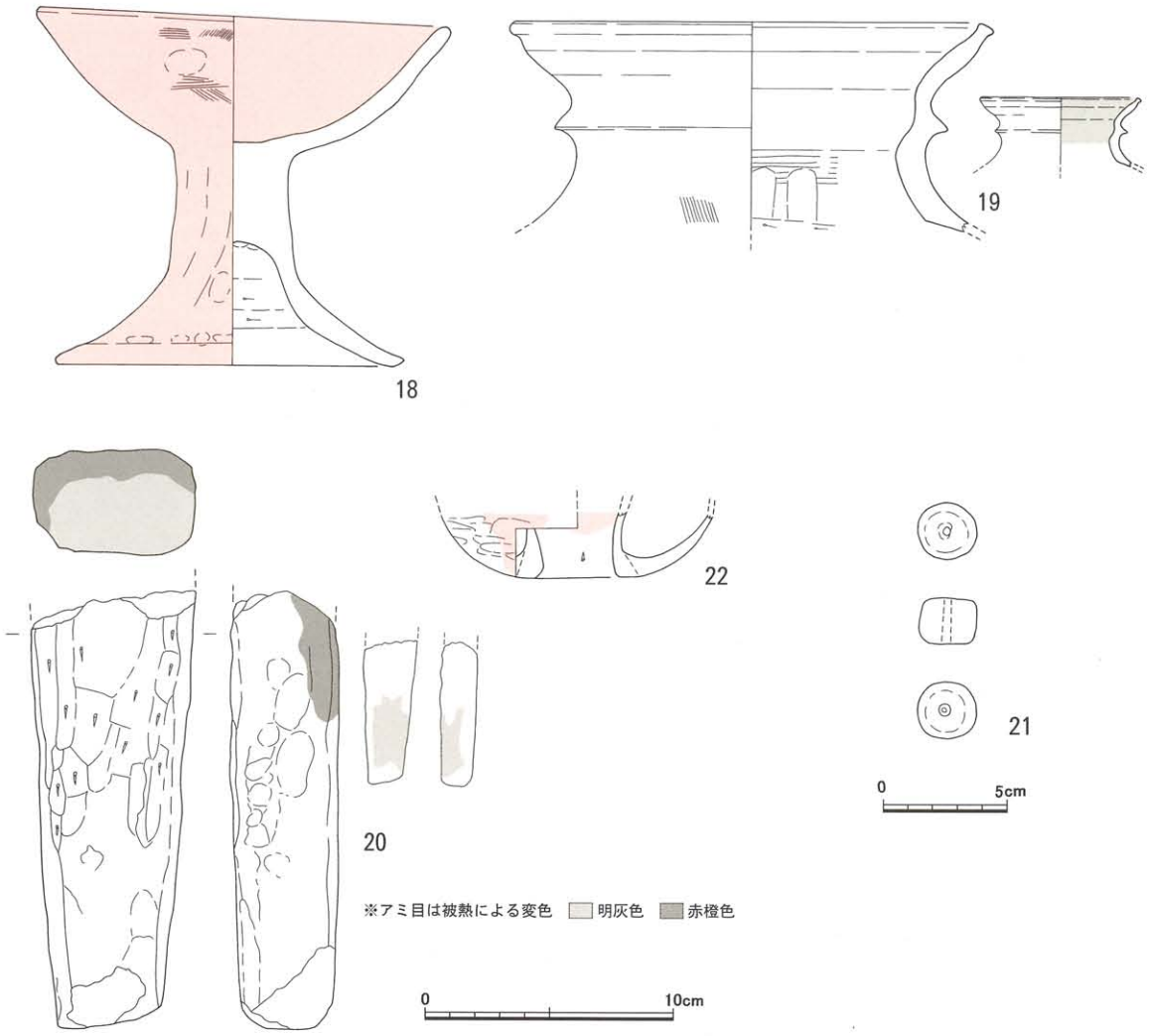
水田面からは中世の銅銭が出土している（第80図）。２は表向きか裏向きか不明である。永楽通宝が３枚裏を向いて出土した（81－７・８・９）他はすべて表面を向いて出土した。水田面に埋納された銭であろう。

**水田面畦畔出土埋納銭（第81図）**

調査区西寄りの畦畔に埋納されていた銭である。埋納坑の掘方は検出されなかった。出土した銭は11世紀前半に始まり、新しいものは永楽通宝まで含まれる。埋納されたのは、水田が作られていた室町後期から江戸初期であろう。




第82図　6区包含層 出土遺物（1）（1：S＝1/2、2～17：S＝1/3）

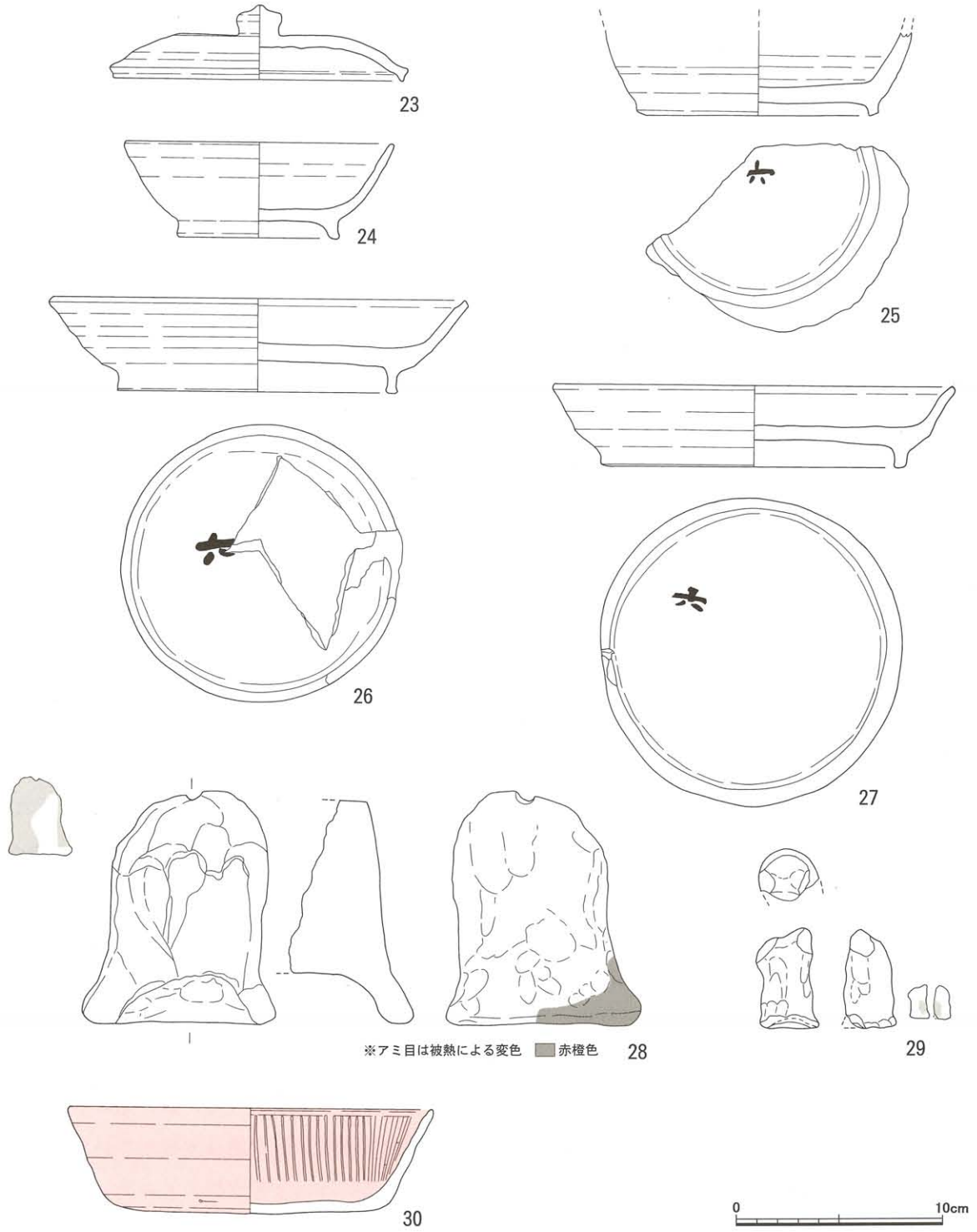



**第83図　6区包含層 出土遺物（2）**（18～20・22：S＝1/3、21：S＝1/1）　**※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス**

## 包含層出土遺物（第82～86図）

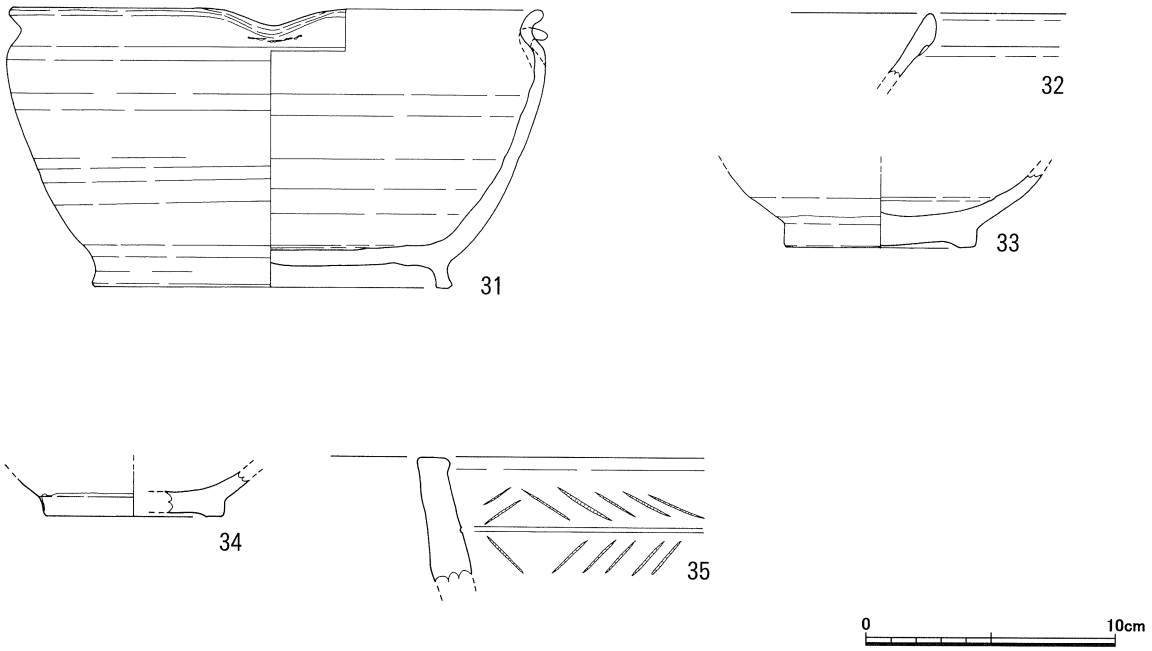
第82図（1～17）は14層、第83図は13層（18～22）、84図は12層（23～30）の出土遺物を掲載した。第85図には9層出土遺物（31～33）、第86図には石製品（36～38）を掲載した。このほか、34は12層上面からの出土であるが、明らかに32・33と同類の白磁であるため併せて掲載した。35は層位が不明である。

82－1は分銅形土製品の中央から側端部にかけてで、全体の半分弱に当たると見られる。上面には径1㎜の管状の工具を押しつけて施文し、下面からは斜めに工具を押し込んで側面まで貫通させている。外面の4分の3までが黒変する。2は凹線を引いた後ヨコナデによりなで消している。3は退化を始めた頃の複合口縁の甕で、付け根近くに明瞭な粘土の継ぎ目がある。4は高坏の脚部で、脚部の上端は坏部との接続面が残っている。ヘラによるキズがつけられているのは、坏部との接着面積を広くとるためであろう。5の用途は不明だが、栓、あるいは土器製作時に使われる叩き具のミニチュアなどの可能性が考えられる。6～17は三韓系土器の壺の破片である。壺の肩部の破片（6～10）は、縦方向の縄蓆文（縄や蓆を巻き付けた工具で表面をたたいて施文する）の上に、横方向の螺旋状沈線をめぐらせるのが特徴である。11～14は縄蓆文が交差することから壺の中央から



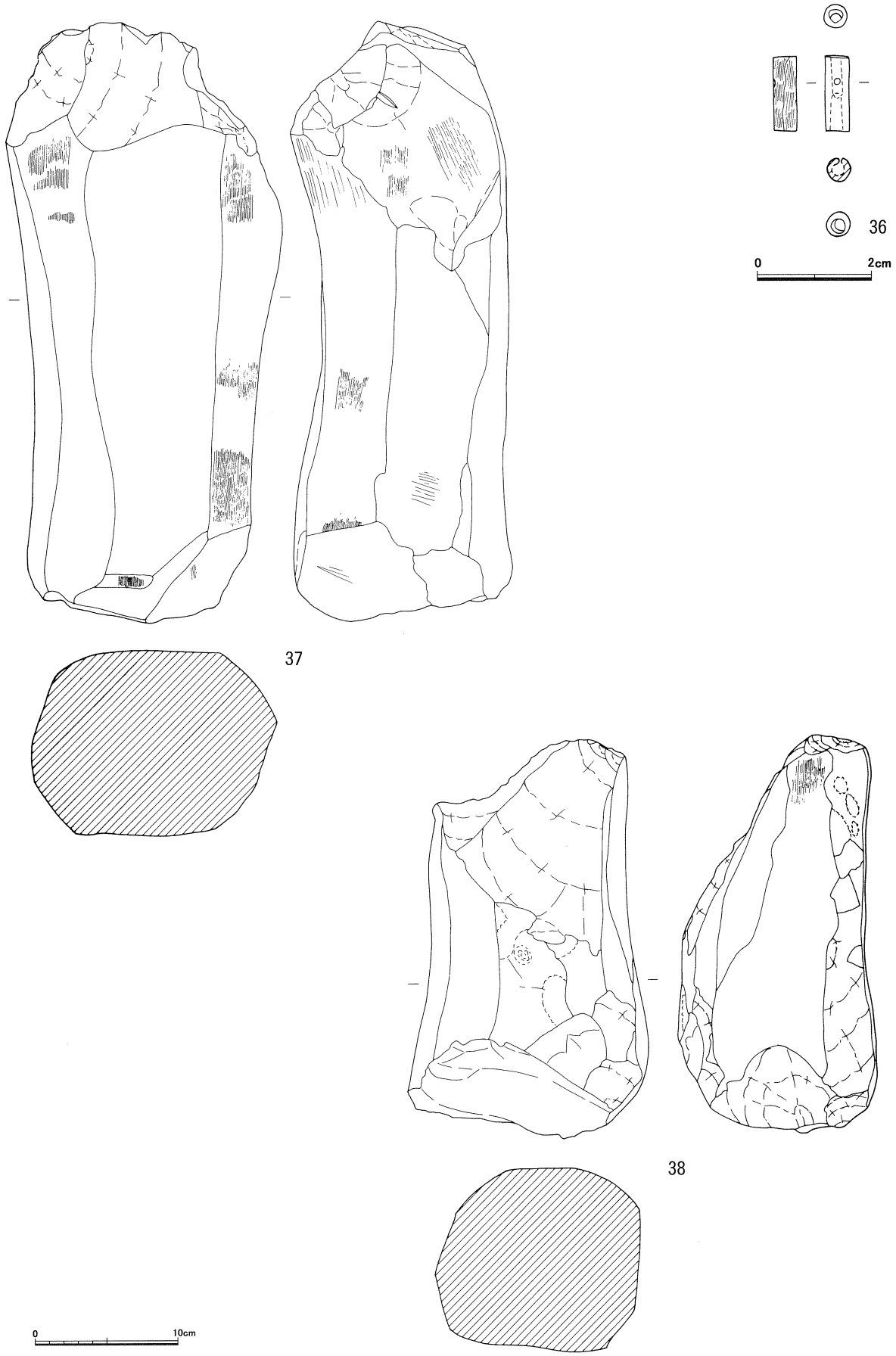

**第84図　6区包含層 出土遺物（3）**（1：S＝1/2、2～17：S＝1/3）　**※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス**

下半分と考えられる。13は横方向のナデで縄蓆文をなで消している。横方向の沈線がない15～17は壺の下半部であろう。83－18は赤彩だが粗製の高坏である。19は壺であろう。在地の複合口縁の壺とは異なる。内面全体に濃いススが付着する。20は角柱形の支脚である。下端の一部は生き残るが、上部は欠損している。被熱して赤橙色になっている面を内側、ススが付着する面を外側にして使用されたと思われる。22は、蓋のような使用法が考えられる。中央の孔は、蒸気が抜けやすいように




**第85図　6区包含層 出土遺物（4）**（S＝1/3）

あけられたものであろうか(4)。半球形の面がヘラミガキされ精美に仕上げられているので、こちらが上面の可能性もあるが、その場合は全く用途が不明である。84－23は宝珠つまみを持つ坏蓋である。天井部はヘラケズリされるため切り離しの痕が明瞭でない。84－25は底面中央に一字の墨書がある。低めの高台が、底部と体部の境界につく須恵器の坏である。肉眼観察の段階では、「大」「六」二通りの可能性が予想されたが、赤外線観察により「六」と判断した。。第2画の横棒と第1画が重なる部分は墨が2回塗られるため、他の部分より墨がよく残る。26は高台の付く皿である。底部と体部の境目よりわずかに内側に、高く細めの高台が付く。字形は25と同様で、「六」あるいは「大」が予想された。横棒と左下・右下の点との間は、墨が途切れているので「六」と判断した。他の2点に比較して文字は太く丸いため、書き始めや「はね」「止め」が不明瞭である。27も墨書がある。26とは器形が酷似し、字も「六」と判断される。第2画の書き始めと「止め」、第3画左下部の「はね」、第4画の「止め」は、他の2点の場合以上に強く意識されている。他の2点とは別人の筆によるか。28は穿孔のある土製支脚である。被熱がある面の反対側は欠損しているが、棒状にした粘土を縦方向に何度も詰めて成形した跡がよく見える。29は土製支脚のミニチュアであるが、実際に火にかけて使用され、内側（二方突起のある側）にススが付着する。30は赤彩された土師器の坏である。暗文は体部内面にのみ見られ、体部外面や底部にはない。口縁端部内面をヨコナデし、緩やかなくびれを生じさせている。底部外面はヘラケズリされ水平に仕上げられる。胎土は他の土師器よりも赤みを帯びた浅黄橙～橙色である。85－31は平安時代の片口鉢である。製作時、片口部を成形するため口縁部を下へ押しつけた際にできた亀裂が、片口直下に残る。焼成が悪く、灰白色に焼き上がる。32は白磁碗Ⅳ類の玉縁状の口縁である。破損後も漆で接着して再利用されたため、内面・断面の一部に漆が付着している。85－33は同じく白磁碗Ⅳ類の底部である。高台部は回転ケズリによりケズリ出される。34は畳付部分にはヘラ状工具による切り離し痕跡が残る。35は内傾する複合口縁壺の口縁部である。外面に有軸羽状文がつく。86－36は両側から穿孔され、側面




第86図　6区包含層 出土遺物（5）（36：S＝1/1、37•38：S＝1/4）

# 6区包含層　出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種　別<br>器　種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 82－1<br>(図版84) | 弥生土器<br>分銅形<br>土製品 | ②(4.7) | | ナデ | | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 82－2<br>(図版84) | 弥生土器<br>甕 | ①(17.7)<br>②18.4 | | 口縁：凹線文後一部ヨコナデ/頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ミガキ胴：ケズリ | 胎土：やや粗(1～2㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：内外面橙色/断面褐灰色 | |
| 82－3<br>(図版84) | 弥生土器<br>甕 | ②(5.5)<br>③2.7 | | 口縁：ヨコナデ/頸～肩：縦方向の粗いハケメ後ヨコナデ/胴～：横方向の目の粗いハケメ、部分的にミガキか | 口縁：ヨコナデ/頸：縦方向のナデ/頸以下：粗いケズリ | 胎土：密(3㎜程度の砂粒を多く含む)<br>色調：内外面灰白色/肩部断面黒灰色 | |
| 82－4<br>(図版84)<br>(図版85) | 土師器<br>高坏 | ②(9.3) | 坏部と脚部の接続部分にはヘラによると思われる傷が2箇所以上ある。坏底部の凹みは粘土塊が坏部側から挿入された痕か | 脚筒：ナデ/脚裾：斜行ハケメ後ヨコナデ | 接続：オサエ/脚筒：斜め、横方向のヘラケズリ、不定方向のハケメが残る/脚裾：ヨコナデ | 胎土：密(5㎜程度の白色粒を含む)<br>色調：内外面橙色/断面浅黄橙色 | |
| 82－5<br>(図版84) | 土師器<br>不明土製品 | ①(最大径)3.3<br>②(3.5) | | ハケメ後ナデ | | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 82－6<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(頸～肩) | ②(5.0) | | 頸：縄蓆文後ヨコナデ/肩：縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒をわずかに含む)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－7<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴中央付近) | ②(6.8) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | ナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－8<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(肩) | ②(3.8) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色 | |
| 82－9<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(肩) | ②(6.1) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－10<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(肩) | ②(5.5) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密(一部に径2.5㎜の空隙あり)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－11<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴) | ②(3.5) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－12<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴) | ②(3.7) | | 縄蓆文後螺旋状沈線文 | 横方向のナデ | 胎土：密<br>色調：青灰色 | |
| 82－13<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴下半) | ②(4.0) | | 縄蓆文後ナデ消し帯あり | 不定方向のナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒をわずかに含む)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－14<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴下半) | ②(2.3) | | 縄蓆文後沈線文 | 不定方向のナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－15<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(胴下半) | ②(3.0) | | 縄蓆文 | 不定方向のナデ | 胎土：密(砂粒の混入なし)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 82－16<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(底か) | ②(1.5) | | 縄蓆文 | 不定方向のナデ | 胎土：密(1㎜以下の赤橙色粒をわずかに含む)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 82－17<br>(図版84) | 三韓系土器<br>壷<br>(底か) | ②(4.6) | | 縄席文 | 不定方向のナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒をわずかに含む)<br>色調：青灰色/断面芯灰赤色 | |
| 83－18<br>(図版85) | 土師器<br>高坏 | ①16.5<br>②14.4<br>③13.8 | 坏部は段のつかない椀形。脚部の上半に大量に粘土を充填。 | 坏：不定方向のハケメ、指頭圧痕あり/脚筒：縦方向のナデ、指頭圧痕あり/脚裾：不定方向のナデ、指頭圧痕あり | 坏：ヨコナデ/脚筒：ケズリ後一部ナデ/脚裾：ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の微砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 赤彩(脚筒部内面を除く) |
| 83－19<br>(図版85) | 土師器<br>壷 | ①(18.6)<br>②(8.4)<br>④4.3 | | 口縁～：強いナデ/胴：タテハケメ | 口縁～：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ後シボリ又はナデか/胴：ケズリ | 胎土：密(2㎜程度の砂粒を少量含む)<br>色調：灰白色 | |
| 83－20<br>(図版87) | 土製品<br>支脚<br>(獣脚形) | ①(6.6)<br>②(17.8)<br>③(4.4) | | オサエ・ナデ後基部側をケズリ | | 胎土：やや粗(2㎜以下の砂粒、石英粒を多く含む)<br>色調：灰黄色 | |
| 83－21<br>(図版86) | 土製品<br>臼玉形<br>土製品 | ②0.6 | | ナデか | | 胎土：密<br>色調：灰白色 | |
| 83－22<br>(図版87) | 土師器<br>蓋か | ②(2.5) | | 椀状部分：横方向のミガキ/筒状部分：ナデ | 椀状部分：ナデ/筒状部分：縦方向のケズリ後ナデ | 胎土：密<br>色調：灰白色 | 赤彩 |
| 84－23<br>(図版87) | 須恵器<br>蓋 | ①(13.9)<br>②3.6 | 宝珠ツマミ | ツマミ：回転ナデ/天井：回転ヘラケズリ/口縁：回転ナデ | 口縁～：回転ナデ/天井：ナデ | 胎土：密(3㎜以下の砂粒を含む)<br>色調： | |
| 84－24<br>(図版85) | 須恵器<br>坏<br>(高台付) | ①12.8<br>②4.6<br>③7.6 | 底面の回転ナデは高台部貼付時についたもの | 体：回転ナデ/底外周：回転ナデ/底中央：静止糸切り痕 | 体：回転ナデ/底：ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：内外面灰色/断面灰赤色 | |
| 84－25<br>(図版85)<br>(図版88) | 須恵器<br>坏<br>(高台付) | ②(4.1)<br>③11.0 | | 体～高台：回転ナデ/底：回転糸切後ナデ | 回転ナデ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：オリーブ灰色 | 底部外面に墨書 |
| 84－26<br>(図版86)<br>(図版88) | 須恵器<br>坏<br>(高台付) | ①20.0<br>②4.5<br>③13.5 | | 口縁～体：回転ナデ/底：回転糸切り後部分的にナデ/高台：回転ナデ | 口縁～体：回転ナデ/底：ナデ/高台：回転ナデ | 胎土：密(5㎜大の砂粒をわずかに含む)<br>色調：オリーブ味をおびた灰白色 | 底部外面に墨書 |
| 84－27<br>(図版86)<br>(図版88) | 須恵器<br>坏<br>(高台付) | ①19.4<br>②3.9<br>③19.8 | | 口縁～体：回転ナデ/底：回転糸切り/高台：回転ナデ | 回転ナデ | 胎土：密(1㎜以下の白色砂粒を多く含む)<br>色調：体灰赤色/底灰オリーブ色 | 底部外面に墨書 |
| 84－28<br>(図版86) | 土製品<br>支脚 | ②(11.3) | 縦長・棒状の粘土を何回も詰めて成形 | ナデ | ナデ | 胎土：2㎜以下の石英粒、砂粒を少し含む<br>色調：浅黄橙色 | 一部被熱 |
| 84－29<br>(図版86) | 土製品<br>支脚 | ①2.5<br>②(4.8)<br>③2.7 | ミニチュア | ナデ | ナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒を少し含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 84－30<br>(図版86) | 土師器<br>坏 | ①17.5<br>②5.0<br>③13.0 | | 底：ケズリ | | 胎土：砂粒を含む<br>色調：薄い茶褐色、浅黄色～橙色 | 赤彩(内面に暗文) |
| 85－31<br>(図版86) | 須恵器<br>片口鉢 | ①21.2<br>②10.2<br>③14.2 | | 回転ナデ | 回転ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>釉調：灰白色 | |
| 85－32<br>(図版87) | 陶磁器<br>碗 | ②(2.5) | | | | 磁土：精選され細かい<br>色調：オリーブ色がかった灰色 | 口縁の一部に釉薬の垂れ |
| 85－33<br>(図版87) | 陶磁器<br>碗 | ②(3.0)<br>③7.5 | 高台は回転ヘラケズリによる削り出し | | 底部近くに1条の沈線 | 磁土：密(2㎜程度の砂粒、長石粒を含む)<br>釉調：オリーブがかった灰白色 | 施釉(体部外面下半部を除く) |
| 85－34<br>(図版87) | 陶磁器<br>碗 | ②(1.8)<br>③(7.2) | 低く幅広い高台が付く | 高台：回転ナデ | | 磁土：やや粗(黒色砂粒を含む)<br>釉調：明オリーブ灰色 | 施釉(高台部を除く)。内外面とも細かな貫入が多い。 |
| 85－35<br>(図版87) | 土師器<br>甕又は壷<br>(口縁) | ②(5.0) | | ヨコナデ後羽状文 | ヨコナデ | やや粗(5㎜以下の砂粒、雲母細片を含む)<br>胎土：浅黄橙色 | |

## 6区包含層　出土石器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 出土地点 | 種　別 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 研磨・使用状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 86－36 | 14層 | 管玉 | 碧玉 | 1.9 | 0.42 | | 0.34 | 表面にわずかに斜めの研磨痕が残る。少しずつ回転させながら上下方向に研磨したものか。穿孔時薄くなりすぎて側面の一部が壊れ、孔があいている | |
| 86－37<br>(図版87) | N-41 | 砥石 | 細粒花崗岩<br>又は流紋岩 | 42.4 | 18.7 | 15.4 | 16,000<br>(16kg) | 側面のうち7面が使用済み。残る1面は途中まで使用している。上方、下方の面も一部平滑になっており、使用と中途と思われる | |
| 86－38<br>(図版87) | N-41 | 砥石 | 細粒花崗岩 | 28.2 | 16.4 | 14.0 | 7,100<br>(7.1kg) | 側面を中心に8面が使用済み。残りの2面は使いかけで一部は未使用の状態で残る。残りの1面は未使用 | |

に埋没中に破損したと思われる孔があいている。37・38は大型の砥石で、据え付けて使用されたと見られる。

**註**

（1）近藤正・前島己基「島根県松江市的場土坑墓」(『考古学雑誌』57巻4号、1972年)

（2）『大角山遺跡発掘調査報告書』(島根県教育委員会、1988年)

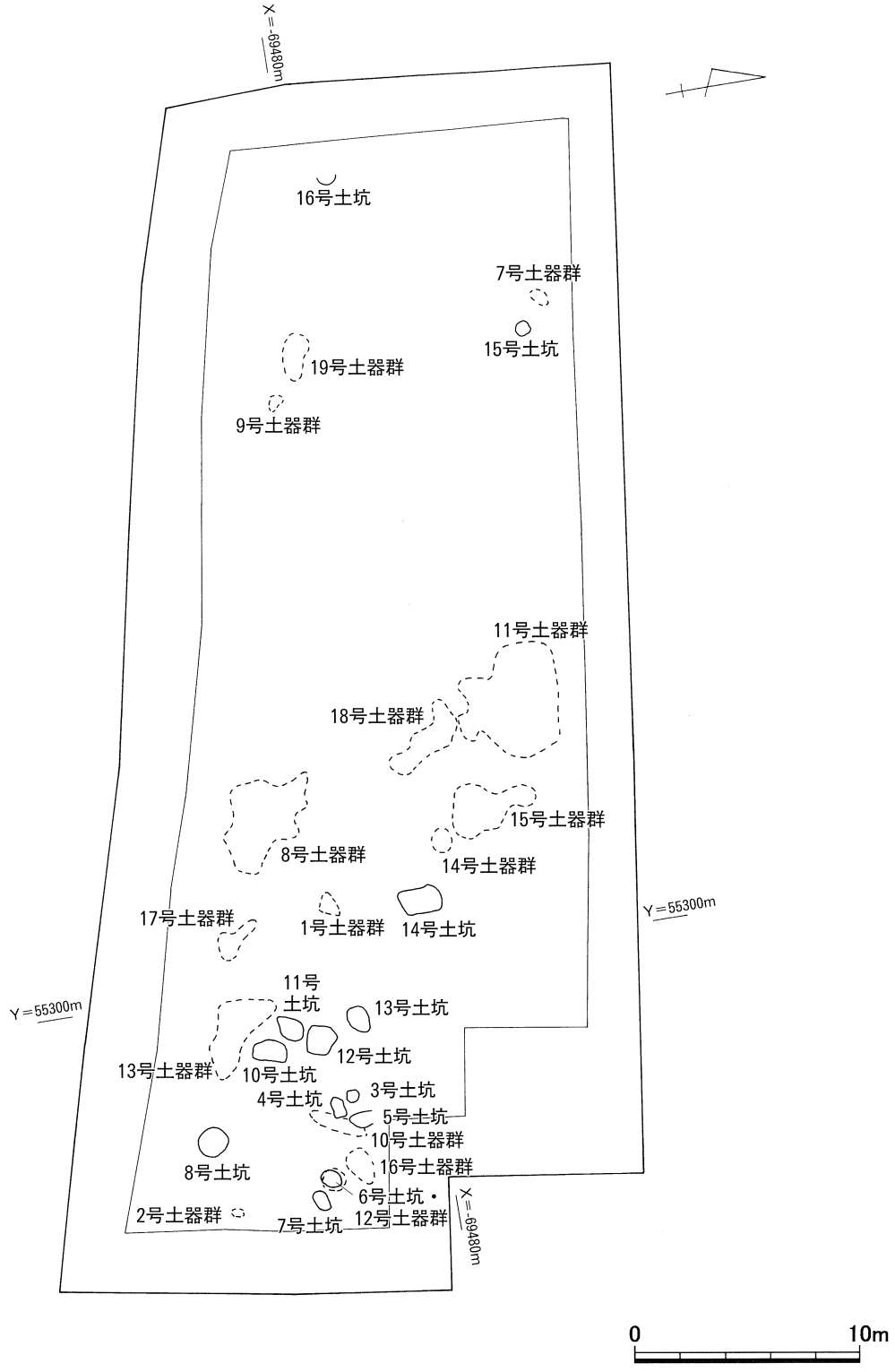
（3）当埋蔵文化財調査センター職員内田律雄の教示による。

（4）同上

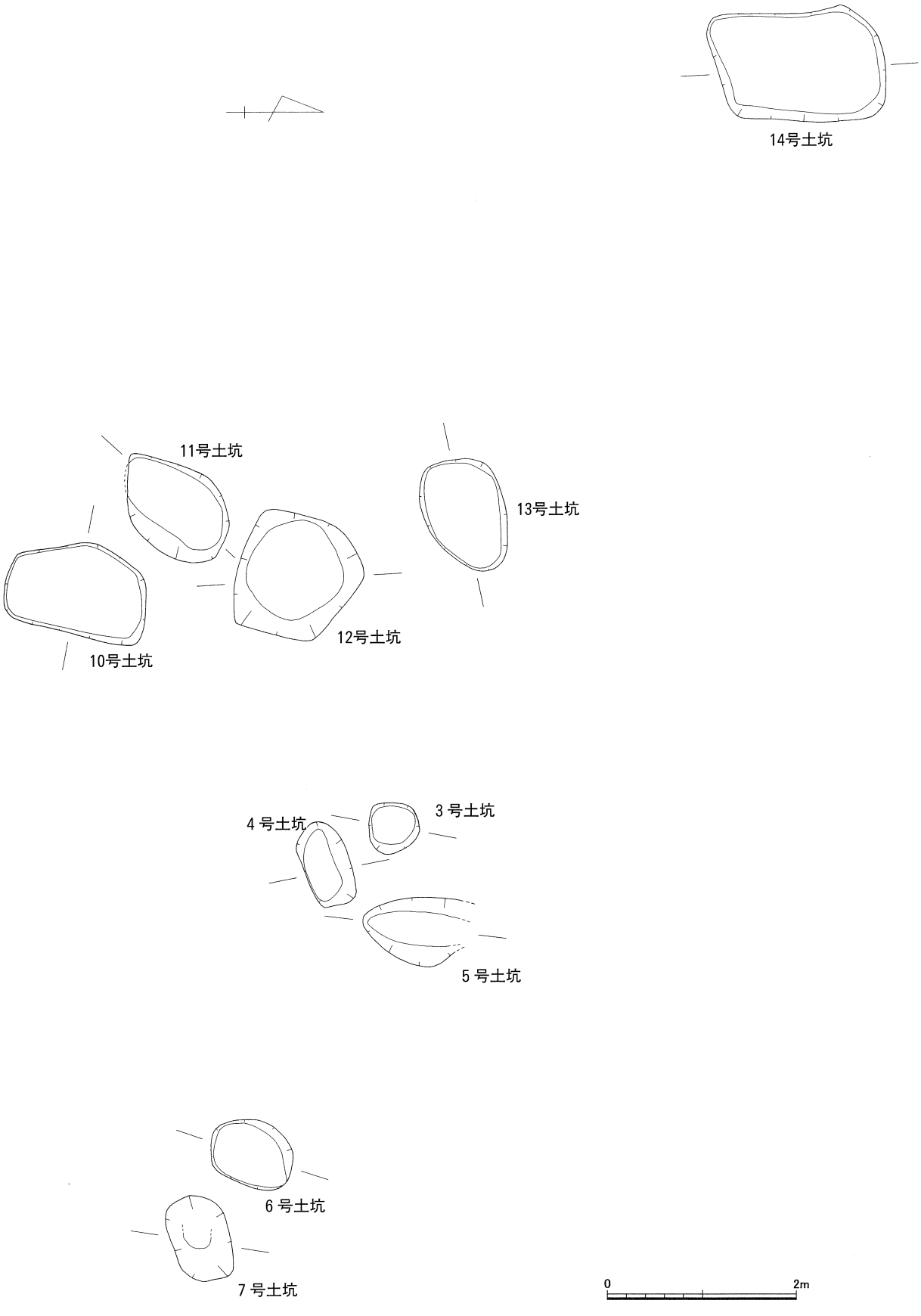
## 第2節　5区の調査

### 14層の遺構・土器群の位置関係（第87図）

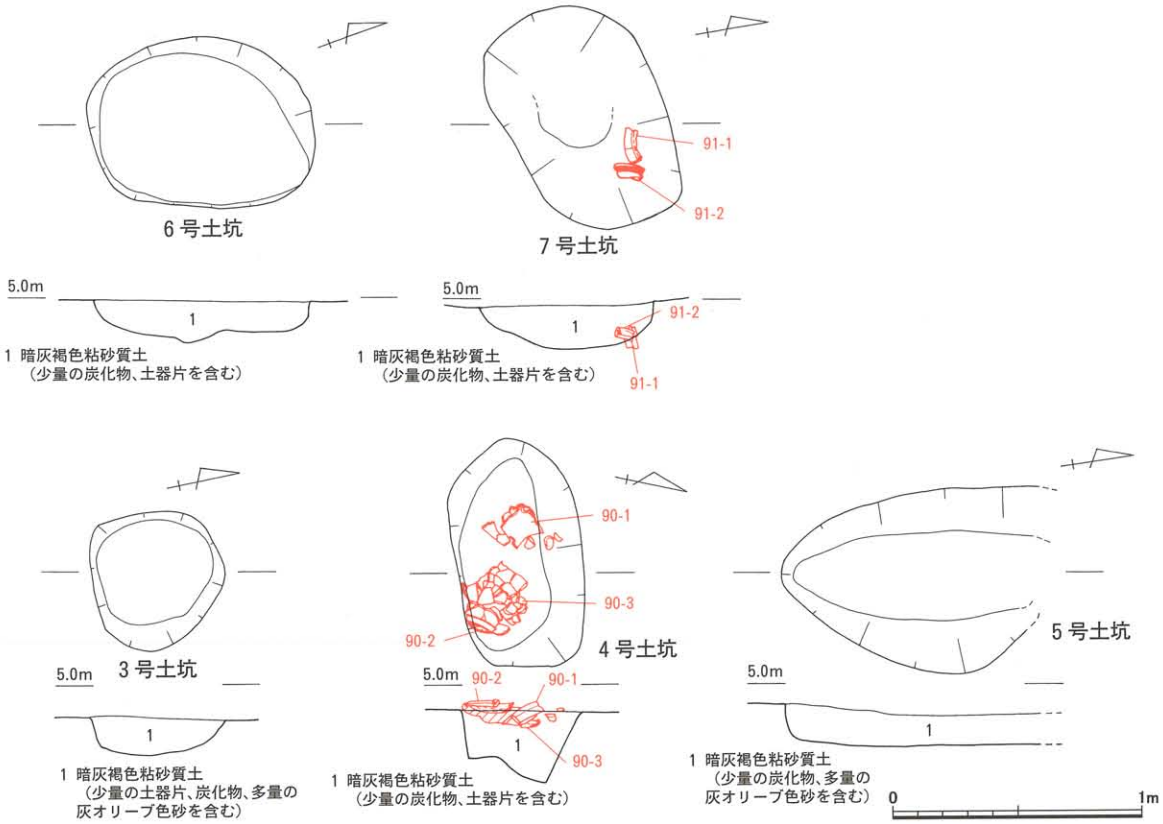
14層の土坑・土器群は調査区東半分に集中する。時期は古墳前期が主体である。遺物量が最大である11号土器群はその集中部分の西端に当たる。調査区中央の空白地帯を挟んで調査区西端にも土



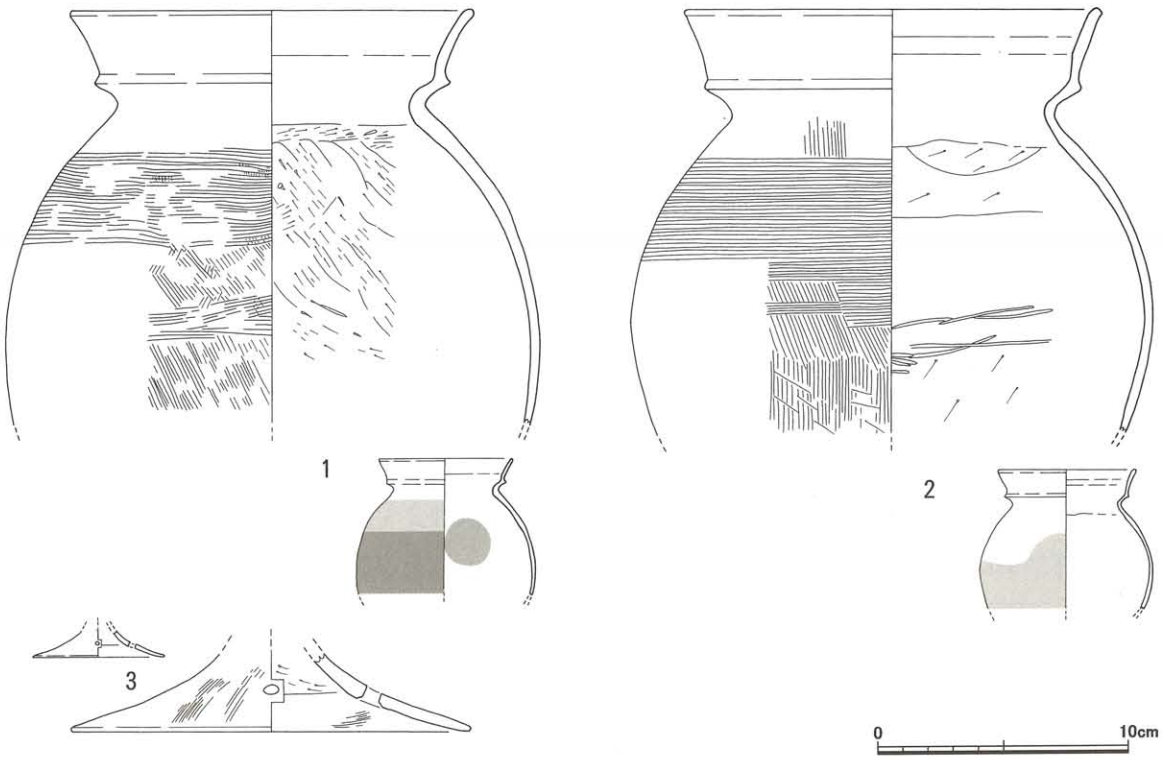

第87図　5区14層の遺構（S＝1/300）




第88図　5 区14層 調査区東部検出土坑の位置関係（S＝1/60）

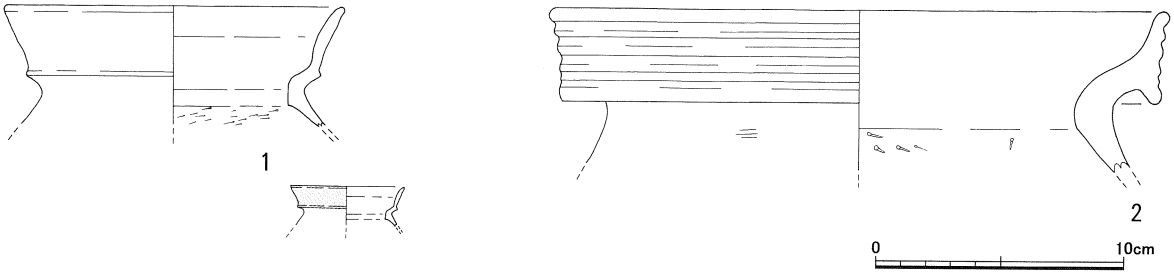



第89図　5区14層 3～7号土坑及び遺物出土位置（S＝1/30）




第90図　5区14層 4号土坑出土遺物（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ




第91図　5区14層　7号土坑出土遺物（S＝1/3）
遺物図面(1/3)の凡例：▒ 薄いスス

坑や土器群が分布するが、東半分ほどの密度はない。また、他の遺構・土器群よりも古い弥生後期中葉の19号土器群が調査区南西部で検出されている。

**14層東半部の土坑（第88図）**

複数の土坑がいくつかのグループをなして存在している。東から順に、6・7号土坑、3～5号土坑、10～13号土坑の3箇所のグループが確認される。これらの土坑は調査区北東隅から西方向へベルト状に並び、13号土器群のすぐ東で切れる（第87図）。

ベルト状に土坑が密集する範囲から離れて単独で検出された土坑として、8号土坑（第94図）と14号土坑（第88・92図）とがある。8号土坑は調査区南東端で、14号土坑は北西に離れた位置で検出された。

3～5号土坑と6・7号土坑との間には14層の土坑が確認されない。ただし、この位置には13層上面から掘り込まれた6号溝状遺構が南北に通っているので（第141図）、もとから空白地帯であったと断定できない。本来はこの位置の14層上面にも遺構や土器群があったのが、6号溝状遺構によって切られ、消滅している可能性もある。6号溝状遺構の底面に古墳前期の土器が散乱しているのは、そのような土坑や土器群の遺物が混入したと考えられ、溝状遺構の年代を示すものではないと思われる。

土坑の埋土は暗灰褐色土で、粘質土と砂質土が混ざりあった土である。

土坑の分布範囲と土器群の分布範囲は緩やかに分かれている。土坑の分布範囲の南側から西側へかけて、土坑群を取り囲むように土器群が並ぶ配置になっている。土坑が密集する部分の南西端に当たるのが10・11号土坑であるが、13号土器群はそれらの南側に隣接する。2号土器群も土坑の密集部分から南に離れている。14号土坑は土坑の密集地帯からは北西にはずれた位置にあるが、11・14・15・18号土器群はさらに西側に位置している。8号土坑は2・13号土器群に挟まれる位置にあるが、遺物が出土していない時期不明の土坑であり、他の土坑から孤立しているので、同時期の遺構であるかは確定的でない。

土坑が密集する部分と土器群の位置が完全に重なるのは10・12号土器群の2箇所であるが、このうち12号土器群は6号土坑の直上から出土している。

**14層　3～7号土坑（第89図）**

3～5号土坑は7号土坑から2m西の位置で、調査区北端近くから検出された。

3号土坑は径55cm、深さ30cmの円形の土坑である。底面は中央が下がってすり鉢状になる。埋土

## 5区14層　4号土坑出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 90－1<br>(図版89) | 土師器<br>甕 | ①16.0<br>②(16.6)<br>④2.9 | 口縁下端は横へ突出 | 口縁：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：2～3㎜の石英粒、金雲母細片を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 90－2<br>(図版89) | 土師器<br>甕 | ①(16.4)<br>②(17.0)<br>④3.2 | | 口縁～肩：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ/胴最大径付近：ヘラ状工具による加工 | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 90－3<br>(図版89) | 土師器<br>高坏<br>(脚) | ②(3.2)<br>③15.9 | 脚裾部に1箇所穿孔。外面から内面へ穿孔か | ハケメ後ナデ | 脚筒：ケズリ/脚裾：ハケメ後ナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |

## 5区14層　7号土坑出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 91－1<br>(図版89) | 弥生土器<br>甕 | ①13.6<br>②(4.8)<br>④2.8 | 口縁端部に面はないが接地を意識した内面加工。端部をわずかに引き出す | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜以下の金雲母細片を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 91－2<br>(図版89) | 弥生土器<br>甕 | ①24.6<br>②(6.4)<br>④3.7 | 口縁下端は下へ突出 | 口縁：凹/頸：ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ及び強いナデ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜以下の石英粒、赤褐色粒、金雲母細片を含む<br>色調：浅黄橙色 | 内面赤彩か |

は炭化物を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。

4号土坑は長径1m、短径50cmと細長く、一見溝状の土坑である。遺物は、複合口縁甕（90－1・2）が、ともに横倒しの状態で出土した。1・2は出土位置が5cm程度離れているので、当初から離して置かれていたと見られる。両者ともおおよそ口縁部が東、底部が西を向くが、完全に同じ方向ではなく約40度向きがずれる。当初から横置きだったか、正置していたものが土坑内で横転したのかは定かでない。高坏3は2の胴部破片に混ざって出土している。

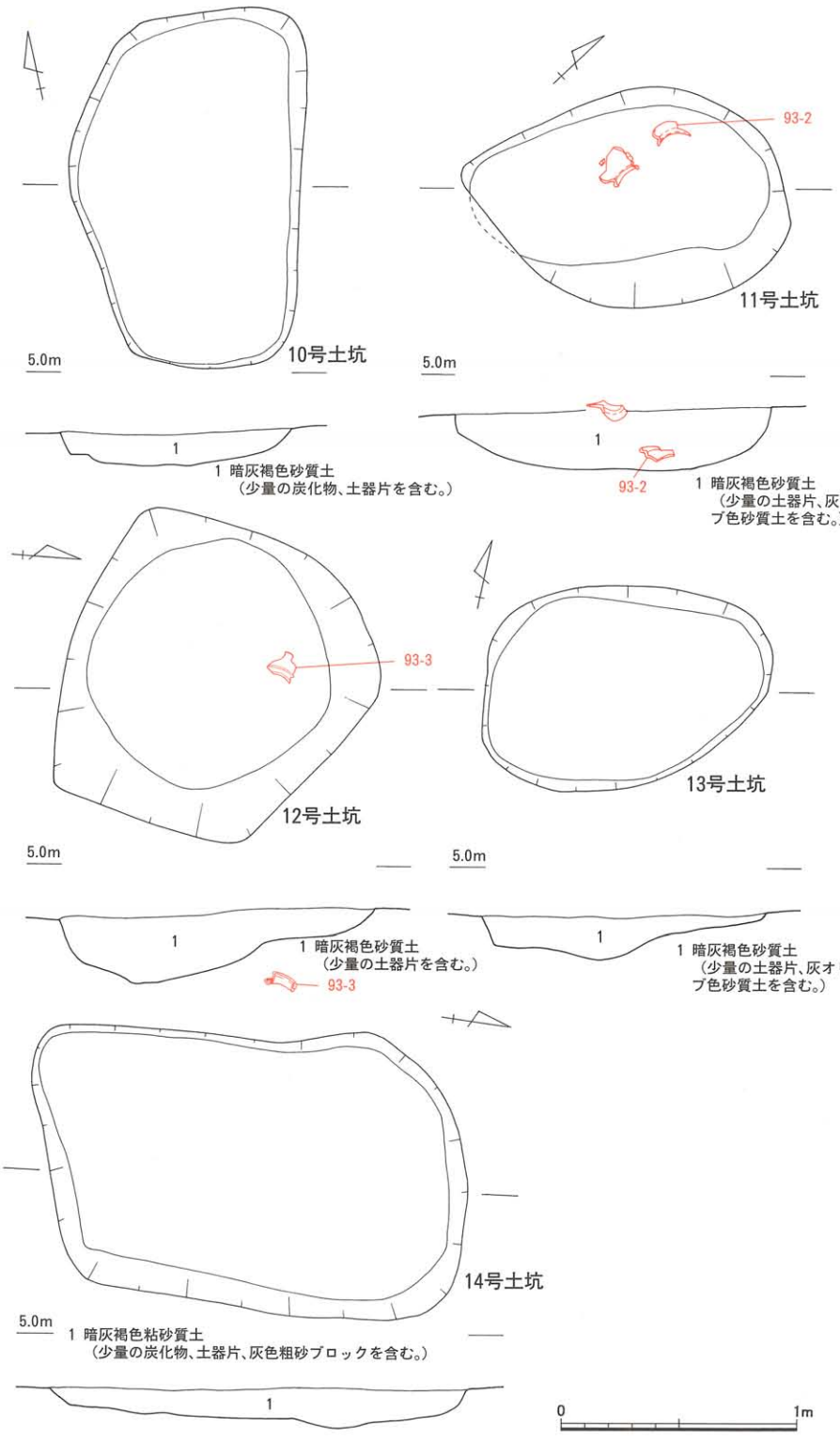
5号土坑は長径1.1m、短径70cmと南北に細長い土坑である。北端は調査区壁にかかっているため、現存部分より長くなる。深さは底面の南から北まで25cmと一様である。遺物は出土していない。

6・7号土坑は調査区東端付近で検出された。

6号土坑は長径90cm、短径70cmの南北に長い楕円形の土坑である。深さは20～30cmである。輪郭は比較的明瞭であったが、底面付近では埋土と周囲の土との区別ができず、底面の下まで半裁してしまった。このため、完掘後の底面の形は段差がついている。上面から多量の土器が出土している。この土器群は当初単なる土器群としか認識していなかった（12号土器群、第118図）が、土器群取り上げ後の精査で下から土坑が検出された。

7号土坑は6号土坑の東隣で検出された。長径90cm、短径80cmを測る東西に長い楕円形の土坑である。実際の底面の深さは40cmであるが、ここでも埋土と周囲の土の区別は困難で、底面より深く半裁してしまった。掘りすぎに気づいた時点で噴砂が検出された（写真図版編図版28下段）。7号土坑の底面には達していないので、7号土坑の時期（弥生後期末、Ⅴ－4様式）以前の地震による噴砂である。

遺物は底面近くから、弥生後期の甕の口縁部が2点出土した。破片のみであるが、2点が接した




第92図　5区14層 10～14号土坑及び遺物出土状況（S＝1/30）

位置で出土し、口縁の向きは横向きであった。

**14層　4号土坑出土遺物（第90図）**

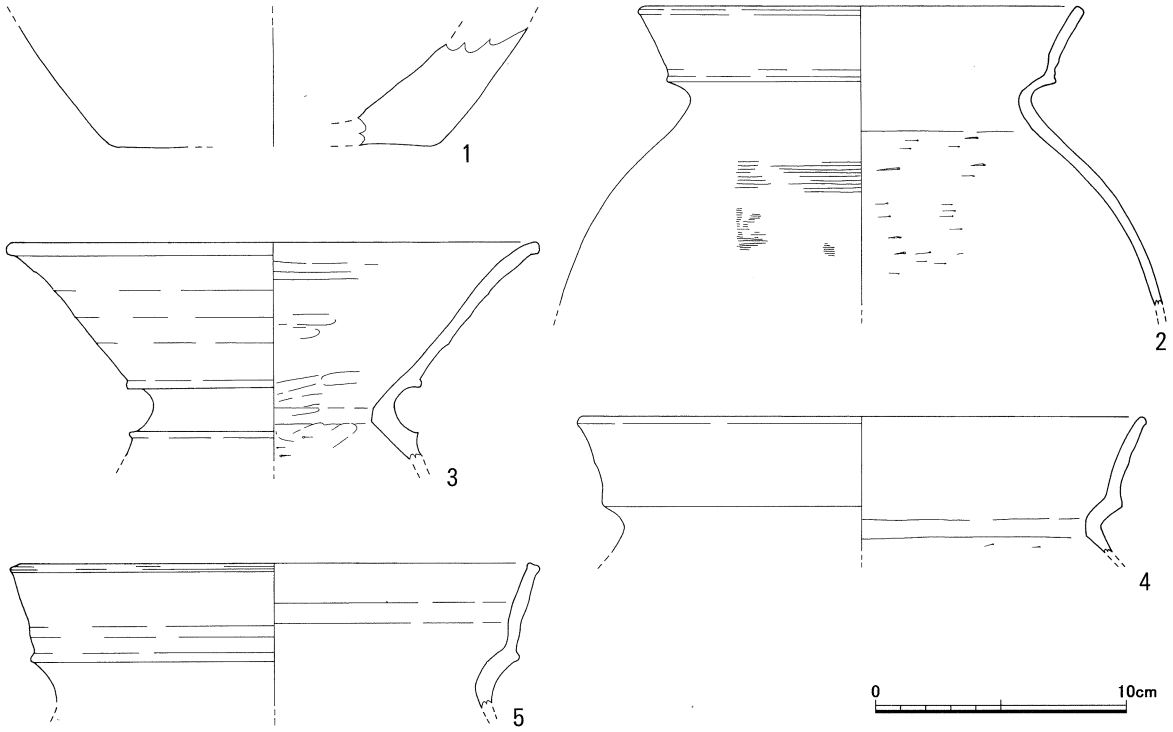
複合口縁の甕2点と脚部が短い高坏1点が出土している。90－1・2ともに口縁端部は面を作らない。胴部はなで肩で球形に近いプロポーションである。器壁は薄い。2の内面には、ヘラケズリ調整が一通り済んだ後、胴部最大径付近で横方向にヘラ状工具による傷跡がつけられている。外面肩部の平行ハケメよりもわずかに下の位置である。目的は不明だが、肩部分の整形に関連したものか。高坏は脚部のみが出土した。外面から1箇所穿孔される。

甕の外面の上半分はススが薄いか風化して消滅し、下半分ではススが濃く残る。1は内面に薄いコゲが残る。高坏にも薄いススが残るようであるが、不明瞭である。

**14層　7号土坑出土遺物（第91図）**

複合口縁の甕が2点出土している。91－1の複合口縁下端は横への突出が明瞭でない。2は複合口縁下端が下へのび、外面には凹線が施され、弥生時代後期に遡る。

ススは口縁部の外面にのみ付着する。




第93図　5区14層 10号～14号土坑出土遺物（S＝1/3）

**14層　10～14号土坑（第92図）**

3号土坑の西1.5mの位置で、4穴の土坑が南北に並ぶように検出された（10～13号土坑）。3～5号土坑との間は土坑の無い空白地帯である。4穴の土坑の南には13号土器群があり、これより南西は土坑にかわって土器群が多く検出される。

10号土坑は南北1.5m、東西1.0mと南北に長い長方形～五角形の土坑である。深さは20cmと浅く、底面の深さがほとんど変わらず一様である。埋土中から出土した遺物（93－1）から、弥生時代に遡る遺構の可能性がある。

11号土坑は長径1.3m、短径95cmの楕円形の土坑である。深さは検出面から25cmでほぼ一様である。出土遺物は、図化できたもので、複合口縁の甕（93－2）がある。土坑底面付近から破片のみ出土しており、口縁が横を向いた状態であった。この土坑の時期も弥生後期まで遡る。

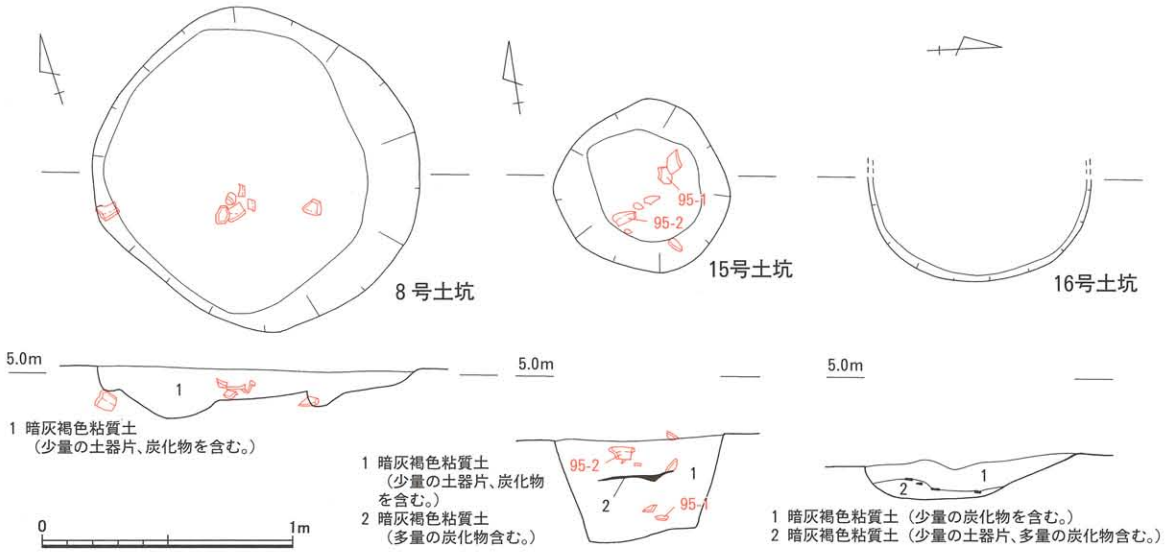
12号土坑は、最も長い東辺の長さ一辺1.3mの五角形状となる。底面は、南半分が北半分よりも約40cm深い、段掘り状となる。遺物は鼓形器台の破片（93－3）が内面を下へ向けた状態で底面付近から出土している。

13号土坑は長径1.2m、短径90cmの東西に長い楕円形である。底面は中央部が深くなるが、最も深い部分でも25cmと浅い。埋土から複合口縁の甕（93－4）の破片が出土している。

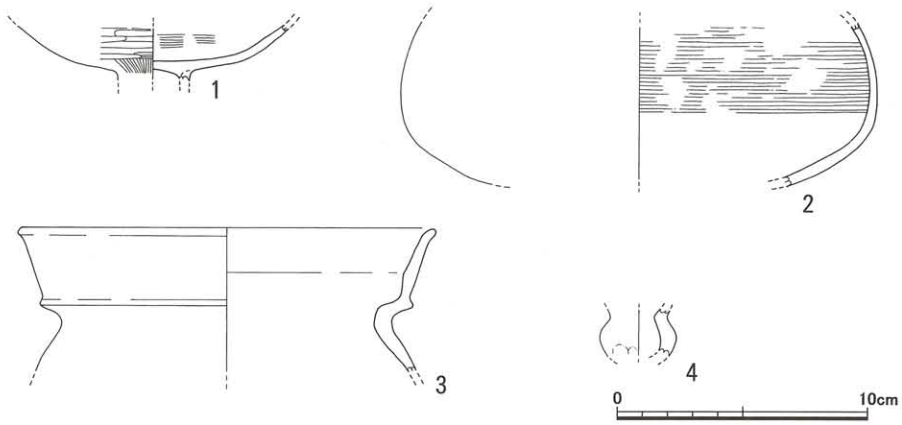
14号土坑は他の4穴から北西に離れた位置で検出された。調査区東半部の土坑群の中では最西端に当たり、これより西は複数の土器群が分布する（11・14・15・18号土器群）。

**遺物（第93図）**

10号土坑からは大形の甕又は壺の底部（1）が出土している。広く厚い平底を持つ。2㎜大の砂粒を多量に含んだ粗い胎土である。土坑の時期は弥生時代まで遡るであろう。2は11号土坑から出




第94図　5区14層　8号・15号・16号土坑及び遺物出土状況（S＝1/30）




第95図　5区14層　15号土坑出土遺物（S＝1/3）

土した複合口縁の甕である。複合口縁下端の横への突出は弱く、器壁が薄い。口縁端部には面がなく丸い。3は12号土坑から出土した鼓形器台である。筒部は短小化している。4は13号土坑から出土した複合口縁の甕の破片である。複合口縁部はゆるく外反し、口縁下端が横へも下へも突出しない。凹線や擬凹線は見られない弥生後期のV－4様式に属する。5は、14号土坑から出土した複合口縁の甕の破片である。複合口縁部は外傾して直線的にのびる。口縁端部は先端を潰して明瞭な面が作られている。頸部の径は口縁下端とあまり変わらず、しまりのない印象を与える。古墳前期に属する。

## 14層　8・15・16号土坑（第94図）

### 14層　8号土坑

調査区東端に密集している土坑群から南に離れた調査区南端付近で検出された、径1.3mの円形の土坑である。底面の深さは検出面から20～40cmとばらつきがあり、一様でない。完掘後は二段掘りの様相を呈したが（写真図版29中段）、掘りすぎによる。中央が深くなる傾向はあっても、明確な二段掘りではなかったと思われる（第94図土層断面図）。

遺物は土坑の底面中心部に集中して出土している。複合口縁の甕などがあるが、図化できない小片であった。

### 5区14層　10号出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－1（図版90） | 弥生土器（底） | ②(4.8) ③12.5 | | 胴：ミガキ/底：ナデか | 不明 | 胎土：粗(3.5㎜以下の砂礫、砂粒を多く含む) 色調：灰白色 | 焼成やや不良 |

### 5区14層　11号土坑出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－2（図版89） | 弥生土器甕 | ①17.2 ②(12.0) ④3.0 | 口縁端部に面がなく丸い。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：3㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を多く含む 色調：灰白色～浅黄橙色 | |

### 5区14層　12号土坑出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－3（図版89） | 土師器鼓形器台 | ①21.0 ②(8.8) | | ヨコナデ | 器受：ミガキ/筒：ミガキか | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む 色調：浅黄橙色～褐灰色 | |

### 5区14層　13号土坑出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－4（図版90） | 弥生土器甕 | ①22.3 ②(5.4) ④3.5 | 口縁端部は丸い | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む 色調：灰白色 | |

### 5区14層　14号土坑出土土器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径cm ②器高cm ③底径cm ④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－5（図版90） | 土師器甕 | ①20.3 ②(5.8) ④3.8 | 口縁端部に外傾する面あり | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む 色調：灰白色 | |

### 15号土坑

調査区北西部で検出された、径70cmと小規模な円形の土坑である。埋土は暗灰褐色粘質土が主体であるが、底面から25cm上に多量の炭化物を含む層が挟まっている。北西1mの地点では、7号土器群も検出されている。

遺物はこの炭化物層の下から低脚坏（95－1）、上から坏（2）が出土した。2は内面を上へ向けた状態であった。それ以外の3・4は埋土中からの出土である。

**遺物（第95図）**

高坏、坏、複合口縁の甕、ミニチュア土器が各1点出土している。95－1の底部中央には、脚部

## 5区14層　15号土坑出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 95－1<br>(図版90) | 土師器<br>低脚坏 | ②(2.3) | 坏底部中央には脚部と接続するための刺突痕多数 | 坏上面：横方向のミガキ/坏下半：ハケメ | ハケメ後ミガキ | 胎土：密(1㎜以下の微細な砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 95－2<br>(図版90) | 土師器<br>坏 | ①(胴部径)<br>17.6<br>②(6.5) | | 不明 | 胴：横方向のハケメ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | 椀形の坏の胴部か。内面のハケメは特異。 |
| 95－3<br>(図版90) | 土師器<br>甕 | ①16.4<br>②(5.7)<br>④3.2 | 口縁端部を外へ折る | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色～褐灰色 | |
| 95－4<br>(図版90) | 土師器<br>ミニチュア土器 | ②(1.9) | 甕の小形品か | 頸～胴上半：ナデ/胴下半：オサエ | ナデか | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色～灰黄色 | |

上面と接着する面積を広く採るため、多数のキズが付けられている。2は上端・下端は欠損するが、坏であろう。内面はハケメ調整される。不規則なハケメではなく、最大径付近で横方向に一周している。坏として使用する際に目立つ箇所であり文様を意識した可能性もある。3は口縁端部を外へ折る。4はミニチュア土器である。壺を意識したと見られ、頸部から底部直上までが残る。底部付近には圧痕が残る。

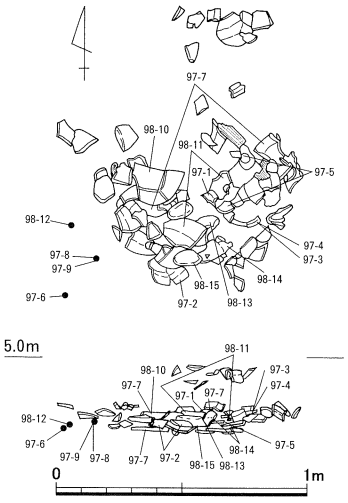
**16号土坑**

調査区西端の壁にかかる位置で検出された。全形は、径85cmの円形の土坑と推定される。底面に近い層には炭化物が集中する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

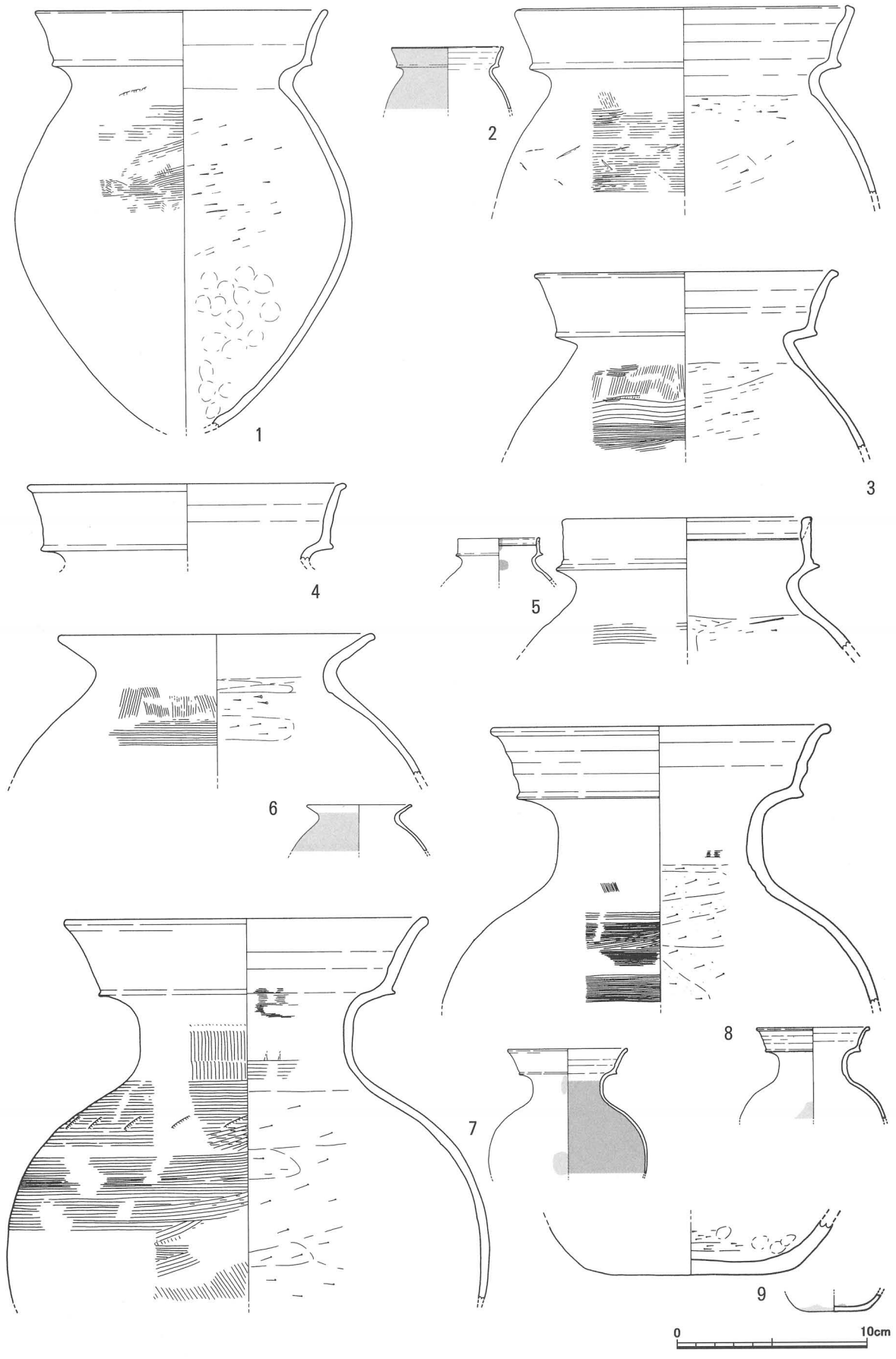
### 14層　1号土器群（第96図）

調査区中央で検出された土器群である。土器群直下は周囲よりわずかに炭化物を多く含んでいたので、当初は土坑を予想した。だが、遺物取り上げ後の精査でも遺構の輪郭が明らかにならなかったので、土器群とせざるを得なかったが、本来は極浅い土坑に伴うものであった可能性が大きい。

97－2は内面を上へ向け、口縁部を南へ向けた横倒れの状態で出土した。3・4は出土位置が近接しているため、同一個体の可能性もあるが接合しなかった。口縁部を下に向けた倒立の状態で出土している。ただし、これと対になる胴部の破片は位置が確認できない。5は98－11を挟んで南と北とに分かれた位置から出土している。6・8・9・12は土器が集中する部分からはやや離れて（20cm前後）出土しているが、これより外側はしばらく遺物が無くなるので、これらが土器群の西端に当たると判断した。壺（7）の破片は離れた位置から出土している。原位置を保っているとは考えられず、破砕された状態で廃棄又は置かれた可能性が高い。8・9は出土位置のみ判明している壺の口縁部と底部である。出土位置が同じであるから、同一個体である可能性が高い。10は坏部内面を上へ向けた状態で出土した。これは正置されていた可能性が高い。11は坏部と脚部が離れて出土し、脚部が横転状態、坏部が内面を上へ向けた状態であ

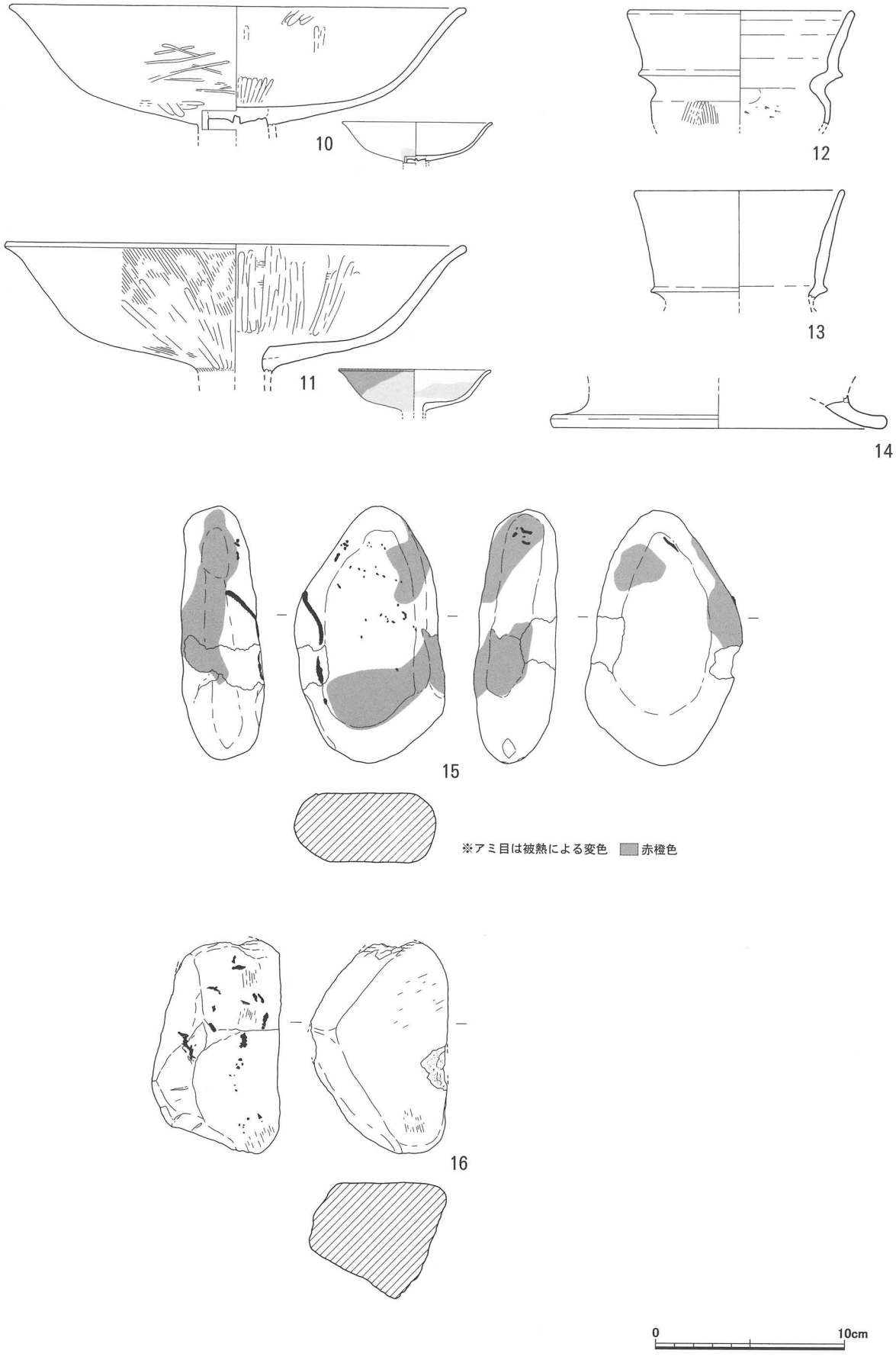



**第96図　5区14層　1号土器群出土状況**（S＝1/30）




第97図　5区14層　1号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　薄いコゲ




第98図　5区14層　1号土器群出土遺物（2）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　汚れ

## 5区14層　1号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97－1<br>(図版91) | 土師器<br>甕 | ①15.3<br>②(22.0)<br>④2.9 | 胴部下半内面に指オサエが多く、型作りか。やや肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴上半：不定方向のハケメ/胴下半：ナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：ケズリ/胴下半：オサエ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色～淡橙色 | |
| 97－2<br>(図版91) | 土師器<br>甕 | ①17.1<br>②(9.9)<br>④3.1 | 口縁端部に面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ後羽状文(ヘラ状工具) | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜の砂礫、砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色～淡橙色 | |
| 97－3<br>(図版90) | 土師器<br>甕 | ①15.5<br>②(9.4)<br>④3.3 | 口縁端部に外傾する面あり。先端を潰して面を作る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：タテハケメ後波状文(櫛状工具)/胴：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | 波状文はほとんど波打っていない |
| 97－4<br>(図版91) | 土師器<br>甕 | ①16.6<br>②(4.1)<br>④3.4 | 口縁端部を外へ向って折ったか | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 97－5<br>(図版91) | 土師器<br>甕 | ①13.0<br>②(7.1)<br>④2.6 | 口縁端部には、わずかに内傾する面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：粗いハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：にぶい黄色～灰白色～黒色 | |
| 97－6<br>(図版90) | 土師器<br>甕 | ①16.3<br>②(7.6) | 口縁端部には面があるようだが不明瞭 | 口縁：ヨコナデ/頸：タテハケメ後ナデ/肩：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ミガキ/胴：ケズリ | 胎土：1.5㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 97－7<br>(図版90) | 土師器<br>壷 | ①19.1<br>②(20.2)<br>④4.0 | 口縁下端は横突出 | 口縁～：ヨコナデ/頸：タテハケメ/肩～：刺突文(貝殻状工具)、横方向中心の粗いハケメ | 口縁：ヨコナデ後ハケメ/頸上半：ハケメ後ナデ/頸下半：横方向の粗いハケメ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 頸部外面に赤彩痕。口縁外面の一部に黒斑。 |
| 97－8<br>(図版90) | 土師器<br>壷 | ①(17.5)<br>②(14.7)<br>④3.7 | 口縁端部がわずかに外反 | 口縁～頸：ヨコナデ/頸～肩：タテハケメ/肩～胴：ヨコハケメ | 口縁～：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ後ヨコナデか/胴：ケズリ | 胎土：密(2㎜大の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 口縁外面の一部に黒斑 |
| 97－9<br>(図版91) | 土師器<br>壷<br>(底) | ②(2.7)<br>③11.4 | | 胴～底：ナデ | ケズリ・オサエ | 胎土：2～3㎜の砂礫、1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | 97－8の底部 |
| 98－10<br>(図版91) | 土師器<br>高坏 | ①23.8<br>②(6.7) | | ミガキ | ミガキ | 胎土：3㎜に砂礫、1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色～黄橙色 | 内外面に黒斑 |
| 98－11<br>(図版91) | 土師器<br>高坏 | ①24.1<br>②(6.8) | 口縁端部に面あり。接地せず。先端を潰して面を作る。坏部と脚部は円板を充填して接続 | ハケメ後ミガキ | ハケメ後ミガキ | 胎土：密(2㎜以下の砂礫、砂粒、金雲母細片を含む)<br>色調：にぶい黄橙色～褐灰色 | |
| 98－12<br>(図版91) | 土師器<br>小形壷 | ①11.7<br>②(6.0)<br>④3.4 | 胴部径が口径より小さい。口縁部と胴部の高さはほぼ同じ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：タテハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰黄色 | |
| 98－13<br>(図版91) | 土師器<br>直口壷 | ①10.8<br>②(5.7)<br>④5.3 | | 不明 | 不明 | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 98－14<br>(図版90) | 土師器<br>器種不明<br>(脚台) | ②(1.8)<br>③17.4 | | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |

る。脚部上面が坏底部とは別の方向を向いて倒れている。13は内面が上を向き、斜めに倒れた状態である。甕5や壷7の破片は互いに離れた位置から出土している。また、土器片の上に土器片が重なって累積する状態であることから、この土器群の土器は廃棄されたものと推定される。

**遺物（第97・98図）**

甕は複合口縁で外傾するもの（97－1～4）、直立するもの（5）と単純口縁のもの（6）がある。1は口縁端部の面がはっきりせずなで肩である。底部内面には多数の指頭圧痕がある。型に押しつけて成形したと見られる。97－2は口縁端部をわずかに内側へ折る。3は口縁端部の先端を潰して面を作り、端部が外側へ肥厚する。1～3とも複合口縁下端が水平に近く、しまりがあるよう

5区14層　1号土器群出土石器観察表

| 挿図番号（写真図版） | 出土地点 | 種　別 | 石　材 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | 研磨・使用状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 98－15（図版91） | 14層 | 砥石又は金床石か | アプライト | 13.5 | 7.5 | 4.3 | 628.04 | 鉄分が表面から左側へ流れた跡あり。ほぼ全体に薄く被熱して赤変 | |
| 98－16（図版91） | 14層 | 砥石 | | 11.1 | 7.25 | 6.6 | 662.32 | 3面使用か。鉄分の付着多い | |

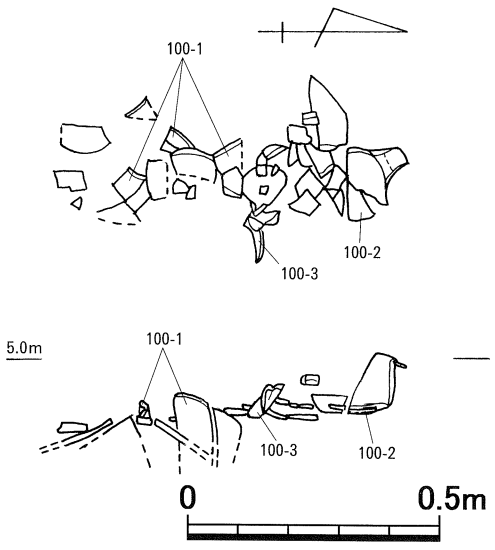
に見える。4は口縁端部を折り曲げるため、外観が玉縁状となる。5は口縁部を一旦成形した後、内面に粘土を貼り足して補強しており、貼り足した部分はわずかなくびれとなって内面に残る。6の口縁部は大きく開く。口縁端部に面があるようだが明瞭でない。7・8は複合口縁の壺である。7は口縁の下端から頸部へ切れ目なしに作られる。器壁は薄い。8の口縁端部は下へ折られ玉縁状となる。9は壺又は甕の底部である。厚い平底で、指頭圧痕が残る。高坏は98－10・11の2点である。10は坏部と脚部を接続後円板を充填する。11も、割れ口の生きている部分の形から、円板が充填されていたと見られる。12は胴部径が口径より小さく、小形丸底壺と見られる。完形であれば、口縁部と胴部の高さは、ほとんど変わらなかったと思われる。調整は中形の甕と大差ない。13はさらに口縁部の長い直口壺である。14は上半分が欠損しているが、大形の低脚坏または台付甕（壺）などの脚台部であろう。これらの土器は、4・8のように玉縁状の複合口縁を持つものを含むので、小谷3式に位置づけられよう。15は各面が被熱して薄赤くなっているので金床石か、または平滑になっている面があることから砥石の可能性が考えられる。15・16ともに鉄分が多く付着する。

ススやコゲは残りが悪く、甕のうち1・3・4では確認できない。一方で壺7や8も外面にススが付着しているので、壺でも貯蔵だけでなく、火にかけて使う場合もあったと思われる。高坏は10・11ともに外面にススが付着する。11の外面のススは口縁部側の方が濃く、逆に内面のコゲは底部中心が濃い。

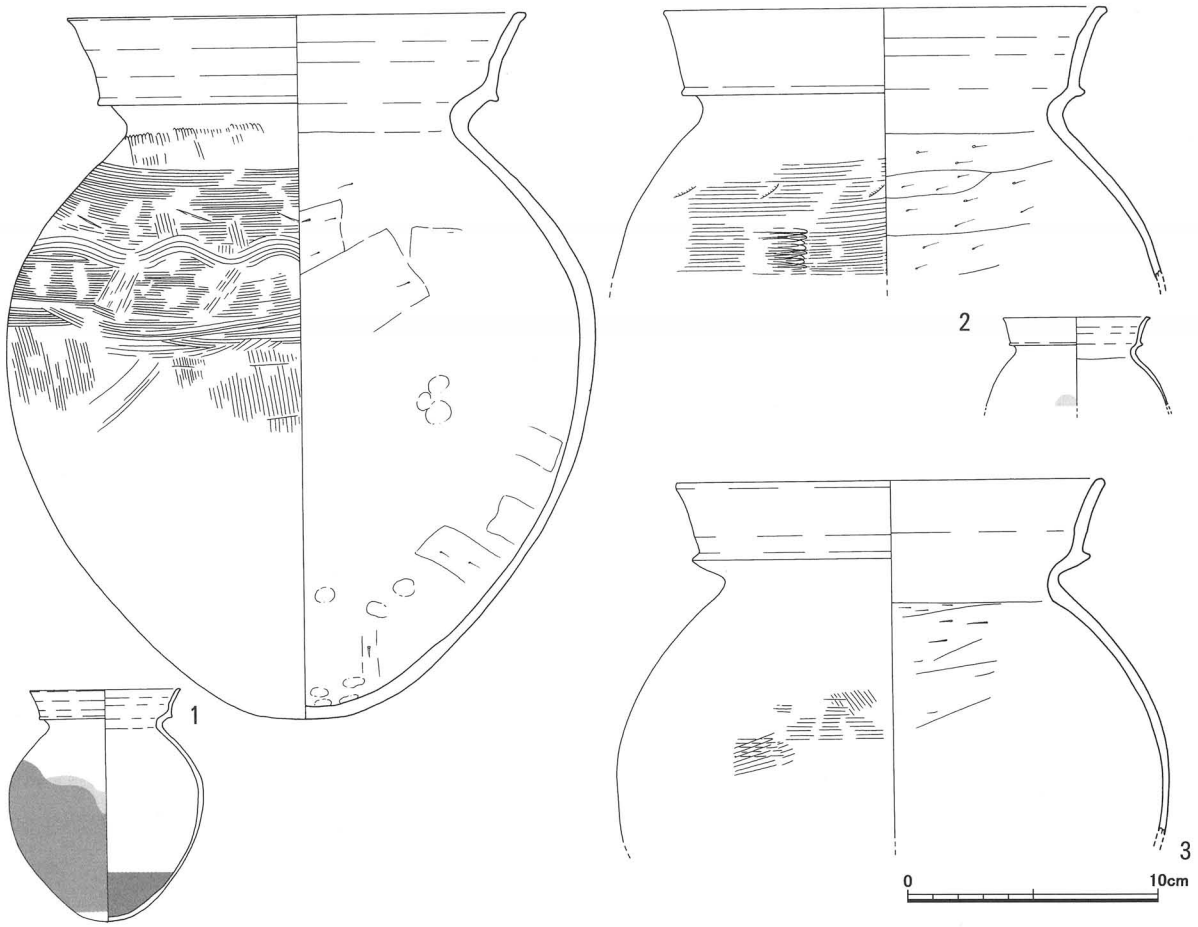
## 14層　2号土器群（第99図）

調査区東端で検出された土器群である。複合口縁の甕3点が出土している。

土器群はぬかるみ状態の中で検出され、第99図の部分まで図化した時点で出土時の状態を保てなくなり、取り上げた。よって、図より下の部分は推測するしかないが、これによれば甕1は口縁を南西へ向け、横倒しの状態で出土している。2は口縁が斜めに倒れて北西を向いている状態、3は横倒れで口縁が北西を向いている状態で出土した。1が南西向き、2が北西向きという違いはあるが、3点とも土器群の中心に底部を向け、半分倒れた状態という点で共通性がある。正置されていた甕が、土圧等の原因で倒れたと推測することが可能であるが、確実性は低い。




第99図　5区14層　2号土器群出土状況
（S＝1/15）




**第100図　5区14層　2号土器群出土遺物（S＝1/3）**

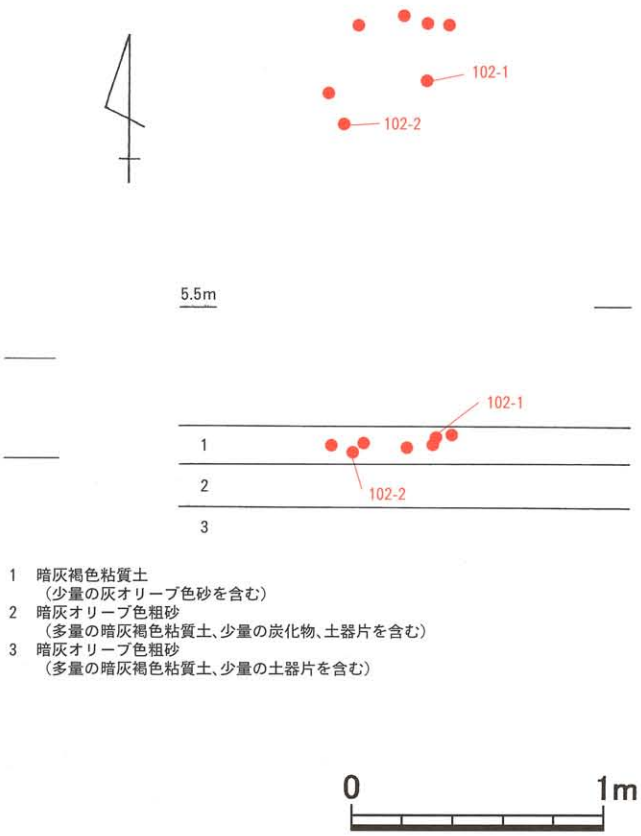
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　濃いコゲ**

**5区14層　2号土器群出土土器観察表**

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 100－1<br>(図版92) | 土師器<br>甕 | ①17.9<br>②(28.3)<br>③3.4<br>④4.0 | 口縁端部に水平な面あり。痕跡的平底あり。すでに型作りを採用か | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ後刺突文、波状文(櫛状工具)/ハケメ後ナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴部：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を多く含む。<br>色調：浅黄橙色 | |
| 100－2<br>(図版92) | 土師器<br>甕 | ①17.5<br>②(11.0)<br>④3.4 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁：ヨコナデ/肩：刺突文(貝殻状工具)/胴：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下：ケズリ | 胎土：やや粗(0.5㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 一部のハケメは右向きに施して止めた後反転させている。 |
| 100－3<br>(図版92) | 土師器<br>甕 | ①17.0<br>②(14.4)<br>④3.1 | 口縁端部丸い | 口縁・頸：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(2㎜以下の石英粒、赤褐色粒、金雲母片を含む)<br>色調：灰白色 | |

**遺物（第100図）**

底部まで残る100－1は肩が張るプロポーションで、器壁は薄い。口縁端部に水平な面があり、倒立させると地面に接するように作られている。肩部外面には、平行ハケメの後波状文、及びそのすぐ上には間隔は疎らであるが刺突文がある。胴部最大径以下は平行ハケメが無くなり、縦方向が主体の粗いハケメに変わっている。底部付近の外面には平底の痕跡がわずかに残るが、内面の底部付近には指頭圧痕が見られ、製作法は型作りと思われる。2も口縁端部に水平な面があり、倒立さ




**第101図　5区14層　7号土器群出土位置**（S＝1/30）

せると面全体が地面に接する。肩部には粗い平行ハケメがめぐり、貝殻腹縁による刺突文がある。これら2点に比べると100－3は端部の面が明瞭でなく、なで肩で、やや新しい要素を持つ。器壁は薄い。複合口縁下端は頸部から一連の部位として作られ、大きく横へ突出する。ヘラケズリの開始位置は3点とも頸部直下である。

スス・コゲは風化の著しい3では確認されない。1は底部まで残っていたため下半分のスス・コゲの状態がよくわかる。1の外面のススは、胴部上半で薄く、下半部へ行くにつれて濃い。ただし、底部の半径5㎝程度の範囲のみススが付着しない。ススの濃度の境目は土器片の割れ口とはずれているので、土器片の遺存状態の相違に起因するものではなく、使用時にこの差が生じたと判断される。おそらく、底部の一部が炉の灰の中に埋もれた状態で使用されたため、その部分だけが火を受けず、ススが付かなかったと推定される。

## 14層　7号土器群（第101図）

調査区の北西端で検出した土器群である。15号土坑から北西90㎝の地点である。径60㎝の円内におさまる狭い範囲に土器片が集まっていたが、このうち図化可能だったのは複合口縁の壺・甕各1点である。

### 遺物（第102図）

102－1は複合口縁の中ほどから外反をはじめる。口縁端部はやや角が不明瞭な面を持つが、水平ではない。1の口縁部外面にはススが付着する。口縁部外面が下を向いているため、火を受けてススが付着したと思われる。壺（2）は、複合口縁が外傾して直線的にのびる。口縁端部の面が不明瞭になって丸くなり、器壁も厚くなる。風化が著しいためか、スス・コゲの付着は確認されない。

**5区14層　7号土器群出土土器観察表**

| 挿図番号（写真図版） | 種別 器種（部位） | 計測値 ①口径㎝ ②器高㎝ ③底径㎝ ④口縁高㎝ | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 102－1（図版92） | 土師器 甕 | ①(15.8) ②(4.9) | 厚めで口縁端部の面は広い | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：横方向のミガキ/胴：ケズリ | 胎土：密（1㎜以下の黒雲母・金雲母細片を多く含む） 色調：灰白色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 102－2（図版92） | 土師器 壺 | ①17.7 ②(19.3) | 口縁部の器壁は4～5㎜と厚手。口縁端部の面は不明瞭 | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ハケメ | 不明 | 胎土：1㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む） 色調：灰白色 | |

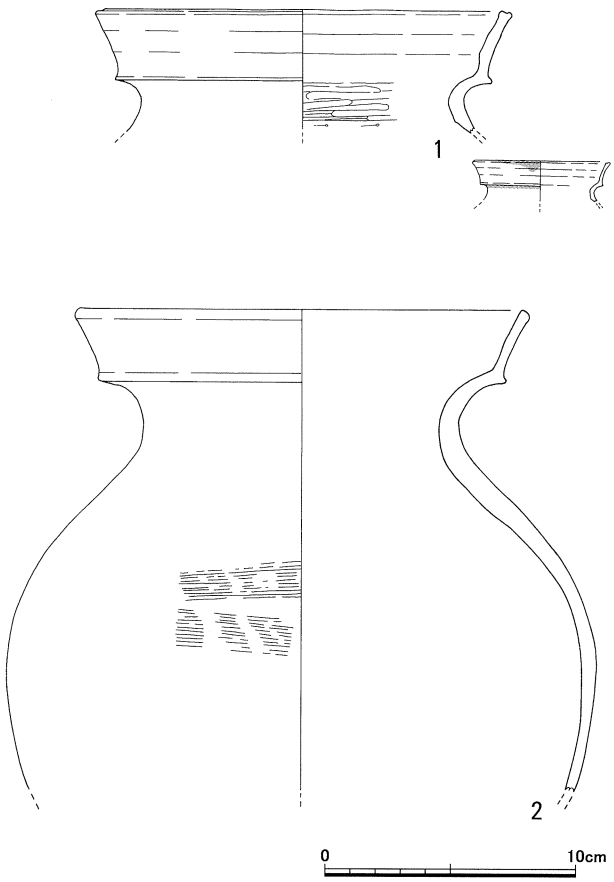
外面の頸部直下から肩部にかけてわずかに他の部分より赤みを帯びているのは、熱を受けて酸化したものであろう。

**14層　8号土器群（第103図）**

調査区南寄りで検出された土器群で、遺物の分布する範囲は広い。出土位置の標高は5.0～5.2mの範囲におさまっている。

土器の多くの出土位置は土器群の東寄りに集中する。105－16の破片が広い範囲で接合していることから、これらの土器は同時に廃棄されたと考えられる。また、この16の破片が散らばっていることと、完形に復元できる土器の少ないことから、土器は廃棄時に既に割れた状態であったと考えられる。

北寄りには単純口縁の甕が3点（2・4・5）まとまって出土しているが、すぐ近くから複合口縁の壺（11）や高坏（16）も出土しており、器種毎にかたまる様相は見られない。南寄りでも、単純口縁の甕（104－46）や複合口縁の壺（105－10・13）、低脚坏（18）など、異なる器種が同じ場所にかたまって出土している。



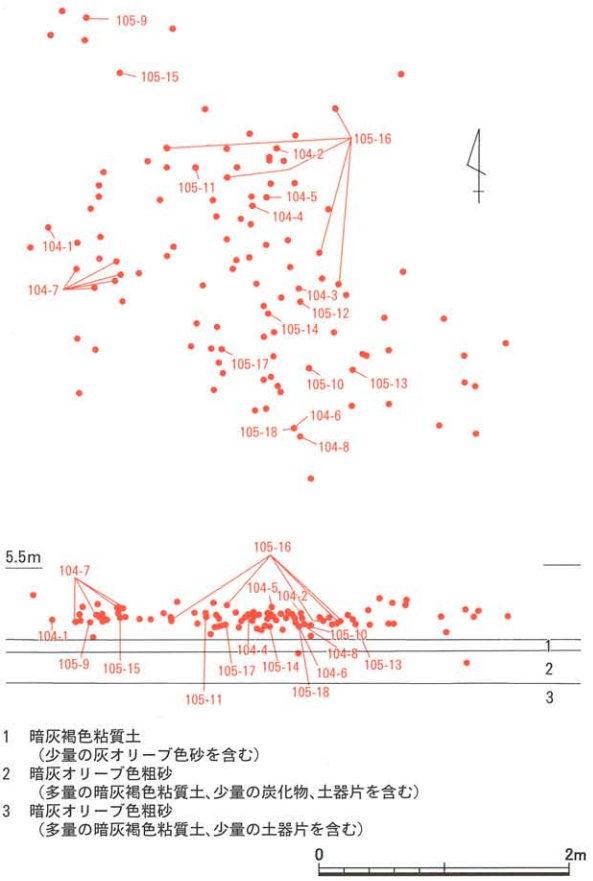

**第102図　5区14層　7号土器群出土遺物**（S＝1/3）
遺物図面(1/3)の凡例：濃いスス

**遺物（第104～105図）**

甕は単純口縁5点（104－1～5）、複合口縁3点（6～8）と単純口縁がやや多い。

1は単純口縁の甕である。器壁が薄い。口縁先端を潰して面が作られ、わずかに内側へ肥厚する。頸部内面は断面形が鋭い「く」の字にならず、緩やかなカーブを描く。2は単純口縁の甕で、口縁部は内彎する。器壁は薄い。頸部の内外面は緩くカーブする。肩部は部分的に沈線が入るが、全周していない。3も口縁部がわずかに内彎する。4は単純口縁で、胴部は完全な球形ではなくやや上下方向が短い。5は口縁部がやや内彎するが、急角度で外傾して長くのび、大きく開く形状となる。そのため、口径が胴部径を上回っている。6は複合口縁の甕である。やや肩が張り、器壁は薄い。口縁部は外傾して直線的に伸び、口縁端部に面がある。肩部には平行ハケメに加え沈線が1条施されるが、起点と終点の高さが食い違うためつながらない。7は器壁が口縁部で6㎜、頸部で1㎝と厚手であるのに対し、胴部は5㎜以下で比較的薄い。熱効率を落とさないため、胴部は薄く作られている。肩部は張らずになで肩となる。頸部直下の内面には、ヘラケズリに失敗して付いたと見られるヘラ痕が残る。肩部をめぐるハケメは完全な平行ではなく、やや波打つ。8は小形の複合口縁甕である。複合口縁下端の横への突出は鈍い。口縁端部は面が退化して丸い。

壺が5点（105－9～13）と比較的多くを占める。12の口縁が直立に近い他はいずれも外傾度がきつい。9は複合口縁の壺である。口縁部は外傾の角度が急で、大きく開く形状である。口縁端部

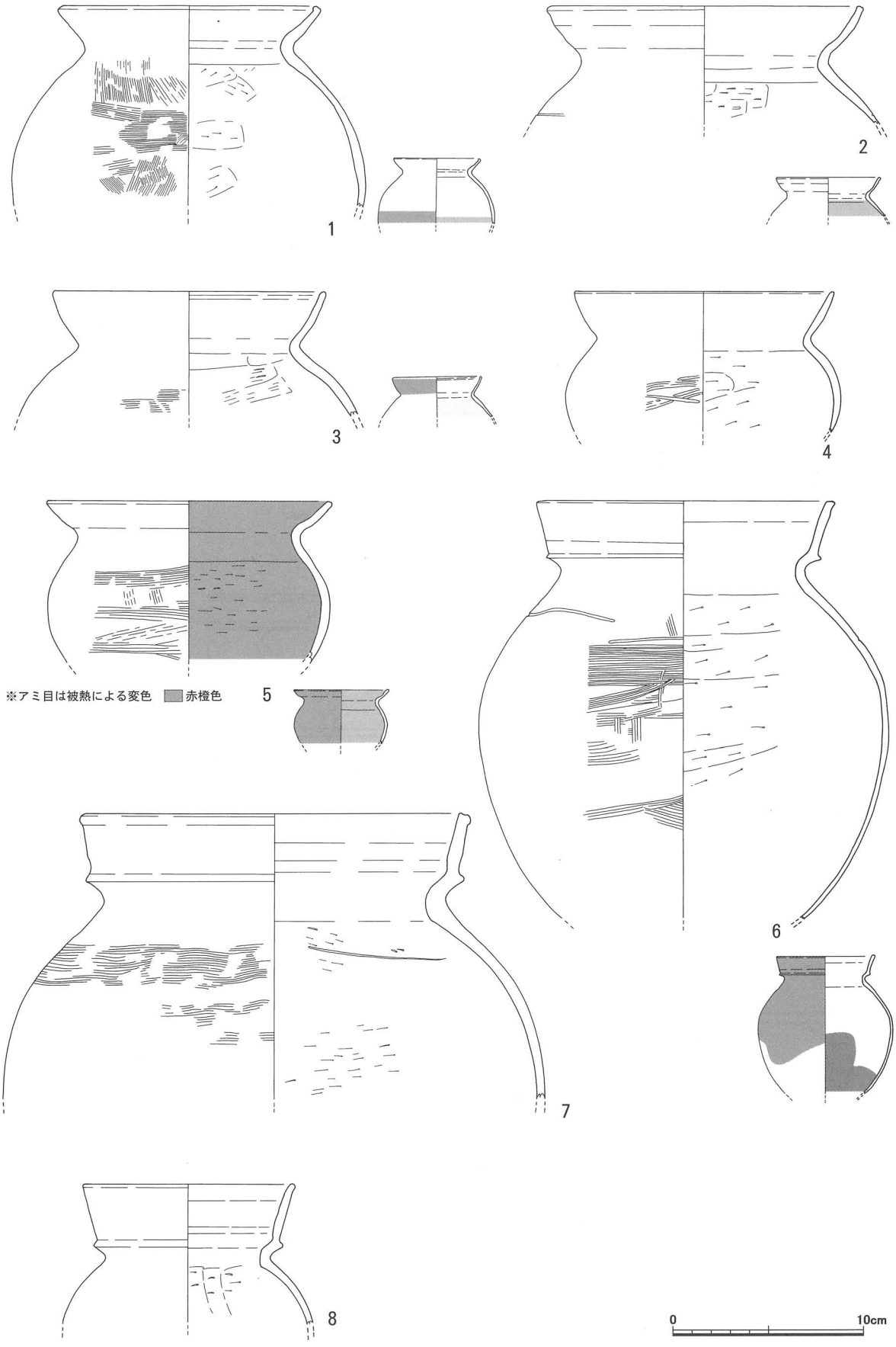



**第103図　5区14層　8号土器群出土位置**（S＝1/60）

の面は水平である。10も口縁部が大きく開き、口縁端部はわずかに外側へ肥厚する。頸部の複合口縁下端よりの部分は一部水平になる。11は竹管文が全面に施される。原体には、径5㎜の竹管（小さい円用）、径13㎜の竹管（大きな円用）、径13㎜の半裁竹管（半円用）の3種類が想定される。全ての文様の単位は、大円と小円による二重円を中心に置き、その外周に配列する文様により下記の3種類に分かれる。（A）周囲に10ないし11個の小円を配するもの、（B）13本ないし14本の半円を付加して渦巻形にするもの、（C）上に2個の小円を配し、下に2個の半円を付けたもの、の3種類である。口縁部外面及び頸部下段の文様列は（A）と（B）を交互に並べたもの、頸部上半部ではこれに（C）が加わるが、それぞれの使用頻度は明らかでない。現存部分で判断する限り、頸部上半の列と下半の列では単位文様の個数を1対1対応させているが、口縁部の文様列は頸部上半の列と1対1対応していない。頸部と胴部の境界には凸帯が取り付けられていたが、剥落して粘土の跡しか残っていない。同じ器形で文様単位（C）を用いた複合口縁の壺が平成14年度調査区のⅡ区からも出土している(1)以外には類例が見られない。また、8号土器群の壺・甕類の中で内面にミガキ調整が施されるのは本品のみである。このミガキ調整と文様の特異性、及びスス・コゲが付着しないことから、煮炊き具ではなく祭祀具として用いられたものと考えられる。105－12は口縁部が短小で、直立する。頸部外面の刺突による斜線は、羽状文の上半分の可能性もあるが、胴部が欠損していて不明である。頸部につく斜め方向の文様は、ハケメ原体と同じ工具によって付けられたと思われる。内面にはシボリメが十分調整されないまま残る。13は小形の複合口縁の壺である。口縁部はほとんど水平になるほど大きく外反する。口縁先端部を潰して面を作り出している。高坏16は底部と体部の境界に断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁先端を潰して面が作られ、下方へ大きく肥厚する。円板のすぐ外側の坏底部外面が脚部上端との接続部になっており、部分的に脚部側の粘土がへばりついて残っている。坏部のみ残存しているため、低脚坏の可能性も否定できない。17の外面には横方向のヘラミガキが高密度に施されるが、粗雑なため凹凸が消えていない。

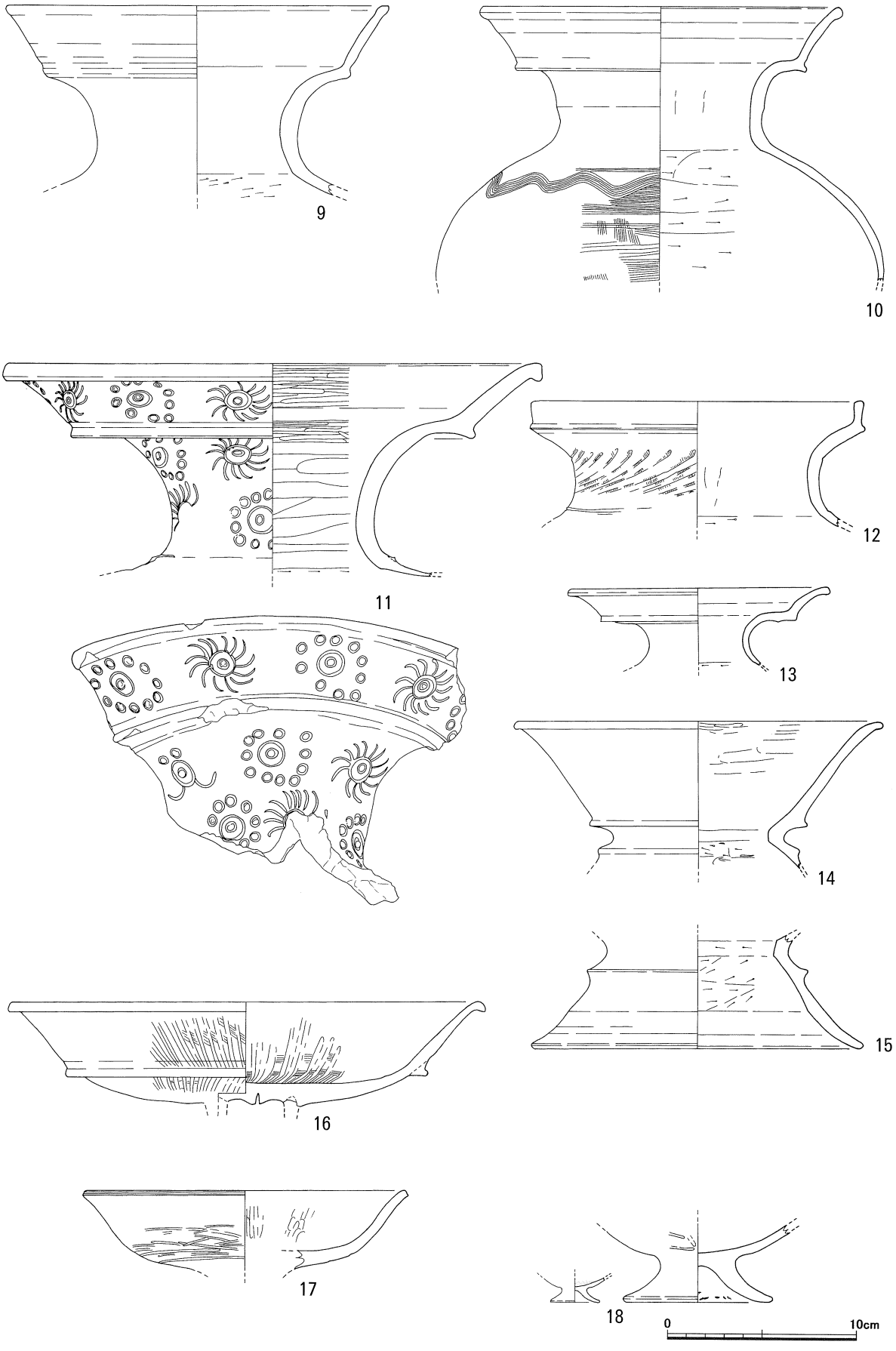
104－1は胴部最大径以下は、外面に濃いスス、内面に薄いコゲが付着する。2は焦げつくほどではないが、薄い汚れが頸部下の内面全体に認められる。内容物が入っていた範囲に薄い汚れが付いたのであろう。3は口縁部外面に濃いススが付着している。口縁部が下を向いているため、火を受けてススが付いたと思われる。

2・3は薄いコゲや汚れが、頸部下の内面全体に認められる。5は特によく使い込まれ、スス・




第104図　5区14層　8号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ　汚れ

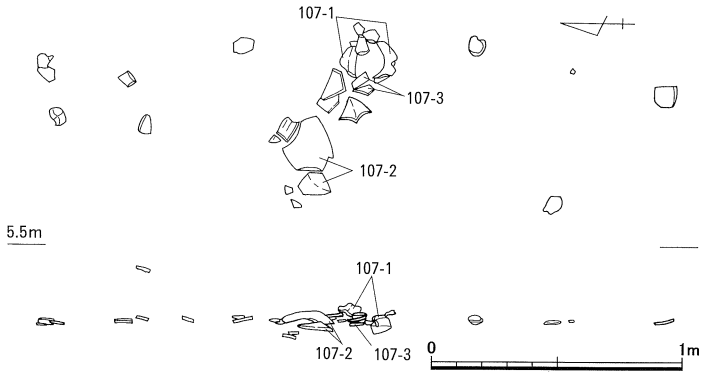



第105図　5区14層　8号土器群出土遺物（2）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：▒ 薄いコゲ

## 5区14層　8号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 104－1<br>(図版92) | 土師器<br>甕 | ①13.3<br>②(10.6) | 口縁端部に面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄色 | |
| 104－2<br>(図版93) | 土師器<br>甕 | ①16.2<br>②(6.2) | 胴部径は口径より大 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：1条の沈線 | 口縁～頸：ヨコナデ/頸下半：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄色 | |
| 104－3<br>(図版93) | 土師器<br>甕 | ①14.0<br>②(6.6) | | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜程度の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：淡橙色、一部橙色 | |
| 104－4<br>(図版93) | 土師器<br>甕 | ①(13.4)<br>②(7.4) | 小形 | 口縁～：ヨコナデ/胴：ミガキか | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒、金雲母・黒雲母細片を含む<br>色調：内外面橙色/断面淡橙色 | |
| 104－5<br>(図版93) | 土師器<br>甕 | ①14.6<br>②(8.6) | 小形。胴部径は口径とほとんど同じ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：やや粗(2㎜以下の石英粒、赤褐色粒および金雲母細片を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 104－6<br>(図版94) | 土師器<br>甕 | ①15.4<br>②(22.0)<br>④3.0 | 口縁部厚い。口縁端部に水平な面あり。なで肩 | 口縁～肩：ヨコナデ、肩に1条の沈線/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：外面灰白色/内面浅黄橙色 | |
| 104－7<br>(図版94) | 土師器<br>甕 | ①19.5<br>②(15.0) | 口縁部厚い。口縁端部に外傾する面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ後部分的にナデ | 胎土：2㎜以下の砂礫、1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | |
| 104－8<br>(図版94) | 土師器<br>小形甕 | ①10.9<br>②(7.3)<br>④3.2 | 小形 | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 105－9<br>(図版93) | 土師器<br>壷 | ①20.0<br>②(10.0)<br>④3.6 | 口縁端部に水平な面あり | ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | |
| 105－10<br>(図版94) | 土師器<br>壷 | ①(18.6)<br>②(14.5)<br>④3.3 | 口縁端部は外側へ肥厚。口縁は厚い | 口縁～肩：ヨコナデ/肩：波状文(櫛状工具)/胴：ハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸：シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 105－11<br>(図版94) | 土師器<br>壷 | ①(27.9)<br>②(11.3)<br>④3.9 | 口縁は外傾度がきつく端部に垂直な面あり。肩部に凸帯の跡あり | ヨコナデ、全面に竹管文 | 口縁：ミガキ/頸：ミガキ(やや大きなヘラ状工具)/ケズリ | 胎土：微細な瀬きり粒、金雲母細片を多く含む<br>色調：灰白色 | |
| 105－12<br>(図版93) | 土師器<br>壷 | ①17.2<br>②(6.6)<br>④1.5 | 口縁は直立 | 口縁：ヨコナデ/頸：刺突文(ハケメ原体と思しき工具)、その下には1条の沈線をめぐらしている | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ、シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | 赤彩(外面) |
| 105－13<br>(図版93) | 土師器<br>壷 | ①(13.5)<br>②(4.1)<br>④1.7 | 口縁は大きく外へひらく | ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデか/ケズリ | 胎土：密(微細な石英粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 105－14<br>(図版93) | 土師器<br>鼓形器台 | ①9.1<br>②(7.8) | | ヨコナデ | 器受：ミガキ/筒：ナデ/脚台：ケズリ | 胎土：密(5㎜以下の赤褐色粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 105－15<br>(図版93) | 土師器<br>鼓形器台 | ②(6.1)<br>③(17.1) | | ヨコナデ | 器受：ミガキまたはナデ/筒～脚台上半：ケズリ/脚台下半：ヨコナデ | 胎土：やや粗(1㎜程度の白色砂粒、金雲母・黒雲母細片を含む)<br>色調：外面灰黄色/内面：灰色/断面：浅黄橙色 | 脚台部内面に黒斑 |
| 105－16<br>(図版93)<br>(図版94) | 土師器<br>高坏 | ①25.9<br>②(5.6) | 口縁端部外側に面あり。坏部と脚部は円板を充填して接続 | 口縁～体：斜行ハケメ後縦方向のミガキ/底：ヨコハケメ後縦方向のミガキ | 口縁～体：ヨコハケメ後縦方向のミガキ/底：放射状のミガキ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：橙色～灰黄色 | |
| 105－17<br>(図版93)<br>(図版94) | 土師器<br>高坏 | ①17.0<br>②(4.2) | 口縁端部に面あり、沈線を廻らす | 粗いミガキ | ミガキ | 胎土：やや粗(2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい橙色 | |
| 105－18<br>(図版94) | 土師器<br>低脚坏 | ②(4.2)<br>③7.6 | 坏部やや深い | 坏：ミガキか/脚：ヨコナデ | 坏：ミガキ/脚：ヨコナデ | 胎土：1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：にぶい黄橙色～浅黄橙色 | 脚裾内面にヘラ状工具による傷(?) |




**第106図　5区14層 10号土器群出土状況**（S＝1/30）

コゲが内外両面の全体に付着している。内面全体が被熱し、1㎜の厚さで赤変する。6は胴部下半迄よく残るが、下半分よりも上半分にススが濃く付着する。内面の下半分には濃いコゲがしっかりこびりついている。

壺甕類にスス・コゲが付着するものは全般に少ないが、これは残存状況にも起因すると考えられる。胴下半部まで残存する104－1・5・6などは内外面ともスス・コゲが観察されるので、上半分しか残らなかったためにスス・コゲが不明なものも含まれているであろう。

**14層　10号土器群（第106図）**

3・4・5号土坑のすぐ西に位置し、東は上層の13層から掘り込まれた6号溝状遺構に接している。本来の土器群はもっと東へ続いていたかもしれないが、6号溝状遺構掘削時に土器群の東端にあった遺物が失われている可能性がある。107－1は口縁を真下へ向け倒立した状態で出土した。割れた胴部の破片が周辺に散乱している。底部2は横転した状態である。口縁部を欠いているが、1や3の出土地点とは別の方向（北東方向）を向いている。胴部最大径も大きく異なるので、1と2は別個体と推定される。高坏（3）は甕（1）と同位置から出土した（第106図）が、倒立状態の甕とセットで使用されたのかは明らかでない。

**遺物（第107図）**

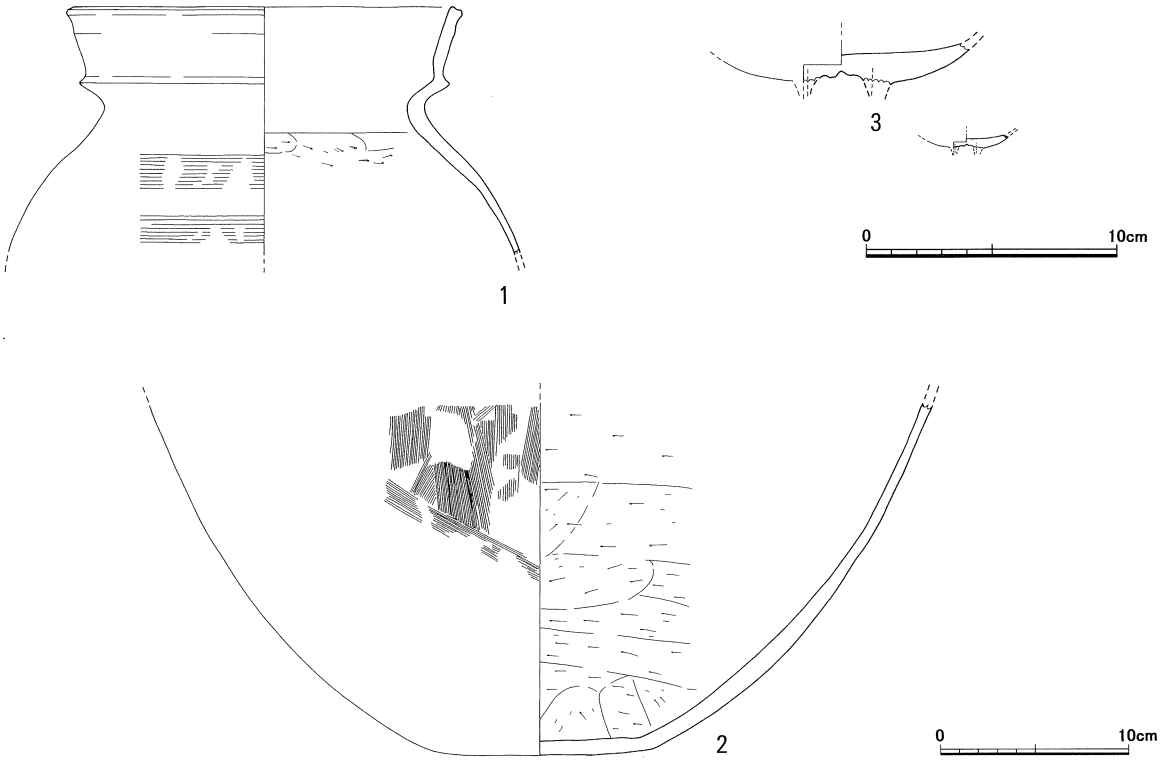
107－1は直線的に外傾する複合口縁の甕である。口縁端部の面が鈍くなり、丸みを帯びる。頸部から複合口縁下端にかけて一連の部位として製作されている。頸部の入り込みは浅い。器壁は口縁部と頸部で厚くなる。内面ヘラケズリの開始位置は頸部直下である。2は薄い平底で、内面は底部までヘラケズリされる。胴部最大径が1に比較して大きくなると推定されること及び出土状況から、1とは別個体と推定される。3は坏部と脚部を別途製作して接続し、さらに円板を充填する。

1は内外面ともスス・コゲが見られないが、欠損した下半分には付着していた可能性を否定できない。逆に、2はスス・コゲの残りやすい底部であるにもかかわらず内外面とも火熱を受けた痕跡がないので、貯蔵具として使用されていたことが推定される。3の内面には、コゲとは断定できないが汚れが濃厚に付着する。

**14層　11号土器群（第108図）**

調査区中央北寄りで検出した、5区最大の土器群である。1つの土器片の上に他の土器片が何層にも累積するような状態で出土した。このような出土状況から、この土器群の性格は廃棄された土器が累積して形成した土器群と考えられる(2)。少数の弥生土器片が出土しているが、このうち109－1と114－31は出土地点が明確でない。混入品の可能性が高い。

土器が集中する部分からやや南西に離れた位置で、114－29や115－38がまとまって出土している。




**第107図　5区14層 10号土器群出土遺物**（1・3：S＝1/3、2：S＝1/4）
遺物図面(1/3)の凡例：□汚れ

**5区14層　10号土器群出土土器観察表**

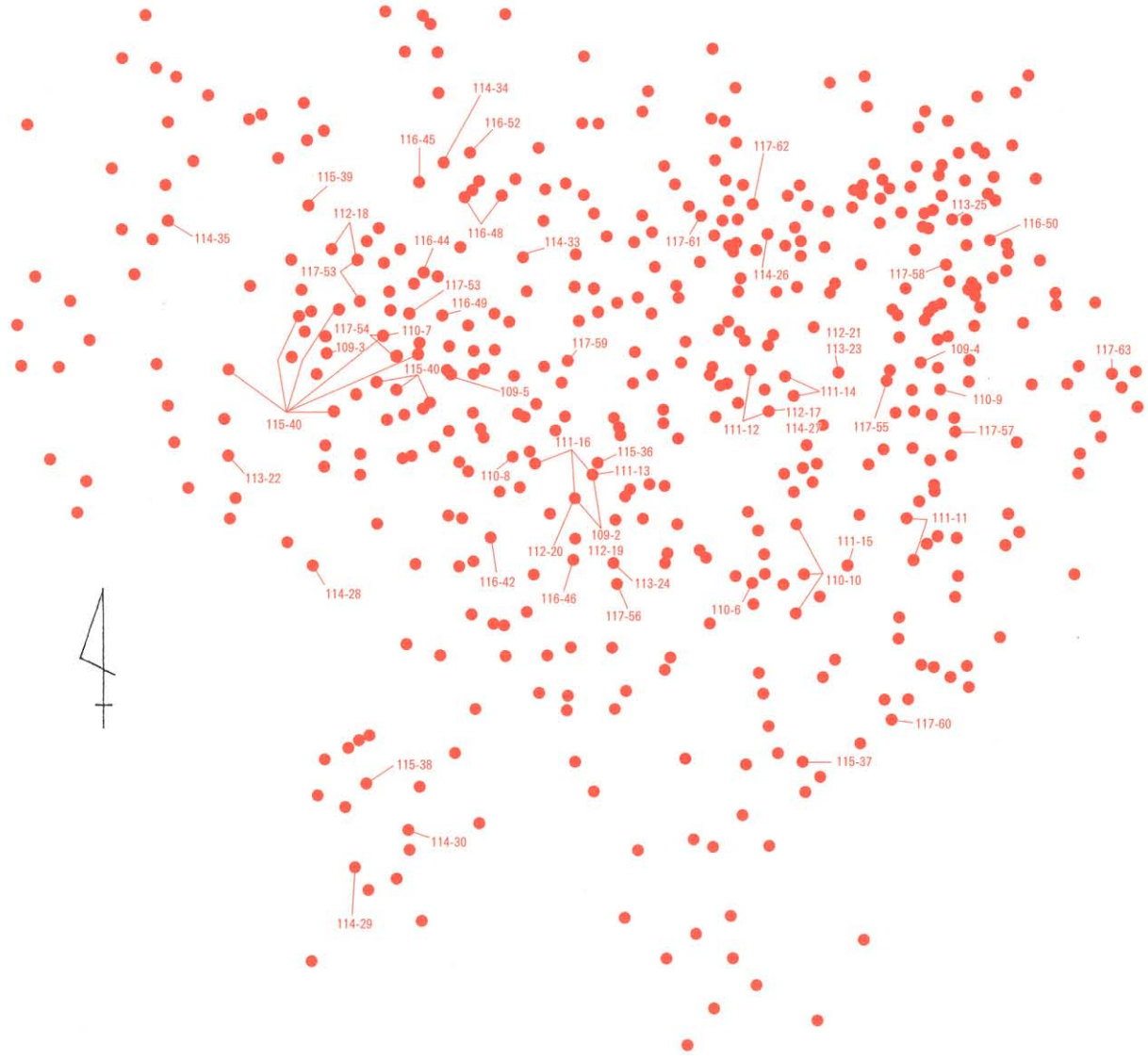
| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 107－1<br>(図版95) | 土師器<br>甕 | ①15.0<br>②(9.8)<br>④3.0 | 口縁端部の面はゆるい。器壁は厚い | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：横方向のハケメが廻る | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：1.5㎜程度の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色～にぶい橙色 | |
| 107－2<br>(図版95) | 弥生土器<br>(底) | ②(18.9)<br>③11.4 | 広い平底をもつ。内面は底面全体にヘラケズリが及ぶ | 胴上半：タテハケメ/胴下半～底：ハケメ後ナデか | ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 底部の一部に黒斑 |
| 107－3<br>(図版95) | 土師器<br>高坏 | ②(1.7) | | 不明 | 不明 | 胎土：やや粗(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：にぶい黄橙色～褐灰色 | |

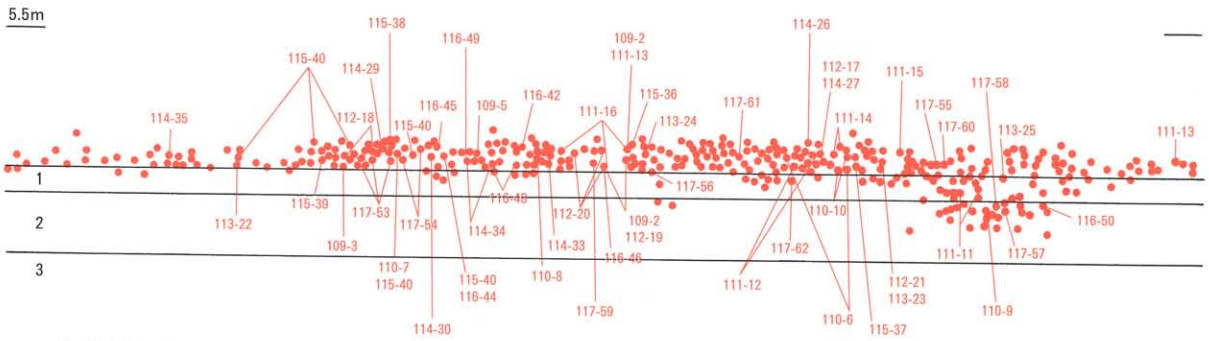
11号土器群の中でも比較的新しいと見られる29や38が出土した標高が5.02～5.04mであるのに対し、近くから出土した弥生中期の壺（114－30）も5.01mで、ほとんど差がないが、時期が離れすぎていることから混入品と見られる。

一方、弥生後期に遡る複合口縁の甕（109－3）と小谷3～4式の複合口縁の壺（115－40）のように位置が重複している場合では、3の出土した標高4.95mに対し40は5.04mで、古い遺物の上に新しいものが累積する状態が確認される。

山陰系甑形土器の出土する標高は、117－57・58が4.8m、56は4.94m、59が4.98mといずれも5.0mを下回り、他の遺物よりも下にくる傾向がある。山陰系甑形土器が他の遺物より時期が古い可能性が考えられる。

複合口縁の甕2点（109－2と112－19）が全く同じ位置から出土している。口縁端部の形態は、

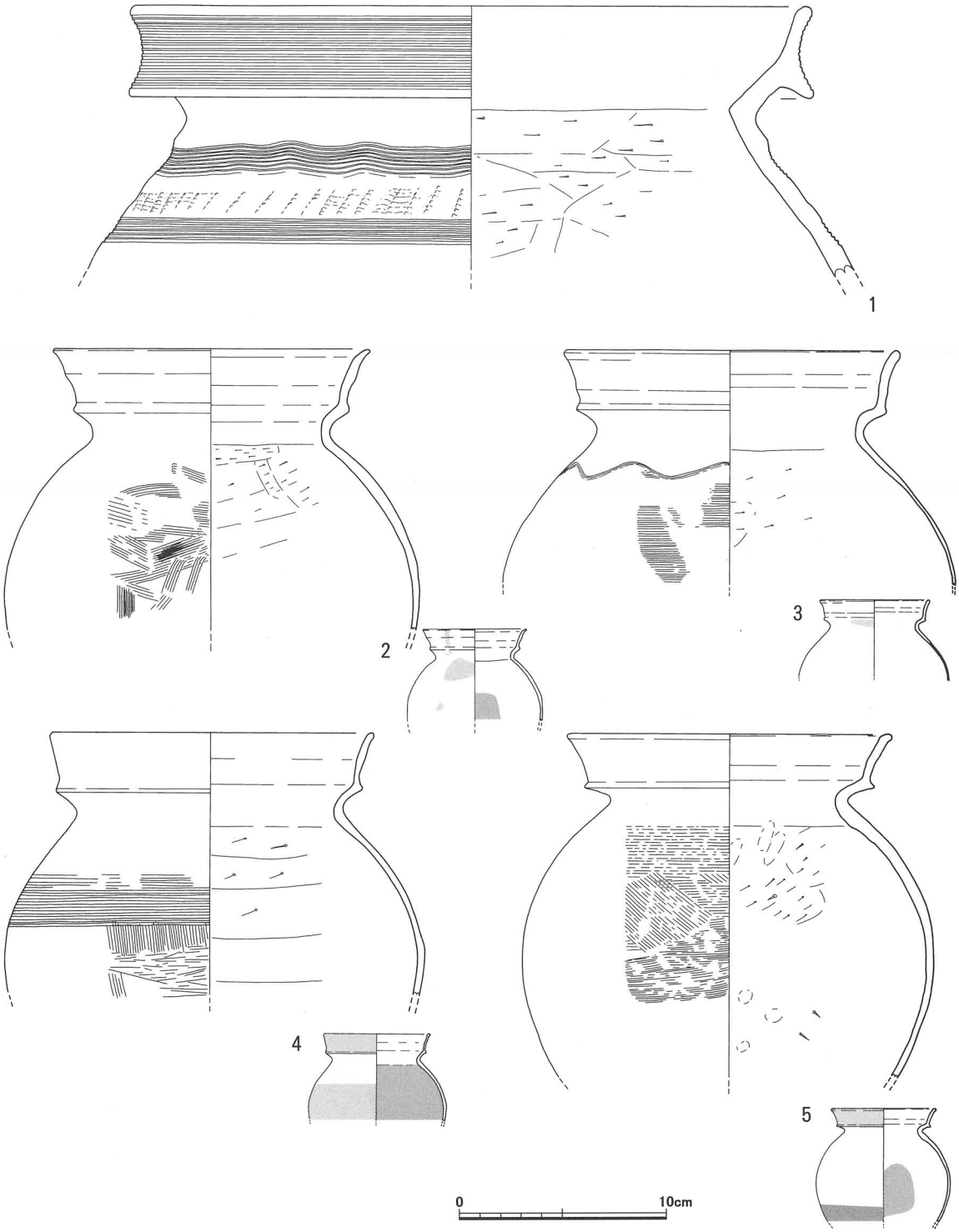



1　暗灰褐色粘質土
　（少量の灰オリーブ色砂を含む）
2　暗灰オリーブ色粗砂
　（多量の暗灰褐色粘質土、少量の炭化物、土器片を含む）
3　暗灰オリーブ色粗砂
　（多量の暗灰褐色粘質土、少量の土器片を含む）

0　2m

第108図　5区14層 11号土器群出土位置（S＝1/30）




第109図　5区14層 11号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ　汚れ

前者が内面を加工されて外へ折れるのに対し、後者の端部は明確な面を持つ。だが、頸部から口縁下端の形態は、横への突出が弱く頸部から口縁下端までスムーズに続いていく点など、共通する要素が多い。さらに、口縁下端が横へ大きく突出して端部に水平な面を持つ13・16もほぼ同位置から出土している。口縁部の形態の違う遺物が同時に廃棄されていると見られる。

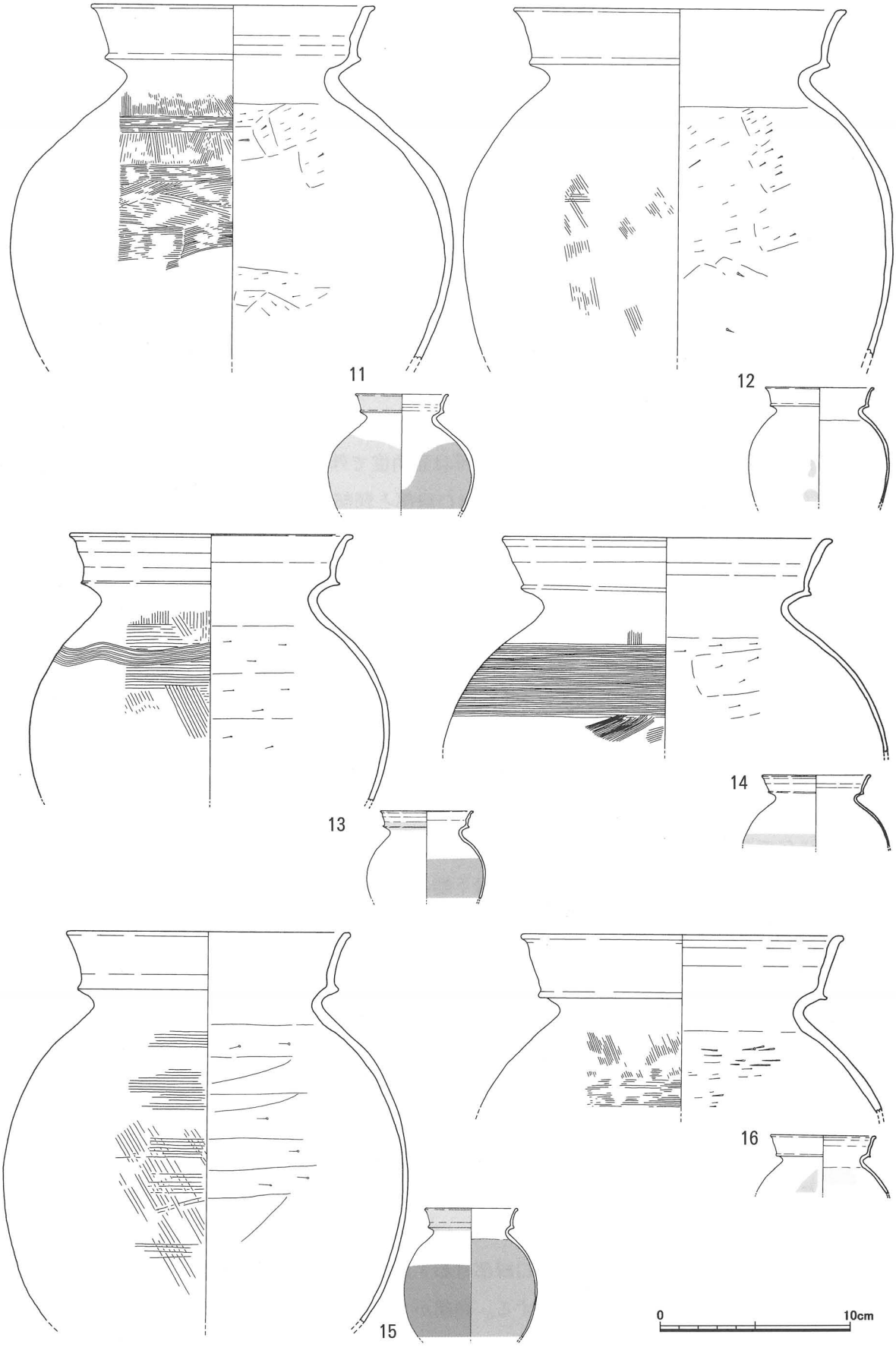
これらのやや東では、111－12・14、112－17・21、113－23、114－27の6個体が集中的に出土し

第110図　5区14層 11号土器群出土遺物（2）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ　汚れ

ているが、端部に面ができる12・14・17と端部が丸くなる21、端部が下に折られて玉縁状の23、単純口縁の27が混在している。

土器群の北寄りでは複合口縁の壺（114－34）・高坏（116－45・48）・低脚坏（52）がまとまって




第111図　5区14層 11号土器群出土遺物（3）（S＝1/3）

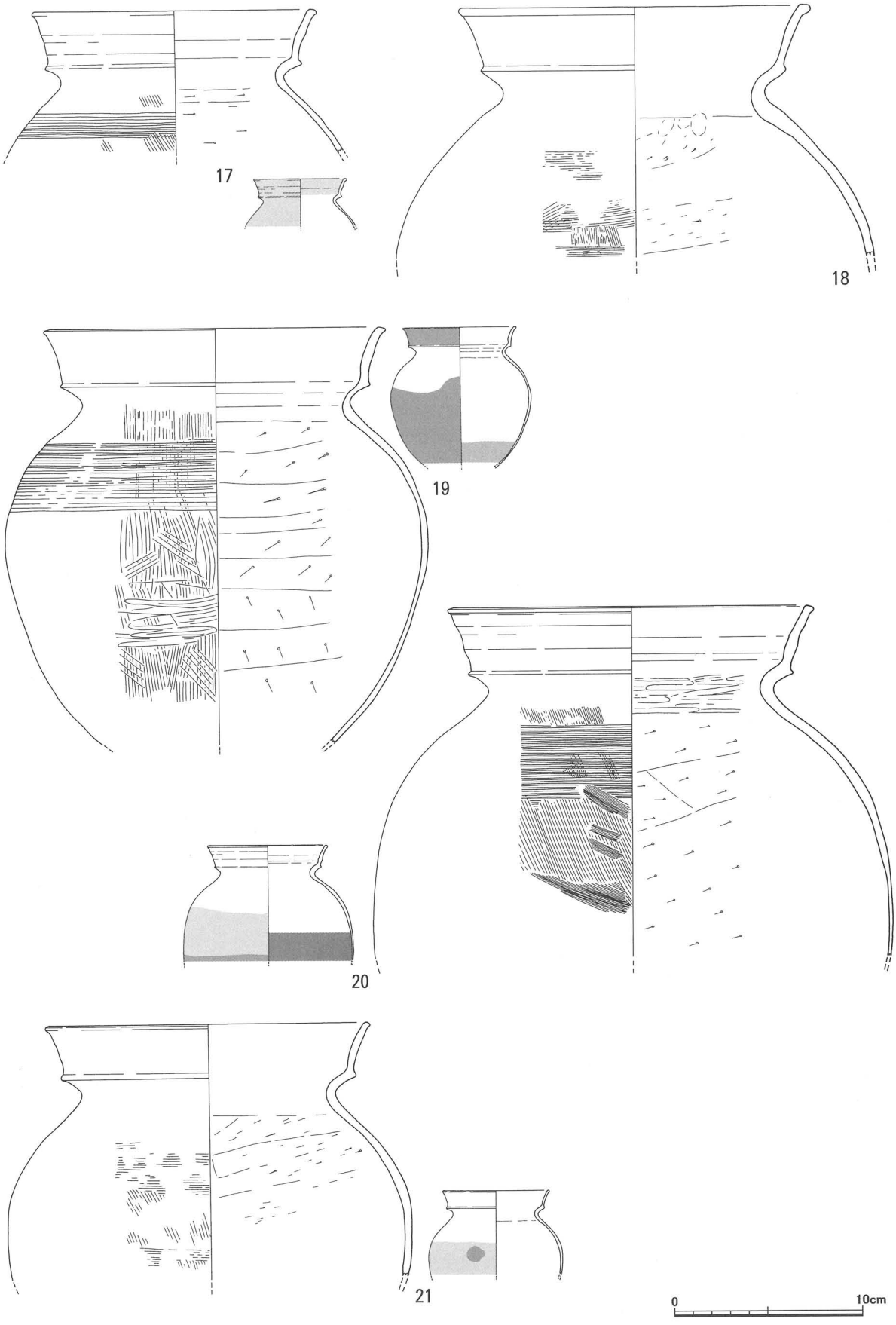
遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ　汚れ

出土している。45と48は色調、胎土、接続部の径の一致から、同一個体の高坏の坏部と脚部と予想され、実際に接合した。ここでも、壺・高坏・低脚坏と複数の器種がかたまっており、器種ごとにまとまる様相は見られない。

**遺物（第109～117図）**

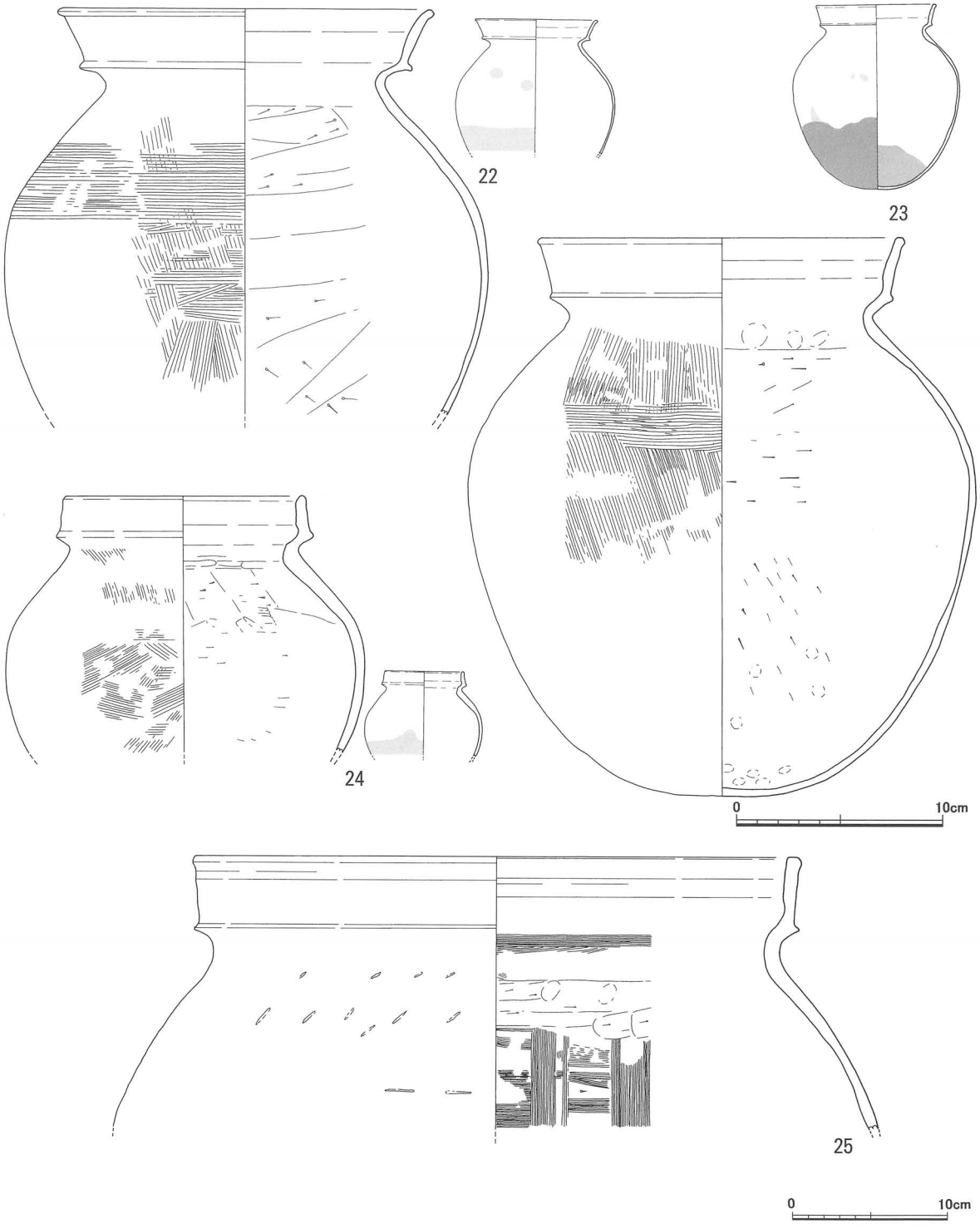
109－1の口縁部には擬凹線文がめぐる。頸部から肩部にかけては上から順にわずかに波打つ平行沈線、刺突列点、平行線文がめぐる。刺突列点の間には工具を引きずったような痕跡があり、押引文の可能性もある。いずれも貝殻状工具を用いて施文されており、口縁部外面のカーブに貝殻腹縁の形状をとどめる。口縁部の内外面には、部分的に赤彩の跡が残る。2は複合口縁下端の突出部が退化して鈍くなっている。口縁端部は内面側の広い範囲が加工されている。器壁は薄く、全体のプロポーションがなで肩になると思われる。3は胴部の器壁がきわめて薄い複合口縁の甕である。やや外反気味で端部は丸い。頸部直下の外面には、ヘラ状工具一本だけを使用して波状文が描かれる。4も器壁が非常に薄い。3・4とも複合口縁の下端は下へも横へも突出しない。5は胴部下半まで残存し、全体になで肩、球形である。口縁部は急角度で外傾し、大きく開く。口縁端部に広い面を持つ。110－6はわずかに肩が張る。器壁は口縁部と頸部が比較的厚いのに対し、胴部の厚さは3㎜程度と薄い。口縁部や胴部に対して頸部の器壁の厚さが目立つ。複合口縁下端の突出は真横ではなく斜め下方向である。7は全体的に器壁が薄い。口縁部は外傾して直線的にのびる。口縁端部はわずかに外へ折れ、内面を接地させようという意識が見られる。8は複合口縁部の外傾度がきつく、大きく開く形状である。胴部は完全な球形ではなく、上下を潰した扁球形である。全体に器壁が薄い。外面の調整は、肩部だけでなく胴部下半にも横方向のハケメがめぐっている。9はわずかに肩が張っており、全体的に器壁は薄い。肩部には、斜め方向のハケメの後横方向の平行ハケメをめぐらす。平行ハケメは精美で、文様を意識している可能性がある。10は口縁端部内面を加工して接地面が作られる。111－11～13は口縁端部にしっかりした面を持ち、外側へ大きく肥厚する。12は完全になで肩であるが、11はわずかに肩が張り、胴部上半の器壁が厚い。14は肩部の平行ハケメの幅が広い。口縁端部は広い面があり、口縁下端よりも厚くなっている。15は複合口縁が外反気味で、下端の横への突出は弱い。外面のハケメは粗い。112－18は口縁端部に明瞭な面が作られ、外側への肥厚も顕著である。頸部から口縁下端まで一連の部位として製作される。19は口縁端部にしっかりした面が作られる。口縁部、胴部上半に比べて下半の器壁は薄く、2～3㎜しかない。外面の調整は縦方向の粗いハケメが主体である。20の頸部内面は、ヨコナデではなくヘラミガキがされ、入念である。器壁は口縁部は5～6㎜、頸部は7㎜と厚いが、胴部の下方へと徐々に厚さを減じ、胴部最大径付近で最小の2㎜にまでなる。これより下の部分にはコゲが付着している。113－22は複合口縁の端部が外側へ肥厚する。23は口縁端部の面が退化して不明瞭になっている。完全な球胴にはならず、わずかに肩が張り、底部にはわずかに平らな部分がある。底部内面には圧痕が多数残る。型に押しつけて成型されたとみられる。口縁部から頸部の器壁が5㎜と厚いが、肩部以下の器壁は薄く3㎜以下である。24の複合口縁部はわずかに内傾する。複合口縁下端は退化が進み、突出しない。25は口縁部がほとんど直立する。頸部から口縁端部まで屈曲する部分が少なく、直線に近い。肩部外面には米粒状の列点がめぐらされる。内面がハケメ調整される。器壁を平らに整えるためであろう。

複合口縁の甕のうち、2～8はいずれも口縁端部が面をもたず丸い。しかし、全体のプロポーショ



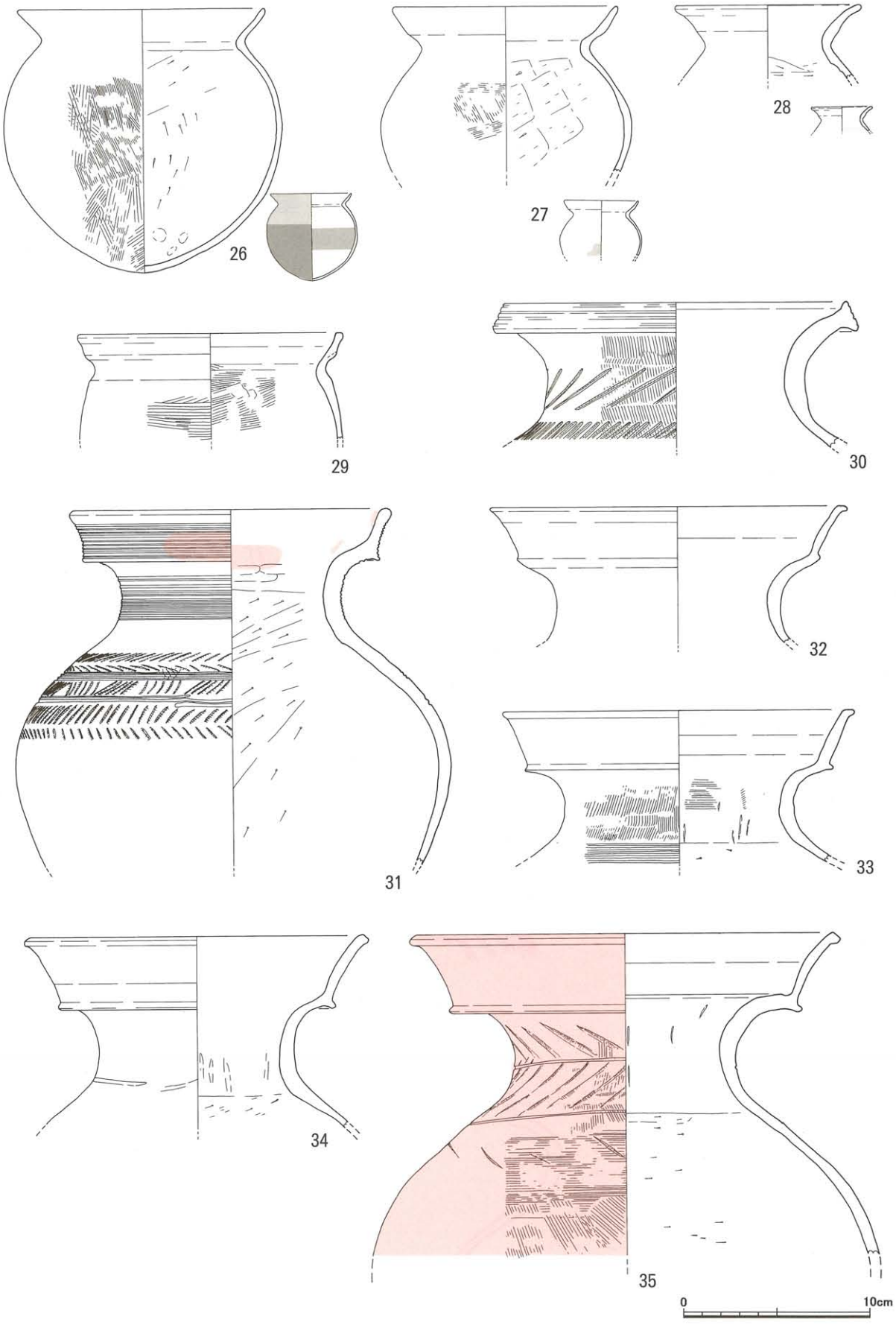

第112図　5区14層 11号土器群出土遺物（4）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ



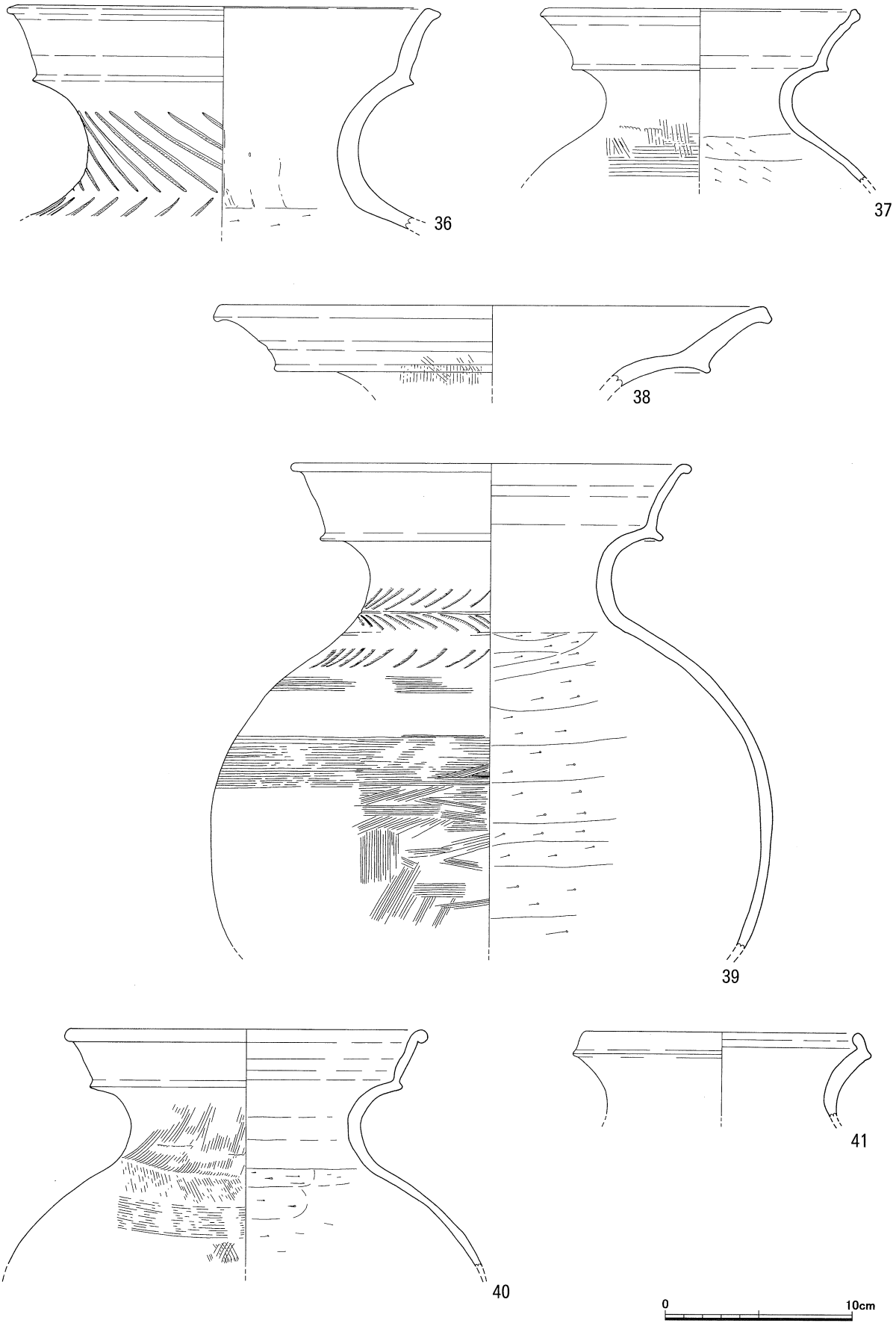

**第113図　5区14層 11号土器群出土遺物（5）（S＝1/3）**
**遺物図面(1/3)の凡例：薄いススス　濃いススス　薄いコゲ**

ンはなで肩で、胴部は球形に近く、器壁は厚いものが多い。110－6・7のように内面ヘラケズリ調整の開始位置が頸部下方へと下降するものが含まれる。9～18は口縁端部に水平な面をもつ。倒立すると面全体が地面と接する。口縁端部の特徴だけ見ると大木式かとも思われるが、全体のプロポーションはいずれも胴部最大径が下降してなで肩となり、内面ヘラケズリの開始位置も下がっている（111－12・15・16）。112－19～113－22も口縁端部に面を持つが、角度はわずかに外傾してい

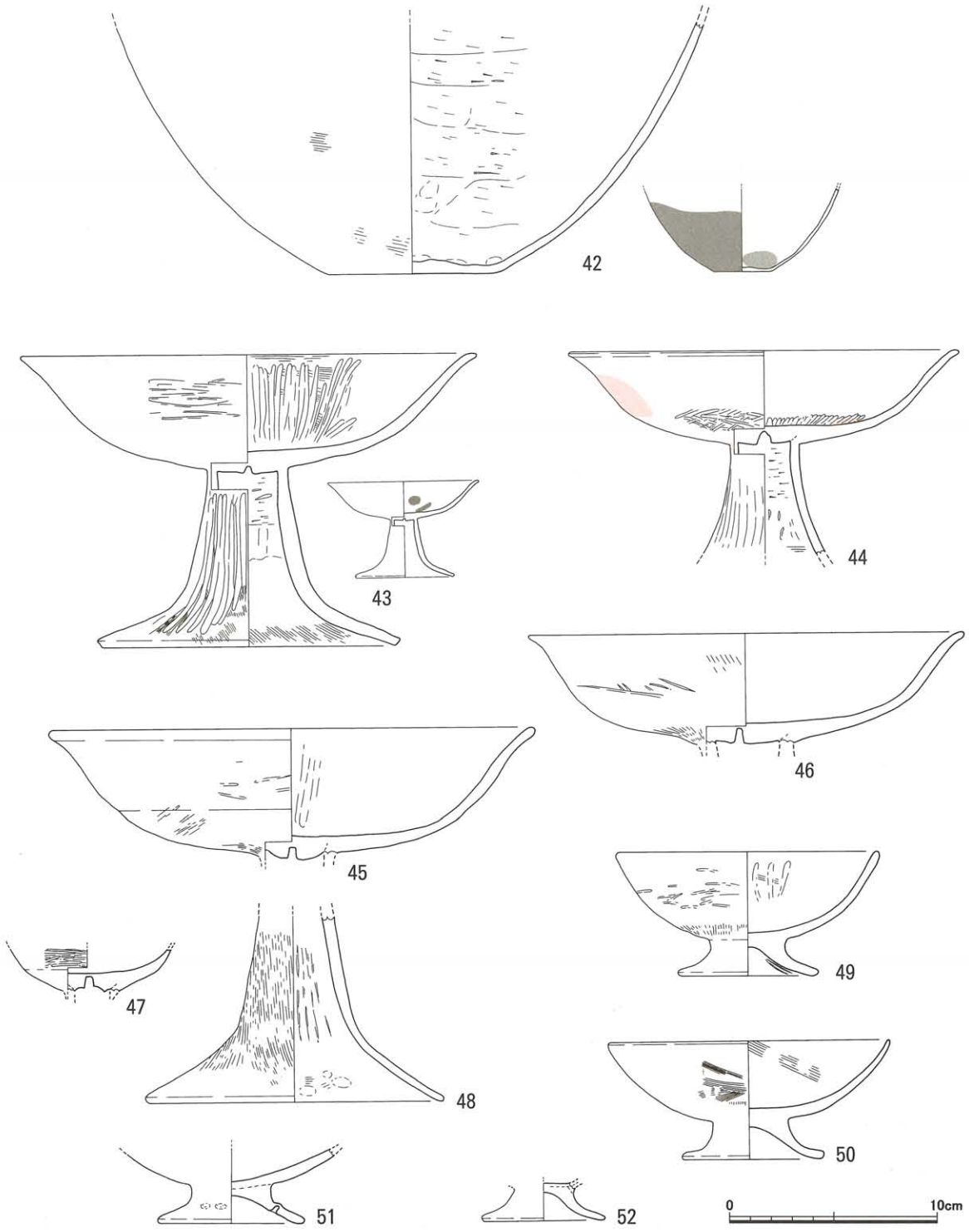



第114図　5区14層 11号土器群出土遺物（6）（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　汚れ




第115図　5区14層 11号土器群出土遺物（7）（S＝1/3）

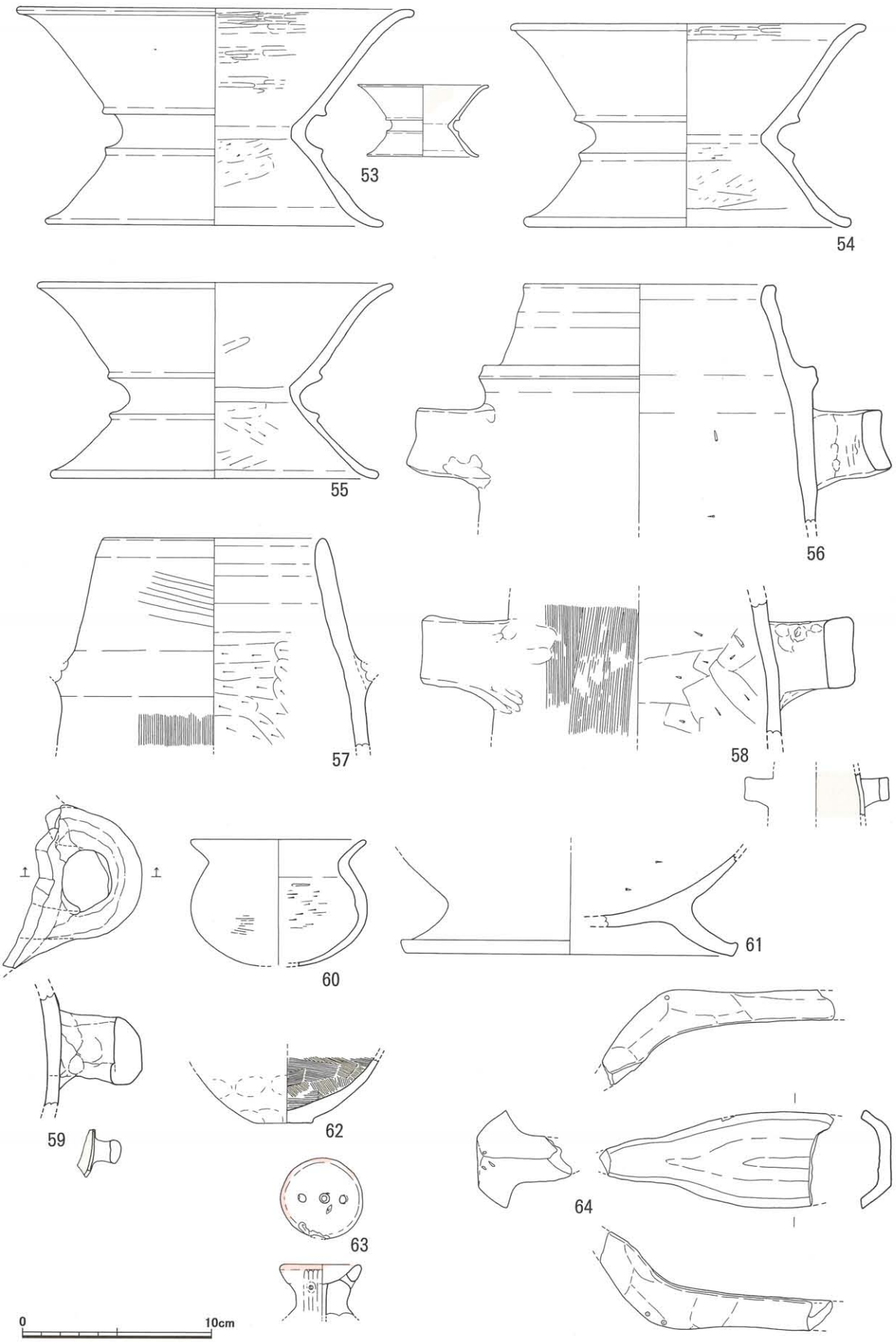



**第116図　5区14層 11号土器群出土遺物（8）（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩**
**遺物図面(1/3)の凡例：濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ**

るので、倒立させても地面に接しない。

以上の特徴から、これらの複合口縁甕は小谷3式と判断される。従来知られている小谷式の土器は、端部に面を持つ形態は時期が下がっても守られる。しかし、当遺跡の出土土器を見ると、口縁端部が丸くなることも退化の一つの方向と考えられよう(3)。

114－26～28は単純口縁の甕である。口縁部がわずかに内彎する27と大きく外反する28がある。




第117図　5区14層 11号土器群出土遺物（9）（S＝1/3）　※赤のアミ目は赤彩

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　汚れ

26・27ともに口縁が外傾して長く伸びるので、口径と胴部径に大きな差がない。29は退化した複合口縁を持つ甕である。口縁部の中程で粘土の継ぎ目があり、くびれが生じている。口径と胴部径の差はほとんど無い。

114－30～115－41は壺である。30は「繰り上げ口縁」状のⅣ－２～Ⅴ－１様式、31は口縁部外面に擬凹線がめぐらされるⅤ－３様式の壺である。この２点が他の遺物に比べて著しく古く、混入品の可能性がある他は、いずれも小谷３式に位置づけられよう。

114－32・33は口縁端部にしっかりした水平な面が作られる。32は口縁下端の横への突出が退化している。33にはしっかり残っている。114－34・35、115－38・39は口縁部を急角度で外傾させるため、大きく開く形となる。口縁部と頸部を接続する際、力が下方へかかったため、口縁下端の突出部は斜め下を向く。口縁部がそれほど大きく開かない115－36・37・40の口縁下端は横向きである。34の頸部下方には、ヘラミガキを意識したと思われるヘラの跡がわずかに残る。35の頸部には中央の沈線を軸とする羽状文が見られる。羽状文の下にはもう一本の沈線が入り、その下の肩部には刺突文がある。36・39の頸部にも同様に羽状文が見られるが、39では羽状文の軸が頸部下方へ下降している。36ではヘラ描沈線による軸線が消失し、37・40では羽状文が省略され、ハケメまたはナデ調整のみとなっている。同じ羽状文でも、114－31など弥生後期の壺では貝殻状工具を用いて主として肩部に施文されるのに対し、古墳前期のものは貝殻状工具を用いず（櫛状工具と推定される）、頸部に施文されるなどの相違がある。114－40の口縁端部は下方へ折り曲げられ、玉縁状の外観となる。41は小形の壺で、短小で内傾する口縁部をもつ。116－42は壺又は甕の底部である。薄く広い平底で、内面調整はヘラケズリと指押さえが併用される。底部外面はハケメ調整されて平たく整えられた後ナデられる。

43～48は高坏である。いずれも刺突痕のある円板を充填して接続される。坏部と脚部を別途製作したか否かは不明だが、45・46などの割れ口から見て連続して作られたと見られる。49～52は低脚坏である。坏部はやや深い。49の脚部内面にはヘラ状工具による縦方向のキズが２本見られる。51は脚部の内面側から穿孔しようとしているが途中でやめており、穿孔しかけた箇所の外面は粘土が盛り上がっている。制作者や使用者の意図からいえば、穿孔するべきではない品物だったのであろう。本品も含め、図に掲載した11号土器群出土遺物はいずれも穿孔がされない。

117－53～55は鼓形器台である。54の端部は玉縁状となる。56～59は山陰系甑形土器である。把手部分が残るもののうち、58・59は把手が甑形土器本体の器壁を貫通して取り付けられている。60は単純口縁の小形甕である。口径と胴部径はほとんど同じ、口縁部の高さは胴部の高さに比べてかなり低い。61は台付き甕の脚台部と思われる。脚台端部には面が作られる。脚台部内側の底部は中心部が落ち込んでいて、水平にならない。62は器種不明だが底部と思われる。外面に多数の指頭圧痕が見られるので手捏ね土器の可能性がある。内面は全面に目の細かいハケメ調整が施される。63は蓋のつまみである。上面から外面へ向かって斜め方向に２箇所穿孔され、上面中央から蓋の下面へ向かって１箇所穿孔される。斜めの孔はつまみに紐を取り付けるため、中央の孔は蒸気を抜くための孔であろう。蒸気を抜く孔があることから煮炊き具の蓋と考えられる。64は舟形土製品である。舟底から舳先にかけてのカーブの変換点では、左舷側に２箇所、右舷側に１箇所の孔（貫通しない）を付ける。いずれも径２㎜で、同じ工具による穿孔と推定される。舟底は平らであり、準構造船を意識している。同種の遺物は平成14年度調査区のⅥ区でも出土しているが（『大津町北遺跡・中野

## 5区14層　11号土器群出土土器観察表

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 109－1<br>(図版96) | 弥生土器<br>甕 | ①(32.3)<br>②(13.0)<br>④4.3 | 口縁端部は丸い。口縁下端は下へ突出 | 口縁：擬凹線文(貝殻状工具)/頸：ヨコナデ/肩：平行線文(貝殻状工具)を2周それらの中間に刺突列点文(貝殻状工具) | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色～にぶい橙色～黄灰色 | 赤彩(口縁内外面、他は不明) |
| 109－2<br>(図版96) | 弥生土器<br>甕 | ①14.9<br>②(13.6)<br>④2.9 | 口縁端部は先細る | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰黄色 | |
| 109－3<br>(図版96) | 弥生土器<br>甕 | ①16.0<br>②11.3<br>④2.9 | | 口縁～：ヨコナデ/肩：波状文/胴：ヨコハケメ | 口縁～：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜未満の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 109－4<br>(図版96) | 土師器<br>甕 | ①15.3<br>②(12.6)<br>④2.7 | 口縁下端は突出せず。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 109－5<br>(図版96) | 土師器<br>甕 | ①15.3<br>②(16.5)<br>④2.6 | 口縁端部の内面加工。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 縁：ヨコナデ/頸：ミガキ/胴上半：右方向のケズリ/胴下半：左方向のケズリおよびオサエ | 胎土：密(2㎜以下の砂礫、砂粒を含む)<br>色調：浅黄色 | |
| 110－6<br>(図版96) | 土師器<br>甕 | ①14.6<br>②(20.4)<br>④2.6 | 器壁やや薄い。少し肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：波状文(櫛状工具)/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：オサエ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰黄褐色～褐灰色 | |
| 110－7<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①15.3<br>②(15.0)<br>④3.0 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁：ヨコナデ/頸直下～：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸直下～：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：外面灰白色/内面浅黄橙色 | |
| 110－8<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①14.8<br>②(12.3)<br>④2.5 | 外傾度がきつい | 口縁～胴：ヨコナデ/胴下半：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：オサエ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の微細な砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 110－9<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①(14.9)<br>②19.6<br>④2.8 | 口縁端部に水平な面あり。器壁薄い。なで肩 | 口縁～：ヨコナデ/肩：直線文/胴：ハケメ | 口縁～：ヨコナデ/胴上半：ケズリ/胴下半：オサエとケズリを併用 | 胎土：1㎜大の石英粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 110－10<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①(15.7)<br>②(23.4)<br>④3.0 | 口縁端部に水平な面あり。わずかに肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ハケメ後刺突文(貝殻又は櫛状工具) | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ/底：オサエ | 胎土：2㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：灰白色～褐色 | |
| 111－11<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①(14.8)<br>②(18.7)<br>④2.8 | 口縁端部に水平な面あり。わずかに肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む<br>色調：浅黄色 | |
| 111－12<br>(図版97) | 土師器<br>甕 | ①17.3<br>②18.4<br>④3.0 | 口縁端部に水平な面あり。器壁は薄い。肩がわずかに張る | 口縁～肩：ヨコナデ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴上半：横方向のケズリ/胴下半：斜め方向のケズリ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：浅黄色 | |
| 111－13<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①(14.8)<br>②(14.0)<br>④2.6 | 口縁端部に水平な面あり。なで肩 | 口縁～：ヨコナデ/肩～胴：ハケメ後肩部に波状文(櫛状工具) | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 111－14<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①17.2<br>②(11.2)<br>④3.0 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁～：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁～：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密。精良。<br>色調：外面灰白色/内面：灰オリーブ色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 111－15<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①(14.8)<br>②(20.5)<br>④3.1 | 口縁端部にわずかに水平な面あり。器壁薄い。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/頸直下：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸直下：ケズリ | 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 111－16<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①16.8<br>②9.3<br>④3.3 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ハケメ後ナデ、ヨコハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：4㎜の砂礫、1㎜程度の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 112－17<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①15.0<br>②(7.7)<br>④2.6 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁～：ヨコナデ/胴：縦後横方向のハケメ | 口縁～：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 112－18<br>(図版99) | 土師器<br>甕 | ①18.5<br>②(13.4)<br>④3.3 | 口縁端部に水平な面あり。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：浅黄色 | |

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112－19<br>(図版98) | 土師器<br>甕 | ①17.5<br>②(22.2)<br>④3.1 | 口縁端部に外傾する面あり。肩部がわずかに張る。胴部下半の器壁は薄い | 口縁：ヨコナデ/頸直下～：不定方向のハケメ後肩部にヨコハケメ | 口縁～：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：2㎜以下の石英粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 112－20<br>(図版99) | 土師器<br>甕 | ①(18.8)<br>②(18.7)<br>④3.6 | 口縁端部に外傾する面あり。器壁厚い。なで肩 | 口縁～：ヨコナデ/肩：タテハケメ/胴上半：ヨコハケメ/胴下半：タテハケメ | 口縁～：ヨコナデ/頸：ミガキか/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を多く含む)<br>色調：灰白色 | 口縁、胴部の一部に黒斑 |
| 112－21<br>(図版99) | 土師器<br>甕 | ①(17.0)<br>②(13.5)<br>④2.9 | 口縁端部にわずかに外傾する面あり。器壁やや薄い。わずかに肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜程度の砂粒、金雲母細片を多く含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 113－22<br>(図版99) | 土師器<br>甕 | ①17.7<br>②(19.5)<br>④2.9 | 口縁端部外側へ肥厚。なで肩 | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ後ナデ | 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 113－23<br>(図版99) | 土師器<br>甕 | ①17.4<br>②27.1<br>④2.9 | 口縁端部にわずかに水平な面あり。器壁薄い。わずかに肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：タテハケメ後ヨコハケメ/胴下半：ナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ナデ/胴上半：ケズリ/胴下半～底：ケズリ後オサエ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：灰白色～浅黄橙色 | |
| 113－24<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①11.4<br>②(12.4)<br>④2.0 | 口縁が内傾。端部丸い。わずかに肩が張る | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ハケメ後ヨコナデ、ヨコハケメ/胴下半：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ミガキまたはナデ/胴：ケズリ後部分的にナデ | 胎土：密(1㎜以下の石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 113－25<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①(38.6)<br>②(17.6)<br>④4.6 | 口縁端部に水平な面あり | 口縁～肩：ヨコナデ/肩～胴上半：3列の刺突文(上段斜め方向、中段斜め方向、下段横方向) | 口縁～頸：ヨコナデ/頸：ヨコハケメ/胴：ケズリ後ヨコ、タテハケメ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒、金雲母細片を含む)<br>色調：灰白色 | 胴部外面の一部に黒斑 |
| 114－26<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①(13.2)<br>②14.2 | 頸部内面くの字。厚い。胴部は器壁薄い | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：タテハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ/底：オサエ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒、金雲母細片を含む)<br>色調：にぶい黄橙色～黒色 | |
| 114－27<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①(11.9)<br>②(8.9) | 口縁内湾。胴部は器壁薄い | 口縁～頸：ヨコナデ/肩：ヨコ及び斜行ハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(1㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 114－28<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①(9.8)<br>②(4.0) | 大きく外へひらく単純口縁 | ヨコナデ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の微細な砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 114－29<br>(図版100) | 土師器<br>甕 | ①(14.1)<br>②(5.7) | 口縁端部に面あり。口縁中程にくびれ。胴部径は口径とほぼ同じ | 口縁：ヨコナデ/胴：ハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸～胴：ハケメ | 胎土：密(1㎜程度の石英粒、金雲母細片を含む)<br>色調：外面灰白色/内面浅黄橙色 | 胴部の一部に黒斑 |
| 114－30<br>(図版100) | 弥生土器<br>壷 | ①(18.2)<br>②(7.9)<br>④1.6 | くりあげ口縁 | 口縁：4条の凹線文後ヨコナデ/頸：タテハケメ後2段の刺突文 | ナデか | 胎土：密(1㎜大の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 114－31<br>(図版103) | 弥生土器<br>壷 | ①(17.0)<br>②(19.1)<br>④2.8 | | 口縁：ヨコナデ・擬凹線文/頸：擬凹線文/胴上半：綾杉文・直線文(貝殻状工具)/胴下半：ナデか | 口縁：ヨコナデ/頸上半：横方向のミガキ/頸下半～：ケズリ | 胎土：やや粗(1㎜大の砂粒を多く含む)<br>色調：内外面灰白色/断面褐灰色 | 焼成やや不良。口縁内面、胴部外面の一部に黒斑。赤彩か(口縁内面) |
| 114－32<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①18.9<br>②(7.4)<br>④2.8 | 口縁端部に水平な面あり。口縁の外傾度きつい。頸部の器壁厚い | ヨコナデ | ナデか | 胎土：密(微細な砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 114－33<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①(18.6)<br>②(8.2)<br>④3.2 | 口縁端部に水平な面あり。接地。口縁の外傾度きつい。器壁厚い | 口縁：ヨコナデ/頸：タテハケメ/胴：ヨコハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸上半：ハケメ後ナデ/頸下半：シボリメ多く調整せず/胴：ケズリ | 胎土：1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：にぶい黄色 | |
| 114－34<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①(18.0)<br>②(10.3)<br>④3.8 | 口縁端部に外傾する面あり。接地せず。口縁の外傾度きつい | 口縁～頸：ヨコナデ | 口縁：ヨコナデ/頸：ヨコナデ、シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：やや密(2㎜の砂礫、金雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 114－35<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①(22.4)<br>②(17.39<br>④4.1 | 口縁端部に外傾する面あり。接地せず。口縁の外傾度きつい | 口縁～頸：ヨコナデ/頸：有軸の羽状文(櫛状工具)→1条の沈線/肩：ヨコハケメ、刺突文(櫛状工具)/胴：不定方向のハケメ | 口縁：ヨコナデ/頸：ヨコナデ、シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：密(1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む)<br>色調：灰白色～橙色 | 赤彩(外面) |

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 115－36<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①(21.9)<br>②(11.9)<br>④4.0 | 口縁端部に外傾する面あり。器壁厚い | 口縁～頸：ヨコナデ/頸～：羽状文(櫛状工具) | 口縁：ヨコナデ/頸：シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：密(１㎜大の砂粒を多く含む)<br>色調：内外面灰白色/断面褐灰色 | 口縁の一部に黒斑 |
| 115－37<br>(図版101) | 土師器<br>壷 | ①(16.4)<br>②(9.3)<br>④3.3 | 口縁端部に外傾する面あり。肥厚。口縁の外傾度きつい | 口縁～頸：ヨコナデ/頸下半：ハケメ/肩：ヨコハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸下半：ナデか/胴：ケズリ | 胎土：密(0.5ミリ以下の石英粒、黒雲母細片を含む)<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 115－38<br>(図版102) | 土師器<br>壷 | ①(28.8)<br>②84.3)<br>④3.4 | 口縁端部に外傾する面あり。口縁の外傾度きつい | 口縁：ヨコナデ/頸：ハケメ後ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：淡黄色 | |
| 115－39<br>(図版102) | 土師器<br>壷 | ①21.1<br>②(26.0)<br>④4.2 | 口縁端部外側に折れる。口縁の外傾度きつい | 口縁～頸：ヨコナデ/頸下半：羽状文(櫛状工具)/肩：平行ハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/胴：ケズリ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 115－40<br>(図版102) | 土師器<br>壷 | ①18.7<br>②(12.7)<br>④3.1 | 口縁端部は下へ折り曲げられ玉縁状になる。口縁の外傾度きつい | 口縁：ヨコナデ/頸：ハケメ後ヨコナデ/肩：ヨコハケメ/胴：不定方向のハケメ | 口縁～頸：ヨコナデ/頸直下：シボリメ/胴：ケズリ | 胎土：２㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：灰黄色 | |
| 115－41<br>(図版102) | 土師器<br>小形壷 | ①(12.6)<br>②(4.6)<br>④1.2 | 小形。口縁端部丸い。口縁内傾。短い | ヨコナデ | ヨコナデ | 胎土：密(１㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 116－42<br>(図版102)<br>(図版103) | 土師器<br>甕<br>(底) | ②(12.0)<br>③8.0 | 平底 | 胴～底：ハケメ後ナデ | 胴：ケズリ/底：オサエ及びケズリ | 胎土：２㎜の砂礫、１㎜程度の砂粒を含む<br>色調：にぶい黄橙色 | 内面に黒斑 |
| 116－43<br>(図版102) | 土師器<br>高坏 | ①(21.9)<br>②14.1<br>③14.2 | 円板を充填 | 坏：ミガキ/脚：タテハケメ後ミガキ | 坏：ヨコハケメ後縦方向のミガキ/脚筒上部：ケズリ/脚筒下部：ナデ/脚裾：ハケメ | 胎土：3㎜の砂礫、１㎜の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 116－44<br>(図版102) | 土師器<br>高坏 | ①(18.6)<br>②(10.0) | 坏部と脚部を連続して作り、円板を充填 | 口縁：ミガキ又はナデ/坏体：横方向のミガキ/脚：縦方向のミガキ | 口縁～体：ミガキ又はヨコナデ/坏底：放射状のミガキ/脚上半：ケズリ/脚下半～：シボリメ | 胎土：２㎜の砂礫、１㎜程度の砂粒、金雲母細片を含む<br>色調：浅黄橙色～橙色 | 赤彩(外面) |
| 116－45<br>(図版103) | 土師器<br>高坏 | ①(23.4)<br>②(6.3) | 円板を充填。底部と体部の境がくびれる | 口縁：ヨコナデか/体：横方向のミガキ/底：ハケメ | 縦方向のミガキ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 116－46<br>(図版103) | 土師器<br>高坏 | ①21.0<br>②(5.3) | 坏部と脚部を連続して作り、円板を充填 | 口縁～体：ミガキ/底：ハケメ | 不明 | 胎土：密(２㎜の砂礫、金雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 116－47<br>(図版103) | 土師器<br>高坏 | ②(2.1) | 坏部は小さく丸い。坏部と脚部は円板を充填 | 坏上半：横方向のミガキ/坏下半：ミガキか | ナデ又はミガキか | 胎土：密(１㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：内外面橙色/断面淡橙色 | |
| 116－48<br>(図版104) | 土師器<br>高坏 | ②(9.0)<br>③14.2 | | 脚筒：タテハケメ/脚裾端：ヨコナデ | 脚筒：シボリメ、調整せず/脚裾：ハケメ後オサエ | 胎土：密(1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む)<br>色調：浅黄橙色～黄灰色 | |
| 116－49<br>(図版104) | 土師器<br>低脚坏 | ①(12.4)<br>②6.0<br>③6.2 | 坏部やや深い | 坏：ハケメ後横方向のミガキ/脚：ヨコナデ | 坏：ハケメ後縦方向のミガキ/脚：ヨコナデ | 胎土：２㎜の砂礫、１㎜程度の砂粒を含む<br>色調：黄橙色 | 脚部内面にヘラ状工具による傷 |
| 116－50<br>(図版104) | 土師器<br>低脚坏 | ①(13.5)<br>②5.7<br>③6.6 | 坏部やや深い | 坏口縁：ナデか/坏体：不定方向のハケメ/脚：ヨコナデ | 坏：斜行ハケメ後ナデか/脚：ヨコナデ | 胎土：密(１㎜以下の微細な砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 116－51<br>(図版104) | 土師器<br>低脚坏 | ②(3.6)<br>③(7.1) | 穿孔しかけて中止(２ヶ所) | ヨコナデ | 坏：ナデ又はミガキか/脚：ナデ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 脚部に貫通していない穿孔が２つ並ぶ |
| 116－52<br>(図版105) | 土師器<br>低脚坏 | ②(1.8)<br>③5.8 | 脚部と坏部を単純に接着し、周囲に粘土を貼り付けただけ | ヨコナデか | 坏：ナデ又はミガキか/脚：ヨコナデか | 胎土：密(１㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 117－53<br>(図版104) | 土師器<br>鼓形器台 | ①20.8<br>②11.5<br>③17.4 | 筒部は太く短い | ヨコナデ | 器受：ミガキ/脚台：ケズリ | 胎土：密(１㎜以下の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | |
| 117－54<br>(図版104) | 土師器<br>鼓形器台 | ①17.9<br>②10.8<br>③16.8 | 筒部は太く短い | ヨコナデ | 器受：ミガキ/器受～筒：ヨコナデか/脚台：ケズリ/脚台裾：ヨコナデ | 胎土：２㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：浅黄色 | |

| 挿図番号<br>(写真図版) | 種別<br>器種<br>(部位) | 計測値<br>①口径cm<br>②器高cm<br>③底径cm<br>④口縁高cm | 形態・成形技法の特徴 | 外面の調整・文様 | 内面の調整 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 117－55<br>(図版105) | 土師器<br>鼓形器台 | ①(18.5)<br>②10.4<br>③17.2 | 筒部は太く短い | ヨコナデ | 器受：ミガキ/筒：ナデか/脚台：ケズリ/脚台裾：ヨコナデ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：にぶい黄橙色 | |
| 117－56<br>(図版106) | 土師器<br>山陰系<br>甑形土器 | ①(13.3)<br>②(12.6) | 把手は横向きに、本体壁外面に直接接着 | 狭口端：ヨコナデ/胴：ヨコナデ/把手：ナデ | 狭口端～凸帯付近：ケズリ後ナデ/凸帯以下：ケズリ/把手：シボリメ、調整せず | 胎土：やや粗(微細な気泡あり、径1㎜以下の白色粒、金雲母、黒雲母細片を含む)<br>色調：浅黄橙色 | |
| 117－57<br>(図版106) | 土師器<br>山陰系<br>甑形土器 | ①(11.7)<br>②(11.0) | | 狭口：目の粗いハケメ後ヨコナデ/胴：タテハケメ | 狭口：ヨコナデ/胴ケズリ | 胎土：2㎜大の砂粒、金雲母、黒雲母細片を含む)<br>色調：内外面灰黄色/断面褐灰色 | 焼成やや不良。(芯は焼け残るか) |
| 117－58<br>(図版106) | 土師器<br>山陰系<br>甑形土器 | ②(7.2) | 把手部を本体壁内面まで貫通させて接着 | 胴：ハケメ/把手：ナデ | 胴：ケズリ | 胎土：やや粗(2㎜以下の砂粒、黒雲母、金雲母細片を多く含む)<br>色調：内外面灰黄色/断面黄灰色 | |
| 117－59<br>(図版106) | 土師器<br>山陰系<br>甑形土器 | ②(7.7) | 横向きの把手。把手部を本体壁内面まで貫通させて接着 | 把手：ナデ・オサエ | 把手：オサエ/本体胴：ケズリ | 胎土：密(3㎜以下の石英粒を多く含む)<br>色調：外面浅黄橙色/内面灰褐色 | |
| 117－60<br>(図版105) | 土師器<br>小形甕 | ①(9.49<br>②(6.7) | 口縁部は短い | 口縁：ヨコナデ/胴：ハケメ後ナデか | 口縁：ヨコナデ/胴：ケズリ/底：ナデ | 胎土：2㎜の砂礫、1㎜以下の砂粒を含む<br>色調：浅黄橙色 | |
| 117－61<br>(図版105) | 土師器<br>台付甕 | ②(5.4)<br>③(17.3) | 脚端部外側に面あり。底部は中心が落ち込む | 底：ケズリ/脚台～脚端：ヨコナデ | 底：ケズリ/脚台：ヨコナデ | 胎土：1.5㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：灰白色 | |
| 117－62<br>(図版105)<br>(図版106) | 土師器<br>(不明) | ②(3.5)<br>③3.0 | 手捏ね成形の可能性が高い | 胴：オサエ後調整せず/底：ナデ | ハケメ | 胎土：2㎜以下の砂礫、砂粒を含む<br>色調：灰黄色 | |
| 117－63<br>(図版105)<br>(図版106) | 弥生土器又は土師器<br>つまみ | ①4.1<br>②(2.7) | 3ヶ所の穿孔 | 縦方向のミガキ | ナデ | 胎土：密(1㎜程度の砂粒を含む)<br>色調：灰白色 | 赤彩(上面の一部)、3つの穿孔 |
| 117－64<br>(図版105)<br>(図版106) | 土製品<br>船形土製品 | 長：12.3<br>幅：5.1<br>高：5.1<br>舷側高：1.6 | 舷側上端は面あり。船底断面は逆台形 | ナデ | ナデ | 胎土：密(1.5㎜以下の石英粒、雲母片を多く含む)<br>色調：浅黄橙色 | |

清水遺跡』(島根県教育委員会) 128図4)、当調査区からは離れている。この遺物はⅥ区出土遺物に比較して一回り小さく、別個体である。これにより、調査区全体を通して確認された舟形土製品の数は2個体となった。

**甕などのスス・コゲの状況**

スス・コゲは甕の大部分で確認できた。複合口縁の下面にはススがよく残っている。109－2は胴部上半のみ残存している。胴部下半の状況は不明であるが、残存部分の外面には部分的にススが残る。4は口縁部と胴部最大径以下の外面にススの付着が認められる。内面は頸部以下全体に汚れが見られる。胴部下半まで残存した5は外面全体に薄いススが付着し、底部へ近づくにつれてススが濃くなるのが確認される。内面には部分的にうすいコゲ痕が残る。110－7は内面下半に薄いコゲが確認された。110－8は胴部下半でスス、内面でも部分的なコゲが確認された。9のススは外面の下半のみ残る。内面のコゲは部分的で斑点状に残るのみである。底部付近まで残存する10は、肩部から底部まで濃厚にススが付着する。内面にも、胴下半部は薄いコゲ、底部は濃いコゲが付着する。底部付近のコゲは内容物の水分が蒸発して、煮つまってきた状態で付着したのであろう。111－11も、肩部以下の外面には濃厚にススが付着する。内面のコゲも薄いが明瞭である。13は内面の肩部以下に濃厚なススが付着する。内面も同じく肩部以下にコゲが認められる。15は胴部下半まで残

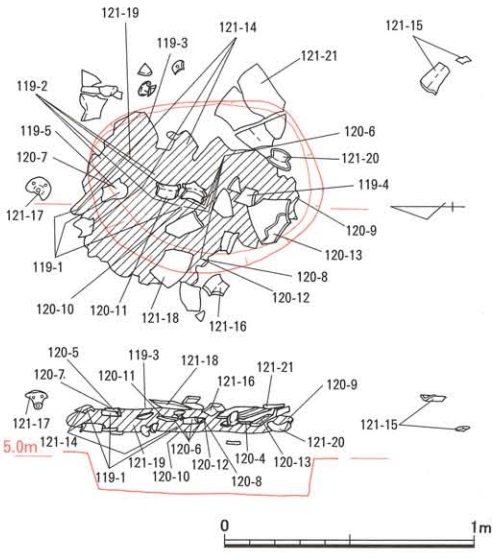
存しているためスス・コゲの状況がよくわかる。外面は肩部以下に濃いススが付着し、内面は頸部以下全体に薄いコゲが付着する。16も頸部直下から内面にコゲが見られる。112－17の内面は、胴部には何の痕跡もなく口縁部が黒くなっている。これは内容物のコゲ付きではなく、外面のススの続きと見られる。19は胴部下半外面に濃いスス、内面底部付近に薄いコゲが付着する。20は胴中央部までしか残らないが、ススが胴部最大径以下で濃くなっているのが観察される。胴部の上から下へいくにつれ徐々に器壁が薄くなっているが、胴部最大径以下で2㎜と極限まで薄くなり、コゲ付きはそれより下の部分にのみ残る。113－23は外面胴部上半分のススは希薄だが、胴部下半では濃く付着している。内面は、底部付近に薄いコゲが見られる。114－26は外面全体にススが付着し、胴部最大径以下の部分で濃厚に残っている。内面でも、胴部最大径付近にベルト状に薄いコゲが見られる。116－42は、内面に薄いコゲが付着する。

甕の外面のススはしばしば確認できるのに対し、内面のコゲつきは外面ほどの頻度では確認されない。内面がコゲつく個体とコゲつかない個体の差が生じる原因としては、以下のような点が考えられる。①胴部～底部の器壁が薄く作られている甕は、熱が早く内面に伝わるためコゲやすい。②煮炊きの対象が固形物である場合はコゲつくが、汁物・湯など液体である場合はコゲつかない。この場合は、コゲつきにまで至らない薄い汚れ程度の痕跡を内面に残している可能性もある。

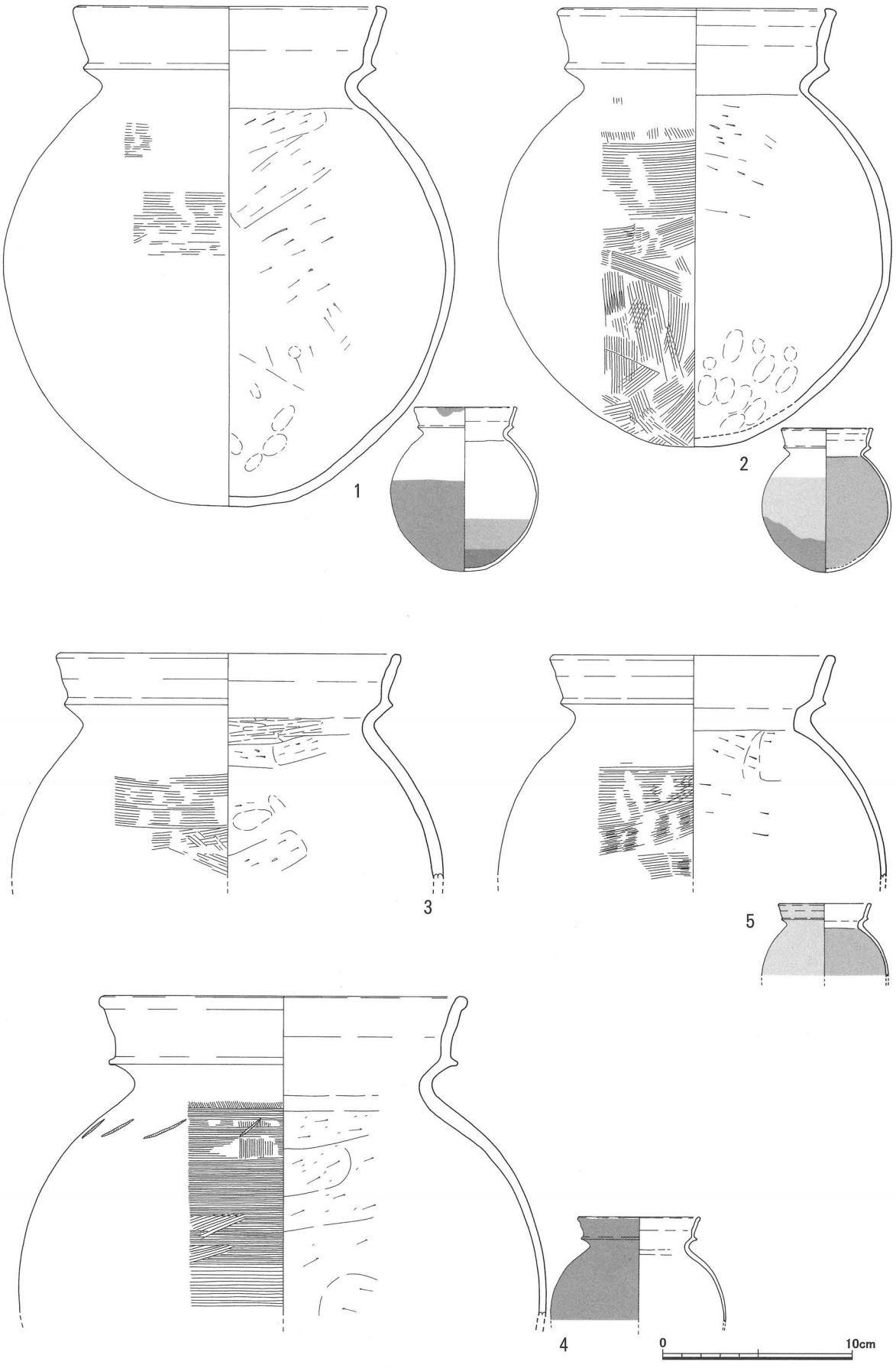
甕以外の器種については、ス・コゲの付着はあまり見られない。高坏や低脚坏では少なく、116－43の内面に部分的にコゲが見られる程度である。明確に火にかけられたことがわかるものは無い。山陰系甑形土器では、風化が著しいためでもあろうが、ススが確認されるもの2点、確認されないもの2点と分かれる。

**14層　12号土器群（第118図）**

6号土坑の検出面から10～20㎝上方で出土した土器群である。6号土坑の本来の掘り込み面は不明であるが、土坑の上面あるいは埋土中にあったと推定される。複合口縁の甕（119－1）は土器群の中央と北端に破片が散らばる。複合口縁の甕（2）は口縁部が横倒しになり東を向いているが、土器群中央から北東にかけて破片となって散らばっていた。複合口縁の甕（4）は破片であるが、頸部内面を上へ向け、東向きに横倒しになった状態と見られる。甕（120－13）も横倒しの状態で、肩部の文様を上に向けて出土している。121－14は単純口縁部分の内面が上を向く。壺（15）は内面を上へ向けて出土した。16は口縁部内面が上を向くが、対になる頸部下半、胴部とも見いだせなかった。高坏17は脚部が上を向く倒立の状態で出土した。しかし、これと対になる坏部の破片は近くからは出土していない。18は坏部内面を上へ向けて出土しているが、残っていたのは脚部との接続部分近くのみで、これに続く坏部の体部、口縁部は残されていなかった。小形丸底壺（20）は半分割れた状態で横倒しになって出土した。特色ある橙色の胎土であるから、調査時に直ちに




**第118図　5区14層 12号土器群出土状況**
（S＝1/30）




第119図　5区14層 12号土器群出土遺物（1）（S＝1/3）

遺物図面(1/3)の凡例：薄いスス　濃いスス　薄いコゲ　濃いコゲ